Nanden Daizōkyō

(南傳大藏經)

VII

Edited by Takakusu Junjirō
(高楠順次郎; 1866–1945)

and various translators

1935

高楠博士功績記念會纂譯

(Scan 2020)

経蔵 (Sutta Pitaka)
長部 (Dīgha Nikāya)
大篇 (Mahā Vagga)

南傳大藏經

Contents

“The Dīgha Nikāya is a Buddhist scripture, the first of the five nikāyas (collections) in the Sutta Piṭaka, which is one of the “three baskets” that constitute the Pāli Tipiṭaka of Theravāda Buddhism. In English it is known as the “Collection of Long Discourses.” A complete version of the Dīrgha Āgama of the Dharmaguptaka School survives in Chinese translation under the title of *Cháng Ahánjīng.*[1] There are 30 *sūtras* (discourses) in it as compared to 34 *suttantas* (discourses) of the Theravādin Dīgha Nikāya. Fragments of the Sarvāstivādin School’s Dīrgha Āgama are also extant in their Sanskrit as well as Tibetan translations. During the fifth century, a commentary on the Dīgha Nikāya, known as the *Sumaṅgalavilāsinī,* was written by Buddhaghosa.”[2]

Mahā Vagga

14. Mahāpadāna Sutta: The Sublime Story of the Buddha Gotama and his six predecessors. Also, the Discourse on the Buddha Vipassi, describing his descent from the Tusita heaven to the commencement of his mission.
15. Mahānidāna Sutta: On the “chain of causation” and theories of the soul.
16. Mahāparinibbāna Sutta: The Great Discourse that records the passing of the Tathāgata into Parinibbāna.
17. Mahāsudassana Sutta: The Great King of Glory. The story of a previous existence of the Buddha, as King Sudassana, told by the Buddha on his death-bed.
18. Janāvāsabha Sutta: The Buddha relates the story of the yakkha (demon) Janāvāsabha to the people of Nādikā.
19. Mahāgovinda Sutta: The heavenly musician Pañcasikha relates the story of Mahāgovinda to the Buddha, who states that he himself was Mahāgovinda.
20. Mahāsamaya Sutta: The devas of the Pure Abode and their evolution.
21. Sakkapañha Sutta: Sakka, the lord of devas, visits the Buddha, and learns from him that everything that originates is also subject to dissolution.
22. Mahāsatipaṭṭhāna Sutta: Discourse on the Foundations of Mindfulness on the body, feelings, thoughts, and states of mind. With a commentary on the Four Noble Truths.
23. Payāsi Sutta: Kumārakassapa converts Payāsi from the heresy that there is no future life or reward of actions.[3]

[1] Taishō 1, separate sutras also in T. 2–25.

[2] Sarao K. T. S.; ”Dīgha Nikāya;” in: Sarao K. T. S., Long J. D. (eds.); *Buddhism and Jainism. Encyclopedia of Indian Religions;* Dordrecht 2017 (Springer)

[3] Webb, Russell; *An Analysis of the Pāli Canon;* Kandy 1975, ^{2}1991, ^{3}2008 (Buddhist Pub. Soc.); ISBN 978-955-24-0048-1. “For free distribution. This work may be republished, reformatted, reprinted and redistributed in any medium. However, any such republication and redistribution is to be made available to the public on a free and unrestricted basis, and translations and other derivative works are to be clearly marked as such.”

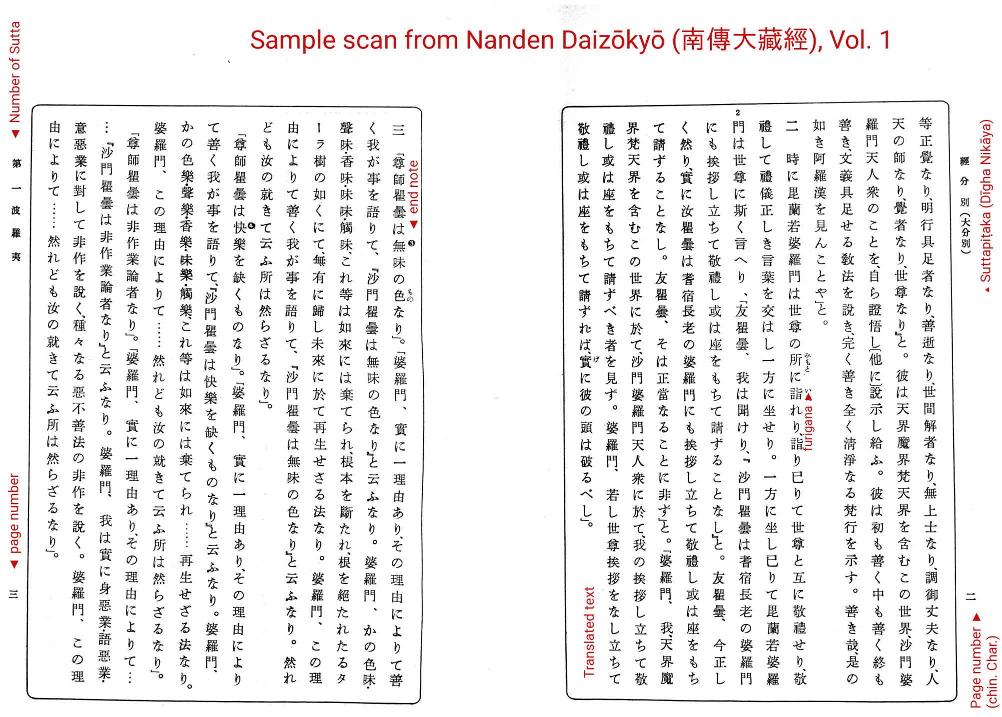


Figure 1: The original Japanese text is written vertically, right to left.

Technical notes: Due to limitations in the specs of the *pdf* and *djvu* file formats direct links from the Concordance (☞ S. X) and romanized Table of Contents only work in the "full" pdf, not the derivates automatically created at `archive.org`. In the *djvu* file only links to external targets work (by opening a new tab in your standard browser). If in doubt – choose the large file.

The hardlinks to `suttacentral.net`, given in captions at the beginning of each section were tested July 11, 2020.

☸ ☸ ☸

Dīgha Nikāya 2–23: Mahā Vagga

Introductory remarks 凡例

凡例

一、今卷依用の底本は巴梨聖典出版協會(Pāli Text Society)本にして、兼て錫蘭版、暹羅版を參照せり。

一、本文行頭に羅馬數字を以て底本の頁數を附し、彼此參看に便じたり。

一、文中(　)印を以て括せる語又は句は、譯者の挿入に係る。

一、文中「……」或は「…乃至…」とあるは、底本に然く省略せるものなり。

一、文中「…(乃至)…」とあるは、譯者が便宜上省略せるものなり。

一、文字の右肩に附せる白抜羅馬數字は註の對照番號にして、註の文は各經の最後に之を出したり。

一、固有名詞の中、その音譯の經典に見在するものは可及的に之を採り、義譯は(　)印に括して添加せり。但し漢譯經典は主としてサンスクリットよりの翻譯なるを以て、その音譯は必ずしも巴梨語のそれに對應すとは言ふべ

からず。

一、假名字を以て表せる發音も亦巴梨語の正確なる音を寫せるものとは言ひ難し。從つて漢字、假名兩者いづれの表音も、その正しきを知る爲には、卷末索隱中の原語に依るを要す。

一、索隱は發音索隱と漢字索隱との二種とし、前者は假名字、原語羅馬字、漢字の順に、後者は漢字、原語羅馬字の順に配し、總て五十音順に列位す。而して漢字索隱には固有名詞の他に術語をも合入したり。

Table of Contents 目次

所に就いてこの妄想を滅し戒を具して三業を修め、善き六境に向つて六根を律し、以て離欲すべきを說かれたものである。經の始に乾闥婆が相聞歌を叫ひ、帝釋が瞿波物語をする段があつて、共に偈をなしてゐる。相聞歌は情味豐かな絕唱で、本經成立の頃、人口に膾炙してゐた民謠を取入れたものではないかとさへ思はれるものがある。瞿波物語の歌は、相聞歌ほどの詩趣は無いにしても、なほ神韻縹眇たるものがあり、經の終の部分には、帝釋が聞法向上の歡喜を述べた六果報偈があるなど、經の內容結構から見て、佛敎文學として優れた地位にあるものたるを斷ずるに憚らない。

本經は漢譯中阿含卷第二四の念處經（大正藏二六）に當る。經は衆生を淨くし、憂悲を度し、苦惱を滅し、正法を得て涅槃を證すべき唯一の道として四念處觀を示し、更に五蓋、五蘊、六處、七覺支、四聖諦に就いても如法に觀察して、淨・樂・常・我の四倒を破すべきを說いたものである。此の中、身念處觀に就いては、呼吸・身體の位置・態度・その構成要素・解剖的部分・死屍等を觀ずるに、精勤にして正智正念なれば、身の四倒を破し解脫を證し得ることを詳細に述べ、四念處を修習するものは、果報として阿羅漢果又は阿那含果を得べきを說き、不退轉の努力精進の必要なる所以を反覆して示してゐる。四念處觀は多くの經典中に散說せられてゐるが、其の比較的簡單なものを骨子として、適當に敷衍したものが、中部經典の念處經であり、更にこの觀法に必要な四聖諦の

るを主眼としてゐること、前の闍尼沙經に同じい。

二〇 大會經……阿部文雄譯……二七一

本經は漢譯長阿含卷第二の大會經(大正藏一)、大三摩惹經(大正藏一九)、雜阿含卷第四四の一一九二經(大正藏九九)、別譯雜阿含卷第五の一〇五經(大正藏一〇〇)に當る。後二經は本經の一―三に當る部分に過ぎず、前二經も本經とはかなりの相違がある。原文は何れかといふと晦澁に屬し、諸天神名の多い上に、全部偈で成つてゐる爲か、西藏譯も漢巴兩文とかなり異なつてゐる。經は迦毘羅城に在す佛の所へ、十方世界の諸天神が、佛と其の僧團とに見え、之を讃歎して聞法せんとて雲集し來る樣を、偈を以て述べたもので、諸天神の中には、自然現象を神化したもの、地方神守護神・鬼神・鳥神・龍神・夜叉、さては淨居天・梵天・四天王・水天・日天・月天などあり、何れも歡喜しつゝこの大會に集まつてゐる所へ、最後に魔軍が來てこの平和な法會を擾亂せんとして果さぬ場面で終つてゐる。

二一 帝釋所問經……小野島行忍譯……二九七

本經は漢譯長阿含卷第一〇の釋提桓因問經(大正藏一)、中阿含卷第三三の釋問經(大正藏二六)、帝釋所問經(大正藏一五)、雜寶藏經卷第六の帝釋問事緣(大正藏二〇三)などに當る。帝釋の問に對して佛が衆生不和の根本は妄想であり、善き心

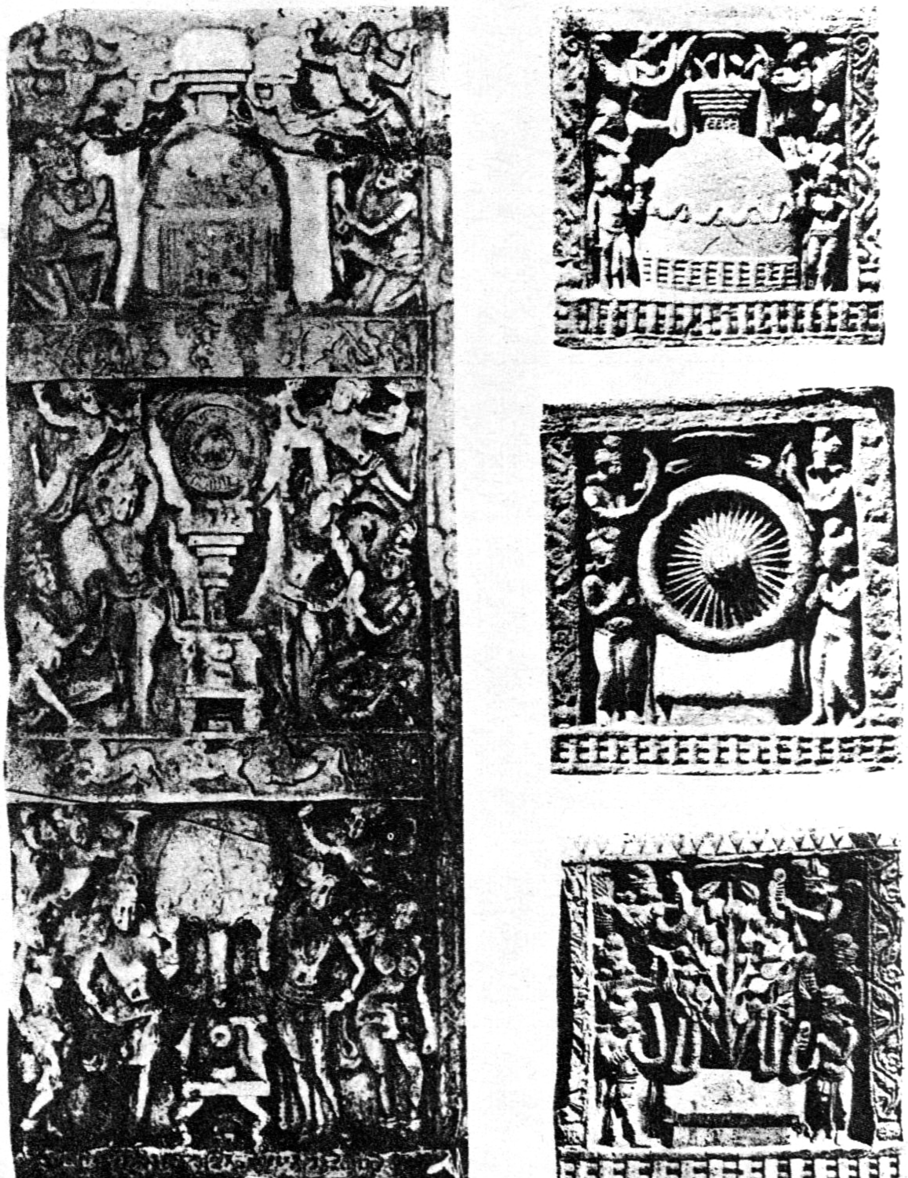
教說を加へて成れるものが、本經の所說であると考へられる。而して此の經に修行の方法を述ぶる限り、戒律との關係深く、相應部經典の念處經では、此の觀法と戒律とを同一視し、正法護持の上から四念處觀が力說せられてゐる點から見て、本經の內容をなすものは、根本佛教中の重要なる一面を傳へてゐるものである。

二三　弊宿經……………水野弘元譯……………三六五

本經は漢譯長阿含卷第六の弊宿經（大正藏一）、中阿含卷第一六の蜱肆經（大正藏二六）、並に大正句王經（大正藏四五）に當る。凡そ佛滅後の事件を述べたものとして、文中明かに其の記載あるものは、五部中に於て約十種あるが、本經は卽ち其の一で、佛滅後久しからずして鳩摩羅迦葉が、婆羅門弊宿と問答して之を敎化した事を說いたものである。而して其の間の問答が、經典中に於て稀に見る程長く且つ秩序立つてゐる點は、那先比丘經のそれにも比せらるべきである。婆羅門弊宿は、來世と化生の有情と善惡業の果報との存在を否定するのであるが、之に對して鳩摩羅迦葉は、巧に諸の譬喩を擧げて其の邪見を破する所、如何にも雜種の論を能くし心識を暢悅せしむとか、善く美語を解し能く談論すとか言はれる如く、談論の一名手たりしを知ると共に、五百の比丘を從へてゐたともあるので、敎團に於ける其の地位も窺ひ得られるのである。

索隱

挿圖目次



2. a（右）成道・初轉法輪・涅槃
　 b（左）成道・初轉法輪・涅槃

[Better Scan p. I.]



3．a（右）出城・成道・初轉法輪・涅槃
　 b（左）降誕・成道・初轉法輪・涅槃

[Better Scan p. III.]



4. 涅槃　大般涅槃經　一四四頁參照

[Better Scan p. V.]

5. 涅槃　大般涅槃經　一四四頁參照



[Better Scan p. V.]

6. 涅槃　大般涅槃經　一四四頁參照

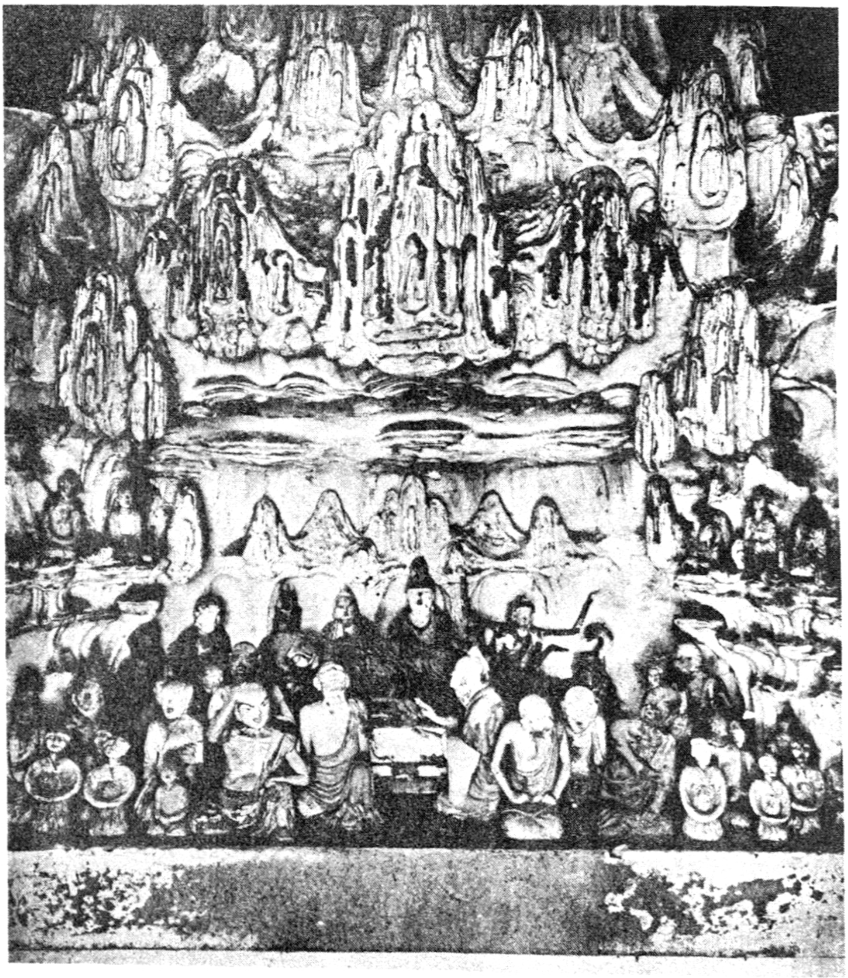


[Better Scan p. IV.]

7. 涅槃　大般涅槃經　一四四頁參照



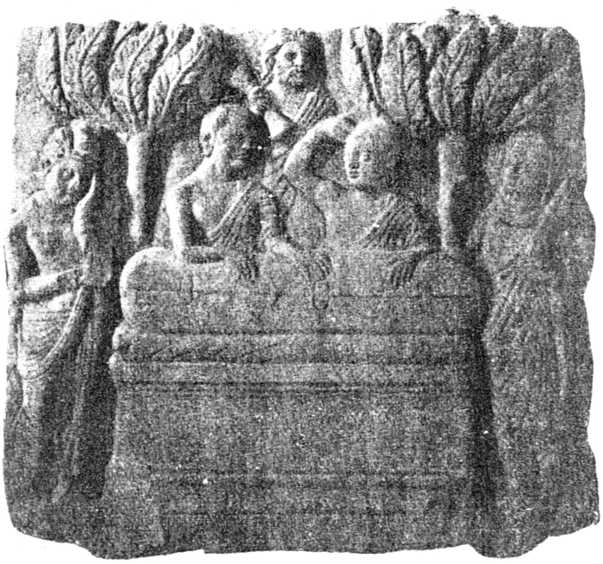
[Better Scan p. VIII.]



8. 涅槃　大般涅槃經　一四三頁參照



9. 包纒　大般涅槃經　一五四頁參照

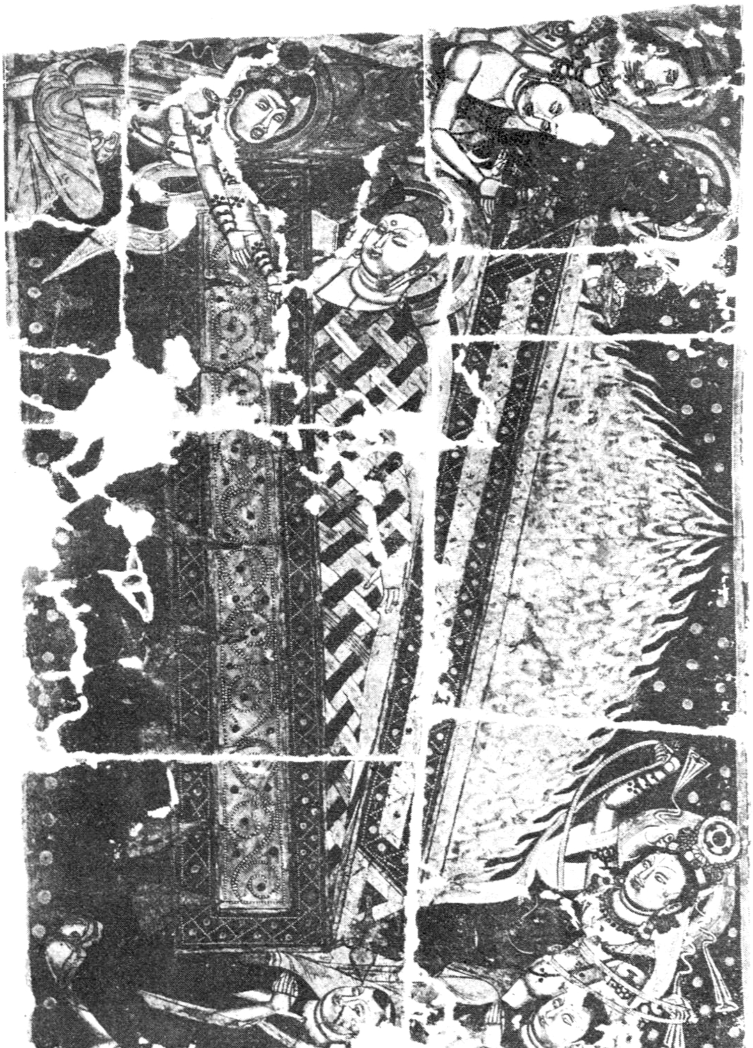


10. 歛棺　大般涅槃經　一五四頁參照

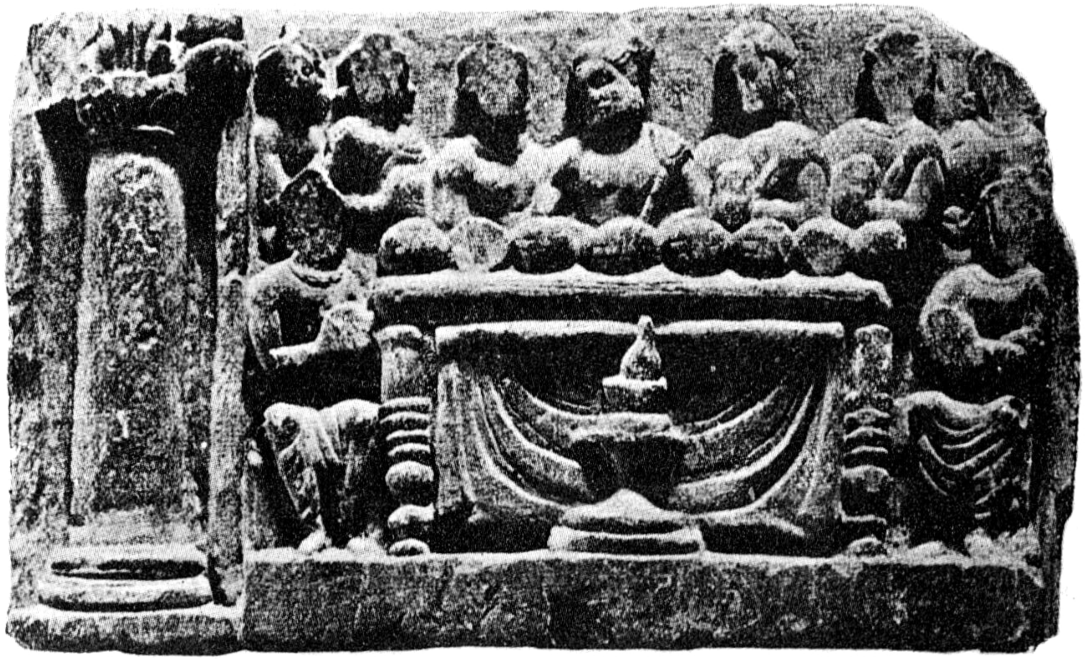


11. 荼毘　大般涅槃經　一五六頁參照

12. 荼毘　大般涅槃經　一五六頁參照



[Colour Scan p. VII.]

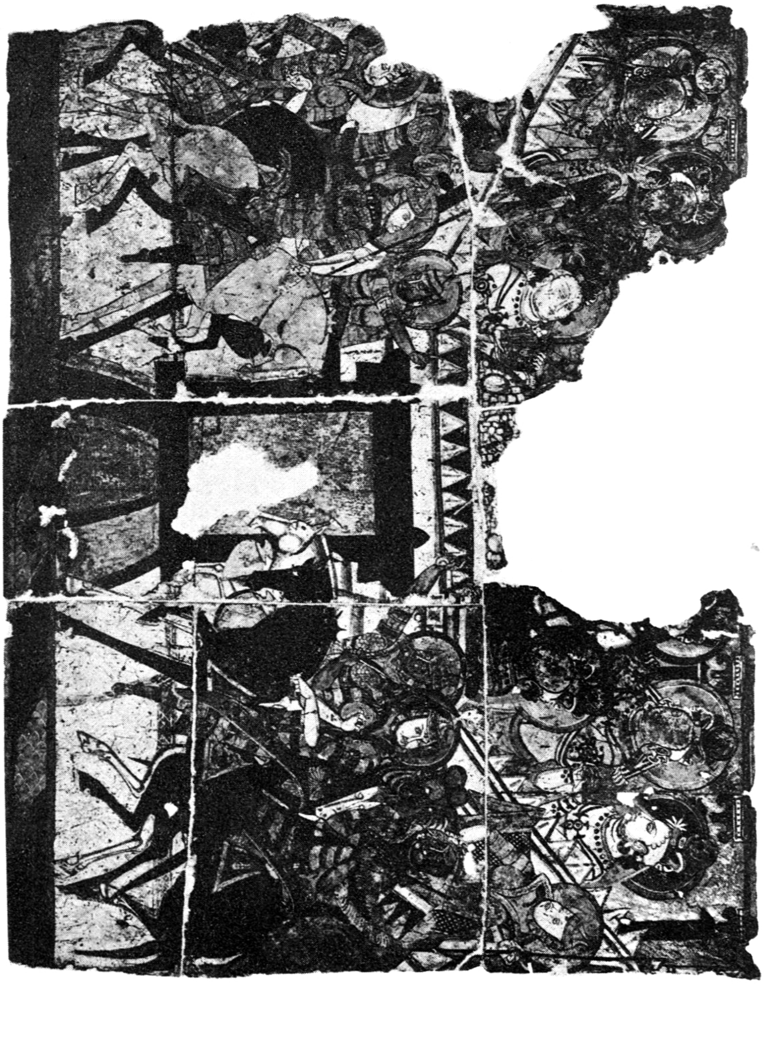


13. 分舍利　大般涅槃經　一五八頁參照

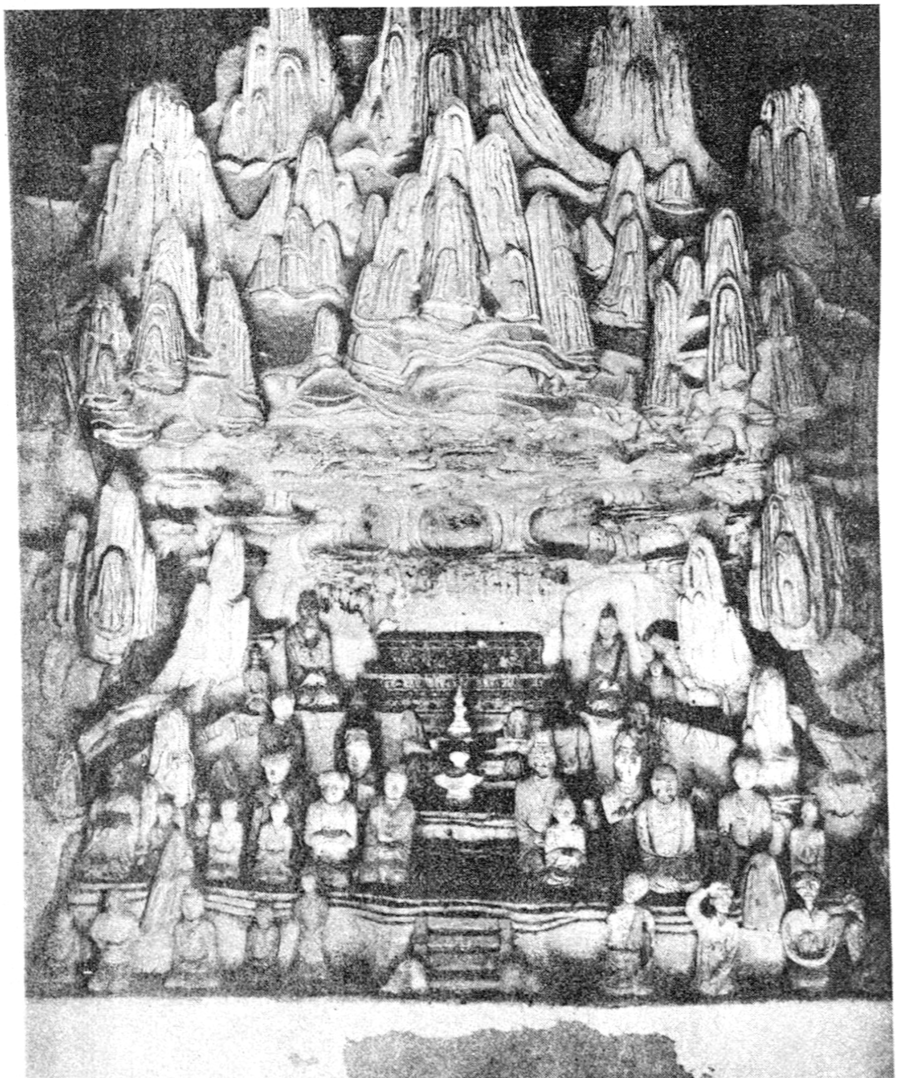


14. 分舍利　大般涅槃經　一五八頁參照

15. 分舍利　大般涅槃經　一五八頁參照



[Colour Scan p. IX.]



16. 分舍利　大般涅槃經　一五八頁參照

大篇（だいへん） (Mahā-vagga)

大縁経（だいえんぎょう） (Mahānidāna-sutta)

寺崎（てらざき） 訳

一五　大縁經（マハーニダーナ・スッタンタ）

I.55
一　是（かく）の如く我（われ）聞く。一時、佛は拘樓（クル）國に住し劍磨瑟曇（カンマーサダンマ）と名くる拘樓の城邑に在（ましま）しき。

爾（そ）の時、長老阿難は世尊の所（みもと）に詣（いた）り、詣り已りて世尊を禮し、一方に坐しぬ。長老阿難は一方に坐して、世尊に問ひて言へり。

「世尊、此の緣起の法は深邃なり深邃の相ありとは奇なり、不可思議なり。そは我等には却つて明々白々の如くに見ゆればなり」。

「阿難よ、是の如く語る勿れ。阿難よ是の如く語る勿れ。阿難よ、此の緣起の法は深邃なり、深邃の相あり。阿難よ此の法を覺らず徹見せざるに依りて、卽ち此の生類は、絲[1]の縺れたるが如く、腫[2]物に覆はれたるが如く、們叉（ムンヂャ）草、波羅波（バッバヂャ）草の如く、惡生・惡趣・地獄の輪廻を出離することを得ざるなり。

二　阿難よ、若し〔人ありて〕『定まれる緣に依りて老死ありや』と問はば、『あり』と

阿難よ、若し人ありて「定まれる縁に依りて受ありや」と問はば、「あり」と答ふべく、若し又「如何なる縁より受ありや」と言はば、「觸の縁より受あり」と語るべきなり。

阿難よ、若し人ありて「定まれる縁に依りて觸ありや」と問はば、「あり」と答ふべく、若し又「如何なる縁より觸ありや」と言はば、「名色（みやうしき）の縁より觸あり」と語るべきなり。

阿難よ、若し人ありて「定まれる縁に依りて名色ありや」と問はば、「あり」と答ふべく、若し又「如何なる縁より名色ありや」と言はば、「識の縁より名色あり」と語るべきなり。

阿難よ、若し人ありて「定まれる縁に依りて識ありや」と問はば、「あり」と答ふべく、若し又「如何なる縁より識ありや」と言はば、「名色の縁より識あり」と語るべきなり。

三　阿難よ、是の如く名色の縁より識生じ、識の縁より名色生じ、名色の縁より觸生じ、觸の縁より受生じ、受の縁より愛生じ、愛の縁より取生じ、取の縁より有生じ、

答ふべく、若し又「如何なる縁より老死ありや」と言はば、「生の縁より老死あり」と語るべきなり。

阿難よ、若し人ありて「定まれる縁に依りて生ありや」と問はば、「あり」と答ふべく、若し又「如何なる縁より生ありや」と言はば、「有（う）の縁より生あり」と語るべきなり。

阿難よ、若し人ありて「定まれる縁に依りて有ありや」と問はば、「あり」と答ふべく、若し又「如何なる縁より有ありや」と言はば、「取（しゅ）の縁より有あり」と語るべきなり。

阿難よ、若し人ありて「定まれる縁に依りて取ありや」と問はば、「あり」と答ふべく、若し又「如何なる縁より取ありや」と言はば、「愛の縁より取あり」と語るべきなり。

阿難よ、若し人ありて「定まれる縁に依りて愛ありや」と問はば、「あり」と答ふべく、若し又「如何なる縁より愛ありや」と言はば、「受の縁より愛あり」と語るべきなり。

なき時、有の滅より亦生は施設せらるゝや」

「世尊、そは實に然らず」

「其の故に、阿難よ、玆に此こそ卽ち生の因、其の因緣、其の集、其の緣たるものあり、謂く有是なり。

六 『取の緣より有あり』とは、これ既に語られたり。阿難よ、如何にして、取の緣より有ありやは、此はこれ、是の如くにして知らるべし。阿難よ、若し何者も、何處に於ても、一切全く取のなき時――譬へば、欲取も見取も戒禁取も我語取も――一切の取のなき時、取の滅より亦、有は施設せらるゝや」。

「世尊、そは實に然らず」。

「其の故に阿難よ、玆に此こそ卽ち有の因、其の因緣、其の集、其の緣たるものあり、謂く取是なり。

七 『愛の緣より取あり』とは、これ既に語られたり。阿難よ、如何にして愛の緣より取ありやは、此はこれ、是の如くにして知らるべし。阿難よ、若し何者も、何處に於ても、一切全く愛のなき時―― 譬へば色愛も聲愛も、香愛も、味愛も、觸愛も、法愛

有の縁より生生じ、生の縁より老死生じ、老死の縁より愁・悲・苦・憂・惱は生ず。是の
57 如くして一切苦蘊の集あり。

四「生の縁より老死あり」とは、これ既に語られたり。阿難よ、如何にして生の縁より老死ありやは、此はこれ、是の如くにして知らるべし。阿難よ、若し何者も、何處に於ても、一切全く生のなき時、——譬へば天の[3]天相に於て、乾闥婆の乾闥婆相に於て、夜叉の夜叉相に於て、物精の物精相に於て、人の人相に於て、四足の四足相に於て、鳥の鳥相に於て、蝸蛇の蝸蛇相に於て、——阿難よ、若し諸の有情の如實の相に於て生なき時、卽ち一切の生なき時、生の滅より亦老死は施設せらるゝや」。

「世尊、そは實に然らず」。

「其の故に、阿難よ、玆に此こそ卽ち老死の因、その因緣、其の集、其の縁たるものあり、謂く生是なり。

五「有の縁より生あり」とは、これ既に語られたり。阿難よ、如何にして有の縁より生ありやは、此はこれ、是の如くにして知らるべし。阿難よ、若し何者も、何處に於ても、一切全く有のなき時、——譬へば欲有も色有も無色有も——一切の有の

59 に縁りて守生じ、守に縁りて護生じ、護に縁りて執杖・執劍・鬪・諍・競・爭論・惡口・妄語等、無數の罪惡の法は生ず。

一〇　「護を縁として、執杖・執劍・鬪・諍・競・爭論・惡口・妄語等無數の罪惡の法生ず」とは、これ既に語られたり。阿難よ、如何にして護を縁として、執杖・執劍・鬪・諍・競・爭論・惡口・妄語等無數の罪惡の法の生ずるやは、此はこれ、是の如くにして知らるべし。阿難よ、若し何者も、何處に於ても、一切全く護のなき時、卽ち一切の護のなき時、護の滅より亦、執杖・執劍・鬪・諍・競・爭論・惡口・妄語等無數の罪惡の法は生ずるや」。

「世尊、そは實に然らず」。

「其の故に、阿難よ、玆に此こそ卽ち執杖・執劍・鬪・諍・競・爭論・惡口・妄語等無數の罪惡の法生ずるの因、其の因縁、其の集、其の縁たるものあり。謂く護是なり。

一一　「守に縁りて護あり」とは、これ既に語られたり。阿難よ、如何にして守に縁りて護ありやは、此はこれ、是の如くにして知らるべし。阿難よ、若し何者も、何處に於ても、一切全く守のなき時、卽ち一切の守のなき時に、守の滅より亦、護は施設せらるゝや」。

も——一切の愛のなき時、愛の滅より亦、取は施設せらるゝや」

「世尊、そは實に然らず」。

「其の故に、阿難よ、玆に此こそ卽ち取の因、其の因緣、其の集、其の緣たるものあり、謂く愛是なり。

八　『受の緣より愛あり』とは、これ既に語られたり。阿難よ、如何にして受の緣より愛ありやは、此はこれ、是の如くにして知らるべし。阿難よ、若し何者も、何處に於ても、一切全く受のなき時——譬へば眼觸所生の受も、耳觸所生の受も、鼻觸所生の受も、舌觸所生の受も、身觸所生の受も、意觸所生の受も——一切の受のなき時、受の滅より亦、愛は施設せらるゝや」。

「世尊、そは實に然らず」。

「其の故に、阿難よ、玆に此こそ卽ち愛の因、其の因緣、其の集、其の緣たるものあり、謂く取是なり。

九　此の如く、阿難よ、受に緣りて愛生じ、愛に緣りて求生じ、求に緣りて利生じ、利に緣りて用生じ、用に緣りて欲（欲貪）生じ、欲に緣りて著生じ、著に緣りて嫉生じ、嫉

「世尊、そは實に然らず」。

「其の故に、阿難よ、玆に此こそ卽ち嫉の因、其の因緣、其の集、其の緣たるものあり、謂く著是なり。

一四　「欲に緣りて著あり」とは、これ既に語られたり。阿難よ、如何にして欲に緣りて著ありやは、此はこれ、是の如くにして知らるべし。阿難よ、若し何者も、何處に於ても、一切全く欲のなき時、卽ち一切の欲のなき時、欲の滅より亦、著は施設せらるゝや」。

「世尊、そは實に然らず」。

「其の故に、阿難よ、玆に此こそ卽ち著の因、其の因緣、其の集、其の緣たるものあり、謂く欲是なり。

一五　「用に緣りて欲あり」とは、是れ既に語られたり。阿難よ、如何にして用に緣りて欲ありやは、此はこれ、是の如くにして知らるべし。阿難よ、若し何者も、何處に於ても、一切全く用のなき時、卽ち一切の用のなき時、用の滅より亦、欲は施設せらるゝや」。

「世尊、そは實に然らず」。

「其の故に、阿難よ、玆に此こそ卽ち護の因、其の因緣、其の集、其の緣たるものあり、謂く守是なり。

一二　『嫉に緣りて守あり』とは、これ既に語られたり、阿難よ、如何にして嫉に緣りて守ありやは、此はこれ、是の如くにして知らるべし。阿難よ、若し何者も、何處に於ても、一切全く嫉のなき時、卽ち一切の嫉のなき時に、嫉の滅より亦、守は施設せらるゝや」。

「世尊、そは實に然らず」。

「其の故に、阿難よ、玆に此こそ卽ち守の因、其の因緣、其の集、其の緣たるものあり、謂く嫉是なり。

一三　『著に緣りて嫉あり』とは、これ既に語られたり、阿難よ、如何にして著に緣りて嫉ありやは、此はこれ、是の如くにして知らるべし。阿難よ、若し何者も、何處に於ても、一切全く著のなき時、卽ち一切の著のなき時に、著の滅より亦、嫉は施設せらるゝや」。

「世尊、そは實に然らず」。

「其の故に、阿難よ、茲に此こそ卽ち利の因、其の因緣、其の集、其の緣たるものあり、謂く求是なり。

一八 「愛に緣りて求あり」とは、これ既に語られたり。阿難よ、如何にして愛に緣りて求ありやは、此はこれ、是の如くにして知らるべし。阿難よ、何者も、何處に於ても、一切全く愛のなき時――譬へば欲愛も、有愛も、非有愛も――一切の愛のなき時、愛の滅より亦、求は施設せらるゝや」。

「世尊、そは實に然らず」。

「其の故に、阿難よ、茲に此こそ卽ち求の因、其の因緣、其の集、其の緣たるものあり、謂く愛是なり。

阿難よ、是の如く愛に二類の法あり、二類に依るも、受に對すれば一に會す。

62 一九 「觸の緣より受あり」とは、これ既に語られたり。阿難よ、如何にして觸の緣より受ありやは、此はこれ、是の如くにして知らるべし。阿難よ、何者も、何處に於ても、一切全く觸のなき時――譬へば眼觸も、耳觸も、鼻觸も、舌觸も、身觸も、意觸も

01

「世尊、そは實に然らず」。

「其の故に、阿難よ、玆に此こそ卽ち欲の因、其の因緣、其の集、其の緣たるものあり、謂く用是なり。

一六　「利に緣りて用あり」とは、これ既に語られたり。阿難よ、如何にして利に緣りて用ありやは、此はこれ、是の如くにして知らるべし。阿難よ、何者も、何處に於ても、一切全く利のなき時、卽ち一切の利のなき時、利の滅より亦、用は施設せらるるや」。

「世尊、そは實に然らず」。

「其の故に、阿難よ、玆に此こそ卽ち用の因、其の因緣、其の集、其の緣たるものあり、謂く利是なり。

一七　「求に緣りて利あり」とは、これ既に語られたり。阿難よ、如何にして求に緣りて利ありやは、此はこれ、是の如くにして知らるべし。阿難よ、何者も、何處に於ても、一切全く求のなき時、卽ち一切の求のなき時、求の滅より亦、利は施設せらるるや」。

の施設はあるも、其の形、其の色、其の相、其の貌なき時にも、猶ほ名目の觸及び有對の觸は施設せらるゝや」。

「世尊、そは實に然らず」。

「阿難よ、かの形に依り、かの色に依り、かの相に依り、かの貌に依り、名色の施設はあるも、其の形、其の色、其の相、其の貌なき時にも、猶ほ名色は施設せらるゝや」。

「世尊、そは實に然らず」。

「其の故に、阿難よ、玆に此こそ卽ち觸の因、其の因緣、其の集、其の緣たるものあり、謂く名色是なり。

二一　「識の緣より名色あり」とは、これ既に語られたり。阿難よ、如何にして識の緣より名色ありやは、此はこれ、是の如くにして知らるべし。阿難よ、識が母胎に入らざる時にも、猶ほ名色は母胎に於て結成するや」。

「世尊、そは實に然らず」。

「阿難よ、識若し母胎に入りて後、消滅するも、猶ほ名色は〔名色の〕相に於て出現するや」。

――一切の觸のなき時、觸の滅より亦、受は施設せらるゝや」。

「世尊、そは實に然らず」。

「其の故に、阿難よ、茲に此こそ卽ち受の因、其の因緣、其の集、其の緣たるものあり、謂く觸是なり。

二〇 「名色の緣より觸あり」とは、これ既に語られたり。阿難よ、如何にして名色の緣より觸ありやは、此はこれ、是の如くにして知らるべし。阿難よ、かの形に依り、かの色に依り、かの相に依り、かの貌に依り、名身の施設あるも、其の形、其の色、其の相、其の貌なき時にも、猶ほ色身に於て、[4]名目の觸(心觸)は施設せらるゝや」。

「世尊、そは實に然らず」。

「阿難よ、かの形に依り、かの色に依り、かの相に依り、かの貌に依り、色身の施設はあるも、其の形、其の色、其の相、其の貌なき時にも、猶ほ名身に於て、有對の觸(身觸)は施設せらるゝや」。

「世尊、そは實に然らず」。

「阿難よ、かの形に依り、かの色に依り、かの相に依り、かの貌に依り、名身及び色身

[64]廻して、現相を施設せられむ限り、名色は識と倶なり。

二三　阿難よ、次に我を計する者は幾種を說くや。阿難よ、我を有色にして有量なりと計する者は、『わが我は有色有量なり』と說く。又阿難よ、我を有色にして無量なりと計する者は、『わが我は有色・無量なり』と說く。又阿難よ、我を無色にして有量なりと計する者は、『わが我は無色有量なり』と說く。又阿難よ、我を無色にして無量なりと計する者は、『わが我は無色・無量なり』と說く。

二四　阿難よ、此の中、我を計して有色・有量なりと說く者は、或は現世に於て我を計して有色・有量なりと說き、或は來世に於て我を計して有色・有量なりと說き、『若し之と異相なるあらば、われ此の相に合致せしめむ』と思考せり。是の如くなるが故に、阿難よ、彼は我が有色・有量なりとの邪見を執すとは、蓋し至言なるべし。

　阿難よ、此の中、我を計して有色・無量なりと說く者は、或は現世に於て我を計して有色・無量なりと說き、或は來世に於て我を計して有色・無量なりと說き、『若し之と異相なるあらば、われ此の相に合致せしめむ』と思考せり。是の如くなるが故に、阿難よ、彼は我が有色・無量なりとの邪見を執すとは、蓋し至言なるべし。

「世尊、そは實に然らず」。

「阿難よ、識が幼者卽ち童男或は童女に於て斷たれたる時、猶ほ名色は增大、成長、發達をなすや」。

「世尊、そは實に然らず」。

「其の故に、阿難よ、玆に此こそ卽ち名色の因、其の因緣、其の集、其の緣たるものあり、謂く識是なり。

二二　「名色の緣より識あり」とは、これ既に語られたり。阿難よ、如何にして名色の緣より識ありやは、是の如くにして知らるべし。阿難よ、識若し名色に於て根據を得ざるも、猶ほ未來に於て生・老・死・苦の集の存在は施設せらるゝや」。

「世尊、そは實に然らず」。

「其の故に、阿難よ、玆に此こそ卽ち識の因、其の因緣、其の集、其の緣たるものあり、謂く名色是なり。

阿難よ、［人の］生れ、或は老い、或は死し或は滅し、或は再生せむ限り、名目道のあらむ限り、言語道のあらむ限り、施設道のあらむ限り、智慧界のあらむ限り、流轉輪

せしめむ」とも思考せず。是の如くなるが故に、阿難よ、彼は我が有色・有量なりとの邪見を執せずとは、蓋し至言なるべし。

阿難よ、此の中、我を有色・無量なりと計せず、此の説をなさざる者は、或は現世に於て我を有色・無量なりと計せず、此の説をなさず、或は來世に於て我を有色・無量なりと計せず、此の説をなさず、「若し之と異相なるあらば、われ此の相に合致せしめむ」とも思考せず。是の如くなるが故に、阿難よ、彼は我が有色無量なりとの邪見を執せずとは、蓋し至言なるべし。

阿難よ、此の中、我を無色・有量なりと計せず、此の説をなさざる者は、或は現世に於て我を無色・有量なりと計せず、此の説をなさず、或は來世に於て我を無色・有量なりと計せず、此の説をなさず、「若し之と異相なるあらば、われ此の相に合致せしめむ」とも思考せず。是の如くなるが故に、阿難よ、彼は我が無色・有量なりとの邪見を執せずとは、蓋し至言なるべし。

阿難よ、此の中、我を無色・無量なりと計せず、此の説をなさざる者は、或は現世に於て我を無色・無量なりと計せず、此の説をなさず、或は來世に於て我を無色・無量

阿難よ、此の中、我を計して無色・有量なりと說くものは、或は現世に於て我を計
して無色・有量なりと說き、或は來世に於て我を計して無色・有量なりと說き：乃
至：來世に於て我を計して、無色・無量なりと說き「若し之と異相なるあらば、われ
65 此の相に合致せしめむ」と思考せり。是の如くなるが故に、阿難よ、彼は我が無色・
無量なりとの邪見を執すとは、蓋し至言なるべし。

阿難よ、我を計する者の說く所、是の如し。

二五 阿難よ、我を計せず、之を說かざる者幾種なりや。阿難よ、我を有色・有量な
りと計せざる者は、「わが我は有色・有量なり」と說かず。又阿難よ、我を有色・無量
なりと計せざる者は、「わが我は有色・無量なり」と說かず。又阿難よ、我を無色・有
量なりと計せざる者は「わが我は無色・有量なり」と說かず。又阿難よ、我を無色・無
量なりと計せざる者は「わが我は無色・無量なり」と說かず。

二六 阿難よ、此の中、我を有色・有量なりと計せず、この說を爲さざる者は、或は現
世に於て我を有色・有量なりと計せず、この說をなさず、或は來世に於て我を有色・
有量なりと計せず、この說をなさず「若し之と異相なるあらば、われ此の相に合致

或る時に於て苦受を領納せむか、其れと同時に樂受を領納せず、又不苦不樂受を領納せずして、唯其の時は苦受をのみ領納すべし。阿難よ、若し又或る時に於て不苦不樂受を領納せむか、其れと同時に樂受を領納せず、又苦受を領納せずして、唯其の時は不苦不樂受をのみ領納すべし。

二九　阿難よ、樂受は實に無常有爲緣起の法にして、滅盡の法・敗壞の法・離欲の法・滅の法なり。阿難よ、苦受も實に無常有爲緣起の法にして、滅盡の法・敗壞の法・離欲の法・滅の法なり。阿難よ、不苦不樂受も實に無常・有爲・緣起の法にして、滅盡の法・敗壞の法・離欲の法・滅の法なり。若し樂受を領納しつゝあらむ者、『是わが我なり』と思考せむか、彼は實に又樂受の滅に依りて、『わが我は滅せり』と考へざるべからず。若し苦受を領納しつゝあらむ者、『是わが我なり』と思考せむか、彼は實に又苦受の滅に依りて『わが我は滅せり』と考へざるべからず。若し不苦不樂受を領納しつゝあらむ者、「是わが我なり』と思考せむか、彼は實に又不苦不樂受の滅に依りて「わが我は滅せり』と考へざるべからず。

斯くて、『受はわが我なり』と言はむ者は、現見の法に於て、無常にして樂・苦と共

なりと計せず、此の説をなさず、『若し之と異相なるあらば、われ此の相に合致せしめむ』とも思考せず。是の如くなるが故に阿難よ、彼は我が無色・無量なりとの[66]邪見を執せずとは、蓋し至言なるべし。

　阿難よ、我を計せず、説かざるもの、是の如し。

二七　阿難よ、我を如何に觀察するや。阿難よ、受に就きて或は『受はわが我なり』、或は『受は實にわが我に非ず、感受し得べからざるもの卽ちわが我なり』と、阿難よ、斯く我を觀察す。或は『受は實にわが我に非ず、又感受し得べからざるものも、わが我に非ず、我はわれに依りて領納せらるべく、卽ち受の法こそわが我なれ』と、阿難よ、斯く我を觀察す。

二八　阿難よ、此の中、受はわが我なりと言はむ者に對しては、次の如く言はれざるべからず。『友よ、此の受に三あり、樂受・苦受・不苦不樂受なり。此等の三受の中、汝は何れを我と見るや』と。

　阿難よ、若し或る時に於て、樂受を領納せむか、其れと同時に苦受を領納せず、又不苦不樂受を領納せずして、唯其の時は樂受をのみ領納すべし。阿難よ、若し又

あらず、我はわれに依りて領納せらるべきものなり、卽ちわが我は受の法是なり」と觀察することも、之に依りて不可能なり。

三二　阿難よ、此の故に、比丘は受を我なりとは觀察せず、感受し得べからざるものを我なりとも觀察せず、又我はわれに依りて領納せらるべきもの、卽ちわが我は受の法なりとも觀察せず。是の如く我を觀ぜざれば、彼は世に於て何者にも執せず。執せざるが故に怖畏せず。怖畏せざるが故に唯獨り般涅槃し、「生は已に盡き、梵行已に立ち、所作已に作し、後有なし」と自ら知るなり。阿難よ、是の如く心解脱せる比丘に、「如來は死後に有りや」と問ふ者あらむに、若し彼は斯く執すと言はば、そは正しからず。「如來は死後に無きや」と問はむに、若し彼は斯く執すと言はば、そは正しからず。「如來は死後に又有り又無きや」と問はむに、若し彼は斯く執すと言はば、そは正しからず。「如來は死後に有るにも非ず、無きにも非ざるや」と問はむに、若し彼は斯く執すと言はば、そは正しからず。そは如何なる因由に依るや。阿難よ、名目のあらむ限り、名目道のあらむ限り、言語のあらむ限り、言語道のあらむ限り、施設のあらむ限り、施設道のあらむ限り、智慧のあらむ限

に滅する生滅の法をば我なりと觀察するなり。阿難よ、其の故に、「受はわが我なり」と觀察することは、之に依りて不可能なり。

三〇　阿難よ、此の中、又「受は實にわが我に非ず、感受し得べからざるもの卽ちわが我なり」と言はば、彼には又次の語をなすべし。「友よ、一切の所受なき處、其處にも猶「われあり」との思はあり得るや」と。

「世尊、そは實に然らず」。

「阿難よ、其の故に、「受は實にわが我に非ず、感受し得べからざるもの、卽ちわが我なり」と觀察することも、之に依りて不可能なり。

三一　阿難よ、此の中、又「受は實にわが我に非ず、わが我は感受し得べからざるものにも非ず、我はわれに依りて領納せらるべきものなり、卽ちわが我は受の法是なり」と言はば、彼には又次の語をなすべし。「友よ、一切全く、受滅したる時、卽ち一切の受のなき時、この受の滅よりそこに「このわれはあり」との思は有り得るや」と。

「世尊、そは實に然らず」。

「其の故に、阿難よ、「受は實にわが我に非ず、感受し得べからざるものもわが我に

阿難よ、一切の識無邊處を超え、『何ものもあるなし』とて、無所有處に生るゝ有情あり、これ第七識住なり。

〔二處とは、第一に〕無想有情處、第二に非想非々想處なり。

三四　阿難よ、此の中、異類の身、異類の想を有する有情、卽ち人と、一分の天と、一分の墮獄者とは、第一識住なりと、斯く知る者は、阿難よ、實に又其の集を知り、其の滅を知り、其の福を知り、其の禍を知り、其の〔輪廻よりの〕出離を知る。而も猶彼は此〔の識住〕に依りて歡喜し得るや。

70 「世尊、そは實に然らず」。…乃至…

「阿難よ、此の中、一切の識無邊處を超え、『何ものもあるなし』とて、無所有處に生るゝ者は第七識住なりと、斯く知る者は、阿難よ、實に又其の集を知り、其の滅を知り、其の福を知り、其の禍を知り、其の〔輪廻よりの〕出離を知る。而も猶彼は此〔の識住〕に依りて歡喜し得るや」。

「世尊、そは實に然らず」。

「阿難よ、此の中、無想有情處は是なりと、斯く知れる者は、阿難よ、實に又其の集を

り、智慧界のあらむ限り、流[5]転輪廻する限り、その限りに於て、比丘は之を知りて解脱す。是の如く知りて解脱せる比丘を、知らず見ざる(の徒)なりと執するは正しからず。

三三　阿難よ、かの識住は七あり、處は二あり。何をか七となす。阿難よ、異類の
69 身、異類の想を有する有情、卽ち人と、一分の天と、一分の墮獄者とあり、これ第一識住なり。

阿難よ、異類の身、一類の想を有する有情、卽ち初禪に依りて生れたる梵衆天あり、これ第二識住なり。

阿難よ、一類の身、異類の想を有する有情、卽ち光音天あり、これ第三識住なり。

阿難よ、一類の身、一類の想を有する有情、卽ち遍淨天あり、是れ第四識住なり。

阿難よ、一切の色想を超え、有對の想を超え、諸種の想を作意せず、「空は無邊なり」とて、空無邊處に生るゝ有情[6]あり、これ第五識住なり。

阿難よ、一切の空無邊處を超え、「識は無邊なり」とて、識無邊處に生るゝ有情あり、これ第六識住なり。

空無邊處に達して住す。これ第四解脫なり。

一切の空無邊處を超え「識は無邊なり」とて、識無邊處に達して住す。これ第五解脫なり。

一切の識無邊處を超え、「何ものもあることなし」とて、無所有處に達して住す。これ第六解脫なり。

一切の無所有處を超え、非想非々想處に達して住す。これ第七解脫なり。

一切の非想非々想處を超え、想受滅盡に達して住す。これ第八解脫なり。

三六　阿難よ、其の故に、比丘は此等の八解脫に順入し、或は逆入し、或は順逆共に入り、樂ふ時、樂ふ所、樂ふ限りの間、之に入出し、斯くて有漏の滅より――現見の法に於て自らを知り、之に直面して――無漏の心解脫・慧解脫に達して住す。この比丘を「阿難よ、倶解脫(者)と名く。阿難よ、この倶解脫の他に、猶高く優れたる倶解脫あることなし」。

世尊は斯く說き給へり。長老阿難は、世尊の說法を聞きて歡喜し踊躍しぬ、と

知り、其の滅を知り、其の福を知り其の禍を知り其の〔輪廻よりの〕出離を知る。而も猶彼は此〔の處〕に依りて歡喜し得るや」。

「世尊、そは實に然らず」。

「阿難よ、此の中、非想非々想處は是なりと、斯く知れる者は、阿難よ、實に又其の集を知り、其の滅を知り、其の福を知り其の禍を知り其の〔輪廻よりの〕出離を知る。而も猶彼は此〔の處〕に依りて歡喜し得るや」。

「世尊、そは實に然らず」。

「其の故に、阿難よ、比丘は是等の七識住及び是等の二處の集・滅・福・禍・出離を如實に知りて、生〔緣起〕より解脱す。阿難よ、この比丘を慧解脱と名く。

三五　阿難よ、この解脱に八あり、何をか八となす。色あるものは色を觀ず。これ第一解脱なり。

內(うち)無色・有想のものは外(そと)色を觀ず。これ第二解脱なり。

71 唯「清淨なり」とのみ〔觀じて〕解脱す。これ第三解脱なり。

一切の色想を超え、有對の想を超え、諸種の想を作意せず、「空は無邊なり」とて、

註❶「絲の縺れたる如く」tantākulaka-jātā 飜譯名義集に tantra-jala-jātaḥ（如亂髮）とあるは、榊博士の想定せるが如く、此の巴利語に相當する梵語 tantra-kulaka-jātaḥ の誤なるべし。

❷「腫物に覆はれたる如く」gulaguṇṭhika-jātā 名義集は之を「如亂絲」の漢譯に當つ。

❸「天の天相」devānaṁ vā devattāya を、人本欲生經、大因經は、神神種、天天種となせど devattā は「天たること」或は「天の本性」の意にして、兩者文法上の格を異にすれば、今「天の天相」と譯したり。

❹「名目の觸」adhivacana-samphassa は、次に出づる「有對の觸」paṭigha-samphassa に對する語なり。名色の「名」は、五蘊中の受想行識の心を指すものにして、心は形體なく唯名を以て知らるゝのみなり。色とは極微所成の質礙ある色蘊をいふ。而して名目の觸と直譯せるは、卽ち前者に當る名の觸なれば、本文括孤中に、此の意を率直に現はす大緣方便經の譯語「心觸」を載せ置けり。之に對し「有對の觸」とは、色に對する觸なれば、是れ又同經の譯語「身觸」を載せたり。尙 adhivacana を中阿・大因經は增語と譯せり。

❺底本には yāvatā vaṭṭaṁ を重複したれども、異本には之を重複せず。今異本を正當と信じ、之に從って譯せり。因に底本も第二二節は之を重複せず。

❻原文は satta とあれど、sattā の誤なり。

大般涅槃経 (Mahāparinibbāna-sutta)

平等通昭 訳

一六　大般涅槃經（マハーパリニッバーナ・スッタンタ）

第一誦品

72 一　是の如く我聞く。一時、世尊は王舍城の靈鷲山に在しき。其の時、韋提希〔夫人〕の子にして摩揭陀王なる阿闍世は、跋祇人を征伐せむと欲しぬ。こゝに彼は斯く言ひぬ。「斯く強力にして威力ありとも此の跋祇人を予は伐たむ、跋祇人を予は根絶せしめむ、跋祇人を予は滅亡せしめむ、跋祇人を予は破滅に至らしめむ」と。

二　こゝに韋提希の子なる摩揭陀王阿闍世は、摩揭陀の大臣禹舍〔雨行〕婆羅門に告げて言へり。

「さらば、婆羅門よ、汝、世尊の所に行け。行きて世尊の足に頂禮せよ。而して予の言として、病無く、苦より離れ、輕快にて安易、愉快にて力強く、健勝にわたらせ給

れ、輕快にて安易、愉快にて力強く、健勝にわたらせ給ふや否やを伺ひまつる。瞿曇よ、韋提希の子なる摩掲陀王阿闍世は、跋祇人を征伐せむと欲しぬ。彼は斯く言ひぬ。『強力にて威力ありとも、此の跋祇人を予は伐たむ、跋祇人を予は根絶せしめむ、跋祇人を予は滅亡せしめむ、跋祇人を予は破滅に至らしめむ』と」。

四　其の時、尊者阿難は、世尊の後に立ちて世尊を扇ぎ居たりき。こゝに世尊は尊者阿難に曰ひぬ。

「阿難よ、汝は跋祇人が屢々集り、集れば多しと聞きしや否や」。

「世尊、我は跋祇人は屢々集り、集れば多しと聞きぬ」。

「然らば、阿難よ、跋祇人は屢々集り、集れば多からん間は、跋祇人に繁榮は期待せられ、衰亡は無かるべし。阿難よ、汝は跋祇人が共に集り、共に起ち、共に跋祇人の
[74] 爲す可き事を爲すと聞きしや否や」。

「世尊、我は跋祇人が共に集り、共に起ち、共に跋祇人の爲す可き事を爲すと聞きぬ」。

「然らば、阿難よ、跋祇人が共に集り、共に起ち、共に跋祇人の爲す可き事を爲す間

ふや否やを問ひて、『世尊、韋提希の子なる摩揭陀王阿闍世は、世尊の足に頂禮し、病無く、苦より離れ、輕快にて安易、愉快にて力強く、健勝にわたらせ給ふや否やを伺ひまつる』と言へ。而して又斯く言へ。『世尊、韋提希の子なる摩揭陀王阿闍世は、跋祇人を征伐せむと欲しぬ。彼は斯く言ひぬ。「強力にして威力ありとも、此の跋祇人を予は伐たむ、跋祇人を予は根絶せしめむ、跋祇人を予は滅亡せしめむ、78 跋祇人を予は破滅に至らしめむ」と』。而して世尊の教誡し給ふまゝに、善くそを憶念して、予に語れ。その故は、世尊は虚妄を曰はざればなり』と。

三　「畏りぬ」と、摩揭陀の大臣禹舍婆羅門は、韋提希の子なる摩揭陀王阿闍世の言を承諾して、華麗なる多くの乘物を裝備し、自らも華麗なる乘物に乘りて、王舍城を離れ、靈鷲山に出發したり。乘物にて行き得る地まで乘物にて行き、そこにて乘物を降り、徒歩にて世尊の在す所に近づきて、世尊に挨拶し、共に挨拶の言、喜の語を取り交して一方に坐しぬ。一方に坐して、摩揭陀の大臣禹舍婆羅門は斯く言ひぬ。

「瞿曇よ、韋提希の子なる摩揭陀王阿闍世は、瞿曇の足に頂禮し、病無く、苦より離

ること無しと聞きしや否や」。
「世尊、我は跋祇人は宗族の婦女・童女をば、暴力にて連れ出し、拘へ留むることなしと聞きぬ」。
「然らば、阿難よ、跋祇人が宗族の婦女・童女をば、暴力もて連れ出し、拘へ留むること無からむ間は、阿難よ、跋祇人に繁榮は期待せられ、衰亡は無かるべし。阿難よ、汝は、跋祇人が〔城の〕內外の跋祇人の跋祇廟を敬ひ尊び崇め支持し、而してかの以前に與へられ以前に爲されたる法に適へる供養を廢せずと聞きしや否や」。
75 「世尊、我は跋祇人が〔城の〕內外の跋祇人の跋祇廟を敬ひ尊び崇め支持し、而してかの以前に與へられ以前に爲されたる法に適へる供養を廢せずと聞きぬ」。
「然らば、阿難よ、跋祇人が〔城の〕內外の跋祇人の跋祇廟を敬ひ尊び崇め支持し、而してかの以前に與へられ以前に爲されたる法に適へる供養を廢せざらむ間は、阿難よ、跋祇人に繁榮は期待せられ、衰亡は無かるべし。阿難よ、汝は跋祇人が阿羅漢に對して、正當の保護と防禦と支持とをよく備ふと聞きしや否や。又阿羅漢が將來この領土に入らむとし、その來れる阿羅漢は領土內に安らかに住すべ

は、阿難よ、跋祇人に繁榮は期待され、衰亡は無かるべし。阿難よ、汝は跋祇人が嘗て定められざる事を定めず、定められたる事を破らず、往昔に定められたる跋祇人の法に從ひて行動すると聞きしや否や」。

「世尊、我は跋祇人が嘗て定められざる事を定めず、定められたる事を破らず、往昔に定められたる跋祇人の法に從ひて行動すと聞きぬ」。

「然らば、阿難よ、跋祇人は嘗て定められざる事を定めず、定められたる事を破らず、往昔に定められたる跋祇人の法に從ひて行動する間は、阿難よ、跋祇人に繁榮は期待され、衰亡は無かるべし。阿難よ、汝は跋耆人が彼の跋祇人の跋祇古老を敬ひ尊び崇め供養し、而して彼等の言を聽く可きなりと思へりと聞きしや否や」。

「世尊、我は跋祇人は跋祇人の跋祇古老を敬ひ尊び、崇め供養し、而して彼等の言を聽く可きなりと思へりと聞きぬ」。

「然らば、阿難よ、跋祇人が彼の跋祇人の跋祇古老を敬ひ尊び崇め供養し、彼等の言を聽く可きなりと思はむ間は、阿難よ、跋祇人に繁榮は期待せられ、衰亡は無かるべし。阿難よ、汝は跋祇人が宗族の婦女童女をば、暴力もて連れ出し、拘へ留む

[76] 無かるべし、況んや七不退法を具するに至りては、又何をか言はむ。嗚呼、瞿曇よ、韋提希の子なる摩掲陀王阿闍世に依りては、戰爭以外、外交以外の不和反間によらずむば、まことに跋祇人を征伏すること能はざるべし。いざ我は行かむ。嗚呼、瞿曇よ、我は忙しく、爲す可き事多し」。

「さらば、婆羅門よ、時宜しと思はば行くべし」。

こゝに摩掲陀の大臣禹舎婆羅門は、世尊の言に悅び歡びて、座を立ちて去りぬ

六　こゝに世尊は、摩掲陀の大臣禹舎婆羅門が去りて間もなく、尊者阿難に曰ひぬ。「阿難よ、汝行きて、王舍城近くに住める諸比丘をば、總て講堂に集まらしめよ」と。

「畏りぬ、世尊」と、尊者阿難は世尊の言を承諾して、王舍城の近くに住める諸比丘を、總て講堂に集めて、世尊に近づきぬ。近づきて世尊に敬禮し、一方に立ちぬ。一方に立ちて、尊者阿難は斯く世尊に白しぬ。「世尊、比丘衆は集れり。世尊、世尊は時宜しと思召さば出御あらせ給へ」と。

こゝに世尊は席を起ちて講堂に赴き給へり。赴きて設けの席に坐し、坐して

しと聞きしや否や」。
「世尊、我は跋祇人が阿羅漢に對して、正當の保護と防禦と支持とをよく備へ、又阿羅漢が將來にこの領土に入らむとし、その來れる阿羅漢は領土內に安らかに住すべしと聞きぬ」。
「然らば、阿難よ、跋祇人が阿羅漢に對して正當の保護と防禦と支持とをよく備へ、又阿羅漢が將來にこの領土に入らむとし、その來れる阿羅漢は領土內に安らかに住せむ間は、跋祇人に繁榮は期待せられ衰亡は無かるべし」。

五　其の時、世尊は摩揭陀の大臣禹舍婆羅門に曰ひぬ。
「婆羅門よ、我、一時、毘舍離（ヹーサーリー）のサーランダダ廟に住したる時、其處にて我は跋祇人に此の七不退法を說きぬ。而して婆羅門よ、此の七不退法が跋祇人の間に存し、跋祇人が此の七不退法に依りてよく敎訓せられむ間は、婆羅門よ、跋祇人に繁榮は期待せられ、衰亡は無かるべし」と。
斯く言はれて、摩揭陀の大臣禹舍婆羅門は言ひぬ。
「嗚呼、瞿曇よ、一々の不退法を具するだに、跋祇人には繁榮が期待せられ、衰亡は

らむ間は、比丘等よ、比丘等に繁榮は期待せられ、衰亡は無かるべし。
また、比丘等よ、比丘等にして、蘭若に住むを望まむ間は、比丘等よ、比丘等に繁榮は期待せられ、衰亡は無かるべし。
また、比丘等よ、比丘等にして一人にて自覺に住し、また將來よき梵行者の來らむとし、その來れるよき梵行者が心よく住せむ間は、比丘等よ、比丘等に繁榮は期待せられ、衰亡は無かるべし。
比丘等よ、この七不退法が比丘等の間に住し、比丘等がこの七不退法に依りてよく教訓せられたらむ間は、比丘等よ、比丘等に繁榮は期待せられ、衰亡は無かるべし。

七　比丘等よ、他の七不退法をも我教へむ。そを聽きて、よく憶念せよ、我說かん」。
「畏りぬ、世尊」と、彼等比丘は世尊に同意しぬ。世尊は斯く曰ひぬ。
「また、比丘等よ、比丘等にして行事に喜なく、行事を喜ばず、行事に好みて與(あつか)らざ
78 らむ間は、比丘等よ、比丘等に繁榮は期待せられ、衰亡は無かるべし。
また、比丘等よ、比丘等にして談話に喜なく、談話を喜ばず、談話に好みて加はら

世尊は比丘等に曰へり。

「汝比丘等よ、我、七不退法を教へむ。そをよく聽きて憶念せよ。我、說かむ」と。

「畏りぬ、世尊」と比丘等は世尊に同意しぬ。世尊は斯く曰ひぬ。

「比丘等よ、比丘等にして屢々集り、集れば多からむ間は、比丘等に繁榮が期待せられ、衰亡は無かるべし。

また、比丘等よ、比丘等にして共に集り共に立ち、共に僧伽の行事を行はむ間は、比丘等よ、比丘等に繁榮は期待せられ、衰亡は無かるべし。

また、比丘等よ、比丘等にして嘗て制定されざりし事は制定せず、制定されたる事を破らず制定されたる學處に從ひて行ぜむ間は、比丘等よ、比丘等に繁榮は期待せられ、衰亡は無かるべし。

また、比丘等よ、比丘等にして經驗ある出家して久しき諸長老、僧伽の師父、僧伽の導師を敬ひ尊び崇め供養し、而して彼等の言を聽く可きなりと思はむ間は、比丘等よ、比丘等に繁榮は期待せられ、衰亡は無かるべし。

また、比丘等よ、比丘等にして、後有を起すべき愛慾を生ぜず、之に支配せられざ

八　また、比丘等よ、他の七不退法をも我敎ふべし。そを聽きてよく憶念せよ。
我說かむ」。

「畏りぬ、世尊」と、彼等比丘は同意しぬ。世尊は斯く曰ひぬ。

「比丘等よ、比丘等にして信を持ち慚あり愧あり、多聞にして、精進に勤め、注意周
79 到にして、智慧あらむ間は、比丘等よ比丘等に繁榮は期待せられ、衰亡は無かるべ
し。

また、比丘等よ、此の七不退法が比丘等の間に住し、比丘等が此の七不退法に依りてよく敎訓せられたらむ間は、比丘等よ、比丘等に繁榮は期待せられ、衰亡は無かるべし。

九　また、比丘等よ、他の七不退法をも我敎ふべし。そを聽きてよく記憶せよ。
我說かむ」。

「畏りぬ、世尊」と、彼等比丘は世尊に同意しぬ。世尊は斯く曰ひぬ。

「また、比丘等よ、比丘等が思念の覺意（念覺支）を修し、法研鑽の覺意（擇法覺支）を修し、精進の覺意（精進覺支）を修し、喜悅の覺意（喜覺支）を修し、靜安の覺意（輕安覺支）を

ざらむ間は、比丘等よ、比丘等に繁榮は期待せられ、衰亡は無かるべし。

また、比丘等よ、比丘等にして睡眠に喜なく、睡眠を喜ばず、睡眠に好みて耽らざらむ間は、比丘等よ、比丘等に繁榮は期待せられ、衰亡は無かるべし。

また、比丘等よ、比丘等にして社會に喜なく、社會を喜ばず、社會に好みて加はらざらむ間は、比丘等よ、比丘等に繁榮は期待せられ、衰亡は無かるべし。

また、比丘等よ、比丘等にして惡しき欲望を持たず、惡しき欲望の影響に陷らざらむ間は、比丘等よ、比丘等に繁榮は期待せられ、衰亡は無かるべし。

また、比丘等よ、比丘等にして惡しき友とならず、惡きし朋友または同朋たらざらむ間は、比丘等よ、比丘等に繁榮は期待せられ、衰亡は無かるべし。

また、比丘等よ、比丘等にして低き特殊の境地に到達したるを以て、中途にて〔涅槃への〕到達を中止するなからむには比丘等よ、比丘等に繁榮は期待せられ、衰亡は無かるべし。

また、比丘等よ、此の七不退法が比丘等の間に住し、比丘等が此の七不退法に依りて教訓せらるゝ間は、比丘等よ、比丘等に繁榮は期待せられ、衰亡は無かるべし。

一一　比丘等よ、六不退法をも我教ふべし。そを聽き、よく憶念せよ、我說かむ」。

「畏りぬ、世尊」と、彼等比丘は世尊に同意しぬ。世尊は斯く曰ひぬ。

「また、比丘等よ、比丘等にして、仁慈なる身業をば梵行者の間に於て、公にも私にも、持ち續けむ間は、比丘等よ、比丘等に繁榮は期待せられ、衰亡は無かるべし。

また、比丘等よ、比丘等にして、仁慈なる口業をば、梵行者の間に於て、公にも私にも持ち續けむ間は、比丘等よ、比丘等に繁榮は期待せられ、衰亡は無かるべし。

また、比丘等よ、比丘等にして、仁慈なる意業をば梵行者の間に於て、公にも私にも、持ち續けむ間は、比丘等よ、比丘等に繁榮は期待せられ、衰亡は無かるべし。

また、比丘等よ、比丘等にして、僧團の規定に從ひて得られたるものは、乃至單なる鉢に入れられしものに至るまで、分配せずして食せず、偏頗なく持戒者・梵行者と共に分配して食せむ間は、比丘等よ、比丘等に繁榮は期待せられ、衰亡は無かるべし。

また、比丘等よ、比丘等にして、斷片ならざる、壞れざる、瑕なき、穢なき、[1]自由人たらしむる、智者に讚嘆せらるゝ、他によりて汚されざる、三昧に導くが如き、かゝる戒

修し、三昧の覺意(定覺支)を修し、捨の覺意(行捨覺支)を修せむ間は、比丘等よ、比丘等に繁榮は期待せられ、衰亡は無かるべし。

また、比丘等よ、此の七不退法が比丘等の間に住し、また比丘等が之等の七不退法に依りてよく教訓せられたらむ間は、比丘等に繁榮は期待せられ、衰亡は無かるべし。

一〇　また、比丘等よ、他の七不退法をも我教ふべし。そを聽きてよく憶念せよ、我說かむ」。

「畏りぬ、世尊」と、彼等比丘は世尊に同意しぬ。世尊は斯く曰ひぬ。

「また、比丘等よ、比丘等にして無常想を修し、無我想を修し、不淨想を修し、苦想を修し、捨離想を修し、離情想を修し、滅想を修せむ間は、比丘等よ、比丘等に繁榮は期待せられ、衰亡は無かるべし。

80 また、比丘等よ、此の七不退法が比丘等の間に住し、また比丘等が七不退法に依りて、よく教訓せられたらむ間は比丘等よ、比丘等に繁榮は期待せられ、衰亡は無かるべし。

ンバラッティカー園に行かむ」と。

「畏りぬ、世尊」と、尊者阿難は同意しぬ。こゝに世尊は大比丘衆と共にアンバラッティカー園に赴き給ひぬ。

一四　其處に、世尊はアンバラッティカー園なる王の家に住し給ひぬ。其處に、世尊はアンバラッティカー園なる王の家に住して比丘等に斯く數々の法話を爲し給へり。即ち、こは戒なり、こは定なり、こは慧なり。戒と共に修せられたる定は、その果大にして利益も大なり。定と共に修せられたる慧は、その果大にして、利益も大なり。慧と共に修せられたる心は、欲漏・有漏・見漏・無明漏等の諸漏より全く解脱すと。

一五　こゝに世尊はアンバラッティカー園に適意に住して、尊者阿難に曰ひぬ。

「いざ、阿難よ、那爛陀（ナーランダー）に行かむ」と。

「畏りぬ、世尊」と、尊者阿難は世尊に同意しぬ。こゝに世尊は大比丘衆と共に那爛陀に赴き給ひぬ。其處に、世尊は那爛陀の波波利（パーヴァーリカ）菴婆（アンバ）林に住し給ひぬ。

一六　こゝに尊者舍利弗は世尊に近づきぬ。近づきて世尊に頂禮して、一方に

律に於て戒を行ひて、公にも私にも、梵行者と共に住せむ間は、比丘等よ、比丘等に繁榮は期待せられ、衰亡は無かるべし。

また、比丘等よ、涅槃に導く聖なる見にして、それを行ずる人を正しく苦の滅に導く如き、斯かる正見によりて、比丘等が正見を持ちて、公にも私にも、梵行者と共に、住せむ間は、比丘等よ、比丘等に繁榮は期待せられ、衰亡は無かるべし。

81

比丘等よ、此の六不退法が比丘等の間に住し、而して比丘等が此等の六不退法に依りてよく教訓せられたらむ間は、比丘等よ、比丘等に繁榮は期待せられ、衰亡は無かるべし」。

一二　こゝに世尊は、かの王舍城の靈鷲山に住して、比丘等に數々の法話をなし給へり。即ち、こは戒なり、こは定なり、こは慧なり。戒と共に修せられたる定は、その果大にして利益も大なり。定と共に修せられたる慧は、その果大にして利益も大なり。慧と共に修せられたる心は、欲漏・有漏・見漏・無明漏等の諸漏より全く解脱すと。

一三　こゝに世尊は王舍城に適意に住して、尊者阿難に曰ひぬ。「いざ、阿難よ、ア

尊は斯く斯くの法、斯く斯くの慧、斯く斯くの行、斯く斯くの解脱なるべし』と知りたるや」。

「然らず、世尊」。

「また、舎利弗よ、今我、阿羅漢・等正覺者なり、その我が心を、汝は汝の心を以て知り、『世尊は斯く斯くの戒なり、世尊は斯く斯くの法、斯く斯くの慧、斯く斯くの行、斯く斯くの解脱なり』と知りたるや」。

「然らず、世尊」。

「こゝに、舎利弗よ、汝には、過去・未來・現在の諸阿羅漢・等正覺者に於ける他心通な
83 し。然らば、舎利弗よ、今何故に、汝の此の言は偉大にして大膽、的確なる所を把へ、師子吼を叫びて、『世尊、我は世尊を斯く信ず。沙門にても又婆羅門にても、世尊より更に偉大に熟知せるもの、卽ち正覺に於て「優れたる」もの、他に「曾て」無く、「將來にも」有らざるべく、「今も」在らず』と「言へるや」。

一七　「世尊、我には、過去・未來・現在の諸阿羅漢・等正覺者に於ける他心通なし。唯我は法の次第を知れり。譬へば、世尊、王者の邊境に城市ありて、堅固なる城壁と、

82 坐しぬ。一方に坐して、尊者舍利弗は斯く言ひぬ。

「世尊、我、世尊に於て斯く信じまつる。沙門にても又婆羅門にても、世尊より更に偉大に熟知せるもの、卽ち正覺に於て〔優れたる〕もの、他に〔曾て〕無く、〔將來にも〕有らざるべく、〔今も〕在らず」と。

「舍利弗よ、汝の言ひしこの言は、偉大にして大膽なり。的確なる所を把へて、師子吼は叫ばれたり。『世尊、我、世尊に於て斯く信じまつる。沙門にても又婆羅門にても、世尊より更に偉大に熟知せるもの、卽ち正覺に於て〔優れたる〕もの、他に〔曾て〕無く、〔將來にも〕有らざるべく、〔今も〕在らず』と。舍利弗よ、過去長時の間に諸阿羅漢・等正覺者ありしが、此等總ての世尊の心をば、汝は汝の心を以て知り、『かの世尊は斯く斯くの戒なりき、かの世尊は斯く斯くの法、斯く斯くの慧、斯く斯くの行、斯く斯くの解脱なりき』と知りたるや」。

「然らず、世尊」。

「また、舍利弗よ、未來長時の間に諸阿羅漢・等正覺者あらむに、此等總ての世尊の心をば、汝は汝の心を以て知り、『かの世尊は斯く斯くの戒にてあるべし、かの世

比丘等に爲し給ひぬ。即ち、戒とは斯く斯くなり、定とは斯く斯くなり、慧とは斯く斯くなり。戒と共に修せる定は、その果大にして利益も大なり。定と共に修せる慧は、その果大にして利益も大なり。慧と共に修せる心は、欲漏・有漏・見漏・無明漏等の諸漏より全く解脱すと。

一九 こゝに世尊は、適意に那爛陀に住して、尊者阿難に曰ひぬ。「いざ、阿難よ、巴(パ)吒(タ)釐(リ)村に行かむ」と。

「承りぬ、世尊」と、尊者阿難は世尊に同意しぬ。こゝに世尊は、大比丘衆と共に巴吒釐村に赴き給ひぬ。

二〇 巴吒釐村の優婆塞等は、「世尊は巴吒釐村に到著し給へり」と聞きぬ。こゝに巴吒釐村の優婆塞等は、世尊に近づきぬ。近づきて敬禮して一方に坐しぬ。一方に坐して、巴吒釐村の優婆塞等は世尊に斯く言ひぬ。「世尊、願くは我等の休息所に住し給はむことを」と。世尊は沈默を以て同意し給ひぬ。

二一 こゝに巴吒釐村の優婆塞等は、世尊の同意を知りて座より起ち、世尊に敬禮し右繞して、休息所に近づきぬ。近づきて、一切の敷物を休息所に擴げ、席を設

堅固なる壘と、門と、唯一の門扉とあり。其處に賢明にして熟練なる智ある門扉の番士ありて、見知らぬ者を止め、見知れる者を入らしむとせむ。〔人ありて〕かの城の周圍の道を辿り行くとも、彼は〔城に〕壘の裂け目、或は壘の割れ目、或は猫の這ひ出る柵の隙間だに〔見出さ〕ざるべし。彼は斯く判ぜむ。何者にても大なる生物が、この城市に出入するには總て此の門扉より出入すべしと。是の如く、世尊、我、法の次第を知れり。世尊、我、過去の諸阿羅漢・等正覺者を知れり。一切のかの世尊は、五蓋を捨て去り、人を弱くする心の汚濁を知りて、心は善く四念處に住し、七菩提分に於て如實に修して、最勝の等正覺を成じ給へりと。また世尊、我、未來の諸阿羅漢・等正覺者を知れり。一切のかの世尊は、五蓋を捨て去り、人を弱くする心の汚濁を知つて、心は善く四念處に住し、七菩提分に於て如實に修して、等正覺を成じ給ふべしと。また世尊、現在に阿羅漢・等正覺者たる世尊は、五蓋を捨て去り、人を弱くする心の汚濁を知りて、心は善く四念處に住し、七菩提分に於て如實に修して、最勝の等正覺を成じ給ふを我知れり」と。

84 一八　こゝに又世尊は、かの那爛陀の波波利菴婆林に住して、斯く種々の法話を

たるに由る無戒者の第二の禍なり。

復更に、戸主等よ、戒を犯したる無戒者は、如何なる社會に入るも、若しくは刹帝利の社會、若しくは婆羅門の社會、若しくは戸主の社會、若しくは沙門の社會にても、不安にして混迷に入る。こは戒を犯したるに由る無戒者の第三の禍あり。

復更に、戸主等よ、戒を犯したる無戒者は惱亂されて死す。こは戒を犯したるに由る無戒者の第四の禍なり。

復更に、戸主等よ、戒を犯したる無戒者は、身壞して死後、惡生・惡趣・苦趣・地獄に生ず。こは戒を犯したるに由る無戒者の第五の禍なり。こは實に、戸主等よ、戒を犯したるに由る無戒者の五禍なり。

二四　戸主等よ、戒の行修に由りて持戒者には此の五利益あり。五とは何ぞや。先づ、戸主等よ、戒を行修せる持戒者は不放逸の爲に、食の豐富に達す。こは戒の行修に由る持戒者の第一の利益なり。

復更に、戸主等よ、戒を行修する持戒者には、善き名聲擴まる。こは戒の行修に由る持戒者の第二の利益なり。

け、水瓶を置き、油燈を立已りて、世尊に近づきぬ。近づきて、世尊に敬禮して一方に立ちぬ。一方に立ちて、巴吒釐村の優婆塞等は、世尊に斯く白しあげぬ。

「世尊、休息所に一切の敷物は擴げられ席は設けられ、水瓶は置かれ、油燈は立てられぬ。世尊、今は世尊の適宜と思召さるゝ時なり」と。

85 二二　こゝに世尊は、下衣を著し、衣鉢を取りて、比丘衆と共に休息所に近づき給ひぬ。近づきて、足を洗ひ休息所に入りて、中央の柱に近く東面して坐し給ひぬ。比丘衆も亦足を洗ひて休息所に入り西の壁に近く東面して世尊に隨ひて坐しぬ。巴吒釐村の優婆塞等は、足を洗ひて休息所に入り、東の壁に近く西面して世尊に隨ひて坐しぬ。

二三　こゝに世尊は、巴吒釐村の優婆塞等に曰ひぬ。

「家主等よ、戒を犯したるに由りて、無戒者には、此の五禍あり。五とは何ぞや。

先づ、戸主等よ、戒を犯したる無戒者は、放逸の爲に食の大不足に陷る。こは戒を犯したるに由る無戒者の第一の禍あり。

復更に、戸主等よ、戒を犯したる無戒者には、惡しき名聲擴まる。こは戒を犯し

り給ひぬ。

二六　その時、摩掲陀の大臣須尼陀(スニーダ)と禹舍とは跋祇人の侵入を防ぐ爲に、巴吒釐[87]村に城塞を築きつゝありき。その時、巴吒釐村に、千の多くの天神が宅地を構へたり。有力なる天神が宅地を構ふる地方には、有力なる王と王の大臣との心は、其處に住居を築くに傾く。中位の天神が宅地を構ふる地方には、中位の王と王の大臣との心は其處に住居を築くに傾く。劣勢の天神が宅地を構ふる地方には、劣勢の王と王の大臣との心は、其所に住居を築くに傾くなり。

二七　世尊は浄き超人間の天眼を以て、かの千の天神が巴吒釐村に宅地を構へつゝあるを見給へり。こゝに世尊は朝早く起きて、尊者阿難に曰ひぬ。

「阿難よ、巴吒釐村に城塞を築きつゝあるは誰人ぞや」。

「世尊、摩掲陀の大臣須尼陀と禹舍とが跋祇人の侵入を防ぐ爲に、巴吒釐村に城塞を築きつゝあり」。

二八　「阿難よ、恰も三十三天と相談して爲すが如く、是の如く、阿難よ、摩掲陀の大臣須尼陀と禹舍とは、跋祇人を防ぐ爲に巴吒釐村に城塞を築きつゝあり。阿難

復更に、戸主等よ、戒を行修する持戒者は、如何なる社會に入るも、若しくは刹帝利の社會、若しくは婆羅門の社會、若しくは戸主の社會、若しくは沙門の社會にても、安泰にして混迷せずして入る。こは戒の行修に由る持戒者の第三の利益なり。

復更に、戸主等よ、戒を行修する修戒者は、惱亂せられずして死す。こは戒の行修に由る持戒者の第四の利益なり。

復更に、戸主等よ、戒を行修する持戒者は、身壞して死後、善處天の世界に生ず。こは戒の行修に由る持戒者の第五の利益なり。之は戸主等よ、戒の行修に由る持戒者の利益なり。

二五　こゝに世尊は、巴吒釐村の優婆塞等に、夜に到るまで法話を敎へ、忠言し、勵まし、歡ばして、去らしめ給ひぬ。「戸主等よ、夜は更けたり。時宜しと思はば去るべし」と。

「畏りぬ世尊」と、巴吒釐村の優婆塞等は、世尊に同意し、座より立ちて、世尊に禮し、右繞して立ち去りぬ。こゝに世尊は、巴吒釐村の優婆塞等の立去るや、空舍に入

歸りぬ。歸りて自らの家に味よき嚼食噉食を準備せしめ、世尊に時を告げぬ。「瞿曇よ、時到りぬ。食事は整へられたり」と。

こゝに世尊は早朝、下衣を著け、衣鉢を取り、比丘衆と共に、摩揭陀の大臣須尼陀・禹舍の住居に赴き給ひぬ。赴きて設けの席に坐し給へり。こゝに摩揭陀の大臣須尼陀・禹舍は、佛陀を上首とする比丘衆に、手づから味よき嚼食噉食を以て滿足せしめ、辭するまで食せしめまつりぬ。こゝに摩揭陀の大臣須尼陀・禹舍は、世尊が食し終りて手と鉢とを洗ひ給ひし時、低き席を取りて一方に坐しぬ。

三一　摩揭陀の大臣須尼陀・禹舍が一方に坐せる時、世尊は此の偈を以て感謝し給ひぬ。

賢者の生れなる者の
住居を取る地方には
其處に戒を持し
賢き梵行者を守りて
其處に都神あらむには

よ、我は清浄なる超人間の天眼を以て、千の多くの天神が巴吒釐村に宅地を築きつゝあるを見たり。有力なる天神が宅地を構ふる地方には、有力なる王と王の大臣との心は其處に住居を築くに傾く。中位の天神が宅地を構ふる地方には、中位の王と王の大臣との心は其所に住居を築くに傾く。劣勢の天神が宅地を構ふる地方には、劣勢の王と王の大臣との心は其所に住居を築くに傾くなり。阿難よ、聖者の居所たる限り、商人の集る限り、この巴吒釐子(華氏)城は首都たり、物貨の集散地たるべし。されど華氏城には、三の危難あるべし。卽ち火により、或は水により、或は友の不和によるものの是なり」。

二九　こゝに摩揭陀の大臣須尼陀と禹舍とは、世尊に近づきぬ。近づきて世尊と互に敬禮し合ひぬ。敬禮して禮儀正しく言葉を交して、一方に立ちぬ。一方に立ちて、摩揭陀の大臣須尼陀と禹舍は世尊に斯く言ひぬ。「尊者瞿曇は今日(我等の家にて)比丘衆と共に供養食を取るを諾ひ給はむことを」と。世尊は沈默を以て承諾し給ひぬ。

三〇　こゝに摩揭陀の大臣須尼陀と禹舍とは、世尊の承諾を知りて、自らの家に

を結びて、彼方へ行かむとしたり。こゝに世尊は、譬へば、力士が屈したる腕を伸ばし、或は伸ばしたる腕を屈せん如き、是の如き間に、恆河の此岸より姿を沒して比丘衆と共に彼岸に立ち給ひぬ。

三四　世尊は、或る者が舟を求め、或る者は筏を求め、或る者は桴を結びて、彼岸に行かむとするを見給ひぬ。その時、世尊は此の意を知りて、この無問自說(烏陀那)を說き給ひぬ。

世人が籠筏を結ぶ間に
深所を捨て橋を造りて
海・湖を渡る者は
渡りたる者、賢き者なり、と。

彼等に供養を捧げ
彼等は敬はれて彼を敬ひ
崇敬されて彼を崇敬す
かくして彼を恵むこと
母の己が子を胸に抱きて恵むに似たり
諸神に恵まれし者は
常に幸福を見る

こゝに世尊は、摩掲陀の大臣須尼陀禹舎に此の偈を以て感謝し、座を立ちて行き給ひぬ。

三二　その時、また摩掲陀の大臣須尼陀・禹舎は、世尊に近く従ひて立てり。「今日沙門瞿曇の出でむ門を、瞿曇門と名くべし。彼の恒河を渡らむ渡場を、瞿曇渡場と爲すべし」と。こゝに世尊の出で給へる門を、瞿曇門とは名けぬ。

三三　こゝに世尊は、恒河に近づき給ひぬ。而してその時、恒河は〔水〕滿ちて〔岸の〕烏も〔水を〕飲み得る程なりき。或る者は舟を求め、或る者は筏を求め、或る者は桴

断ち、有に導くもの〔綱〕を滅したる時、今や後有は無し」と。

三　此を世尊は曰ひぬ。此を善逝は曰ひて、師主は又斯く曰ひぬ。

16 四聖諦を如實に知らざるにより、
　各々の生〔趣〕に輪廻する道は長し。
　かの〔聖諦〕は見られ、有に導くもの〔綱〕は断たれ、
　苦の根は切られて、こゝに再生なし。

四　其處にて又世尊は拘利村に住し、斯く數々の法話を比丘等に爲し給ひぬ。即ち、戒は斯く斯くなり、定は斯く斯くなり、慧は斯く斯くなり。戒と共に修せられたる定は、果大にして利益も大なり。定と共に修せられたる慧は、果大にして利益も大なり。慧と共に修せられたる心は、欲漏・有漏・見漏・無明漏等の諸漏より全く解脱すと。

五　こゝに世尊は拘利村に適意に住して、尊者阿難に曰ひぬ。「いざ、阿難よ、那提迦に赴かむ」と。

「畏りぬ、世尊」と、尊者阿難は世尊に同意しぬ。こゝに世尊は大比丘衆と共に那

第二誦品

90 一　こゝに世尊は尊者阿難に曰ひぬ。「いざ阿難よ、拘利(コーティ)村に行かむ」と。「畏りぬ、世尊」と、尊者阿難は世尊に同意しぬ。こゝに世尊は、大比丘衆と共に拘利村に赴き給ひぬ。こゝに世尊は、かの拘利村に住し給へり。

二　彼處にて世尊は比丘等に曰ひぬ。「比丘等よ、四聖諦を覺悟し通曉せざるに依り斯く此の長き間、我も汝等も共に流轉し、輪廻したるなり。四とは何ぞや。比丘等よ、苦聖諦を覺悟し通曉せざるに依り斯く此の長き間、我も汝等も共に流轉し輪廻したり。比丘等よ、苦集聖諦を覺悟し、通曉せざるにより斯く此の長き間、我も汝等も共に流轉し輪廻したり。比丘等よ苦滅聖諦を…乃至…比丘等よ、苦滅に達する道聖諦を覺悟し通曉せざるにより斯く此の長き間、我も汝等も共に流轉し、輪廻したり。されど比丘等よ、苦聖諦を覺知し、通曉し、苦集聖諦を覺知し通曉し、苦滅聖諦を覺知し通曉し、苦滅に達する道聖諦を覺知し通曉し、有愛を

と名くる優婆塞は、那提迦にて死せり。彼の生れたる趣は何處にて、死後の狀態は如何に」。

七　「阿難よ、遮樓比丘は、現世に於てすら、自ら漏盡となり、無漏の心解脱・慧解脱を知り、實證し、到達して住せり。阿難よ難陀比丘尼は、五下分結を斷じて化生し、其處に滅して、かの世界より還らず。阿難よ、須達哆優婆塞は、三結を斷じ、漸次に貪・瞋癡を滅して斯陀含(一來)となり、一度この世界に還歸して苦の滅を致さむ。阿難よ、スヂャーター優婆夷は、三結を斷じ、須陀洹(預流)に達し、惡趣に墮ちず、決定して(阿羅漢果の)正覺に到らむ。阿難よ、カクダ優婆塞は五下分結を斷じて化生し、其處に滅して、その世界より還らず。阿難よ、迦陵伽優婆塞は…乃至…阿難よ、ニカタ優婆塞は…乃至…阿難よ、カティッサバ優婆塞は…乃至…阿難よ、トゥッタ優婆塞は…乃至…阿難よ、サントゥッタ優婆塞は…乃至…阿難よ、婆頭樓優婆塞は…乃至…阿難よ、蘇婆頭樓優婆塞は、五下分結を斷じて化生し、其處に滅して、そ
93 の世界より還らず。阿難よ、那提迦にて死せる五十人以上の優婆塞は、五下分結を斷じて化生し、其處に滅して、かの世界より還らず。更に、阿難よ、那提迦にて死

提迦に赴き給へり。その那提迦にて世尊はギンヂャカーヴサタ(煉瓦堂)に住し給ひぬ。

六　こゝに尊者阿難は世尊に近づきぬ。近づきて世尊に敬禮し、一方に坐しぬ。一方に坐して尊者阿難は世尊に斯く白しぬ。

「世尊、遮樓と名くる比丘は、那提迦にて死せり。彼の生れたる趣は何處にて、死後の狀態は如何に。世尊、難陀と名くる比丘尼は、那提迦にて死せり。彼女の生れたる趣は何處にて、死後の狀態は如何に。世尊、須達哆と名くる優婆塞は、那提迦にて死せり。彼の生れたる趣は何處にて、死後の狀態は如何に。世尊、スヂャーター(善生)と名くる優婆夷は、那提迦にて死せり。彼女の生れたる趣は何處にて、死後の狀態は如何に。世尊、カクダと名くる優婆塞は、那提迦にて死せり。彼の生れたる趣は何處にて、死後の狀態は如何に。世尊、迦陵伽と名くる優婆塞は…乃至…世尊、尼迦吒と名くる優婆塞は…乃至…世尊、カティッサバと名くる優婆塞は…乃至…世尊、トゥッタと名くる優婆塞は…乃至…世尊、サントゥッタと名くる優婆塞は…乃至…世尊、婆頭樓と名くる優婆塞は…乃至…世尊、蘇婆頭樓

法に對して正信を具足したり、「世尊に依りて善く說かれたる法は、目に見へ、直ちに現れ、明瞭に見え、涅槃に導き、知者に依りて自ら夫々知らるべきものなり」と。僧團に對して正信を具足したり、「世尊の弟子僧團は善く身を修せり、世尊の弟子僧團は直く身を修せり、世尊の弟子僧團は智にて身を修せり、世尊の弟子僧團は
94 正しく身を修せり、卽ち世尊の弟子僧團は四雙八輩にして、そは供養せらる可き、接待せらる可き、禮拜せらる可き、合掌せらる可き、世の無上の福田なり」と。聖聲聞は、聖者に愛せらるゝ、斷片ならざる壞れざる、瑕なき、穢なき、自由人たらしむる、賢者に讚嘆せらるゝ、他によりて汚されざる、三昧に導く戒を具足したり。

げに、阿難よ、こは法鏡と名くる法の次第にて、そを具足せる聖聲聞は、もし欲するならば、各自に就きて斯く陳ぶるを得む。「我に地獄は滅し、畜生道は滅し、餓鬼境は滅し、墮地獄惡趣は滅し、我は須陀洹にして不退轉の法に住し、決定して正覺に達せむ」と。

一〇　また世尊は、其處なる那提迦の煉瓦堂に住して、比丘衆に數々の法話を爲し給ひぬ。卽ち、戒とは斯く斯くなり、定とは斯く斯くなり、慧とは斯く斯くなり

せる九十人の優婆塞は、三結を斷じ漸次に貪瞋癡を滅して斯陀含となり、一度この世界に還歸して苦の滅を致さむ。特に阿難よ那提迦にて死せる五百人の優婆塞は、三結を斷じ、須陀洹に達して惡趣に墮ちず、決定して正覺に到らむ。

八　今、阿難よ、人間の死せむことは、これ不可思議ならず。されど人の死せる時、如來に近づきてこの事を問はむこと、阿難よ、そは如來にとりて煩はし。されば、こゝに、阿難よ、法鏡[2]と名くる法の次第を敎へむ。そを具足せる聖聲聞は、もし欲するならば、各自に就きてかく陳ぶるを得む。『我に地獄は滅し、畜生道は滅し、餓鬼境は滅し、墮地獄・惡趣は滅し、我は須陀洹にして不退轉[3]の法に住し、決定して正覺に達せむ』と。

九　然らば、阿難よ、そを具足せる聖聲聞が、もし欲するならば、各自に就きて『我に地獄は滅し、畜生道は滅し、餓鬼境は滅し、墮地獄・惡趣は滅し、我は須陀洹にして不退轉の法に住し、決定して正覺に達せむ』と陳ぶる法鏡なる法の次第とは何ぞや。こゝに、阿難よ、聖聲聞は佛陀に對して正信を具足したり、『斯く、かの世尊は、阿羅漢・等正覺者・明行具足者・善逝・世間解者・無上者・丈夫調御師・人天師・佛陀・世尊なり』と。

るにも入るにも自覺を爲してあり、前を見るにも後を見るにも自覺を爲してあり、腕を屈するにも伸ばすにも自覺を爲してあり、衣鉢を取るにも、自覺を爲してあり、食し、飮み、咀み、味ふにも自覺を爲してあり、大小便を爲すにも自覺を爲してあり、行き、止り、坐り、聽き、覺め、語り、默してあるにも自覺をなしてあり。是の如くにして、比丘等よ、比丘は自覺してあるなり。比丘等よ、比丘は正念にして自覺してあるべし。こは汝等に對する我等の教なり」と。

一四　娼婦菴婆波梨は「げに世尊は毘舍離に至りて、毘舍離の我が菴羅林に住し給ふ」と聞きぬ。こゝに娼婦菴婆波梨は、いとも麗はしき多くの乘物を裝備し、麗はしき乘物に乘り、いとも麗はしき多くの乘物にて、毘舍離より進みて自らの園に赴きぬ。乘物の通り得る程は乘物にて行き、其處にて乘物より降りて、徒歩にて世尊に近づきぬ。近づきて、世尊に敬禮して一方に坐せる娼婦菴婆波梨に、世尊は法話を以て教示し、訓誡し、鼓舞し、喜ばしめ給ひぬ。

こゝに娼婦菴婆波梨は、世尊に依りて、法話を以て教示せられ、訓誡せられ、鼓舞せられ、喜ばしめられて、世尊に斯く白し上げぬ。「世尊、世尊は明日我が家にて、比

……乃至……欲漏・有漏・見漏・無明漏等の諸漏より全く解脱す」と。

一一　こゝに世尊は、那提迦に適意に住して、尊者阿難に日ひぬ。「いざ阿難よ、毘舎離に赴かむ」と。

「畏りぬ、世尊」と、尊者阿難は世尊に同意しぬ。こゝに世尊は、大比丘衆と共に毘舎離に赴き給ひぬ。而して彼處毘舎離にて、世尊は菴婆波梨(アンバパーリ)林に住し給へり。

一二　彼處にて世尊は比丘等に日ひぬ。

「比丘等よ、比丘は正念にして自覺してあるべし。こは汝等に對する我等の教なり。

而して比丘等よ、比丘が正念にあるとは何ぞや。こゝに、比丘等よ、比丘は身に就きて身を觀察し、熱心に自覺し考へ深く住し、〔この〕世界に於て貪欲と憂悲とを
95 排除すべし。受に就きて……乃至……心に就きて……乃至……法に就きて法を觀察し、熱心に自覺し考へ深く住し、〔この〕世界に於て貪欲と憂悲とを排除すべし。斯くして比丘等よ、比丘は正念にてあるなり。

一三　而して比丘等よ、比丘が自覺してあるとは何ぞや。比丘等よ、比丘は出づ

り」。

「やよ、菴婆波梨よ、その供養食を十萬金にて換へよ」。

「貴公子等よ、假令我に毘舍離の國土を與へむとも、我はかゝる大なる供養食を讓らざるべし」。

こゝに彼等離車人は手を振りぬ「嗚呼悲しいかな、我等は瑣々たる一婦女に打勝たれぬ。嗚呼、悲しいかな、我等は瑣々たる一婦女に姫られぬ」とて。

こゝに彼の離車人等は、菴婆波梨林に赴きぬ。

一七　世尊はかの離車人が遠くより近づき來るを見給ひぬ。見て、比丘等に曰へり。「比丘等よ、比丘等の中、忉利天を見ざる者は、比丘等よ、離車人の群を見るべし。97 比丘等よ、離車人の群を幾度も見るべし。比丘等よ、離車人の群を、忉利天衆としてよく見るべし」と。

一八　こゝに彼等離車人は、乘物の通り得る程は乘物にて行き、其處にて乘物より降り、徒歩にて世尊に近づきぬ。近づきて、世尊に敬禮して一方に坐しぬ。彼等離車人が一方に坐せる時、世尊は法話にて敎訓し、敎誡し、鼓舞し、喜ばしめ給ひ

丘衆と共に供養食を受くることを諾ひ給はむことを」と。

世尊は沈默を以て同意し給ひぬ。こゝに娼婦菴婆波梨は、世尊の同意を知りて座より起ち、世尊に敬禮して右繞をなして去りぬ。

一五　毘舍離に住せる離車人（リッチャギ）は「實に世尊は毘舍離に至り、毘舍離の菴婆波梨林
96 に住し給ふ」と聽きぬ。こゝに彼等離車人は、いとも麗はしき多くの乘物を裝備し、麗はしき乘物に乘り、いとも麗はしき多くの乘物にて毘舍離より發ち出でぬ。離車人の或る者は紺青にして、紺青の色、紺青の衣、紺青の莊嚴をなし、離車人の或る者は黃にて、黃の色、黃の衣、黃の莊嚴をなし、離車人の或る者は赤く、赤の色、赤の衣、赤の莊嚴をなし、離車人の或る者は白く、白き色、白き衣、白の莊嚴をなせり。

一六　こゝに娼婦菴婆波梨は、いとも若き離車人に、軸と軸、輪と輪、軛と軛とを衝突せしめぬ。こゝに離車人は娼婦菴婆波梨に斯く言ひぬ。

「やよ、菴婆波梨よ、何の故に汝は、いとも若き離車人に、軸と軸、輪と輪、軛と軛とを衝突せしめたるや」。

「貴公子等よ、我は今我が家に、世尊を比丘衆と共に供養食に招待致したればな

比丘衆に、手づから味美き嚼食・噉食を以て満足せしめ辭するまで食せしめぬ。

こゝに娼婦菴婆波梨は、世尊の食し終り、鉢と手とを洗ひ給へる時、低き席を取りて一方に坐しぬ。一方に坐して娼婦菴婆波梨は世尊に斯く白し上げぬ。

「世尊、我は此の園林をば、佛を上首とする比丘衆に獻じまつる」と。

世尊は園林を受け給ひぬ。こゝに世尊は、娼婦菴婆波梨をば法話にて教訓し、教誡し、鼓舞し、歡ばしめ、座より起ちて去り給ひぬ。

二〇　斯くて世尊は、かの毘舍離の菴婆波梨林に住し給へる間、この數々の法話を比丘等に爲し給へり。即ち、戒とは斯く斯くなり、定とは斯く斯くなり、慧とは斯く斯くなり。戒と共に修せられたる定は、果大にして利益も大なり、定と共に修せられたる慧は、果大にして利益も大なり。慧と共に修せられたる心は、欲漏・有漏・見漏・無明漏等の諸漏より全く解脱すと。

二一　こゝに世尊は、菴婆波梨林に適意に住して、尊者阿難に日ひぬ。

「いざ、阿難よ、竹林村に行かむ」。

「畏りぬ、世尊」と、尊者阿難は世尊に同意しぬ。

ぬ。

こゝに彼等離車人は、世尊によりて法話にて教訓せられ、教誡せられ、鼓舞せられ、喜ばしめられて世尊に斯く白し上げぬ。

「世尊、世尊は比丘衆と共に、明日我等が家にて供養食を受くるを諾ひ給はむことを」。

「離車人等よ、我は〔既に〕明日娼婦菴婆波梨より供養食を受くることを約しぬ」。

こゝにかの離車人等は手を振りぬ、「嗚呼悲しいかな、我等は瑣々たる一婦女に打勝たれぬ。嗚呼、悲しいかな我等は瑣々たる一婦女に姧られぬ」とて。

こゝにかの離車人は、世尊の言に歡び感謝し、座より起ちて、世尊に敬禮して右繞して去りぬ。

一九　こゝに娼婦菴婆波梨は、其の夜の間に、自らの園に味美き嚼食・噉食を準備せしめて、世尊に時を告げぬ。「世尊、時なり、供養食は整へられたり」と。こゝに世尊は早朝、下衣を著し衣鉢を取りて、比丘衆と共に娼婦菴婆波梨の住居に赴き給ひぬ。赴きて、設けの席に坐し給へり。こゝに娼婦菴婆波梨は、佛を上首とする

二四　こゝに世尊は病より回復し給へり。病より回復し給ふや、直ちに住居より出で來り、住居の蔭の設けの席に坐し給へり。こゝに尊者阿難は世尊に近づきぬ。近づきて、世尊に敬禮して一方に坐しぬ。一方に坐して、尊者阿難は世尊に斯く白し上げぬ。

「世尊、我は世尊の健全なるを見まつりぬ。世尊、我は世尊の耐へ給ふべきを見まつりぬ。世尊、げに我は世尊の病を見まつりて、身衰ふるに至り、我に四方は明らけく見えず、我に法は明らかならざりき。されど、『世尊は比丘衆に關して何かを語り給はざる間は、世尊は入滅し給はざるべし』と思ひて、我は聊か心安らかとなりぬ」。

100 二五　「然らば、阿難よ、比丘衆は我に何を待望するや。我は内外の區別なく〔悉く〕法を説けり。阿難よ、如來の法には、或る者を弟子に隱す如き、教師の握拳[5]は無し、げに阿難よ、或は『我、比丘衆を導かむ』、或は『比丘衆は我に賴れり』と、斯く思はむ者こそ、げに阿難よ、比丘衆に關して何かを語るべし。されど阿難よ、如來は、『我、比丘衆を導くべし』、或は『比丘衆は我に賴れり』と、斯く思ふことなし。されば、阿難よ、如

こゝに世尊は大比丘衆と共に竹林村に赴き、其處にて世尊は竹林村に住し給ひぬ。

二二　其處にて世尊は比丘等に曰ひぬ。

「行け、汝比丘等よ、毘舍離の邊に、友人を賴り、知人を賴り、親友を賴りて、雨安居に入れ。我も亦此處竹林村にて雨安居に入るべし」。

「畏りぬ、世尊」と、比丘等は世尊に同意して、毘舍離の邊に、友人を賴り、知人を賴り、親友を賴りて、雨安居に入りぬ。世尊も亦彼處竹林村にて雨安居に入り給ひぬ。

二三　こゝに世尊の雨安居に入り給ひし時恐しき病生じ、死に近きまでの激痛起りぬ。されど、世尊は正念にして自覺し、苦を訴へずして耐へ給へり。

こゝに世尊は斯く思惟し給へり「我、弟子に告げず、比丘衆を敎訓せずして入滅(般涅槃)せむことは、げに我に相應しからず。我今、精進に依りて此の病を耐へ、壽命を留めて住すべし」と。

こゝに世尊は、精進に依りてかの病を耐へ、壽命を留めて住し給ひ、こゝに世尊の病は止みぬ。

101 阿難よ、げに、今に於ても、又は我死して後に於ても、自らを洲とし、自らを依所とし、他を依所とせず、法を洲とし、法を依所とし、他を依所とせずして、修行せむと欲するものは、阿難よ、彼等は我が比丘中にて、最高處に在るべし」と。

來は比丘衆に關して何をか語らむ。また阿難よ、我は老い衰へ、老衰し、老人となり、老齢に達して、我が齢八十となれり。譬へば、阿難よ、古き車が革紐の助に依りて行く如く、是の如く、阿難よ、惟ふに如來の身體は革紐の助に依りて行くなり。阿難よ、如來が、一切の相の憶念なき、一一の受の滅より相なき心三昧に入りて住する時こそ、阿難よ、如來の身體は健全にてあるなり。

二六　されば、阿難よ、こゝに自らを洲❻とし、自らを依所として、他人を依所とせず、法を洲とし、法を依所として、他を依所とせずして住せよ。而して阿難よ、何の故にか自らを洲とし、自らを依所として他人を依所とせず、法を洲とし、法を依所とし、他を依所とせずして住するや。

阿難よ、こゝに比丘は身に就きて身を觀察し、熱心に自覺し、考へ深く住し、〔この〕世界に於て貪欲と憂悲を排除すべし。受に就きて……乃至……心に就きて……乃至……法に就きて法を觀察し、熱心に自覺し、考へ深く住し〔この〕世界に於て貪欲と憂悲を排除すべし。斯くて阿難よ、比丘は自らを洲とし、自らを依所として、他人を依所とせず、法を洲とし、法を依所とし、他を依所とせずして住す。

修し、確乎として立ち、充分に積み、しかと修習せる者は、欲するまゝに一劫或は一劫以上を留まるを得べし。げに如來は四神足を修し、繰返し修し、車の如く修し、家の礎の如くに修し、確乎として立ち、充分に積み、しかと修習したり。阿難よ、如來は欲するまゝに、一劫或は一劫以上を留まるを得べし」と。

四 斯く尊者阿難は、世尊に依りて相が明らかに示され、光が明らけく發せられたる時、洞察する能はずして、世尊に對して斯くは願はざりき。「世尊、世尊は一劫の間住し給へ、善逝は一劫の間住し給へ、衆生の利益の爲、衆生の幸福の爲、世間の慈愛の爲に、人天の利益の爲、幸福の爲に」と。そは魔に依りて心覆はれたればなり。

五 再度世尊は…乃至…三度世尊は、尊者阿難に曰ひぬ。

「阿難よ、毘舍離は樂し。憂園廟は樂し。瞿曇廟は樂し。サッタンバカ廟は樂し。バフプッタ廟は樂し。サーランダダ廟は樂し。遮波羅廟は樂し。

阿難よ、何人にても、四神足を修し、繰返し修し、車の如く修し、家の礎の如く修し、確乎として立ち、充分に積み、しかと修習せる者は欲するまゝに、一劫或は一劫以上を留まるを得べし。げに如來は四神足を修し、繰返し修し、車の如く修し、家の

第三誦品

102 一　こゝに世尊は早朝、下衣を著し衣鉢を取りて、毘舍離に行乞に入り給ひぬ。毘舍離に行乞して、行乞より歸り、食事を終へて、尊者阿難に曰ひぬ。

「阿難よ、敷具を携へ行け。日中の休息を取らむ爲、遮波羅（チャーパーラ）廟に行かむ」と。

「畏りぬ、世尊」と、尊者阿難は世尊に同意し、敷具を取りて、世尊の後に隨ひ行きぬ。

二　こゝに世尊は遮波羅廟に赴き給ひぬ。赴きて設けの席に坐し給ひぬ。尊者阿難は世尊に敬禮して一方に坐しぬ。一方に坐せる尊者阿難に、世尊は斯く曰ひぬ。

「阿難よ、毘舍離は樂し。憂園（ウデーナ）廟は樂し。瞿曇（ゴータマカ）廟は樂し。サッタンバカ廟は樂し。バフプッタ廟は樂し。サーランダダ廟は樂し。遮波羅廟は樂し。

103 三　阿難よ、何人にても、四神足を修し、繰返し修し、車の如く修し、家の礎の如くに

丘なる聲聞等がよく決定し、自ら訓練し、賢明・多聞にして、法を持し、法と隨法とを
修し、正しく修し、隨法を行じ、己が師の所說をよく護て語り、說法し、知らしめ、確立
せしめ、開明せしめ、分別せしめ、公明に爲し、生起する非難せられたる爭論をば法
を以て降伏せしめ、神變ある法を說示せざる間は、惡しき者よ、我は般涅槃に入ら
ざるべし」と。

八　然るに世尊、今や世尊の比丘なる聲聞等はよく決定し、自ら訓練し、賢明多聞
105 にして、法を持し、法と隨法とを修し正しく修し、隨法を行じ、己が師の所說をよく
獲て語り、說法し、知らしめ、確立せしめ、開明せしめ、分別せしめ、公明に爲し、生起す
る非難されたる爭論をば法を以て降伏せしめ神變ある法を說示す。世尊、今世
尊は般涅槃に入り給へ、善逝は般涅槃に入り給へ、世尊、今は世尊の般涅槃し給ふ
べき時なり。

世尊、實に世尊は此の言を曰へり。「我が比丘尼なる女聲聞等が、よく決定し、自
ら訓練し、…乃至…我が優婆塞なる聲聞等が、よく決定し、自ら訓練し、賢明多聞に
して法を持し、法と隨法とを修し、正しく修し、隨法を行じ、己が師の所說をよく獲

礎の如く修し、確乎として立ち、充分に積み、しかと修習したり。阿難よ、如來は欲するまゝに一劫或は一劫以上を留まるを得べし」と。

斯く尊者阿難は、世尊に依りて相が明らかに示され、光が明らけく發せられた
104 る時、洞察する能はずして、世尊に對して、かくは願はざりき。「世尊、世尊は一劫の間住し給へ、善逝は一劫の間住し給へ、衆生の利益の爲、衆生の幸福の爲、世間の慈愛の爲に、人天の利益の爲、幸福の爲に」と。そは魔に依りて心覆はれたればなり。

六 その時世尊は尊者阿難に曰ひぬ。

「阿難よ、汝行け、時宜しと思はば」と。

「畏りぬ、世尊」と、尊者阿難は世尊に同意して座より起ち、世尊に敬禮し、右繞を爲して、遠からざる一樹の下に坐しぬ。

七 その時惡しき者魔は、尊者阿難の去るや否や、世尊に近づきぬ。近づきて、一方に立ちぬ。一方に立ちて、惡しき者魔は斯く言ひぬ。

「世尊、今世尊は般涅槃に入り給へ、善逝は般涅槃に入り給へ、世尊、今は世尊の般涅槃し給ふべき時なり。また、世尊、世尊は此の言を曰へり。『惡しき者よ、我が比

然るに、世尊、今や世尊の優婆夷なる女聲聞等はよく決定し、自ら訓練し、賢明多聞にして、法を持し、法と隨法とを修し、正しく修し、隨法を行ずる者となり、己が師の所說をよく獲て、語り、說法し、知らしめ、確立せしめ、開明せしめ、分別せしめ、公明に爲し、生起する非難せられたる爭論をば、法を以て降伏せしめ、神變ある法をば說示す。世尊、今世尊は般涅槃に入り給へ。善逝は般涅槃に入り給へ。世尊、今は世尊の般涅槃し給ふべき時なり。

世尊、また實に世尊は此の言を日へり。「我が此の梵行が成就せられ、榮え、擴がり、多くの人に知られ、廣く擴がり、卽ち人の爲に廣說せられざるむ間は、惡しき者よ、我は般涅槃に入らざるべし」と。

然るに、世尊、今や世尊の梵行は成就せられ、榮え、擴がり、多くの人に知られ、廣く擴がり、卽ち人の爲に廣說せられたり。世尊、今世尊は般涅槃に入り給へ、善逝は般涅槃に入り給へ。世尊、今は世尊の般涅槃し給ふべき時なり」と。

九　斯く言はれし時、世尊は惡しき者魔に斯く日ひぬ。「惡しき者よ、心安かれ。如來の般涅槃は遠からざるべし。これより三月の後、如來は般涅槃に入るべし」。

て、語り説法し、知らしめ、確立せしめ、開明せしめ、分別せしめ、公明に爲し、生起する非難されたる爭論をば、法を以て降伏せしめ、神變ある法を說示せざる間は、惡しき者よ、我は般涅槃に入らざるべし」と。

然るに、世尊、今や世尊の優婆塞なる聲聞等はよく決定し、自ら訓練し、賢明多聞にして、法を持し、法と隨法とを修し、正しく修し、隨法を行じ、己が師の所說をよく獲て、語り、說法し、知らしめ、確立せしめ、開明せしめ、分別せしめ、公明に爲し、生起する非難されたる爭論をば、法を以て降伏せしめ、神變ある法を說示す。世尊、今世尊は般涅槃に入り給へ、善逝は般涅槃に入り給へ。世尊、今は世尊の般涅槃し給ふべき時なり。

世尊、又實に世尊は此の言を日へり。『我が優婆夷たる女聲聞等がよく決定し、自ら訓練し、賢明多聞にして、法を持し、法と隨法とを修し、正しく修し、隨法を行じ、己が師の所說をよく獲て、語り、說法し、知らしめ、確立せしめ、開明せしめ、分別せしめ、公明に爲し、生起する非難せられたる爭論をば、法を以て降伏せしめ、神變ある法を說示せざる間は、惡しき者よ、我は般涅槃に入らざるべし』と。

いとも大なる地震あり。「人々は恐怖して、身毛竪立し、又天鼓は破裂しぬ。この大なる地震出現の因は何ぞ、縁は何ぞや」。

一三 「阿難よ、げに此の大なる地震出現の因は八あり、縁は八あり。八とは何ぞ阿難よ、この大地は水上に立ち、水は風上に立ち、風は空にあるなり。阿難よ、げに大風吹く時、大風吹くによりて水は動かされ、動かされたる水は地を動かす。こ
108 れ大なる地震出現の第一の因、第一の縁なり。

一四 阿難よ、又更に、神通あり心を制御せる沙門若しくは婆羅門あり、或は大神通大威神力ある天神ありて、僅かなる地想、測る可らざる水想を修してある時、この地を動かし、震はしめ、震動せしむ。これ大なる地震出現の第二の因、第二の縁なり。

一五 更に又、阿難よ、菩薩が兜率天より沒し、正念正智にして母胎に入る時、この地は動き、震ひ震動す。これ大なる地震出現の第三の因、第三の縁なり。

一六 更に又、阿難よ、菩薩が正念正智にして母胎より出づる時、この地は動き、震ひ、震動す。これ大なる地震出現の第四の因、第四の縁なり。

一〇　こゝに世尊は遮波羅廟に於て正念正智にして壽命の素因(壽行)を捨て給ひぬ。而して世尊の壽命の素因を捨て給へる時、大地震ありて、「人々は」恐怖し、身毛竪立し、又天鼓は破裂しぬ。こゝに世尊は其の意を知りて、此の時、此の憂陀[107]那を述べ給へり。

有量無量の生に導く
有の素因(有行)を牟尼は捨てぬ。
內心の喜ありて正念に住し、
鎧の如き己が生を斷ち切りぬ。

一一　こゝに尊者阿難は斯く思ひぬ。「鳴呼、げに不可思議なるかな、鳴呼げに未曾有なるかな。鳴呼、此の大地震、鳴呼、此のいとも大なる地震あり。「人々は」恐怖して、身毛竪立し、又天鼓は破裂せり。この大地震出現の因は何ぞ、緣は何ぞや」と。

一二　こゝに尊者阿難は世尊に近づきぬ。近づきて、世尊に敬禮し、一方に坐しぬ。一方に坐して尊者阿難は世尊に斯く白しぬ。

「不可思議なり、世尊。未曾有なり、世尊。鳴呼、世尊、この大地震あり。鳴呼、世尊、

めぬ。而して彼等は語れる我を知らずして、「かく語る此の者は何者なりや。神なるか、人なるか」と〔思へり〕。我は法話を以て教訓し、訓誡し、鼓舞し、喜ばしめて、姿を消しぬ。かく姿を消したる我を知らずして、彼等は、『姿を消したる者は何者なりや。神なるや、人なるや」と〔思へり〕。

二三　阿難よ、また我は幾百の婆羅門衆に……乃至……居士衆に……乃至……沙門衆に……乃至……四天衆に……乃至……忉利天衆に……乃至……魔衆に……乃至……梵天衆に近づきて、其處に我自ら曾て坐し、曾て語り、また曾て會話せしことあるを想起す。其の時、我が色は彼等の色に等しく、我が聲は彼等の聲に等しかりき。我は法話を以て教訓し訓誡し、鼓舞し、喜ばしめぬ。而して彼等は語れる我を知らずして、「かく語る此の者は何者なりや。神なるや、人なるや」と〔思へり〕。而して我は法話
110 を以て教訓し、訓誡し、鼓舞し、喜ばしめて姿を消しぬ。斯く姿を消したる我を知らずして彼等は、『姿を消したる此の者は何者なりや、神なるや、人なるや」と〔思へり〕。

阿難よ、これ八衆なり。

一七　更に又阿難よ、如來が無上等正覺を證する時、この地は動き、震ひ、震動す。これ大なる地震出現の第五の因、第五の緣なり。

一八　更に又、阿難よ、如來が無上法輪を轉ずる時、この地は動き、震ひ、震動す。これ大なる地震出現の第六の因、第六の緣なり。

一九　更に又、阿難よ、如來が正念正智にして壽命の素因を捨つる時、この地は動き、震ひ、震動す。これ大なる地震出現の第七の因、第七の緣なり。

二〇　更に又、阿難よ、如來が完全なる捨離によりて涅槃界に般涅槃する時、この[109]地は動き、震ひ、震動す。これ大なる地震出現の第八の因、第八の緣なり。

阿難よ、此等は大なる地震出現の八の因、八の緣なり。

二一　阿難よ、八衆あり。八とは何ぞや。刹帝利衆、婆羅門衆、居士衆、沙門衆、四天王衆、忉利天衆、魔衆、梵天衆なり。

二二　阿難よ、また我は幾百の刹帝利衆に近づきて、其處に我自ら曾て坐し、曾て語り、また曾て會話せしことあるを想起す。其の時、我が色は彼等の色に等しく、我が聲は彼等の聲に等しかりき。我は法話を以て敎訓し、訓誡し、鼓舞し、喜ばし

111
三〇　或る者は內心に無色想を抱き、黄なる、色黄なる、外觀黄なる、艶黄なる外部の色――譬へば、黄なる色黄なる、外觀黄なる、艶黄なる羯尼迦華（カニカーラ）、又譬へば、黄なる、色黄なる、外觀黄なる、艶黄なる、兩面滑かなる波羅奈衣――を見て、是の如く、或る者は內心に無色想を抱き、黄なる、色黄なる、外觀黄なる、艶黄なる外部の色を見て、『其等を勝知し勝見す』と、如實の想を得。これ第六の勝處なり。

三一　或る者は內心に無色想を抱き、赤き、色赤き、外觀赤き、艶赤き外部の色――譬へば、赤き、色赤き、外觀赤き、艶赤き般豆時婆迦華（バンドゥヂーベカ）、又譬へば、赤き、色赤き、外觀赤き、艶赤き、兩面滑かなる波羅奈衣――を見て、是の如く、或る者は內心に無色想を抱き、赤き、色赤き、外觀赤き、艶赤き外部の色を見て、『其等を勝知し勝見す』と、如實の想を得。これ第七の勝處なり。

三二　或る者は內心に無色想を抱き、白き、色白き、外觀白き、艶白き外部の色――譬へば、白き色白き、外觀白き、艶白き烏沙那斯星（オーサディ）(太白金星)、又譬へば、白き、色白き、外觀白き、艶白き、兩面滑かなる波羅奈衣――を見て、是の如く、或る者は內心に無色想を抱き、白き、色白き、外觀白き、艶白き外部の色を見て、『其等を勝知し勝見す』と、如

二四　阿難よ、八勝處あり。八とは何ぞや。

二五　或る者は内心に色想を抱き、限りある好き惡しき外部の色（しき）を見て、『其等を勝知し勝見す』と、如實の想を得。これ第一の勝處なり。

二六　或る者は内心に色想を抱き、限りなき好き惡しき外部の色を見て、『其等を勝知し勝見す』と、如實の想を得。これ第二の勝處なり。

二七　或る者は内心に無色想を抱き、限りある好き惡しき外部の色を見て、『其等を勝知し勝見す』と、如實の想を得。これ第三の勝處なり。

二八　或る者は内心に無色想を抱き、限りなき好き惡しき外部の色を見て、『其等を勝知し勝見す』と、如實の想を得。これ第四の勝處なり。

二九　或る者は内心に無色想を抱き、青き、色青き、外觀青き、艶青き外部の色——譬へば、青き、色青き、外觀青き、艶青き烏摩迦（ウンマー）華、又譬へば青き、色青き、外觀青き、艶青き、兩面滑かなる波羅奈（バーラーナシー）衣の如き——を見て、是の如く、或る者は内心に無色想を抱き、青き、色青き、外觀青き、艶青き外部の色を見て、『其等を勝知し勝見す』と、如實の想を得。これ第五の勝處なり。

凡ての非想非々想處を超越して、想受の滅に達して住す。これ第八の解脱なり。

阿難よ、これ八解脱なり。

三四 阿難よ、我、或る時、無上正覺を成じて、鬱鞞羅(ウルヹーラー)の尼連禪(ネーランヂャラー)河畔の阿踰波羅(アヂャパーラ)尼拘律(ニグローダ)樹下に住したりき。其の時、阿難よ、惡しき者魔は我に近づきぬ。近づきて一方に立ちぬ。一方に立ちて、阿難よ、惡しき者魔は我に斯く言ひぬ。「世尊、今世尊は般涅槃に入り給へ、善逝は般涅槃に入り給へ。世尊、今は世尊の般涅槃し給ふべき時なり」と。

三五 かく言はれたる時、阿難よ、我は惡しき者魔に斯く言ひぬ。

「惡しき者よ、我はわが比丘なる諸聲聞が、よく決定し、自ら訓練し、賢明・多聞にして、法を持し、法と隨法とを修し、正しく修し、隨法を行じ、己が師の所説をよく獲て、語り、説法し、知らしめ、確立せしめ、開明せしめ、分別せしめ、公明に爲し、生起する非
113 難されたる爭論をば、法を以て降伏せしめ、神變ある法を説示せざる間は、我は般涅槃に入らざるべし。

實の想を得。これ第八の勝處なり。

阿難よ、これ八勝處なり。

三三 阿難よ、八解脱あり。八とは何ぞや。

色想ある者は色(しき)を見る。これ第一の解脱なり。

112 内心に無色想を抱く者は、外部の色を見る。これ第二の解脱なり。

「淨し」と思ひて、心を一心になす。これ第三の解脱なり。

凡ての色想を超越し、瞋恚の想を絶滅し、種々想を意圖せざることによりて、「無邊の空なり」と、空無邊處に達して住す。これ第四の解脱なり。

凡ての空無邊處を超越して、「無邊の識なり」と、識無邊處に達して住す。これ第五の解脱なり。

凡ての識無邊處を超越して、「何ものも無し」と、無所有處に達して住す。これ第六の解脱なり。

凡ての無所有處を超越して、非想非々想處に達して住す。これ第七の解脱なり。

般涅槃に入らざるべし。

惡しき者よ、我が此の梵行が成就せられ、榮え、擴がり、多くの人に知られ、廣く擴がり、卽ち人の爲に廣說されざる間は、我は般涅槃に入らざるべし」と。

三六　而して今又、阿難よ、今日遮波羅廟にて、惡しき者魔は我に近づけり。近づきて一方に立てり。一方に立ちて、阿難よ、惡しき者魔は我に斯く言へり。

「世尊、今こそ世尊は般涅槃に入り給へ、善逝は般涅槃に入り給へ。世尊、今こそ世尊の般涅槃し給ふべき時なり。また世尊、世尊は此の言を曰へり。「汝、惡しき
114 者よ、我は我が比丘なる諸聲聞が、よく決定し、自ら訓練し、賢明多聞にして法を持し、法と隨法とを修し、正しく修し、隨法を行じ、己が師の所說をよく獲て、語り、說法し、知らしめ、確立せしめ、開明せしめ、分別せしめ、公明に爲し、生起する非難されたる爭論を、法を以て降伏せしめ、神變ある法を說示せざる間は、我は般涅槃に入らざるべし」と。然るに、世尊、今や世尊の比丘なる諸聲聞は、よく決定し、自ら訓練し、賢明多聞にして、法を持し、法と隨法とを修し、隨法を行じ、己が師の所說をよく獲て、語り、說法し、知らしめ、確立せしめ、開明せしめ、分別せしめ、公明に爲し、生起する

我が比丘尼なる女聲聞等が、よく決定し、自ら訓練し、賢明多聞にして、法を持し、法と隨法とを修し、正しく修し、隨法を行じ、己が師の所説をよく獲て、語り、説法し、知らしめ、確立せしめ、開明せしめ、分別せしめ、公明に爲し、生起する非難せられたる爭論をば、法を以て降伏せしめ、神變ある法を説示せざる間は、惡しき者よ、我は般涅槃に入らざるべし。

我が優婆塞なる聲聞等が、よく決定し、自ら訓練し、賢明多聞にして、法を持し、法と隨法とを修し、正しく修し、隨法を行じ、己が師の所説をよく獲て、語り、説法し、知らしめ、確立せしめ、開明せしめ、分別せしめ、公明に爲し、生起する非難せられたる爭論をば、法を以て降伏せしめ、神變ある法を説示せざる間は、惡しき者よ、我は般涅槃に入らざるべし。

我が優婆夷なる女聲聞等が、よく決定し、自ら訓練し、賢明多聞にして、法を持し、法と隨法とを修し、正しく修し、隨法を行じ、己が師の所説をよく獲て、語り、説法し、知らしめ、確立せしめ、開明せしめ、分別せしめ、公明に爲し、生起する非難せられたる爭論をば、法を以て降伏せしめ、神變ある法を説示せざる間は、惡しき者よ、我は

115 三八　かく語られたる時、尊者阿難は世尊に白し上げぬ。

「世尊、世尊は一劫の間住し給へ、善逝は一劫の間住し給へ。衆生の利益の爲に、衆生の幸福の爲に、世間の慈愛の爲に、人天の利益の爲、幸福の爲に」。

「阿難よ、今は止めよ、如來に願ふ勿れ。阿難よ、今は如來に願ふべき時に非ず」。

三九　再度、尊者阿難は「世尊に白し上げぬ。

「世尊、世尊は一劫の間住し給へ、善逝は一劫の間住し給へ。衆生の利益の爲に、衆生の幸福の爲に、世間の慈愛の爲に、人天の利益の爲、幸福の爲に」。

「阿難よ、今は止めよ、如來に願ふ勿れ。阿難よ、今は如來に願ふべき時に非ず」。

三度、尊者阿難は世尊に白し上げぬ。

「世尊、世尊は一劫の間住し給へ、善逝は一劫の間住し給へ。衆生の利益の爲に、衆生の幸福の爲に、世間の慈愛の爲に、人天の利益の爲、幸福の爲に」。

「阿難よ、汝は如來の菩提を信ずるや」。

「然り、世尊」。

「然らば、阿難よ、今汝は何の故に、三度までも如來を煩はしむるや」。

非難されたる爭論を、法を以て降伏せしめ、神變ある法を說示す。世尊、今世尊は、般涅槃に入り給へ、善逝は般涅槃に入り給へ。世尊、今こそ世尊の般涅槃し給ふべき時なり。また世尊、世尊は此の言を曰へり。「惡しき者よ、我が比丘尼なる…乃至…我が優婆塞なる…乃至…我が優婆夷なる…乃至…我が此の梵行が成就せられ、榮え、擴がり、多くの人に知られ、廣く擴がり、卽ち人の爲に廣說せられざる間は、我は般涅槃に入らざるべし」と。

然るに、世尊、今や世尊の梵行は成就せられ、榮え、擴がり、多くの人に知られ、廣く擴がり、卽ち人の爲に廣說せられたり。世尊、今世尊は般涅槃に入り給へ、善逝は般涅槃に入り給へ。世尊、今こそ世尊の般涅槃し給ふべき時なり」と。

三七 かく言はれたる時、阿難よ、我は惡しき者魔に斯く曰ひぬ。「惡しき者よ、心安かれ。如來の般涅槃は遠からざるべし。これより三月の後、如來は般涅槃に入るべし」と。

而して今、阿難よ、今日遮波羅廟に於て、正念正智に任せる如來によりて、壽命の素因(壽行)は捨てられたり」と。

四一　阿難よ、或る時、我は王舍城の靈鷲山に住しき。其處にて、阿難よ、我は曰(い)へ
116 り。『阿難よ、王舍城は樂し。靈鷲山は樂し。阿難よ、何人にても、四神足を修し、繰返し修し、車の如く修し、家の礎の如く修し、確乎として立ち、充分に積み、しかと修習したる者は、欲するまゝに、一劫或は一劫以上を留まるを得べし。今如來は、四神足を修し、繰返し修し、車の如く修し、家の礎の如く修し、確乎として立ち、充分に積み、しかと修習したり。阿難よ、如來は欲するまゝに、一劫或は一劫以上を留まるを得べし』と。是の如く、阿難よ、如來に依りて斯く相が明らかに示され、光が明けく發せられたる時、汝は洞察する能はずして、如來に對して、『世尊は一劫の間住し給へ、善逝は一劫の間住し給へ。衆生の利益の爲に、衆生の幸福の爲に、世間の慈愛の爲に、人天の利益の爲、幸福の爲に』と願はざりき。阿難よ、汝若し如來に願ひたらむに、如來は或は再度汝の言を却けむ。されど三度目には許されたらむ。この故に、阿難よ、こは汝の惡作なり。こは汝の咎なり。

四二　阿難よ、或る時、我は同じ王舍城の尼拘律樹園に住しき…乃至…我は同じ王舍城のチョーラ崖に住しき…乃至…同じ王舍城の毘婆羅(ヹーバーラ)山側のサッタバンニ

四〇　「世尊、我はこ[の語]を世尊より、面前にて聞き、面前にて受けたり。『阿難よ、何人にても、四神足を修し、繰返し修し、車の如く修し、家の礎の如く修し、確乎として立ち、充分に積み、しかと修習したる者は、欲するまゝに、一劫或は一劫以上を留まるを得べし。今如來は、四神足を修し…乃至…一劫或は一劫以上を留まるを得べし』と」。

「阿難よ、汝は信ずるや」。

「然り、世尊」。

「然らばげに、阿難よ、こは汝の惡作なり、こは汝の咎なり。如來に依りて斯く相が明らかに示され、光が明らけく發せられたる時、汝は洞察する能はずして、如來に對して、『世尊は一劫の間住し給へ、善逝は一劫の間住し給へ。衆生の利益の爲に、衆生の幸福の爲に、世間の慈愛の爲に、人天の利益の爲、幸福の爲に』と願はざりしは。

阿難よ、汝若し如來に願ひたらんに、如來は或は再度汝の言を却けむ。されど、三度目には許されたらむ。この故に、阿難よ、こは汝の惡作なり、こは汝の咎なり。

に依りて斯く相が明らかに示され、光が明らけく發せられたる時、汝は洞察する能はずして、如來に對して、『世尊は一劫の間住し給へ、善逝は一劫の間住し給へ。衆生の利益の爲に、衆生の幸福の爲に、世間の慈愛の爲に、人天の利益の爲、幸福の爲に』とは願はざりき。阿難よ、汝若し如來に願ひたらむに、如來は或は再度汝の言を却けむ。されど三度目には許されたらむ。この故に、阿難よ、こは汝の惡作なり、こは汝の咎なり。

四五　阿難よ、或る時、我は毘舍離の憂園廟に住しき。其處にて、阿難よ、我は曰へり。『阿難よ、毘舍離は樂し。憂園廟は樂し。阿難よ、何人にても、四神足を修し、繰返し修し、車の如く修し、家の礎の如く修し、確乎として立ち、充分に積み、しかと修習したる者は、欲するまゝに一劫或は一劫以上を留まるを得べし。今如來は、四神足を修し、繰返し修し、車の如く修し、家の礎の如く修し、確乎として立ち、充分に積み、しかと修習したり。阿難よ、如來は欲するまゝに、一劫或は一劫以上を留まるを得べし』と。是の如く、阿難よ、如來に依りて、斯く相が明らかに示され、光が明らけく發せられたる時、汝は洞察する能はずして、如來に對して、『世尊は一劫の

（七葉）窟に住しき…乃至…同じ王舍城のイシギリ（仙人山）側のカーラシラー（黑石）窟に住しき…乃至…同じ王舍城の寒林サッパソーンディカ（蛇頭巖）に住しき…乃至…同じ王舍城の榻補園に住しき…乃至…同じ王舍城の迦蘭陀竹林に住しき…乃至…王舍城の耆婆菴羅園に住しき…乃至…同じ王舍城のマッダクッチ鹿園に住しき。

四三　彼處にても阿難よ、我は曰へり。「阿難よ、王舍城は樂し、靈鷲山は樂し、瞿曇尼拘律樹は樂し、チョーラ崖は樂し、毘婆羅山側の七葉窟は樂し、仙人山側の黑石
117 窟は樂し、寒林蛇頭巖は樂し、榻補園は樂し、迦蘭陀竹林は樂し、耆婆菴羅園は樂し、マッダクッチ鹿園は樂し。

四四　阿難よ、何人にても、四神足を修し、繰返し修し、車の如く修し、家の礎の如く修し、確乎として立ち、充分に積み、しかと修習したる者は、欲するまゝに、一劫或は一劫以上を留まるを得べし。今如來は、四神足を修し、繰返し修し、車の如く修し、家の礎の如く修し、確乎として立ち、充分に積み、しかと修習したり。阿難よ、如來は欲するまゝに、一劫或は一劫以上を留まるを得べし」と。是の如く、阿難よ、如來

如く、阿難よ、如來に依りて斯く相が明らかに示され、光が明らけく發せられたる時、汝は洞察する能はずして、如來に對して、『世尊は一劫の間住し給へ、善逝は一劫の間住し給へ。衆生の利益の爲に、衆生の幸福の爲に、世間の慈愛の爲に、人天の利益の爲、幸福の爲に』とは願はざりき。阿難よ、汝若し如來に願ひたらむに、如來は或は再度汝の言を却けむ。されど三度目には許されたらむ。この故に、阿難よ、こは汝の惡作なり。こは汝の咎なり。

四八　されど、阿難よ、我は斯く曰はざりしや。凡ての愛しく好める者と雖も、「生」別し、「死」別し、「死して後、境界を」異にすると。阿難よ、如何にしてか、そはあり得む、かの生じたる、存在する、造られたる、破壞の法にして、「而も」そは實に破壞せずといふこと、かゝる處あることなし。然るに阿難よ、そは如來に依りて棄てられ、投出され、脫せられ、捨離せられ、放擲せられたるものにして、壽命の素因も捨てられたり。如來は確かに決定して此の言を述べぬ。「久しからずして如來の般涅
119 槃はあるべし。之より三月の後、如來は般涅槃に入るべし」と。如來は壽命に關する此の言を再び取り消すべしとは、この處あることなし。

間住し給へ、善逝は一劫の間住し給へ。衆生の利益の爲に、衆生の幸福の爲に、世間の慈愛の爲に、人天の利益の爲、幸福の爲に』とは願はざりき。阿難よ、汝若し如來に願ひたらむに、如來は或は再度汝の言を却けむ。されど三度目には許されたらむ。この故に、阿難よ、こは汝の惡作なり、こは汝の咎なり。

[118]四六　阿難よ、或る時、我は毘舍離の瞿曇廟に住しき。…乃至…毘舍離のサッタンバ廟に住しき…乃至…毘舍離のバフプッタ廟に住しき…乃至…毘舍離のサーランダダ廟に住しき…乃至…

四七　こゝに阿難よ、我今、遮波羅廟にて曰へり。『阿難よ、毘舍離は樂し、憂園廟は樂し、瞿曇廟は樂し、サッタンバ廟は樂し、バフプッタ廟は樂し、サーランダダ廟は樂し、遮波羅廟は樂し。阿難よ、何人にても、四神足を修し、繰返し修し、車の如く修し、家の礎の如く修し、確乎として立ち、充分に積み、しかと修習したる者は、欲するまゝに一劫或は一劫以上を留まるを得べし。今如來は四神足を修し、繰返し修し、車の如く修し、家の礎の如く修し、確乎として立ち充分に積み、しかと修習したり。阿難よ、如來は欲するまゝに一劫或は一劫以上を留まるを得べし』と。是の

む爲にして、卽ちそは衆生の利益の爲、衆生の幸福の爲、世間の慈愛の爲、人天の利益の爲、幸福の爲なり。而して、比丘等よ、その我が知りて汝等に說き、汝等善く之を理解し、實踐し、修習し、廣く宣布すべき、而してこは梵行をして長く續き、久しく
120 住せしめむ爲にして、卽ちそは衆生の利益の爲、衆生の幸福の爲、世間の慈愛の爲、人天の利益の爲、幸福の爲なる法とは何ぞや。そは卽ち四念處、四精進、四神足、五根、五力、七菩提分、八聖道分なり。比丘等よ、その法を我は知りて說きたり。汝等は善く理解し、實踐し、修習し、廣く宣布すべし。こは梵行をして長く續き、久しく住せしめむ爲にして、卽ちそは衆生の利益の爲、衆生の幸福の爲、世間の慈愛の爲、人天の利益の爲、幸福の爲なりと」。

五一　こゝに世尊は比丘等に曰ひぬ。「いざ、比丘等よ、我今汝等に告ぐ。諸行は壞法なり。不放逸によりて精進せよ。久しからずして如來の般涅槃はあるべし。これより三月の後、如來は般涅槃に入るべし」と。

世尊は之を曰ひ、善逝は之を曰ひて、更に師はかく曰ひぬ。

我が齡は熟しぬ、

いざ阿難よ、大林の重閣講堂に行かむ」。

「畏りぬ、世尊」と、尊者阿難は世尊に同意しぬ。

四九　こゝに世尊は、尊者阿難と共に大林の重閣講堂に赴き給ひぬ。赴きて尊者阿難に曰へり。

「阿難よ、汝行け。〔行きて〕毘舍離附近に住する限りの比丘等を凡て講堂に集めよ」。

「畏りぬ、世尊」と、尊者阿難は世尊に同意し、毘舍離附近に住する限りの比丘等を、凡て講堂に集めて、世尊に近づきぬ。近づきて、世尊に敬禮し、一方に立ちぬ。一方に立ちて、尊者阿難は世尊に斯く白し上げぬ。

「世尊、比丘衆は集れり。世尊、時宜しと思召さば、出御あらせ給へ」と。

五〇　こゝに世尊は講堂に近づき給ひぬ。近づきて、設けの席に坐し給ひぬ。坐して、世尊は比丘等に曰ひぬ。

「然ればこゝに比丘等よ、我は法を知りて汝等に示したり。汝等は善くそを理解し、實踐し、修習し、廣く宣布すべし。こは梵行をして長く續き、久しく住せしめ

第四誦品

122
一　こゝに世尊は早朝、下衣を整へ衣鉢を取りて、毘舍離に行乞し給ひぬ。毘舍離に行乞して、食を終り、行乞より歸り來て、象の眺むるが如くにして毘舍離を眺め、尊者阿難に曰ひぬ。

「阿難よ、こは如來の最後の毘舍離の眺めなるべし。いざ、阿難よ、犍荼(ガンダ)村に赴かむ」。

「畏りぬ、世尊」と尊者阿難は世尊に同意しぬ。こゝに世尊は大比丘衆と共に犍荼村に赴き給へり。其の時、世尊は彼處犍荼村に住し給ひぬ。

二　其處にて世尊は比丘等に曰ひぬ。「比丘等よ、四法を覺知せず、通達せざるにより、我にも又汝等にも斯かる此の長き道の流轉輪廻あるなり。四とは何ぞや。比丘等よ、聖なる戒を覺知せず、通達せざるにより、我にも又汝等にも斯かる此の長き道の流轉輪廻あり。比丘等よ、聖なる定を覺知せず、通達せざるにより、我に

121

我が壽命は少し、
汝等を捨てゝ、我行かん。
我によりて自らの歸依はなされぬ。
比丘等よ、精勵にして正念、
よく戒を保ちてあれ。
思惟によりて心を沈め、
善く己が心を守れ。
此の法と律とに精勵して住せむ者は、
生の流轉を捨てゝ、苦の終極を致すべし、と。

果大にして利益も大なり。慧と共に修せられたる心は、欲漏・有漏・見漏・無明漏等の諸漏より全く解脱すと。

五　こゝに世尊は、適意に犍荼村に住して、尊者阿難に曰ひぬ。

「いざ、阿難よ、ハッティ(授手)村に…乃至…菴羅(アンベ)村に…乃至…閻浮(ジャンブ)村に…乃至…負彌(ボーガ)城に赴かむ」

六　「畏りぬ、世尊」と、尊者阿難は世尊に同意しぬ。こゝに世尊は大比丘衆と共に負彌城に赴き給ひぬ。

七　其の時、世尊は彼處負彌城にて阿難(アーナンダ)廟に住し給へり。其處にて世尊は比丘等に曰ひぬ。

「比丘等よ、この四大教法を說かむ。そを聽き、よく憶念せよ、我語らむ」。

124 「畏りぬ、世尊」と、かの比丘等は世尊に同意しぬ。世尊は斯く曰ひぬ。

八　「先づ、比丘等よ、比丘は斯く言はむ。『友よ、我はそを世尊より、面前にて聽き、面前にて受けたり。こは法なり、こは戒なり、こは師の敎義なり』と。比丘等よ、その比丘の所說は、喜んで受けらる可きにもあらず、排斥せらるべきにもあらず。喜

も又汝等にも斯かる此の長き道の流轉輪廻あり。比丘等よ、聖なる慧を覺知せず、通達せざるにより、我にも又汝等にも斯かる此の長き道の流轉輪廻あり。比丘等よ、聖なる解脱を覺知せず、通達せざるにより、我にも又汝等にも斯かる此の長き道の流轉輪廻あり。而して比丘等よ、聖なる戒を覺知し通達し、聖なる定を覺知し通達し、聖なる慧を覺知し通達し、聖なる解脱を覺知し通達して、有の欲は[123]斷たれ、有に導く〔綱〕は絶えて、復再生なし」。

三　之を世尊は曰ひ、之を善逝は曰ひて、更に師は斯く曰ひぬ。

　戒と定と慧と解脱とは無上なり。
　名聲ある瞿曇によりてこの法は覺知せられたり。
かく佛は知りて、比丘等に法を説きぬ。
苦を滅したる具眼の師は般涅槃す、と。

四　其の時、世尊は彼の犍荼村に住して、かく種々の法話を比丘等に爲し給ひぬ。卽ち戒とは斯く斯くなり。定とは斯く斯くなり。慧とは斯く斯くなり。戒と共に修せられたる定は、果大にして利益も大なり。定と共に修せられたる慧は、

るなり」と。かくて、比丘等よ、こは捨て去るべし。若し其等を經に照合し、律に參照して、經にも合し、律にも一致せば、この結論に達す可きなり。「こは確にかの世
125 尊の言にして、かの僧團によりて正しく受けられたり」と。比丘等よ、この第二の教法を受持すべし。

一〇　更にまた比丘等よ、比丘は斯く言はむ。「げに斯く斯くの所に、多聞にして、阿含を知り、法を持し、律を持し、摩夷（マーティカー）を持せる多くの長老比丘等住す。かの長老達より我はそを面前に聽き、面前に受けたり。こは法なり、こは律なり、こは師の教說なり」と。比丘等よ、その比丘の所說は喜びて受けらるべきにもあらず、排斥せらるべきにもあらず。喜びて受けず、排斥もせずして、その辭句を善く理解して、經に照合し、律に參照すべし。若し其等を經に照合し、律に參照して、經にも合せず、律にも一致せざる時は、この結論に到達すべきなり。「こは確に、かの世尊の言にあらずして、かの長老等によりて誤り受けられたるなり」と。かくて、比丘等よ、こは捨て去るべし。若し其等を經に照合し、律に參照して經にも合し、律にも一致せば、この結論に到達すべきなり。「こは確に、かの世尊の言にして、かの長老

びて受けず、排斥もせずして、その辭句を善く理解して、經に照合し、律に參照すべし。若し其等を經に照合し、律に參照して、經にも合せず律にも一致せざる時は、この結論に到達すべきなり。「こは確にかの世尊の言にあらずして、此の比丘によりて誤り受けられたるなり」と。斯くて比丘等よ、こは捨て去るべし。若し其等を經に照合し、律に參照して、經にも合し、律にも一致せば、この結論に到達すべきなり。「こは確にかの世尊の言にして、此の比丘によりて善く受けられたり」と。比丘等よ、この第一の大教法を受持すべし。

九　また比丘等よ、比丘は斯く言はむ。「げに斯く斯くの所に、長老を持ち、多聞の耆舊を持つ僧團あり。その僧團より我はそを面前に聽き、面前に受けたり。こは法なり、こは律なり、こは師の教說なり」と。比丘等よ、その比丘の所說は、喜びて受けらるべきにもあらず、排斥さるべきにもあらず。喜びて受けず、排斥もせずしてその辭句を善く理解して、經に照合し、律に參照すべし。若し其等を經に照合し、律に參照して、經にも合せず、律にも一致せざる時は、この結論に到達すべきなり。「こは確に、かの世尊の言にあらずして、かの僧團によりて誤り受けられた

爲し給ひぬ。卽ち、戒とは斯く斯くなり。定とは斯く斯くなり。慧とは斯く斯くなり。戒と共に修せられたる定は、果大にして利益も大なり。定と共に修せられたる慧は、果大にして利益も大なり。慧と共に修せられたる心は、欲漏・有漏・見漏・無明漏等の諸漏より全く解脱すと。

一三　こゝに世尊は、負彌城に適意に住して、尊者阿難に曰ひぬ。

「いざ、阿難よ、波婆城に赴かむ」。

「畏りぬ、世尊」と、尊者阿難は世尊に同意しぬ。

こゝに世尊は、大比丘衆と共に波婆城に赴き給ひぬ。其處にて世尊は、波婆城の鍛冶の子なる准陀の菴羅林に住し給ひぬ。

一四　鍛冶の子なる准陀は聞きぬ。「世尊は實に波婆城に達し、波婆城の我が菴羅林に住し給ふ」と。こゝに鍛冶の子なる准陀は世尊に近づきぬ。近づきて、世尊に敬禮して一方に坐しぬ。一方に坐せる鍛冶の子なる准陀を、世尊は法話を以て訓誡し、敎誡し、鼓舞し、喜ばしめ給ひぬ。

一五　こゝに鍛冶の子なる准陀は、世尊によりて法話を以て訓誡せられ、敎誡せ

等によりて正しく受けられたり」と。比丘等よ、この第三の大教法を受持すべし。

一一　更にまた比丘等よ、比丘は斯く言はむ。『げに斯く斯くの所に、多聞にして阿含を知り、法を持し、律を持し、摩夷を持せる一長老比丘住せり。かの長老より、我はそを面前に聽き、面前に受けたり。こは法なり。こは律なり。こは師の教説なり』と。比丘等よ、その比丘の所説は、喜びて受けらるべきにもあらず、排斥せらるべきにもあらず。喜びて受けず、排斥もせずして、その辭句を善く理解して、經に照合すべし、律に參照すべし。若し其等を經に照合し、律に參照して、經にも合せず、律にも一致せざる時は、この結論に到達すべきなり。『こは確に、かの世尊の言にあらずして、かの長老によりて誤り受けられたるなり』と。斯くて、比丘等よ、こは捨て去るべし。若し其等を經に照合し、律に參照して、經にも合し、律にも
126 一致せば、この結論に到達すべきなり。『こは確にかの世尊の言にして、かの長老によりて正しく受けられたり』と。比丘等よ、この第四の大教法を受持すべし。

比丘等よ、この四大教法を受持すべし」と。

一二　其の時世尊は、かの負彌（ボーガ）城の阿難廟に住して、かく種々の法話を比丘等に

一九　こゝに世尊は、鍛冶の子なる准陀に曰ひぬ。
「准陀よ、殘れる茸は、そを穴に埋めよ。准陀よ我は天界に於ても、魔界に於ても、梵界に於ても、沙門・婆羅門の間に於ても、天・人の間に於ても、如來を措きて他に、そを食して能く消化するもののあるを見ず」。
「畏りぬ、世尊」と、鍛冶の子なる准陀は世尊に同意して殘れる茸を穴に埋めて、世尊に近づきぬ。近づきて世尊に敬禮し、一方に坐しぬ。鍛冶の子なる准陀の一方に坐したる時、世尊は法話を以て教訓し、教誡し、鼓舞し、喜ばしめて、座より起ちて去り給ひぬ。

二〇　こゝに鍛冶の子なる准陀の食を世尊が食し給ひける時、重き（赤痢）病發り、
128 赤き血迸り出づる死に近き激しき苦痛生じぬ。その時世尊は正念正智にして、苦しめられずして耐へ忍び給ひぬ。
こゝに世尊は尊者阿難に曰ひぬ。「いざ、阿難よ、拘尸那竭（クシナーラー）に赴かむ」。
「畏りぬ、世尊」と、尊者阿難は世尊に同意しぬ。
是の如くに我は聞く。

られ、鼓舞せられ、喜ばしめられて、世尊に斯く白し上げぬ。

「世尊、世尊は明朝、比丘衆と倶に、我が家にて供養食を受くるを諾ひ給へ」と。

世尊は沈黙を以て同意し給ひぬ。

一六　こゝに鍛冶の子なる准陀は、世尊の同意を知りて、座より起ち、世尊に敬禮して右繞して去りぬ。

一七　こゝに鍛冶の子なる准陀は、其の夜の間に、味美き嚼食噉食と、多くの茸[7]とを用意して、世尊に時を告げぬ。「時なり、世尊、食事は準備されぬ」と。

一八　こゝに世尊は早朝、下衣を整へ衣鉢を取りて、比丘衆と共に、鍛冶の子なる准陀の住居に赴き給ひぬ。赴きて、設けの席に坐し給ひぬ。坐して世尊は、鍛冶の子なる准陀に曰ひぬ。

「汝の用意したる茸を我に供へよ。また用意したる他の嚼食噉食を比丘衆に供へよ」。

「畏りぬ、世尊」と鍛冶の子なる准陀は世尊に同意して、用意したる茸を世尊に供へ、用意したる他の嚼食噉食を比丘衆に供へぬ。

かく言はれて、尊者阿難は世尊に斯く白し上げぬ
「世尊、今、五百の車通り過ぎぬ。その水は車輪に斷たれて少く、搔き亂され、濁り
129 て流る。世尊、かの脚倶多河は程遠からず、水清くして快く、水冷にして澄み、得易
くして喜ばし。其處にて世尊は水を飲み、また四肢を冷し給ふべし」と。

二三 再度、世尊は尊者阿難に曰ひぬ。「いざ、阿難よ、汝我に水を運び來れ。阿難よ、我は渇きたり。我は飲まむ」と。

再度、尊者阿難は世尊に斯く白し上げぬ。

「世尊、今五百の車通り過ぎぬ。その水は車輪に斷たれて少く、搔き亂され、濁りて流る。世尊、かの脚倶多河は程遠からず、水清くして快く、水冷にして澄み、得易くして喜ばし。其處にて世尊は水を飲み又四肢を冷し給ふべし」と。

二四 三度、世尊は尊者阿難に曰ひぬ。「いざ、阿難よ、汝我に水を運び來れ。阿難よ、我は渇きたり。我は飲まむ」と。

「畏りぬ、世尊」と、尊者阿難は世尊に同意して、鉢を取りてかの河に赴きぬ。こゝにかの河は車輪に斷たれて水少く、搔き亂され、濁りて流れけるに、尊者阿難の行

鍛冶師准陀の食を食し、
賢者は罹りましましぬ、
死に近き激しき病に。
茸を食し給ひてぞ、
激しき病、師に起りぬ。
下痢しつゝ世尊は曰ひぬ。
拘夷那竭に我行かむと。

二一　こゝに世尊は路より退きて、一樹の下に近づき給ひぬ。近づきて尊者阿難に曰ひぬ。

「いざ、阿難よ、汝我に上衣を四重にして敷け。阿難よ、我は疲れたり。我は坐せむ」。

「畏りぬ、世尊」と尊者阿難は世尊に同意して、上衣を四重にして敷きぬ。

二二　世尊は設けの席に坐し給ひぬ。坐して、世尊は尊者阿難に曰ひぬ。「いざ、阿難よ、汝我に水を運び來れ。我は渇きたり。阿難よ、我は飲まむ」。

言ひぬ。

「不可思議なるかな、世尊、稀有なるかな世尊。嗚呼、世尊、出家が斯く心靜なる狀にして住すとは。

二七　世尊、昔時、阿羅羅迦羅摩は大道を歩み道より外れて、程遠からざる一樹の下に、晝の休息の爲に坐しぬ。世尊、その時五百の車は阿羅羅迦羅摩に近く近く通り過ぎぬ。世尊、その時かの隊商の車の後に隨ひ行ける一人は、阿羅羅迦羅摩に近づきぬ。近づきて阿羅羅迦羅摩に斯く言ひぬ。

「尊者よ、御身も五百車の通り過ぎしを見たるや。」

「友よ、げに我は見ざりき。」

「然らば尊者よ、音を聞きたるや。」

「友よ、げに我は聞かざりき。」

「然らば尊者よ、眠りて居たるや。」

「友よ、げに我眠りてあらざりき。」

「然らば尊者よ、覺めて居たるや。」

ける時、清くして澄み、濁らずして流れぬ。

二五　こゝに尊者阿難は斯く思ひぬ。「嗚呼實に不可思議なるかな。嗚呼實に稀有なるかな、如來の大神通大威力や。實に此の河は車輪に斷たれて水少く、搔き亂され、濁りて流れけるに、我行ける時、清くして澄み、濁らずして流るとは」と。〔かくて〕鉢にて水を汲みて、世尊に近づきぬ。近づきて、世尊に斯く白し上げぬ。

「不可思議なるかな、世尊、稀有なるかな世尊、如來の大神通大威力や。世尊、今かの河は車輪に斷たれて水少く、搔き亂され、濁りて流れけるに、我の行きし時、清くして澄み、濁らずして流れぬ。世尊は水を飲ませ給へ。善逝は水を飲ませ給へ」と。

こゝに世尊は水を飲み給ひぬ。

130 二六　その時また、阿羅羅迦羅摩（アーラーラカーラーマ）の弟子にして福貴（プックサ）てふ末羅子、拘夷那竭より波婆に至る大道を歩みてありき。

末羅子福貴は世尊の一樹の下に坐し給へるを見ぬ。見て、世尊に近づきぬ、近づきて、世尊に敬禮して一方に坐しぬ。一方に坐して、末羅子福貴は世尊に斯く

の車、又は一千の車、又は一萬の車も、何をか爲さん。覺めてありて等しく意識しつゝも、天に雨降り、天に雷鳴し、電光閃き、雷電裂くる時、そを見ず音を聞かざるは、一層爲し難く、又一層達し難し」。

三〇 「さて福貴よ、一時、我阿頭(アートゥマー)にてプサーガーラ(籾穀の家)に住したり。其の時、天に雨降り、天に雷鳴し、電光閃き、雷電裂けプサーガーラの兄弟二人の農夫と四頭の牛とは殺されたり。その時、福貴よ、阿頭より大群衆出で來りて、かの殺されたる兄弟二人の農夫と四頭の牛に近づきぬ。

三一 其の時、福貴よ、我、プサーガーラより出でてプサーガーラの戸口の露地に歩み來りぬ。その時、福貴よ、かの大群衆中より、或る者、我の居たる所に近づき來りぬ。近づきて我に敬禮し、一方に立ちぬ。一方に立てる彼の者に、福貴よ、我は斯く言ひぬ。

三二 「友よ、何の故に大群衆は集りしや」。

132 「世尊、今天に雨降り、天に雷鳴し、電光閃き、雷電裂けて、兄弟二人の農夫と四頭の牛とは殺されぬ。されば、かの大群衆は集りしなり。而して世尊、御身は何處に

「然り、友よ」。

「然らば尊者よ、御身は覺めてありて等しく意識しつゝも、五百車の近く近く通り過ぎたるを而も見ず、また音を聞かざりき。實に尊者よ、御身の上衣は塵に蔽はれたるや」。

「然り、友よ」。

こゝに、世尊、かの人は斯く思ひぬ。「嗚呼げに不可思議なるかな、嗚呼げに稀有なるかな。嗚呼、實に出家は斯くも心靜かなる狀(さま)にて住し、其處にて覺めてありて等しく意識しつゝも、五百車の近く近く通り過ぐるを而も見ず、また音を聞かざるとは」と。彼は阿羅羅・迦羅摩に深き信を述べて行きぬ」。

131

二八　「福貴よ、汝はそを如何に思ふや。覺めてありて等しく意識しつゝも、五百車の近く近く通り過ぐるを見ず、又音を聞かざると、覺めてありて等しく意識しつゝも、天に雨降り、天に雷鳴し、電光閃き、雷電裂くる時、そを見ず音を聞かざると、何れが一層爲し難く、或は一層達し難きや」。

二九　「尊者よ、かの五百の車、又は六百の車、又は七百の車、又は八百の車、又は九百

有なり。嗚呼、げに出家が斯くも心静かなる狀にて住し、げに其處にて覺めてありて等しく意識しつゝも、天に雨降り、天に雷鳴し、電光閃き、雷電裂くる時、そを見ず、音をも聞かざるとは」と。我に深き信を述べ、我に敬禮し、右繞して去りぬ」。

三四　斯く言はれて、末羅子福貴は世尊に斯く白し上げぬ。

「世尊、この我は、阿羅羅・迦羅摩に對する我が信を、大風の如く吹き飛ばし、奔流の如く流し去る。世尊、いとも優れたるかな。世尊、いとも優れたるかな。譬へば、世尊、倒れたるを起し、覆はれたるを顯はし、迷へる者に道を示し、具眼者は物を見るならむとて、暗き所に油燈を齎すが如く、是の如く、世尊は數多くの次第にて法
133 を知らしめ給へり。世尊、この我は世尊と、法と比丘僧團とに歸依す。世尊は今より一生の間歸依する優婆塞として、我を攝受し給へ」と。

三五　こゝに末羅子福貴は、他の者に言ひぬ。

「やよ、汝は我に、柔き絹の金色の一對の衣を持ち來れ」と。

「畏りぬ、尊者」と、かの者は末羅子福貴に同意して、かの柔き絹の金色の一對の衣を持ち來りぬ。

居給へるや」。
「友よ、我は此處に居たり」。
「然らば世尊、何を見給へるや」。
「友よ、〔何も〕見ざりき」。
「然らば世尊、何の音を聞き給へるや」。
「友よ、我、音を聞かざりき」。
「然らば世尊、眠りて居給へるや」。
「友よ、我は眠りてあらざりき」。
「然らば世尊、覺めて居給へるや」。
「然り、友よ」。
「然らば世尊、御身は覺めてありて等しく意識しつゝも、天に雨降り、天に雷鳴し、電光閃き、雷電裂けたる時、そを見ず音をも聞かざりしと〔仰せらるゝや〕」。
「然り、友よ」。
三三　こゝに福貴よ、かの人は斯く思ひぬ。「嗚呼げに不可思議なり、嗚呼げに稀

はし。世尊、我この柔き絹の金色の一對の衣を、世尊の軀に著せまつりし時、世尊
134 の軀に著せまつりしその衣は、光輝を失へるが如く見えぬ」

「阿難よ、そは然り。阿難よ、げに二時に於て、如來の皮膚の色は極めて淸く麗はし。二とは何ぞや。卽ち、阿難よ、如來の無上等正覺を成じたる夜と、無餘涅槃界に入る夜となり。この二時に於て、如來の皮膚の色は極めて淸く麗はしきなり。

三八 而して阿難よ、今夜最後更(さいとかう)に、拘夷那竭なる末羅族の恕跋單(ウパヷタナ)林の沙羅雙樹の間に於て、如來の般涅槃はあるべし。いざ、阿難よ、河に赴かむ」。

「畏りぬ、世尊」と、尊者阿難は世尊に同意しぬ。

柔き絹の金色の一對の衣を、
福貴は持ち來りぬ。
そを著し給へる師は、
金色にぞ輝きぬ。

三九 こゝに世尊は大比丘衆と共に、脚倶多河に赴き給ひぬ。赴きて脚倶多河に侵り、沐浴をなし、水を飮み、出て來りて菴羅林に赴き給ひぬ。赴きて、尊者准陀

こゝに末羅子福貴は、かの柔き絹の金色の一對の衣を世尊に捧げぬ。「世尊、こは柔き絹の金色の一對の衣なり。世尊、そを世尊は我が爲に憐みて受け給はんことを」

「然らば、福貴よ、一は我に、一は阿難に著せよ」。

「畏りぬ、世尊」と、末羅子福貴は世尊に同意して、一を世尊に著せまつり、一を阿難に著せぬ。

三六 こゝに世尊は末羅子福貴を、法話を以て教訓し、教誡し、鼓舞し、喜ばしめ給ひぬ。こゝに末羅子福貴は、世尊に依りて法話を以て教訓せられ、教誡せられ、鼓舞せられ、喜ばしめられて、座より起ち、世尊に敬禮し、右繞して去りぬ。

三七 こゝに尊者阿難は、末羅子福貴の去りて間もなく、かの柔き絹の金色の一對の衣を、世尊の軀に著せまつりぬ。世尊の軀に著せられたるその衣は、光輝を失へるが如くに見えぬ。

こゝに尊者阿難は世尊に斯く白し上げぬ。

「世尊、不可思議なるかな。世尊、稀有なるかな。世尊、如來の皮膚の色は淸く麗

准陀と名くる比丘に曰ひぬ。
「我が臥床(ふしど)に衣をば
四重(よへ)にして敷けよかし」と。
彼准陀は勵され、己を制して速かに、
衣を四重にして敷きぬ。
疲れましたる氣色にて、
教主は[床に]臥し給ひ、
こゝに准陀は面前に坐しぬ。

こゝに世尊は尊者阿難に曰ひぬ。

四二 「阿難よ、何人か鍛冶の子たる准陀に悔心を起さしむる者あるやも知れず『如來は汝の捧げたる最後の供養食を食して、般涅槃し給ひたるなれば、友准陀よ、汝には利益なく、汝には功徳なし』と。[されど]阿難よ、鍛冶の子なる准陀の悔心は、是の如く排除せらるべきなり。

『如來は汝の捧げたる最後の供養食を食して、般涅槃し給ひたるなれば、友よ、汝

に曰ひぬ。

「いざ、准陀、汝我が爲に上衣を四重にして敷け。 准陀よ、我は疲れたり。 我は臥せむ」

「畏りぬ、世尊」と、尊者准陀は世尊に同意して、上衣を四重にして敷きぬ。

四〇 こゝに世尊は右脇にて師子臥をなし、足に足を重ね給ひ、起たんことを慮り[136]て、正念正智にして心を集注し給へり。其の時、尊者准陀は世尊の前に坐しぬ。

四一 水清くして快く、いとも澄みたる
脚倶多河に佛は赴き、
いと疲れたる氣色にて、
世に比なき如來敎主は浸り給ひぬ。
敎主は沐浴し、水を飲み、
比丘衆の最中（もなか）に圍れて、
敎主世尊はこゝに法を説き、
大仙は菴羅林に去り給へり。

而して善人は悪を捨て、
貪瞋癡を滅して寂定なり。

には利益あり、汝には功德あり。友准陀よ、そを我は面前にて如來より聞き、面前にて受けぬ。此の二の供養食には等しき果等しき異熟果ありて、他の供養食よりも勝れたる、より大なる果あり、より大なる利益あり、二とは何ぞや。卽ち彼の供養食を食して、如來が無上等正覺を成じたると、又此の供養食を食して、如來が無餘涅槃界に入るとなり。此の二の供養食は等しき果、等しき異熟果ありて他の供養食よりも勝れたる、より大なる果、より大なる利益あるなり。鍛冶子尊者准陀は長壽に導く業を積みたり。鍛冶子尊者准陀は良種族に導く業を積み、鍛冶子尊者准陀は安樂に導く業を積みたり。鍛冶子尊者准陀は名聲に導く業を積みたり。鍛冶子尊者准陀は生天に導く業を積みたり。鍛冶子尊者准陀は王位に導く業を積みたり」と。

阿難よ、是の如く、鍛冶の子なる准陀の悔心は排除さるべきなり」。

四三 こゝに世尊は其の意を知りて、その時、この偈を述べ給ひぬ。

與ふる者に功德は增し、
心を制する者に怨恨は積まれず。

らは如來供養の爲に、如來の軀に注ぎ、降り注ぎ、撒り注ぎぬ。また天の曼陀羅華は虛空より降りて、如來供養の爲に、如來の軀に注ぎ、降り注ぎ、撒り注ぎぬ。天の栴檀末は虛空より降りて、如來供養の爲に、如來の軀に注ぎ、降り注ぎ、撒り注ぎ
138 ぬ。天の鐃は、如來供養の爲に虛空に鳴りぬ。天の歌謠は、如來供養の爲に虛空に起りぬ。

三　こゝに世尊は尊者阿難に曰ひぬ。

「阿難よ、沙羅雙樹は時ならざるに花咲き、凡ての花は滿開にて、如來供養の爲に、如來の軀に注ぎ、降り注ぎ、撒り注ぎぬ。また天の曼陀羅華は虛空より降りて、如來供養の爲に、如來の軀に注ぎ、降り注ぎ、撒り注ぎぬ。天の栴檀末は虛空より降りて、如來供養の爲に、如來の軀に注ぎ、降り注ぎ、撒り注ぎぬ。天の鐃は、如來供養の爲に、虛空に鳴りぬ。天の歌謠は、如來供養の爲に、虛空に起りぬ。

阿難よ、斯かる手段にて、如來は崇められ、尊ばれ、敬はれ、供養せられ、尊敬せらるゝにはあらず。阿難よ、比丘或は比丘尼、或は優婆塞、或は優婆夷にして、法と隨法とに到達して住し、正しく到達し、法に隨ひて行ずる者こそ、如來を最上に崇め、尊

第五誦品

137 一　こゝに世尊は尊者阿難に曰ひぬ。
「いざ、阿難よ、凞連禪河（ヒランニャヴァティー）の彼岸なる拘夷那竭（クシナーラ）の末羅族の漚跋單（ウパヴァタナ）の沙羅林に赴かむ」と。
「畏りぬ、世尊」と、尊者阿難は世尊に同意しぬ。こゝに世尊は大比丘衆と共に、凞連禪河の彼岸なる拘夷那竭の漚跋單に赴き給ひぬ。赴きて、尊者阿難に曰ひぬ。
「いざ、阿難よ、汝は我が爲に、沙羅雙樹の間に、頭を北に向けて床を敷け。阿難よ、我は疲れたり、我は横はらむ」と。
「畏りぬ、世尊」と、尊者阿難は世尊に同意して、沙羅双樹間に、頭を北に向けて床を敷きぬ。こゝに世尊は右脇にて、足の上に足を重ね、師子臥をなして、正念正智に住し給へり。
二　さて其の時、沙羅雙樹は、時ならざるに花咲き、凡ての花は滿開なりき。それ

端なる末羅族の恕跋單沙羅林の周圍十二由旬の間には、大力ある諸天によりて觸れられざるもの、兎毛の先端にて突くほどの所もなし。阿難よ、諸天は呟やけり。『嗚呼、我等は如來を見む爲に遠くより來れり。時ありて阿羅漢・等正覺者たる如來は世に出で給ふ。而して今日今夜最後更(さいごかう)に、如來の般涅槃はあるべし。然るにこの有力なる比丘は如來の前に立ちて蔽ひたれば、我等は最後更に如來を見奉る能はず』と、阿難よ、諸天は呟やけり」。

六　「さらば世尊、諸天は如何なる狀態にありと世尊は思惟し給ふや」。

「阿難よ、諸天ありて、虛空に於て地の事を念じ、頭髮を亂して
140 泣き、碎かれたる岩の如くに打ち倒れ、婉轉し、展轉す。『世尊の般涅槃に入り給はむこと餘りに早し、善逝の般涅槃に入り給はむこと餘りに早し、世間の眼の隱れむこと餘りに早し』とて。

「阿難よ、諸天ありて、地に於て地の事を念じ、頭髮を亂して泣き、腕を伸ばして泣き、碎かれたる岩の如くに打ち倒れ、婉轉し、展轉す。『如來の般涅槃に入り給はむこと餘りに早し、善逝の般涅槃に入り給はむこと餘りに早し、世間の眼の隱れむ

び、敬ひ、供養し、尊敬するなれ。されば こゝに、阿難よ、「法と隨法とに到達して住し、正しく到達して、法に隨ひて行ずべし」と、是の如く、阿難よ、學ばるべきなり」と。

四　さてその時、尊者優波摩那（ウパヷーナ）は、世尊の前に立ちて、世尊を扇ぎ居たり。こゝに世尊は尊者優波摩那を退け給ひぬ。「去れ、比丘よ、我が前に立つ勿れ」と。

こゝに尊者阿難は斯く思ひぬ。「げに此の尊者優波摩那は、長き間、世尊の常侍たり、近侍たり、近行者たりき。然るに今こゝに世尊は、臨終に尊者優波摩那を退け給ひぬ。「去れ、比丘よ、我が前に立つ勿れ」と。げに何の因、何の縁にて、世尊はかの尊者優波摩那を退けて、「去れ、比丘よ、我が前に立つ勿れ」と曰へるや」と。

五　こゝに尊者阿難は、世尊に斯く白し上げぬ。

「世尊、この尊者優波摩那は、長き間、世尊の常侍たり、近侍たり、近行者たりき。然るに今こゝに世尊は、臨終に尊者優波摩那を退け給ひぬ。「去れ、比丘よ、我が前に立つ勿れ」と。げに何の因、何の縁にて、世尊は尊者優波摩那を退けて、「去れ、比丘よ、我が前に立つ勿れ」と曰へるや」。

「阿難よ、十方世界のいとも多くの諸天、如來を見む爲に集りぬ。阿難よ、拘夷那

「此處にて如來は無餘涅槃に入りたり」と云ふ處は、阿難よ、信心ある善男子の見るべく、尊敬すべき處なり。

141 げに阿難よ、これ等の四〔處〕は、信心ある善男子の見るべく、尊敬すべき處なり。

げに阿難よ、信心ある比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷は、「此處にて如來は生れ給へり」、「此處にて如來は無上等正覺を成じ給へり」、「此處にて如來は無上法輪を轉じ給へり」、「此處にて如來は無餘涅槃に入り給へり」とて集り來るべし。

阿難よ、何人にても、廟の巡禮者にして遍歷し、信心ありて死せむに、凡て死後身體の分離したる時、善趣なる天界に再生すべし」。

九 「世尊、我等は女人を如何にすべきや」。

「阿難よ、見ること勿れ」。

「世尊、見たる時は如何にすべきや」。

「阿難よ、話すこと勿れ」。

「世尊、されど話しかけられたる時は如何にすべきや」。

「斯かる時は、阿難よ、警戒してあれ」。

こと餘りに早し」とて。されど、彼の諸天は愛を盡したれば、正念正智にして耐ゆ。『諸行は無常なり。如何ぞ、滅せざることあり得べき』と」。

七 「世尊、嘗て諸地方に於て雨安居を過したる時、比丘等は如來を見む爲に來れり。我等はかの心の修業を積みたる比丘等を見るを得、尊敬するを得たり。されど世尊、世尊の無き後には、我等は心の修業を積みたる比丘等を見るを得ず、尊敬するを得ざるべし」。

八 「阿難よ、この四處は信心ある善男子の見るべく、尊敬すべき處なり。四とは何ぞや。

『此處にて如來は生れたり』と云ふ處は、阿難よ、信心ある善男子の見るべく、尊敬すべき處なり。

『此處にて如來は等正覺を成じたり』と云ふ處は、阿難よ、信心ある善男子の見るべく、尊敬すべき處なり。

『此處にて如來は無上法輪を轉じたり』と云ふ處は、阿難よ、信心ある善男子の見るべく、尊敬すべき處なり。

「阿難よ、轉輪王の舍利を處理するが如く、是の如く如來の舍利を處理すべきなり。大なる四衢道に如來の塔を造立すべし。彼處にて華鬘或は香或は顏料を供へて禮拜せむ者には、長き間利益と安樂とあるべし。

一二　阿難よ、塔を建つるに價するものは、此の四なり。四とは何ぞや。如來・阿羅漢・等正覺者は塔を建つるに價す。辟支佛は塔を建つるに價す。如來の聲聞は塔を建つるに價す。轉輪王は塔を建つるに價す。

「而して、阿難よ、如何なる理由に基きて、如來・阿羅漢・等正覺者は塔を建つるに價するや。『こはかの世尊阿羅漢・等正覺者の塔なり』と思ひて、阿難よ、大衆は心淨まる。彼處にて彼等は心淨まりて、死後身體の壞したる時、善趣なる天界に再生す。阿難よ、この理由に基きて、如來・阿羅漢・等正覺者は塔を建つるに價す。

また阿難よ、如何なる理由に基きて、辟支佛は塔を建つるに價するや。『こはか
143 の世尊辟支佛の塔なり』と思ひて、阿難よ、大衆は心淨まる。彼處にて彼等は心淨まりて、死後身體の壞したる時、善趣なる天界に再生す。阿難よ、この理由に基きて、辟支佛は塔を建つるに價す。

一〇「世尊、我等は如來の舍利を如何に處理すべきや」。

「阿難よ、汝等は如來の舍利供養の爲に煩はされざれ。いざ、阿難よ、汝等は最高善に努力せよ。最善を修せよ。最高善に於て、不放逸にて熱心・精懃にして任せよ。阿難よ、如來に信心を懷く刹帝利の學者も、婆羅門の學者も、居士の學者もありて、彼等は如來の舍利供養を爲すべし」。

一一「されど、世尊、如來の舍利を如何に處理すべきや」。

「阿難よ、轉輪王の舍利を處理するが如く、是の如く、如來の舍利を處理すべきなり」。

「而して、世尊、轉輪王の舍利は如何に處理すべきや」。

「阿難よ、人々は轉輪王の軀を、新しき布にて包む。新しき布にて包みて、眞新しき麻布にて包む。眞新しき麻布にて包みて、新しき衣にて包む。かゝる方法に
142 て、五百重に轉輪王の軀を包みて、鐵の油槨に入れ、他の鐵槨にて蔽ひ、一切の香の積を作りて、轉輪王の軀を火葬し、而して大なる四衢道に轉輪王の塔を造立す。阿難よ、轉輪王の軀は是の如く處理するなり。

して、爲すべきものあり、而も我を愍み給ふ教主は我を離れて般涅槃に入り給ふべし」とて」。

こゝに世尊は或る比丘に曰ひぬ。「汝比丘よ、行きて、我が言として阿難を呼べ。「友阿難よ、教主は汝を呼び給ふ」と」。

「畏りぬ、世尊」と、かの比丘は世尊に同意して、尊者阿難に近づきぬ。近づきて尊者阿難に斯く言ひぬ。

「友よ、教主は汝を呼び給ふ」。

「畏りぬ、友よ」と、尊者阿難は彼の比丘に同意して、世尊に近づきぬ。近づきて世尊に敬禮して一方に坐しぬ。

一四　一方に坐したる時、世尊は尊者阿難に斯く曰ひぬ。

「止めよ、阿難よ、悲しむ勿れ、慟哭する勿れ。阿難よ、嘗て我、斯く説かざりしや、凡ての愛しく好める者と雖も、(生)別し、(死)別し、(死後境界を)異にす、と。阿難よ、如何ぞこのことあり得べき。かの生じたる、存在せる、造られたる、壞の法にして、あゝ(そが)壞することなしといふ、かゝる處あることなし。長き間、阿難よ、汝は慈愛ある、

また阿難よ、如何なる理由に基きて、如來の聲聞は塔を建つるに價するや。「こはかの世尊阿羅漢・等正覺者の聲聞の塔なり」と思ひて、阿難よ、大衆は心淨まる。其處にて彼等は心淨まり、死後、身體の壞したる時、善趣なる天界に再生す。阿難よ、この理由に基きて、如來の聲聞は塔を建つるに價す。

また阿難よ、如何なる理由に基きて、轉輪王は塔を建つるに價するや。「こはかの法を好む法王の塔なり」と思ひて、阿難よ、大衆は心淨まる。其處にて彼等心淨まりて、死後身體の壞したる時、善趣なる天界に再生す。阿難よ、この理由に基きて、轉輪王は塔を建つるに價す。

阿難よ、この四は塔を建つるに價するなり」。

一三　こゝに尊者阿難は住所に入り、門を把り涕泣して立ち居たりき。「嗚呼、我は學地にして〔なほ〕爲すべきものあり。而も我を愍み給ふ敎主は、我を離れて般涅槃に入り給ふべし」とて。

こゝに世尊は比丘等に曰ひぬ。「阿難は何處にあるや」。

「世尊、彼の尊者阿難は住所に入り、門を把り涕泣して立てり。『嗚呼、我は學地に

比丘等よ、若し比丘衆にして、阿難を見む爲に近づき行かむに、彼等は見て喜ばしめらる。其處にて若し阿難說法せむに、彼等は說法にて喜ばしめらる。比丘等よ、阿難の默したらむ時は、比丘衆は不滿なり。

比丘等よ、若し比丘尼衆にして…乃至…優婆塞衆にして…乃至…優婆夷衆にして、阿難を見む爲に近づき行かむに、彼等は見て喜ばしめらる。其處にて若し阿難說法せむに、彼等は說法にて喜ばしめらる。比丘等よ、阿難の默したらむ時は、優婆夷衆は不滿なり。

比丘等よ、轉輪王にも此の四の不可思議にして稀有なる法あり。

比丘等よ、若し刹帝利衆にして…乃至…婆羅門衆にして…乃至…居士衆にして…乃至…沙門衆にして轉輪王を見む爲に近づき行かむに、彼等は見て喜ばしめらる。其處にて若し轉輪王が說かむに、彼等は說話にて喜ばしめらる。比丘等よ轉輪王にして默したらむ時は、沙門衆は不滿なり。

146 是の如く、比丘等よ、阿難には四の不可思議にして稀有なる法あり。比丘等よ、若し比丘衆にして…乃至…比丘尼衆にして…乃至…優婆塞衆にして…乃至…

利益ある、安樂なる、二なき、無量なる身業に依りて、慈愛ある、利益ある、安樂なる、二なき、無量なる口業に依りて、慈愛ある、利益ある、安樂なる、二なき、無量なる意業に依りて、如來に近侍したり。阿難よ、汝はよく爲したり。精進を行へ。速かに無漏たるべし」。

一五 こゝに世尊は比丘等に曰ひぬ。

「汝比丘等よ、過去世に諸阿羅漢・等正覺者ありき。彼の世尊等には優れたる侍者ありて、譬へば我に於ける阿難の如くなりき。汝比丘等よ、未來世に諸阿羅漢・等正覺者あらむ。彼の世尊等にも優れたる侍者ありて、譬へば我に於ける阿難の如くならむ。

げに比丘等よ、阿難は賢者にして、『こは如來に見えむ爲、比丘等の近づくべき時なり、こは比丘尼の時なり、こは優婆塞の時なり、こは優婆夷の時なり、こは王・王[145]大臣・外道の教師・外道の弟子の時なり』と、よく知る。

一六 比丘等よ、阿難にはこの四の不可思議にして稀有なる法あり。四とは何ぞや。

舍婆提(サーブティー)と名くる王都にて、長さ東西に十二由旬、幅南北七由旬なりき。

阿難よ、拘舍婆提王都は繁榮し、富裕にして、人民多く、庶民參集し、また食豐かな
147 りき。譬へば、阿難よ、諸天のアーラカマンダーと名くる王城の繁榮し、富裕にして、人民多く、庶民參集し、また食豐かなるが如し。是の如く、阿難よ、げに拘舍婆提王都は繁榮し、富裕にして、人民多く、庶民參集し、また食豐かなりき。

阿難よ、拘舍婆提王都は晝夜十種の聲にて滿たされ、天の喜びありき。譬へば象聲・馬聲・兵車聲・太鼓聲・鼓聲・琵琶聲・歌謠聲・鈸聲・小鐃聲、及び第十に「食べよ、飲めよ、歌へよ」の聲なりき。

一九　阿難よ、汝行け。拘夷那竭に入り、拘夷那竭の末羅族等に告げよ。「お丶、ヴーセッタ等よ、今夜最後(さいご)更(かう)に、如來の般涅槃はあるべし。ヴーセッタ等よ、集り來れ、後に「我等の村の土地にと我が如來の般涅槃はありき。而も我等は最後更に如來を見る能はざりき」との後悔ならしむる勿れ」と」。

「畏りぬ、世尊」と、尊者阿難は世尊に同意して、下衣を整へ、衣鉢を取り、一人を連れて拘夷那竭に入りぬ。

優婆夷にして、阿難を見む爲に近づき行かむに、彼等は見て喜ばしめらる。其處にて若し阿難說法せむに、彼等は說法にて喜ばしめらる。比丘等よ、阿難の默したらむ時は、優婆夷衆は不滿なり。

比丘等よ、阿難には此の四の不可思議にして稀有なる法あり」。

一七　是の如く言はれて、尊者阿難は世尊に斯く白し上げぬ。

「世尊、世尊はこの小都市、竹藪中の都城枝葉の如き都城にて、般涅槃に入り給ふ勿れ。世尊、他の大なる都城、譬へば瞻婆(チャンパー)城・王舍城・舍衞城・娑祇(サーケータ)城・憍賞彌(コーサンビ)城・波羅奈(バーラーナシー)城あり。其處にて世尊は般涅槃し給へ。其處には多くの刹帝利の大講堂、婆羅門の大講堂、居士の大講堂あり、如來に歸依せるものあり。彼等は如來の舍利に供養を爲すべし」。

「阿難よ、斯く言ふ勿れ。阿難よ、小都城、竹藪中の都城、枝葉の如き都城と言ふ勿れ。

一八　阿難よ、往時大善見王と名くる法を好む轉輪法王あり、四邊を征服し、凡ての人民を安固たらしめ、七寶を具足せり。阿難よ、この拘夷那竭は大善見王の拘(ク)

二〇　其の時、拘夷那竭の末羅族は、さる用件にて會議堂に集り居たりき。こゝに尊者阿難は拘夷那竭の末羅族の講堂に赴きぬ。赴きて、拘夷那竭の末羅等に告げぬ。

「おゝ、ヴーセッタ等よ、今夜、最後更に、如來の般涅槃はあるべし。ヴーセッタ等よ、集り來れ。ヴーセッタ等よ、集り來れ。後に『我等の村の土地にて如來般涅槃
148 はありき。而も我等は最後更に如來を見る能はざりき』との後悔あらしむる勿れ」と。

二一　尊者阿難より之を聞きて、末羅族等、末羅族の子等、末羅族の娘等、及び末羅族の妻等は、苦しみ憂へて、心の苦に壓せられ、或る者は頭髮を亂して泣き、腕を伸ばして泣き、碎かれたる岩の如くに打ち倒れ、婉轉し、展轉せり。「如來の般涅槃に入り給はむこと餘り、に早し。善逝の般涅槃に入り給はむこと餘りに早し。世間の眼の隱れむこと餘りに早し」とて。

こゝに末羅族等、末羅族の子等、末羅族の娘等、及び末羅族の妻等は、苦しみ憂へて、心の苦に壓せられ、末羅族の惒跋單沙羅林なる、阿難の所に近づき行きぬ。

二二　こゝに尊者阿難は斯く思ひぬ。「若し我、拘夷那竭の末羅族の一人一人をして世尊に敬禮せしめむには、この夜明に至りても、拘夷那竭の末羅族は世尊に敬禮し終らざるべし。いざ今、我は拘夷那竭の末羅族に於て、種を一團とし、種を一團として、立ちて世尊に敬禮せしめむ。『世尊、斯く斯くの名の末羅族は、子と共に、妻と共に、來と共に、友と共に、世尊の足に頂禮す』とて」。

こゝに尊者阿難は、此の方法に依りて、最初更（さいしよかう）に拘夷那竭の末羅族をして世尊に敬禮せしめぬ。

二三　こゝに其の時、須跋（スバッダ）と名くる遊行僧、拘夷那竭に住しぬ。遊行僧須跋は、「今夜最後更に、沙門瞿曇の般涅槃はあるべし」と聞きぬ。

149 こゝに遊行僧須跋は斯く思ひぬ。「我嘗てかの年老いたる長老にて師の弟子たる遊行僧の言へるを聞きぬ。『阿羅漢・等正覺者たる如來は、世に出現し給ふこと稀なり』と。然るに今夜、最後更に、沙門瞿曇の般涅槃はあるべし。而して我に此の疑の法生じたり。斯くて我が此の疑の法を捨つるが如き法をば、沙門瞿曇

150 に、沙門瞿曇の般涅槃はあるべし。而して我に此の疑の法生じたり。かくて我が此の疑の法を捨つるが如き法をば、沙門瞿曇は我に說くを得むとの信を、我は沙門瞿曇に懷く。嗚呼、阿難よ、この我をして沙門瞿曇を見るを得しめむことを」と。

三度尊者阿難は遊行僧須跋に斯く言ひぬ。「止めよ、友須跋よ、如來を煩はしまつる勿れ。世尊は疲れ給へり」と。

二五　世尊は、須跋との間になされたる尊者阿難のこの會話を聞き給ひぬ。こゝに世尊は尊者阿難に曰ひぬ。

「止めよ、阿難よ、須跋を防ぐる勿れ。阿難よ、須跋は如來を見るを得。須跋の問はむ事は、何事にても、凡て知らむと欲して問ふにて、「我を」煩はさむと欲してにはあらず。而して我は彼の所問を說くべく、其を彼は速かに理解すべし」と。

こゝに尊者阿難は、遊行僧須跋に斯く言ひぬ。「行け、友須跋よ、世尊は御身に許を與へ給へり」と。

二六　こゝに遊行僧須跋は世尊に近づきぬ。近づきて世尊に挨拶し、挨拶の言

は我に說くを得むとの信を、我は沙門瞿曇に懷く」と。

二四　こゝに遊行僧須跋は、末羅族の恕跋單沙羅林なる、尊者阿難の所に近づきて行きぬ。近づきて、尊者阿難に斯く言ひぬ。

「嗚呼、阿難よ、我はかの年老いたる長老にて、師の弟子たる遊行僧の言へるを聞きぬ。『阿羅漢・等正覺者たる如來の世に出現し給ふこと稀なり』と。然るに今夜最後更に、沙門瞿曇の般涅槃はあるべし。而して我に此の疑の法生じたり。かくて我が此の疑の法を捨つるが如き法をば、沙門瞿曇は我に說くを得むとの信を、我は、沙門瞿曇に懷く。嗚呼、阿難よ、この我をして沙門瞿曇を見るを得しめむことを」と。

斯く言へる時、尊者阿難は遊行僧須跋に言ひぬ。「止めよ、友須跋よ、如來を煩はしまつる勿れ。世尊は疲れ給へり」と。

再度遊行僧須跋は…乃至…三度遊行僧須跋は、尊者阿難に斯く言ひぬ。

「嗚呼、阿難よ、かの年老いたる長老にて、師の弟子たる遊行僧の言へるを聞きぬ。『阿羅漢・等正覺者たる如來の、世に出現し給ふは稀なり』と。然るに、今夜最後更

れ、其處には第二〔果〕の沙門も見出され、其處には第三〔果〕の沙門も見出され、其處には第四〔果〕の沙門も見出さる。須跋よ、この〔我が〕法律に於て、八聖道は見出さる、須跋よ、此處に〔第一果の〕沙門、第二〔果〕の沙門、此處に第三〔果〕の沙門、此處に第四〔果〕の沙門は見出さる。他の言論は、沙門にとりては空し。されば、須跋よ、比丘等は此に正しく住すべし。この世界は、阿羅漢にとりて空しからず。

須跋よ、我歳二十九にして、
善を求めて出家しぬ。
須跋よ、我出家してより、
已に五十有一年、
正理正法の地を遊行せり。
此の外に沙門〔果〕あることなし。

152 第二の沙門〔果〕もあることなく、第三の沙門〔果〕もあることなく、第四の沙門〔果〕もあることなし。他の言論は沙門にとりては空し。されば、須跋よ、比丘等は此に正しく住すべし。この世界は阿羅漢等にとりて空しからず」。

と友宜を互に交換して、一方に坐しぬ。一方に坐して、遊行僧須跋は世尊に斯く言へり。

「おゝ、瞿曇よ、この沙門婆羅門にして、僧伽を持ち、弟子を持ち、弟子の師にて知者にして名稱あり、敎祖にして大衆に崇敬せられたるもの、譬へば、不蘭迦葉(プーラナカッサパ)・末伽梨(マッカリ)憍舍利(ゴーサーラ)・阿浮陀翅舍金披羅(アヂタケーサカンベリー)・波浮迦旃(パクダカッチャーヤナ)・薩若毘耶梨弗(サンヂャヤベーラッティプッタ)・尼健子(ニガンタナータプッタ)の如き、彼等凡ては己が
161
智を以て知りたるや、凡ては知らざるや、其の或る者は知り、或る者は知らざるや」。

「止めよ、須跋よ。彼等凡ては己が智を以て知りたるや、凡ては知らざるや、其の或る者は知り、或る者は知らざるや」と言ふこと勿れ。須跋よ、我汝に法を説かむ。そを聞きてよく憶念せよ。我說かむ」。

「畏りぬ、世尊」と、遊行僧須跋は世尊に同意しぬ。世尊は斯く曰ひぬ。

二七　「須跋よ、如何なる法・律に於ても、八聖道の見出されざる所には、其處には第一果の)沙門も見出されず、其處には第二(果)の沙門も見出されず、其處には第三(果)の沙門も見出されず、其處にて第四(果)の沙門も見出されず。而して、須跋よ、如何なる法・律に於ても、八聖道の見出さるゝ所には、其處には(第一果の)沙門も見出さ

こゝに世尊は尊者に曰ひぬ。「然れば、阿難よ、須跋を出家せしめよ」。

「畏りぬ、世尊」と、尊者阿難は世尊に同意しぬ。

三〇　こゝに遊行僧須跋は、尊者阿難に斯く言ひぬ。

「友阿難よ、卿の得たる利益は大なり。友阿難よ、卿の得たる利益はいと大なり。教主の面前に近く住し、灌頂にて灌水するとは」と。遊行僧須跋は世尊の所にて
153 出家するを得、具足戒を受けぬ。具足戒を受けて間もなく、こゝに尊者須跋は獨り離れ居て、放逸ならず、熱心に精懃して住し、未だ久しからずして、之〔を獲む〕が爲に善男子の正しく家より出でて家なき生活に入る、かの無上梵行の完成を、現世に於て自ら知り證し達して住し、「生は盡き、梵行は確立し、所作は已に辨じ、更にかゝる狀態に來ること無し」と知りぬ。

かくて尊者須跋は
今一人の阿羅漢とはなりぬ。
彼は世尊の
最後の直弟なりき。

二八　是の如く言はれたる時、遊行僧須跋は世尊に言ひぬ。

「世尊、いとも優れたるかな。世尊、いとも優れたるかな。譬へば、世尊、倒れたるを起し、覆はれたるものを顯はし、迷へる者に道を示し、具眼者は物を見得むとて、暗き所に油燈を持ち來るが如く、是の如く、世尊は種々の次第を以て法を説き給へり。世尊、この我は、世尊に、法に、また比丘僧團に歸依す。願はくは我、世尊の所(みもと)にて出家を得しめ、具足戒を得しめ給はむことを」。

「須跋よ、嘗て他の外道たりし者、この[我が]法・律に於て出家を請ひ、具足戒を請ふ者は、四箇月間別住すべきなり。四月の後比丘等の同意あらば、比丘の修行の爲出家せしめ、具足戒を受けしむ。されど此の際個性の差別の顧慮せらるべきは、我之を認む」。

二九　「世尊、若し以前に他の外道たりし者、此の法律に於て出家を請ひ、具足戒を請へる時、四箇月間別住し、四月の後、比丘等の同意あらば、比丘の修行の爲出家せしめ、具足戒を受けしむとならば、我は四年間別住すべし。四年の後、比丘等の同意あらば、比丘の修行の爲出家し、具足戒を受けしむべし」。

「阿難よ、闡怒（チャンナ）比丘は欲することをば言ふを得む。されど彼は比丘等によりて話し掛けらるべからず、訓誡せらるべからず、教誡せらるべからず」。

五　こゝに世尊は比丘等に曰ひぬ。

「また比丘等よ、或は比丘にして、佛又は法、又は僧伽、又は道、又は方法に就き疑又は惑あるものあらむ。比丘等よ、問へ。後に『我等は師に面接してありき。我等
155 は世尊に面接しありて、問ふを得ざりき』との悔あらしむる勿れ」と。

斯く言はれて、比丘等は默然としてありき。再度世尊は…乃至…三度世尊は比丘等に曰ひぬ。

「また比丘等よ、或は比丘にして、佛又は法、又は僧伽、又は道、又は方法に就き、疑又は惑あるものあらむ。比丘等よ、問へ。後に、『我等は師に面接してありき。我等は世尊に面接しありて、問ふを得ざりき』との悔あらしむる勿れ」と。

三度比丘等は默然としてありき。

こゝに世尊は比丘等に曰ひぬ。

「比丘等よ、げに如來を尊崇するが故に汝等は問はざるなるべし。比丘等よ、友

第六誦品

154 一　こゝに世尊は尊者阿難に曰ひぬ。

「阿難よ、或は汝等に斯かる念あるべし。『敎主の言は終れり。我等の敎主はなし』と。阿難よ、そを斯く見るべからず。阿難よ、我に依りて說かれ、敎へられたる法と律とは、我が亡き後に汝等の師たり。

二　また、阿難よ、比丘等が今『友よ』の語を以て互に呼び交す如く、我が亡き後には然く呼び交す勿れ。阿難よ、若き比丘は、年老いたる比丘によりて、名或は姓にて、或は『友よ』の語にて呼ばるべし。年老いたる比丘は、若き比丘によりて、『尊者よ』或は『具壽者よ』と呼ばるべきなり。

三　阿難よ、欲するならば、我が亡き後、僧團は小小學處〔戒〕を廢せよ。

四　阿難よ、我が亡き後、闡怒（チャンナ）比丘には梵檀罰を加ふべし」。

「世尊、梵檀罰とは何ぞや」。

第二禪より起ちて第三禪に入り給ひぬ。第三禪より起ちて、第四禪に入り給ひぬ。第四禪より起ちて、空處定に入り給ひぬ。空處定より起ちて、識處定に入り給ひぬ。識處定より起ちて、無所有定に入り給ひぬ。無所有定より起ちて、非想非々想定に入り給ひぬ。非想非々想定より起ちて、滅想定に入り給ひぬ。

こゝに尊者阿難は尊者阿那律に斯く言ひぬ。

「尊者阿那律よ、世尊は般涅槃し給へり」。

「友阿難よ、世尊は般涅槃し給はず。滅想定に入り給へるなり」。

九 こゝに世尊は滅想定より起ちて、非想非々想定に入り給ひぬ。非想非々想定より起ちて、無所有定に入り給ひぬ。無所有定より起ちて、識處定に入り給ひぬ。識處定より起ちて、空處定に入り給ひぬ。空處定より起ちて、第四禪に入り給ひぬ。第四禪より起ちて、第三禪に入り給ひぬ。第三禪より起ちて、第二禪に入り給ひぬ。第二禪より起ちて、初禪に入り給ひぬ。初禪より起ちて、第二禪に入り給ひぬ。第二禪より起ちて、第三禪に入り給ひぬ。第三禪より起ちて、第四禪に入り給ひぬ。第四禪より起ちて、世尊は直に般涅槃に入り給ひぬ。

人が友人に尋ぬる心持にて尋ねよ」と。

斯く言はれても、比丘等は默然としてありき。

六　こゝに尊者阿難は世尊に斯く白し上げぬ。

「世尊、不可思議なり。世尊、稀有なり。世尊、我はこの比丘僧伽に斯かる信念を持つ。佛、或は法、或は僧伽、或は道、或は方法に就き、一比丘にも疑又は惑あることなし」と。

「阿難よ、汝は信念より言ふ。されど、阿難よ、如來には斯かる智あり。「この比丘僧伽には、佛、或は法、或は僧伽、或は道、或は方法に就き、一比丘にも疑又は惑あることなし。實に無し。阿難よ、五百比丘衆の最後の比丘も、預流に達し、不退轉法に達し、決定にして正覺に到達す」と」。

七　こゝに世尊は比丘等に曰ひぬ。

156 「やよ、比丘等よ、汝等に告げむ。「諸行は壞法なり。不放逸によりて精進せよ」と」。

これ如來の最後の言なり。

八　こゝに世尊は初禪に入り給ひぬ。初禪より起ちて、第二禪に入り給ひぬ。

心安立せる救済者には
入息出息なし。
欲なき者は寂静に達し、
牟尼は滅し給ひぬ。
不動の心もて
よく苦に耐へ給ひ、
燈火の滅するが如く
心の解脱はありき。

世尊の般涅槃し給へる時、般涅槃と共に尊者阿難は此の偈を説きぬ。
其の時恐怖ありき、
其の時身毛竪立しぬ。
一切の慈悲を具せる等正覚者の
般涅槃に入り給へる時。

こゝに世尊の般涅槃し給へる時、欲より離れざる比丘等の或る者は、腕を伸ば

一〇　世尊の般涅槃に入り給ひし時、般涅槃と共に大地震あり。〔人々は〕恐怖して身毛竪立し、又天鼓は鳴りぬ。

157 世尊の般涅槃に入り給へる時、般涅槃と共に、娑婆世界主梵天は、此の偈を説きぬ。

一切の生有るものは
世に聚身を横ふべし。
世に比倫なきかゝる教主
力大なる正覺者如來は般涅槃し給へり。

世尊の般涅槃に入り給へる時、般涅槃と共に、釋提桓因は此の偈を説きぬ。

あゝ諸行は無常なり、
生滅の法より成る、
生じては滅す、
其等の寂靜は安樂なり。

世尊の般涅槃に入り給へる時、般涅槃と共に尊者阿那律は此の偈を説きぬ。

眼は隠れ給へり」とて。

友阿難よ、諸天は地に在りて地の事を念じ、頭髪を亂して泣き、腕を伸ばして泣き、砕かれたる岩の如く打ち倒れ、婉轉し展轉す。『餘りにも早く世尊は般涅槃し給へり。餘りにも早く善逝は般涅槃に入り給へり。餘りにも早く世間の眼は隠れ給へり』とて。

また慾を離れたる諸天は、正念正智にしてよく耐ゆ。『諸行は無常なり。如何ぞ「滅せざること」あり得む』とて」。

一二　こゝに尊者阿那律と尊者阿難とは夜間を法話にて過しぬ。こゝに尊者阿那律は尊者阿難に告げぬ。

「行け、友阿難よ、拘夷那竭に入りて拘夷那竭の末羅族に告げよ。『ワーセッタ等よ、世尊は般涅槃に入り給へり、時宜しと思はば「詣づべし」』と」。

「畏りぬ、尊者」と、尊者阿難は阿那律に同意して、早朝下衣を整へ、衣鉢を取り、一従
159 者を伴ひて拘夷那竭に入りぬ。さて其の時、拘夷那竭の末羅族は、用件ありて講堂に集りて居たり。こゝに尊者阿難は拘夷那竭の末羅族の講堂に赴きぬ。赴

して泣き、碎かれたる岩の如くに打ち倒れ、婉轉し、展轉せり。「餘りに早く世尊は
158 般涅槃し給へり。餘りにも早く善逝は般涅槃し給へり。餘りにも早く、世間の
眼は姿を隱し給ひぬ」とて。

又かの欲を離れたる比丘等は、正念正智にして、よく耐へぬ。「諸行は無常なり、如何で「滅せざる」ことあり得むや」と。

一一　こゝに尊者阿那律は比丘等に告げぬ。

「止めよ、友よ、悲しむ勿れ、慟哭する勿れ。友よ、世尊は嘗て斯く說き給はずや。凡ての愛しく好める者と雖も、「生」別し「死」別し「死」後は境界を異にすと。友よ、如何ぞこのことはあり得べき。かの生じたる、存在せる、造られたる壞の法にして、壞することなしといふが如き、斯かる處あることなし。友よ、諸天は呟やく」。

「尊者よ、如何なる種類の諸天に就き、尊者阿那律は考慮せらるゝや」。

「友阿難よ、諸天は虛空に在りて地の事を念じ、頭髮を亂して泣き、腕を伸ばして泣き、碎かれたる岩の如くに打ち倒れ、婉轉し、展轉す。『餘りにも早く世尊は般涅槃し給へり。餘りにも早く善逝は般涅槃に入り給へり。餘りにも早く世間の

あらず。明朝我等は世尊の軀を荼毘しまつらむ」。

こゝに拘夷那竭の末羅族は、舞踊・歌謠・奏樂・華鬘・香を以て、世尊の軀を尊び敬ひ崇め供養し、天幕を張り、曼陀羅華鬘を捧げて、第二日も過ぎ、第三日も過ぎ、第四日も過ぎ、第五日も過ぎ、第六日も過ぎぬ。

160

一四　こゝに第七日に、拘夷那竭の末羅族は斯く思ひぬ。「我等は舞踊・歌謠・奏樂・華鬘・香を以て世尊の軀を尊び敬ひ崇め供養して、南より城市の南に運び、外方より城市の外に[運び]城市の南に於て世尊の軀を荼毘しまつらむ」と。

斯くて其の時、八人の末羅族の首長は頭を洗ひ新衣を著け「我等は世尊の軀を運び行かむ」とすれども、運び行く能はざりき。

こゝに拘夷那竭の末羅族は、尊者阿那律に斯く言ひぬ。「何の因、何の縁にて、此等八人の末羅族の首長が頭を洗ひ新衣を著け、『我等は世尊の軀を運び行かむ』とすれども、運び行く能はざるや」。

「ヴーセッタ等よ、汝等には或る意向あり、諸天には異なれる意向あり」。

一五　「尊者よ、諸天の意向は何ぞや」。

きて、拘夷那竭の末羅族に告げぬ。

「ヴーセッタ等よ、世尊は般涅槃に入り給へり。時宜しと思はば詣づべし」と。

尊者阿難の此の言を聞きて、末羅族、末羅族の子等、末羅族の娘等、末羅族の妻等は嘆き悲しみ、心の苦しみに惱みて、或る者は頭髪を亂して泣き、腕を伸ばして泣き、砕かれたる岩の如くに打ち倒れ、婉轉し展轉せり。「餘りにも早く世尊は般涅槃し給へり。餘りにも早く善逝は般涅槃に入り給へり　餘りにも早く世間の眼は隱れ給へり」とて。

一三　こゝに拘夷那竭の末羅族は人々に命じぬ。「然らば拘夷那竭中の香と鬘と凡ての樂器を集めよ」と。

こゝに拘夷那竭の末羅族は、香と鬘と凡ての樂器と五百重の布とを取りて、世尊の軀の在す末羅族の恕跋單沙羅林に近づきぬ。近づきて、舞踊歌謠奏樂・鬘・香を以て世尊の軀を尊び敬ひ崇め供養し天幕を張り、曼陀羅華鬘を捧げぬ。斯くして其の日を過しぬ。

こゝに拘夷那竭羅の末羅族は斯く思ひぬ。「今日は世尊の軀を荼毘する時に

一七　こゝに拘夷那竭の末羅族は尊者阿難に斯く言ひぬ。「尊者阿難よ、我等は如來の軀を如何に處理すべきや」。

「ヷーセッタ等よ、轉輪王の軀を處理するが如く、是の如く、如來の軀を處理しまつるべし」。

「然らば、尊者阿難よ、轉輪王の軀は如何に處理すべきや」。

「ヷーセッタ等よ、人々は轉輪王の軀を新しき布を以て包む。新しき布を以て包みて、眞新しき麻布を以て包む。眞新しき麻布を以て包みて、新しき衣を以て包む。斯かる方法にて、五百重に轉輪王の軀を包みて、鐵の油槨に納れ、他の鐵槨を以て蔽ひ、一切の香にて積を作りて、轉輪王の軀を荼毘し、而して大なる四衢道に於て轉輪王の塔を造るなり。ヷーセッタ等よ、斯く人々は轉輪王の軀を處理す。

ヷーセッタ等よ、轉輪王の軀を荼毘するがごとく、是のごとく、如來の軀を荼毘すべく、大なる四衢道に於て如來の塔を造立すべきなり。其處にて、華鬘、或は香或は顏料を置き、或は禮拜をなし、或は心を淨めむ者には、長き間、利益と安樂ある

「ヷーセッタ等よ、汝等の意向は、『我等は舞踊歌謠・奏樂・華鬘・香を以て世尊の軀を尊び敬ひ崇め供養し、南より城市の南に運び、外方より城市の外に運び、城市の南に於て荼毘しまつらむ』となり。〔されど〕ヷーセッタ等よ、諸天の意向は『我等は天の舞踊・歌謠・奏樂・華鬘・香を以て世尊の軀を尊び敬ひ崇め供養して、北方より城市の北に運び、北門より城市に入り、中央より城市の中央に運び、東門より城市の東方マクタバンダナ（天冠寺）と名くる末羅族の廟に進みて、其處にて世尊の軀を荼毘しまつらむ』となり」。

「尊者よ、諸天の意向の如くあらむことを」。

一六　またその時拘夷那竭は、塵箱の塵芥の堆積の上に至るまでも、膝邊まで曼陀羅華を以て撒かれてありき。

こゝに諸天と拘夷那竭の末羅族とは、人・天の舞踊・歌謠・奏樂・華鬘・香を以て、世尊
161 の軀を尊び敬ひ崇め供養して、北方より城市の北に入り、北門より城市に入り、中央より城市の中央に運び、東門より城市の東方天冠寺と名くる廟に進み、其處に世尊の軀を安置しまつりぬ。

我は此の曼陀羅華を持てるなり」と。

その時、かの欲を離れざる比丘等の或る者は、腕を伸して泣き、砕かれたる岩の如く打ち倒れ、婉轉し、展轉せり。「餘りにも早く世尊は般涅槃に入り給へり。餘りにも早く善逝は般涅槃に入り給へり。餘りにも早く世間の眼は隱れ給へり」と。又かの欲を離れたる比丘等は、正念正智にして、よく耐えぬ。「諸行は無常なり。如何で〔滅せざること〕あり得む」とて。

二〇 其の時、年老いて出家したる須跋(スベッダ)と名くる〔比丘〕かの大衆の中に坐してありき。こゝに年老いて出家したる須跋はかの比丘等に斯く言ひぬ。

「止めよ、友よ、悲しむ勿れ、慟哭する勿れ。我等はかの大沙門より全く脱れたり。『こは汝等に許す。こは汝等に許さず』とて、苦しめられ、また壓迫せられしが、今や我等は欲することを爲し、欲せざることを爲さざるべし」と。

こゝに尊者大迦葉は比丘等に言ひぬ。

163 「止めよ、友よ、悲しむ勿れ、慟哭する勿れ。友よげに世尊は嘗て斯く說き給はずや。『凡ての愛しく好める者と雖も〔生〕別し、〔死〕別し、〔死後境界を〕異にす。友よ、如何

べし」。

一八　こゝに拘夷那竭の末羅族は人々に命じぬ。「されば末羅族の眞新しき麻布を集めよといへ」と。

こゝに拘夷那竭の末羅族は、世尊の軀を新しき布を以て包めり。新しき布を以て包みて、眞新しき麻布を以て包めり。眞新しき麻布を以て包みて、新しき衣を以て包めり。斯かる方法にて、五百重に世尊の軀を包みて、鐵の油槨に納れ、他の鐵槨を以て蔽ひ、一切の香を以て積を作りて、世尊の軀を積の上に安置しぬ。

162

一九　其の時、尊者大迦葉は波婆(パーヴァー)より拘夷那竭に至る大道を、大比丘衆五百人と倶に進みてありき。こゝに尊者大迦葉は、道より退きて一樹下に坐しぬ。

その時、或る邪命外道は、拘夷那竭より曼陀羅華を持ちて、波婆に至る大道を進みてありき。

尊者大迦葉は、彼方より邪命外道の來るを見ぬ。かの邪命外道を見て斯く言ひぬ。「友よ、我等の教主を知るや」と。

「然り、友よ、我は知る。今日より七日以前沙門瞿曇は般涅槃に入りぬ。されば

頂禮しぬ。

又かの五百人の比丘も、一肩の衣を整へ、合掌して三度香積を右繞し、世尊の足に頂禮しぬ。

164 斯くて尊者大迦葉と五百人の比丘とが頂禮し終れる時、世尊の香積は自ら燃えぬ。

二三 世尊の軀の荼毘せらるゝや、皮肉筋髓の煤も灰も認められずして、唯舍利のみ殘りぬ。

譬へば、げに酥又は油の燃えたる時、煤も灰も認められざるが如く、是の如く、世尊の軀の荼毘せられたる時、皮肉筋髓の煤も灰も認められずして、唯舍利のみ殘れり。而して此等五百重の衣の中、その最內部と最外部との二重は燒けたり。

而して世尊の軀の燒けたる時、虛空より水流降りて、世尊の香積を消し、水倉より水流迸りて、世尊の香積を消しぬ。拘夷那竭の末羅族は、一切の香水を以て世尊の香積を消しぬ。

ぞ、このことはあり得べき。かの生じたる存在する造られたる壞の法は、壞することなしといふが如き、斯かる處あることなし」と。

二一　而して其の時、四人の末羅族の首長は、頭を洗ひ、新衣を著け「我等は世尊の香積に火を點ぜむ」とすれども、火を點ずる能はざりき。

こゝに拘夷那竭の末羅族は、尊者阿那律に斯く言ひぬ。

「尊者阿那律よ、如何なる因、如何なる縁にて、四人の末羅族の首長が、頭を洗ひ、新衣を著け「我等は世尊の香積に火を點ぜむ」とすれども、火を點ずる能はざるや」。

「ヷーセッタ等よ、諸天の意向と異なればなり」。

「然らば、尊者よ、諸天の意向は如何なるや」。

「ヷーセッタ等よ、諸天の意向は、「かの尊者大迦葉は大比丘衆五百人と倶に、波婆より拘夷那竭に至る大道を進みつゝあり。尊者大迦葉が世尊の足を頂禮せざる間は、世尊の香積に火は點ぜざらしめむ」となり」。

「尊者よ、諸天の意向の如くならむことを」。

二二　こゝに尊者大迦葉は、拘夷那竭の天冠寺なる末羅族の廟に赴きぬ。赴き

我等も世尊の舍利塔を造り、供養を爲すべし」と言へり。

遮羅頗(アッラカッパ)の跋離(ブリ)族は「世尊は拘夷那竭に於て般涅槃し給ひぬ」と聞きぬ。

こゝに遮羅頗の跋離族は拘夷那竭の末羅族に使者を遣して「世尊も刹帝利族なり、我等も刹帝利族なり。我等は世尊の舍利の一分を受くるに價す。我等も世尊の舍利塔を造り供養を爲すべし」と言へり。

羅摩伽(ラーマガーマ)の拘利(コーリヤ)族は「世尊は拘夷那竭に於て般涅槃し給ひぬ」と聞きぬ。

こゝに羅摩伽の拘利族は、拘夷那竭の末羅族に使者を遣して「世尊も刹帝利族なり、我等も刹帝利族なり。我等も世尊の舍利の一分を受くるに價す。我等も世尊の舍利塔を造り、供養を爲すべし」と言へり。

毘留提(エータディーパ)の婆羅門は「世尊は拘夷那竭に於て般涅槃し給ひぬ」と聞きぬ。

こゝに毘留提の婆羅門は、拘夷那竭の末羅族に使者を遣して、「世尊は刹帝利族なり、我は婆羅門なり。我は世尊の舍利の一分を受くるに價す。我も世尊の舍利塔を造り、供養を爲すべし」と言へり。

波婆(パーヴァー)の末羅族は、「世尊は拘夷那竭に於て般涅槃し給ひぬ」と聞きぬ。

こゝに拘夷那竭の末羅族は、七日間講堂に於て、槍の垣を造り弓の柵を廻(めぐら)し、舞踊・歌謡・奏樂華鬘・香を以て世尊の軀を尊び敬ひ崇め供養しぬ。

二四　韋提希の子なる摩揭陀王阿闍世は「世尊は拘夷那竭にて般涅槃し給へり」と聞きぬ。

こゝに韋提希の子なる摩揭陀王阿闍世は、拘夷那竭の末羅族に使者を遣して、「世尊も刹帝利族なり、我も刹帝利族なり。我は世尊の舎利の一分を受くるに價す。我も世尊の舎利塔を造り供養を爲すべし」と言へり。

毘舎離の離車(リッチャヰ)族は、「世尊は拘夷那竭に於て般涅槃にし給へり」と聞きぬ。

こゝに毘舎離の離車族は、拘夷那竭の末羅族に使者を遣して、「世尊も刹帝利族なり、我等も刹帝利族なり。我等は世尊の舎利の一分を受くるに價す。我等
165 も世尊の舎利塔を造り、供養を爲すべし」と言へり。

迦毘羅城の釋迦族は、「世尊は拘夷那竭に於て般涅槃し給ひぬ」と聞きぬ。

こゝに迦毘羅城の釋迦族は、拘夷那竭の末羅族に使者を遣して、「世尊は我等の種族の最も優れ給へる者なり。我等は世尊の舎利の一分を受くるに價す。

大衆は具眼者の信者たれ、と。

「然らば、婆羅門よ、汝は世尊の舍利を八分して、平等によく分配し分てよ」。

「畏りぬ、卿等よ」とて、香姓婆羅門はかの集れる人々に同意して、世尊の舍利を八分し、平等によく分配して、かの集れる人々に斯く言ひぬ。

「卿等よ、この瓶をば我に與へよ。我も瓶塔を造り、供養を爲さむ」と。

香姓婆羅門に瓶は與へられぬ。

二六　畢鉢（ピッパリヴァナ）のモーリヤ（孔雀）族は、世尊は拘夷那竭に般涅槃し給ひぬ」と聞きぬ。

こゝに畢鉢の孔雀族は、拘夷那竭の末羅族に使者を遣して「世尊も刹帝利族なり。我等も刹帝利族なり。我等も世尊の舍利の一分を受くるに價す。我等も世尊の舍利の塔を造り供養を爲さむ」と言へり。

「世尊の舍利の一分も無し。世尊の舍利は分配せられたり。されば灰を持ち行かれよ」。

この故に彼等は灰を持ち行きぬ。

二七　こゝに韋提希の子なる摩揭陀王阿闍世は、王舍城に世尊の舍利塔を造り

こゝに波婆の末羅族は拘夷那竭の末羅族に使者を遣して「世尊も刹帝利族なり。我等も刹帝利族なり。我等も世尊の舍利の一分を受くるに價す。我等も世尊の舍利塔を造り、供養を爲すべし」と言へり。

二五　かく言はれたる時、拘夷那竭の末羅族は、かの集れる人々に斯く言ひぬ。
166 「世尊は我等の村の野にて般涅槃し給ひしなり。我等は世尊の舍利の一分をも與へざるべし」と。

かく言はれたる時、香姓婆羅門はかの集れる人々に言ひぬ。

卿等よ、聞け、我が一語を、
我等の佛陀は忍辱の説者なりき。
無上人の舍利の分配に、
爭あるは善からず。
卿等よ、我等は凡て落著き和合し
互に調和して、八の分配を爲さむ。
廣く四方に塔あらしめよ。

最勝者の他の一斛は
羅摩村（ラーマガーマ）にて龍王に供養せらる。
一牙（ゲ）は忉利天にて供養せられ、
また一牙は健陀羅（ガンダーラ）城にて供養せらる。
迦陵迦（カーリンガ）王はまた一牙を得、
また一牙を龍王は供養しぬ。
その光にて此の大なる國土は
優れたる供養物もて莊嚴せられぬ。
かくて此の具眼者の舍利は
よく恭敬せられ、いとよく恭敬せられぬ。
天主・龍主・人主に供養せられ
人間の長者によりてこゝに供養せられぬ。
合掌して彼を禮拜せよ。
げに佛は百劫にも得難し。

供養を爲しぬ。
167 毘舍離の離車族は、毘舍離に世尊の舍利塔を造り、供養を爲しぬ。
迦毘羅城の釋迦族は、迦毘羅城に世尊の舍利塔を造り供養を爲しぬ。
遮羅頗の跋離族は、遮羅頗に世尊の舍利塔を造り、供養を爲しぬ。
羅摩伽の拘利族は、羅摩伽に世尊の舍利塔を造り、供養を爲しぬ。
毘留提の婆羅門は、毘留提に世尊の舍利塔を造り、供養を爲しぬ。
波婆の末羅族は、波婆に世尊の舍利塔を造り、供養を爲しぬ。
拘夷那竭の末羅族は、拘夷那竭に世尊の舍利塔を造り、供養を爲しぬ。
香姓婆羅門は、瓶塔を造り、供養を爲しぬ。
畢鉢の孔雀族は、畢鉢に灰塔を造り、供養を爲しぬ。
斯くて、こゝに八の舍利塔と、第九に瓶塔と、第十に灰塔とあり。
是の如く、こは嘗てありしなり。
二八　具眼者の舍利は八斛あり。
七斛は閻浮洲にて供養せらる。

註
❶自由人(bhujissa)は、佛音の註によれば、戒律は愛欲の奴隷たることより人を救つて自由人たるものとなす故、自由人と名くと云ふ。
❷法鏡(dhammādāsa)は正法によりて作られたる鏡の意なり。
❸「不退轉法」はavinipāta-dhammaを譯せり。vinipātaは「惡趣に墮すること」の意なる故、avinipātaは不墮惡趣の義なり。
❹「國土」は佛音の註によれば「城市のぐるり」と云へり。
❺「握拳」はmutthiを譯せり。婆羅門の阿闍梨が教の奥義を拳の如く握りて弟子に明さゞるを云ふなり。
❻「洲」の原語dīpaには、洲と燈明との二義あり。佛音は「太洋の中の洲」の義と註せり。今は佛音に從ひて「洲」と譯せり。
❼原語sūkara maddavaは、佛音の註によれば、若くもなく年老いてもゐない優れた野羊に出來た肉とする說もあり、柔かい飯に牛乳を注ぎ、五味ある食とする說等もあるといふ。又「乾したる野猪の肉」と譯す人もある。然しDr. Hoeyによれば、この地方の農夫は、今尙叢林中に生ずる一種の茸の球根狀の根を好んで食し、それをsūkara-kaṇḍaと稱すといひ、又漢譯には栴檀樹耳とありて、茸とする說を有力なりと見て、今「茸」と譯したり。

一七　大善見王經（マハースダッサナ・スッタンタ）

第一誦品

169 一　是の如く我聞く。一時世尊、拘尸那揭羅（クシナーラー）城和跋單（ウパヴァタナ）❶なる末羅（マッラ）族の娑羅林に在（いま）しぬ。娑羅雙樹の間に於て般涅槃の時。

二　爾（そ）の時、尊者阿難は世尊の在す所に近づき、世尊に敬禮して一方に坐しぬ。一方に坐して尊者阿難は世尊に白し上げぬ。

「世尊、世尊はこの隘小なる市、この荒廢せる市、この邊鄙なる市に於て入滅し給ふ勿れ。世尊、他に多くの大城あり例へば、瞻波（チャンパー）城、王舍城、舍衛城、沙計多（サーケータ）城、憍賞彌（コーサンビ）城、波羅奈（バーラーナシー）城の如し。其處にて世尊は入滅し給へかし。其處には多くの王族大家あり、婆羅門大家あり、居士大家ありて、何れも如來を尊信す。彼等は如來の舍利を尊重恭敬せむ」。

三　「阿難よ、こは隘小なる市、荒廢せる市、邊鄙なる市なりと言ふ勿れ。昔、阿難よ、

は一切寶造なりき。

六　阿難よ、王城拘舍婆提は七種の多羅の並樹もて圍まれ、一は金造、一は銀造、一は毘瑠璃造、一は水精造、一は珊瑚造、一は車渠造、一は一切寶造なりき。金造の多羅樹には金造の幹、銀造の葉菓あり、銀造の多羅樹には銀造の幹、金造の葉菓あり、毘瑠璃造の多羅樹には毘瑠璃造の幹、水精造の葉菓あり、水精造の多羅樹には水精造の幹、毘瑠璃造の葉菓あり、珊瑚造の多羅樹には珊瑚造の幹、車渠造の葉菓あり、車渠造の多羅樹には車渠造の幹、珊瑚造の葉菓あり、一切寶造の多羅樹には一切寶造の幹、一切寶造の葉菓ありき。阿難よ、此等多羅の並樹の風に搖られたる時、其の音美妙にして興奮せしめ、好ましくして恍惚たらしむ。恰も阿難よ、五支の樂器の善く練(な)らされ、善く整調されたるが、名手によりて善く奏(かなで)られたる時、其の音美妙にして興奮せしめ、好ましくして恍惚たらしむるが如く、その如く阿難
172 よ、此等多羅の並樹の風に搖られたる時、其の音美妙にして興奮せしめ、好ましくして恍惚たらしむ。阿難よ、其の時其の王城拘舍婆提に在りし陶醉を樂欲する無賴の徒は、此等多羅の並樹の風に搖られたる音に隨ひて躍り狂ひぬ。

大善見王と名くるありき。王族にして灌頂王たり、四邊の主にして常勝者たり、

170 國の確保者たりき。阿難よ、此の拘戸那掲羅城は此の大善見王の居城にして拘(ク)舍婆提(サーヴァティ)城と名けられたり。阿難よ、この拘舍婆提城は東西長さ十二由旬、南北廣さ七由旬ありき。阿難よ、この王城拘舍婆提は繁華殷盛にして住民多く、人口稠密にして、物資豐なりき。恰も阿難よ、諸神の王城アーラカマンダーと名くるが、繁華殷盛にして住者多く、夜叉稠密にして、物資豐なるが如く、その如く、阿難よ、王城拘舍婆提は繁華殷盛にして住民多く、人口稠密にして、物資豐なりき。阿難よ、拘舍婆提王城は晝夜に十種の聲を以て賑はしかりき。象聲・馬聲・車聲・太鼓聲・杖鼓聲・琵琶聲・歌聲・鐃聲・銅鑼聲及び第十に「食へよ、飲めよ、[2]歡び騒げよ」との聲なりき。

四 阿難よ、王城拘舍婆提は七種の城壁を以て圍繞せられたり。即ち一は金造、一は銀造、一は毘瑠璃造、一は水精造、一は珊瑚造、一は車渠造、一は一切寶造なりき。

五 阿難よ、王城拘舍婆提には四種の門あり。即ち一は金造、一は銀造、一は毘瑠

171 璃造、一は水精造なりき。一々の門に七柱建てられ、各々高さ人身の三倍或は四倍ありて、一は金造、一は銀造、一は毘瑠璃造、一は水精造、一は珊瑚造、一は車渠造、一

ず。習[3]制に從ひて食せよ』と。
かくて阿難よ、彼等東方に於ける敵王等は、王大善見の服從者となりぬ。

一〇　阿難よ、此の輪寶は東方大海に沈みて後、再び出現して南方に轉じぬ…乃至…南方大海に沈みて後、再び出現して西方に轉じぬ…乃至…西方大海に沈みて後、再び出現して北方に轉じぬ。それに隨ひて王大善見は四軍と共に進みぬ。阿難よ、輪寶の止まる處、其處に王大善見は四軍と共に止住したり。

阿難よ、北方に於ける敵王等は王大善見に近づきて言く、『來れ、大王よ。善く來りぬ、大王よ。一切は主のものなり、大王よ。唯命を垂れよ、大王よ』と。

王大善見の言く『生物を殺すべからず。與へられざるを取るべからず。邪婬
174 を行ふべからず。虚言を言ふべからず。人を酔はしむるものを飲むべからず。習制に從ひて食せよ』と。

阿難よ、北方に於ける敵王等は王大善見の服從者となりぬ。

一一　阿難よ、斯くて彼の輪寶は大海を周邊とせる大地を征服して拘舍婆提城に歸り來り、王大善見の內城の門前法廷の前に軸を止めて、王大善見の內城を輝

七　阿難よ、王大善見は七寶及び四如意德を賦與せられたり。七寶とは、阿難よ、月十五日布薩の當日、王大善見は沐浴齋戒し、高殿上に昇れるに、天の輪寶現はれぬ。千輻轂輪一切善具したり。王大善見そを見て言く、『予は實に聞けり、若し王族の灌頂王にして十五日布薩の當日、沐浴齋戒し、高殿上に昇るに、千輻轂輪一切善具せる天の輪寶現はれなば、彼王は轉輪王たるべしと。然らば予はまさに轉輪王たるならむか』と。

八　阿難よ、其の時王大善見、座より立ちて一肩を脫し、左手に水瓶を執り、右手を以て輪寶に〔水を〕注ぎて言く『輪寶よ、卿は轉ぜよ。輪寶よ、卿は征服せよ』。其の時阿難よ、其の輪寶は東方に向ひて轉じぬ。それに隨ひて王大善見は四軍と共に
173 進みぬ。阿難よ、其の輪寶の止まる處、其處に王大善見は四軍と共に止住したり。

九　阿難よ、其の時東方に在りし敵王等は王大善見に近づきて言く、『來れ、大王よ。善く來りぬ、大王よ。〔一切は〕王のものなり、大王よ。唯命を垂れよ、大王よ』と。王大善見の言く、『生物を殺すべからず。與へられざるを取るべからず。邪婬を行ふべからず。虛言を言ふべからず。人を醉はしむるものを飮むべから

長き間よく馴らされたるが如く、その如く調御し得られたり。阿難よ、嘗て王大善見は此の馬寶を試みむとして、早朝此に乘りて大海を周邊とせる大地を巡遊し、王城拘舍婆提に歸りて後、朝食をなせり。

阿難よ、王大善見に對して是の如き馬寶現はれぬ。

一四　復次に阿難よ、王大善見に對して珠寶現はれぬ。そは毘瑠璃珠にて、光輝き、性質正しく、八面備はり、よく磨かれ、透明淸澈にして一切妙德を具有したり。阿難よ、其の珠寶の光は普く一由旬に擴がれり。阿難よ、嘗て王大善見は此の珠寶を試みむとて、四軍を配列して高幢上に其の珠寶を置きたるに暗黑の夜中に於て軍を進むるを得たり。又阿難よ、普く其の周圍の村人等は其の光に照され晝なりと思ひて業務に從事するを得たりき。

阿難よ、王大善見に對して是の如き珠寶現はれぬ。

一五　復次に阿難よ、王大善見に對して女寶現はれぬ。形相殊妙にして可愛、淸麗、顏色最勝にして花の如し。長過ぎず短過ぎず、瘦せ過ぎず、肥え過ぎず、黑過ぎず白過ぎず、人間の容色を越えて天人の容色を備へたり。阿難よ、其の女寶の皮

かすが如くに住したり。

阿難よ、王大善見に對して以上の如き輪寶現はれぬ。

一二　また阿難よ、王大善見に對して象寶現はれぬ。全身純白、七[4]處具拄、神力ありて、空中に飛行し得、布薩陀(ウポーサタ)と名くる象王なりき。此を見て王大善見の心悦びて、「若し調御するを得ば、此の象は實に賢良なる乘用象ならむ」と謂(おも)へり。斯くて阿難よ、此の象寶は恰も賢良にして生れ正しき象の、長き間善く馴らされたるが如く、その如くよく調御し得られたり。阿難よ、嘗て王大善見はこの象寶を試みむとて、早朝に乘りて大海を周邊とせる大地を巡遊し、王城拘舍婆提に歸りて後、朝食をなせり。

阿難よ、王大善見に對して是の如き象寶現はれぬ

一三　復次に阿難よ、王大善見に對して馬寶現はれぬ。全身純[5]白、頭は烏の如く黑く、們叉(ムンヂャ)草の如き鬣にて神力あり、空中を飛行し得、雲馬と名くる馬王なりき。王大善見これを見て心悦び「もし調御するを得ば、此の馬は實に賢良なる乘用馬

175 とならむ」と謂(おも)へり。阿難よ、其の時、其の馬寶は恰も賢良にして生れ正しき馬の、

『居士よ、予は今此處に於て黄金を欲するなり』と。

阿難よ、其の時其の居士寶は兩手を以て水に觸れて、黄金の滿てる瓶を擧げ、王大善見に白さく『大王よ、これにて宜しきや』と。

王大善見乃ち言く、『居士よ、それにて宜し、それにて結構なり』と。

阿難よ、王大善見に對して是の如き居士寶現はれぬ。

177

一七 復次に阿難よ、王大善見に對して將軍寶現はれぬ。賢明雄略にして智謀あり、よく王大善見をして進ましむべき時に進ましめ、退かしむべき時に退かしめ、住(とど)まらしむべき時に住まらしむる能力ありき。

彼は王大善見に近づきて言く、『大王よ、主は慮を煩はし給ふ勿れ、臣よく指揮すべし』と。

阿難よ、王大善見に對して是の如き將軍寶現はれぬ。

阿難よ、王大善見は此等七寶を賦與せられたり。

一八 復次に阿難よ、王大善見は四如意徳(6)を賦與せられたり。四とは何ぞや。

阿難よ、王大善見は形相殊妙、可愛、淸灑、顏色最勝花の如く、常人より遙に優れたり。

膚の感觸は恰も綿の如く絹綿の如くなりき。阿難よ、此の女寶の身體四肢は冬は暖かく、夏は冷かなりき。阿難よ、此の女寶の身體より栴檀香を發し、口より青
176 蓮華香を發したり。阿難よ、此の女寶は常に王大善見より先に起き後に寢ね、從順貞淑にして、言行可愛なりき。阿難よ、此の女寶は王大善見を心を以ても冒すことなし。況んや身體を以てをや。

阿難よ、此の王大善見に對し是の如き女寶現はれぬ。

一六　復次に阿難よ、王大善見には居士寶現はれぬ。彼には業の報によりて生ぜる天眼現はれ、財寶の伏藏せられたるは、其の所有者の有無に係はらず、總て見出さる。彼は王大善見に近づきて言く、「大王よ、主（おんみ）は慮（みこころ）を煩はし給ふ勿れ、臣は主の財物を適宜に處理すべし」と。

阿難よ、嘗て王大善見は此の居士寶を試みむとて、舟に乘りて恒河の流の中央に入りて居士寶に言く、

「予は黃金を要す」

「然らば大王よ、舟を一方の岸に近づけ給へ」。

予が婆羅門居士を長き間見得むが爲に」と。阿難よ、王大善見は此の第四の如意
德を有したりき。

阿難よ、王大善見は此等の四如意德を賦與せられたり。

二二　斯くて阿難よ、王大善見謂へらく「予は今此等多羅樹間、百肘毎に蓮池を造
らしめむ」と。

阿難よ、王大善見はそれら多羅樹間、百肘毎に蓮池を造らしめぬ。

阿難よ、其等蓮池は四種の甎を以て積まれたり。一は金造、一は銀造、一は毘瑠
璃造、一は水精造なりき。阿難よ、それら蓮池に於て各々四つづゝ四種の階段あ
り、一は金造、一は銀造、一は毘瑠璃造、一は水精造なりき。金造の階段には金造の
179 柱と銀造の貫と笠木とあり。銀造の階段には銀造の柱と金造の貫と笠木とあ
り。毘瑠璃造の階段には毘瑠璃造の柱と水精造の貫と笠木とあり。水精造の
階段には水精造の柱と毘瑠璃造の貫と笠木とありき。

此等蓮池は二種の勾欄を以て圍まれたり。一は金造、一は銀造なりき。金造
の勾欄には金造の柱と銀造の貫と笠木とあり、銀造の勾欄には銀造の柱と金造

阿難よ、王大善見は此の第一如意徳を有したりき。
一九　復次に阿難よ、王大善見は長壽者なりき。常人より遙に長命なりき。阿難よ、王大善見は此の第二の如意徳を有したりき。
二〇　復次に阿難よ、王大善見は無病息災にして均齊なる消化力あり、[體熱]過冷ならず過溫ならず、[健康は]常人より遙に勝れたり。阿難よ、王大善見は此の第三の如意徳を有したりき。
178 二一　復次に阿難よ、王大善見は婆羅門及び居士に愛せられ、歡ばれたり。阿難よ、譬へば父が子によりて愛せられ歡ばるゝが如く、是の如く王大善見は婆羅門居士によりて愛せられ歡ばれたり。又阿難よ、婆羅門居士は王大善見によりて愛せられ歡ばれたり。恰も阿難よ、子が父によりて愛せられ歡ばるゝが如く、是の如く阿難よ、婆羅門居士は、王大善見によりて愛せられ歡ばれたり。嘗て阿難よ、王大善見は四軍と共に遊園地に出でぬ。其の時阿難よ、婆羅門居士等は王大善見に近づきて言く、『大王よ、急がずして行き給へ。我等が主を長き間拜し得む爲に』と。阿難よ、王大善見も亦その御者に言く、『御者よ、急がずして車を遣れ、

を、銀を欲するものには銀を與へぬ。

二四 復次に阿難よ、婆羅門居士等は多くの財を持ちて王大善見の所に近づきて白さく、『大王よ、此の多くの財は大王の爲に齎せるなり。大王幸に此を納受し給へ』。

『予の財は如法の税によりて作られ、既に充分なり。汝そを取れ。而して猶多くを持ち行け』と。

彼等は王によりて拒まれ、一方に退きて相議り、『我等は此等の財を再び我等の家に持ち歸らむは宜しからず。寧ろ我等は王大善見に宮殿を造獻せむ』と。

彼等は王大善見の所に行きて言く、『大王よ、主に宮殿を造獻せむ』と。

阿難よ、王大善見は、そを默して諾へり。

二五 時に阿難よ、諸天の主帝釋天は心を以て王大善見の心中を知り、毘首羯摩天子に命じて言く、『來れ毘首羯摩よ、王大善見の爲に宮殿を造れ、ダンマ(法)と名づくる高堂を』と。

の貫と笠木とありき。

二三　阿難よ、次に王大善見謂(おも)へらく、「予は今此等蓮池に、四季常に咲きて、一切人に珍らしき、青蓮・紅蓮・黄蓮・白蓮等の種々の華を植ゑ、以て自然の華鬘となさしめむ」と。斯くて阿難よ、王大善見はそれら蓮池に、四季常に咲きて一切人に珍らしき青蓮・紅蓮・黄蓮・白蓮等の種々華を植え、以て自然の華鬘となさしめぬ。

又、阿難よ、王大善見謂(おも)へらく「予、今此等蓮池の畔(ほとり)に助浴者を置き、人々通過の際に入浴に便せしめむ」と。斯くて阿難よ、王大善見はそれら蓮池の岸に助浴者を置き、人々通過の際に入浴に便ならしめたり。

又、阿難よ、王大善見謂へらく「予は今此等蓮池の畔に布施を設けて、食を需むるものには食を、飲を需むるものには飲を、衣を需むるものには衣を、乗物を需むるものには乗物を、休息を要するものには牀を、女を欲するものには女を、金を欲するものには金を、銀を欲するものには銀を與へむ」と。

180 阿難よ、王大善見乃ちそれら蓮池の畔に布施を設け、食を需むるものには食を、飲を需むるものには飲を、衣を需むるものには衣を、乗物を需むるものには乗物

璃造、一は水精造なりき。その金造の階段には金造の柱と銀造の貫と笠木とあり。銀造の階段には銀造の柱と金造の貫と笠木とあり。毘瑠璃造の階段には
182 毘瑠璃造の柱と水精造の貫と笠木とあり。水精造の階段には水精造の柱と毘瑠璃造の貫と笠木とありき。

阿難よ、法高堂には八萬四千の樓閣あり、四種にして一は金造、一は銀造、一は毘瑠璃造、一は水精造なりき。金造の樓閣には銀造の牀座備へられ、銀造の樓閣には金造の牀座備へられ、毘瑠璃造の樓閣には象牙造の牀座備へられ、水精造の樓閣には堅木造の牀座備へられたり。金造樓閣の門には銀の多羅樹立てられたり、それには銀の幹、金の葉菓あり。銀造樓閣の門には金の多羅樹立てられたり、それには金の幹、銀の葉菓あり。毘瑠璃造樓閣の門には水精の多羅樹立てられたり、それには水精の幹、毘瑠璃の葉菓あり。水精造樓閣の門には毘瑠璃の多羅樹立てられたり、それには毘瑠璃の幹、水精の葉菓ありき。

二七　阿難よ、時に王大善見謂へらく『今、予は大莊嚴樓の門に總て黄金の多羅樹林を造らしめむ。其處に於て日中予の安在せむ爲に』と。

阿難よ、毘首羯摩天子は諸天の主帝釋天に「唯然り」と答へ、恰も力強き人が屈し
181 たる腕を伸ばし伸ばしたる腕を屈するが如く速に、三十三天より消えて王大善見の前に現はれぬ。斯くて阿難よ、毘首羯摩天子は王大善見に言く、「大王よ、主の宮殿を造營せむ、法と名づくる高堂を」と。

阿難よ、王大善見は默して諾へり。斯くて毘首羯摩天子は王大善見の宮殿、法と名くる高堂を造りぬ。

二六　阿難よ、法高堂は東西長さ一由旬、南北廣さ半由旬ありき。

阿難よ、法高堂の基礎は四種の甎を以て高さ人身の三倍に堆(つみ)上げられたり。一は金造、一は銀造、一は毘瑠璃造、一は水精造なりき。

阿難よ、法高堂に八萬四千の柱あり、四種にして、一は金造、一は銀造、一は毘瑠璃造、一は水精造なりき。

阿難よ、法高堂は四種の板を以て敷かれ、一は金造、一は銀造、一は毘瑠璃造、一は水精造なりき。

阿難よ、法高堂には二十四の階段あり、四種にして一は金造、一は銀造、一は毘瑠

期最後の月の、秋の晴天雲無き日、天空に昇れる太陽の眩燿見るに堪へ難きが如
184 く、その如く法高堂は眩燿見るに堪へ難かりき。

三一　阿難よ、王大善見又謂へらく「予は今法高堂の前にダンマ(法)と名づくる蓮池を造らしめむ」と。斯くて王大善見は法高堂の前に法と名づくる蓮池を造らしめぬ。

阿難よ、法蓮池は東西長さ一由旬、南北廣さ半由旬ありき。阿難よ、法蓮池は四種の甎を以て積まれ、一は金造、一は銀造、一は毘瑠璃造、一は水精造なりき。

阿難よ、法蓮池には二十四の階段あり、四種にして、一は金造、一は銀造、一は毘瑠璃造、一は水精造なりき。金造の階段には金造の柱・銀造の貫と笠木とあり。銀造の階段には銀造の柱、金造の貫と笠木とあり。毘瑠璃造の階段には毘瑠璃造の柱、水精造の貫と笠木とあり。水精造の階段には水精造の柱、毘瑠璃造の貫と笠木とありき。

阿難よ、法蓮池は二の勾欄を以て繞らされ、一は金造、一は銀造なりき。金造の勾欄には金造の柱、銀造の貫と笠木とあり。銀造の勾欄には銀造の柱、金造の貫

かくて阿難よ、王大善見は大莊嚴樓の門に總て黄金の多羅樹林を造らしめ、其處に於て日中安在せり。

二八　阿難よ、法高堂は二の欄楯を以て繞らされ、一は金造、一は銀造なりき。金
183 造の欄楯には金造の柱と銀造の貫と笠木とあり。銀造の欄楯には銀造の柱と金造の貫と笠木とありき。

二九　阿難よ、法高堂は二の鈴網を以て繞らされ、一は金造、一は銀造なりき。金造の網には銀造の鈴あり、銀造の網には金造の鈴あり。それら鈴網の風に搖られたる時には、其の音美妙にして興奮せしめ、好ましくして恍惚たらしむ。恰も阿難よ、五支の樂器のよく練(な)らされ、よく整調されたるが、名手によりて善く奏(かなで)られたる時、其の音美妙にして興奮せしめ、好ましくして恍惚たらしむるが如く、その如く、實に阿難よ、此等鈴網の風に搖られたる時には、其の音美妙にして興奮せしめ、好ましくして恍惚たらしめたり。阿難よ、其の時王城拘舍婆提に在りし陶醉を樂欲する無賴の徒は、此の鈴網の風に搖られたる音に隨ひて躍り狂ひぬ。

三〇　阿難よ、此の法高堂竣成するや、眩耀見るに堪へ難かりき。恰も阿難よ、雨

に搖られたる音に隨ひて躍り狂ひぬ。

三三　阿難よ、此の法高堂及び法蓮池の竣成しける時、王大善見は其の當時に於て、沙門中の沙門として尊敬せられたる者、婆羅門中の婆羅門として尊敬せられたる者を、一切樂具を以て滿足せしめて法高堂に昇れり。

第二誦品

一　阿難よ、時に王大善見謂へらく、「予の現在の是の如き大威力、是の如き大勢力は如何なる業の果に緣り、如何なる業の報に緣るや」と。阿難よ、斯くて王大善見謂へらく「こは予の三の業の果なり、三の業の報なり。卽ち布施、調御、自制なり。」これに緣りて予は現在是の如く大威力あり、是の如く大勢力あるなり」と。

186

二　阿難よ、斯くて王大善見はかの大莊嚴樓に行き大莊嚴樓の門に立ちて、次の感興語を發せり。

愛欲の心よ、止まれ、
瞋恚の心よ、止まれ、
害傷の心よ、止まれ。

と笠木とありき。

三二　阿難よ、法蓮池は七種の多羅の並樹を以て繞らされ、一は金造、一は毘瑠璃造、一は水精造、一は珊瑚造、一は車渠造、一は一切寶造なりき。金造の多
185 羅樹には金の幹と銀の葉菓とあり、銀造の多羅樹には銀の幹と金の葉菓とあり、毘瑠璃造の多羅樹には毘瑠璃の幹と水精の葉菓とあり、水精造の多羅樹には水精の幹と毘瑠璃の葉菓とあり、珊瑚造の多羅樹には珊瑚の幹と車渠の葉菓とあり、車渠造の多羅樹には車渠の幹と珊瑚の葉菓とあり。一切寶造の多羅樹には一切寶の幹と一切寶の葉菓とありき。

阿難よ、此等多羅の並樹の風に搖られたる時、その音美妙にして興奮せしめ、好ましくして恍惚たらしむ。恰も阿難よ、五支の樂器のよく練(な)らされ、よく整調されたるが、名手によりて善く奏(かなで)られたる時、其の音美妙にして興奮せしめ、好ましくして恍惚たらしむるが如く、その如く阿難よ、此等多羅の並樹の風に搖られたる時、其の音美妙にして興奮せしめ、好ましくして恍惚たらしめぬ。阿難よ、其の時此の王城拘舍婆提に在りし陶醉を樂欲する無頼の徒は、此等多羅の並樹の風

へる心を以て…乃至…喜を伴へる心を以て…乃至…捨を伴へる心を以て一方[187]に充滿し安住せり。是の如く第二、第三、第四方に充滿し安住せり。斯くして上方下方周遍一切方に、普き世界に、捨を伴へる心を以て、廣大無量無比にして無害なる心を以て、充滿し安住せり。

五　阿難よ、王大善見には八萬四千の都城ありて、拘舍婆提王城を首としたり。

八萬四千の高堂ありて、法高堂を首としたり。

八萬四千の樓閣ありて、大莊嚴樓を首としたり。

八萬四千の牀座ありて、金牀・銀牀・牙牀・堅木牀にして長き毛の著ける覆包あり、花を織り込める毛布の覆包あり、カダリ鹿の毛皮の覆包あり、天蓋あり、兩端に紅の枕ありき。

八萬四千の象ありて、皆黄金を以て飾られ、黄金の幡を立て、黄金の網を以て覆(おほ)はれたり、布薩陀象王を其の首としたり。

八萬四千の馬ありて、黄金を以て飾られ、黄金の幡を立て、黄金の網を以て覆はれ、雲馬王を其の首としたり。

愛欲の心よ、これ以上なるべからず、
瞋恚の心よ、これ以上なるべからず、
害傷の心よ、これ以上なるべからず、と。

三　阿難よ、時に王大善見は大莊嚴樓に入り、金造の牀座に坐して、諸欲を離れ、不善法を離れ、有尋有伺にして、離より生ずる喜と樂とのある初禪に達して住せり。尋、伺を滅して內心靜安となり、心專一となり、無尋、無伺にして定より生ずる喜と樂とのある第二禪に達して住せり。喜を離れて捨となりて住し、正念正智にして、身を以て樂を感受し、諸聖者が、『これ捨にして正念なる樂住なり』と說ける第三禪に達して住せり。樂を捨て苦を離れ、前に感じたる悅と憂とを共に滅して不苦不樂にして捨念淸淨となれる第四禪に達して住せり。

四　阿難よ、次に王大善見は大莊嚴樓より出でゝ金造樓に入り、銀造の牀座に坐して、慈を伴へる心を以て一方に充滿し安住せり。斯くして第二第三第四方に充滿し、安住せり。斯くして上方下方周遍一切方に、普き世界に、慈を伴へる心を以て、廣大無量無比にして無害なる心を以て充滿し、安住せり。……乃至……悲を伴

斯くて、阿難よ、王大善見は將軍寶に命じて言く、『予が愛する將軍よ、予の此等八萬四千の象は、今は朝夕に敬禮に來るを常とすれど、卿よ、爾今百年毎に一回、四萬[189]二千の象が敬禮に來ること丶せよ』と。

『唯然り、大王よ』と、かの將軍寶は王大善見に答へぬ。阿難よ、その以後、百年毎に一回、四萬二千の象が王大善見に敬禮に來ること丶なれり。

七　斯くて阿難よ、善賢妃は多百千年の後の或る時謂へらく『長き間私は王大善見を見ず、今行きて王大善見に見えむ』と。

斯くて阿難よ、善賢妃は女官共に言く『來れ、御許達よ、頭を洗ひ金衣を著けよ。長き間、私達は王大善見を見ざりき。今行きて王大善見に見えむ』と。

女官等は善賢妃に『唯然り』と答へ、頭を洗ひ金衣を著けて善賢妃の所に行きぬ。

斯くて阿難よ、善賢妃は將軍寶に言く『愛する將軍よ、四軍を整へよ、長き間私達は王大善見を見ず、今行きて王大善見に見えむとす』と。

阿難よ、將軍寶は善賢妃に『唯然り』と答へて四軍を整へ、善賢妃に報じて言く『女王よ、四軍は既に女王の爲に整へられたり、たゞ命を承けむ』と。

188

八萬四千の車ありて、獅子の皮を繞らされ、虎の皮を繞らされ、彪の皮を繞らされ、淡紅の毛布を繞らされ、黃金にて飾られ、黃金の幡を立て黃金の網を以て覆はれたり、エーヂャヤンタ(樂聲車をその首としたり。

八萬四千の珠玉ありて、寶珠をその首としたり。

八萬四千の女ありて、善賢妃をその首としたり。

八萬四千の居士ありて、居士寶をその首としたり。

八萬四千の利帝利臣ありて、將軍寶をその首としたり。

八萬四千の乳牛ありて、ドゥクーラ草にて織りたる頸飾を著け、[9]銀の乳入を持ち居たり。

八萬四千倶胝の布ありて、精巧微妙なる麻布、綿布、絹布、毛布なりき。

八萬四千鉢の乳粥ありて、朝夕に供養せられたり。

六　阿難よ、其の時、王大善見の八萬四千の象は、朝夕王に敬禮に來るを常とせり。然るに、阿難よ、王大善見謂へらく「實に此等の予の八萬四千の象は、朝夕敬禮に來るを常とす。予は、爾今、百年毎に一回、四萬二千の象が敬禮に來ること、せむ」と。

のものなり、そこに於て、大王よ、欲を興し、存在に對する希望を起し給へ。

191 大王よ、此等法高堂を首とする八萬四千の高堂は主のものなり、そこに於て、大王よ、欲を興し、存在に對する希望を起し給へ。

大王よ、此等大莊嚴樓を首とする八萬四千の樓閣は主のものなり、そこに於て大王よ、欲を興し、存在に對する希望を起し給へ。

大王よ、此等金造銀造牙造堅木造の、長き毛の附ける覆包あり、花を織り込める毛布の覆包あり、カダリ鹿の毛皮の覆包あり天蓋あり、兩端に紅の枕ある八萬四千の牀座は主のものなり、そこに於て大王よ、欲を興し、存在に對する希望を起し給へ。

大王よ、此等黄金を以て飾られ、黄金の幡を立て、黄金の網にて覆はれたる、布薩陀象王を首とする八萬四千の象は主のものなり、そこに於て、大王よ、欲を興し、存在に對する希望を起し給へ。

大王よ、此等黄金を以て飾られ、黄金の幡を立て、黄金の網にて覆はれたる、雲馬王を首とする、八萬四千の馬は主のものなり、そこに於て大王よ、欲を興し、存在に

190 八　斯くて阿難よ、善賢妃は四軍と共に女官達を從へて法高堂に行き、法高堂に昇りて、大莊嚴樓の所に行き、その樓門の傍に倚りて立ちぬ。

阿難よ、時に王大善見は『この群衆の寄せ來る大なる物音は何ぞや』と訝り、大莊嚴樓より出でゝ、善賢妃が門の傍に倚りて立てるを見ぬ。王は善賢妃を見て言く、『妃よ、其處に留まれ、入る勿れ』と。

九　斯くて阿難よ、王大善見は他の者に言く『汝行きて大莊嚴樓より金造の牀座を取出し、全金造の多羅樹林に於て裝置せよ』と。

『唯然り、大王よ』と彼の男は王大善見に答へ、大莊嚴樓より金造の牀座を取出し、全金造の多羅樹林に裝置したり。

阿難よ、斯くて王大善見は右脇を下にして獅子の如く横はり、一方の足に他の足を乘せて、正念正智にてありぬ。

一〇　阿難よ、時に善賢妃謂へらく『王大善見の感官は實に淸淨なり、皮膚の色は極めて淸淨精緻なり。王大善見はみまかり給へるにあらずや』と。

乃ち王大善見に言く『大王よ、此等拘舍婆提城を首とする八萬四千の都城は主

給へ。

大王よ、此等精巧微妙なる麻布綿布絹布毛布等の八萬四千倶胝の布は主のものなり、そこに於て、大王よ、欲を興し、存在に對する希望を起し給へ。

大王よ、此等朝夕に供養せらるゝ[10]八萬四千鉢の乳粥は主のものなり、そこに於て、大王よ、欲を興し、存在に對する希望を起し給へ」と。

一一　阿難よ、王大善見は是の如く説かれて、善賢妃に言く「妃よ、妃(おんみ)は長き間、予に好ましく、愛らしく、樂しき語を語るを常としたり。然るにこのたびは妃(おんみ)は予に好ましからず、愛らしからず、樂しからざる語を語りぬ」。

「然らば、大王よ、如何に語るべきにや」。

「妃よ、是の如く語れかし、「一切の可愛なるもの、可樂なるものは種々となるべきものなり、離るべきものなり、他となるべきものなり、願はくは、主は欲望を持てるまゝ、みまかるなからむことを。欲望を持てる人の死は不幸なり、誹(そし)らるべきことなり。

對する希望を起し給へ。

大王よ、此等獅子の皮にて繞らされ、虎の皮にて繞らされ、彪の皮にて繞らされ、淡紅の毛布を繞らされ、黄金にて飾られ、黄金の幡を立て、黄金の網を以て覆はれたる、ヱーヂャヤンタ車を首とする八萬四千の車は主のものなり、そこに於て、大王よ、欲を興し、存在に對する希望を起し給へ。

大王よ、此等珠寶を首とする八萬四千の珠は主のものなり、そこに於て、大王よ、欲を興し、存在に對する希望を起し給へ。

大王よ、此等女寶を首とする八萬四千の女は主のものなり、そこに於て、大王よ、欲を起し、存在に對する希望を起し給へ。

大王よ、此等居士寶を首とする八萬四千の居士は主のものなり、そこに於て、大王よ、欲を興し、存在に對する希望を起し給へ。

大王よ、此等將軍寶を首とする八萬四千の刹帝利臣は主のものなり、そこに於て、大王よ、欲を興し、存在に對する希望を起し給へ。

大王よ、此等ドゥクーラ草にて織りたる頸飾を著け、銀の乳入を持てる八萬四

すなからむことを。

大王よ、此等獅子の皮にて繞らされ、虎の皮にて繞らされ、彪の皮にて繞らされ、淡紅の毛布を繞らされ、黃金を以て飾られ、黃金の幡を立て、黃金の網を以て覆はれたるヱージャヤンタ車を首とする八萬四千の車、そこに於て、大王よ、欲を捨て、存在に對する執著を起すなからむことを。

大王よ、此等珠寶を首とする八萬四千の珠、そこに於て、大王よ、欲を捨て、存在に對する執著を起すなからむことを。

大王よ、此等善賢妃を首とする八萬四千の女、そこに於て大王よ、欲を捨て、存在に對する執著を起すなからむことを。

大王よ、此等居士寶を首とする八萬四千の居士、そこに於て、大王よ、欲を捨て、存在に對する執著を起すなからむことを。

大王よ、此等將軍寶を首とする八萬四千の刹帝利臣、そこに於て、大王よ、欲を捨て、存在に對する執著を起すなからむことを。

大王よ、主の此等拘舍婆提を首とする八萬四千の都城、そこに於て、大王よ、欲を捨て、存在に對する執著[11]を起すなからむことを。

大王よ、主の此等法高堂を首とする八萬四千の高堂、そこに於て、大王よ、欲を捨て、存在に對する執著を起すなからむことを。

193 大王よ、主の此等大莊嚴樓を首とする八萬四千の樓閣、そこに於て、大王よ、欲を捨て、存在に對する執著を起すなからむことを。

大王よ、主の此等金造・銀造・牙造・堅木造の長き毛の付ける覆包あり、花を織り込める毛布の覆包あり、カダリ鹿の毛皮の覆包あり、天蓋あり、兩端に紅の枕ある八萬四千の牀座、そこに於て、大王よ、欲を捨て、存在に對する執著を起すなからむことを。

大王よ、此等黃金を以て飾られ、黃金の幡を立て、黃金の網にて覆はれたる、布薩陀象王を首とする八萬四千の象、そこに於て、大王よ、欲を捨て、存在に對する執著を起すなからむことを。

大王よ、此等黃金を以て飾られ、黃金の幡を立て、黃金の網にて覆はれたる、雲馬

て、存在に對する執著を起し給ふなからむことを。

大王よ、主の此等大莊嚴樓を首とする八萬四千の樓閣、そこに於て、大王よ、欲を捨て、存在に對する執著を起し給ふなからむことを。

大王よ、主の此等金造・銀造・牙造・堅木造の、長き毛の附ける覆包あり、花を織り込める毛布の覆包あり、カダリ鹿の毛皮の覆包あり天蓋あり、兩端に紅の枕ある、八萬四千の牀座、そこに於て、大王よ、欲を捨て、存在に對する執著を起し給ふなからむことを。

大王よ、此等黄金を以て飾られ、黄金の幡を立て、黄金の網にて覆はれたる、布薩陀象王を首とする八萬四千の象、そこに於て、大王よ、欲を捨て、存在に對する執著を起し給ふなからむことを。

大王よ、此等黄金を以て飾られ、黄金の幡を立て、黄金の網にて覆はれたる雲馬
195 王を首とする八萬四千の馬、そこに於て、大王よ、欲を捨て、存在に對する執著を起し給ふなからむことを。

大王よ、此等獅子の皮にて繞らされ、虎の皮にて繞らされ、彪の皮にて繞らされ、

大王よ、此等ドゥクーラ草を織りたる頸飾を著け、銀の乳入を持てる八萬四千の乳牛、そこに於て、大王よ、欲を捨て、存在に對する執著を起すなからむことを。

194 大王よ、此等精巧微妙なる麻布綿布絹布毛布等の八萬四千倶低の布、そこに於て、大王よ、欲を捨て、存在に對する執著を起すなからむことを。

大王よ、此等朝夕に供養せらるゝ八萬四千鉢の乳粥、そこに於て、大王よ、欲を捨て、存在に對する執著を起すなからむことを」と。

一二　阿難よ、善賢妃はかく說かれて號哭涕涙したり。斯くて、阿難よ、善賢妃は涕涙して王大善見に白さく、「大王よ、一切の可愛なるもの、可樂なるものは、種々となるべきものなり、離るべきものなり、他となるべきものなり。主は欲を持てるまゝみまかり給ふなからんことを。欲を持てるまゝみまかり給ふは不幸なり、誹らるべきことなり。

大王よ、主の此等拘舍婆提城を首とする八萬四千の都城、そこに於て、欲を捨て、存在に對する執著を起し給ふなからむことを。

大王よ、主の此等法高堂を首とする八萬四千の高堂、そこに於て、大王よ、欲を捨

て、大王よ、欲を捨て、存在に對する執著を起し給ふなからむことを。

　大王よ、此等朝夕に供養せらるゝ八萬四千鉢の乳粥、そこに於て、大王よ、欲を捨て、存在に對する執著を起し給ふなからむことを」と。

一三　阿難よ、斯くて王大善見は久しからずして死せり。恰も、阿難よ、居士又は
196 居士子が好ましき食物を食ひ終りたる後に於て睡氣(ねむけ)を催すが如く、その如く實に王大善見に死の近づける識ありき。阿難よ、王大善見は死して善道梵界に上昇したり。

　阿難よ、王大善見は八萬四千年間童兒の遊戯を遊び、八萬四千年間攝政をなし、八萬四千年間王たり、八萬四千年間家居者にして、法高堂に於て梵行を行じたり。彼は四梵住を修し、身體壞して死後梵界上昇者たりき。

一四　阿難よ、汝或は斯く思ふならん「其の時の王大善見は他の人なり」と。されど、斯く考ふ勿れ。我こそは其の時に於ける王大善見なりしなり。

　それら拘舍婆提を首とする八萬四千の都城は我のものたりしなり。

　それら法高堂を首とする八萬四千の高堂は我のものたりしなり。

淡紅の毛布を繞らされ、黃金を以て飾られ、黃金の幡を立て、黃金の網を以て覆はれたるヱーヂャヤンタ車を首とする八萬四千の車、そこに於て、大王よ、欲を捨て、存在に對する執著を起し給ふなからむことを。

大王よ、此等珠寶を首とする八萬四千の珠、そこに於て、大王よ、欲を捨て、存在に對する執著を起し給ふなからむことを。

大王よ、此等善賢妃を首とする八萬四千の女、そこに於て欲を捨て、存在に對する執著を起し給ふなからむことを。

大王よ、此等居士寶を首とする八萬四千の居士、そこに於て、大王よ、欲を捨て、存在に對する執著を起し給ふなからむことを。

大王よ、此等將軍寶を首とする八萬四千の刹帝利臣、そこに於て、大王よ、欲を捨て、存在に對する執著を起すなからむことを。

大王よ、此等ドゥクーラ草を織りたる頸飾を著け、銀の乳入を持てる八萬四千の乳牛、そこに於て、大王よ、欲を捨て、存在に對する執著を起し給ふなからむことを。

大王よ、此等精巧微妙なる麻布・綿布・絹布・毛布等の八萬四千倶胝の布、そこに於

それら將軍寶を首とする八萬四千の剎帝利臣は我のものたりしなり。

それらドゥクーラ草を織りたる頸飾を著け、銀の乳入を持てる八萬四千の乳牛は我のものたりしなり。

それら精巧微妙なる麻布綿布絹布毛布等の八萬四千倶胝の布は我のものたりしなり。

それら朝夕に供養せられたる八萬四千鉢の乳粥は我のものたりしなり。

一五　阿難よ、それら八萬四千の都城の中、かの一こそは其の時我の住める城なり、卽ち拘舍婆提王城なり。

阿難よ、それら八萬四千の高堂の中、かの一こそは其の時我の住める高堂なり、卽ち法高堂なり。

阿難よ、それら八萬四千の樓閣の中、かの一こそは、其の時我の住める樓閣なり、卽ち大莊嚴樓なり。

阿難よ、それらの八萬四千の牀座の中、かの一こそは、其の時我の用ひしものなり、卽ち金造、又は銀造、又は牙造、又は堅木造なり。

それら大莊嚴樓を首とする八萬四千の樓閣は我のものたりしなり。
それら金造・銀造・牙造・堅木造の長き毛の附ける毛布の覆包あり、花を織り込める毛布の覆包あり、カダリ鹿の毛皮の覆包あり、天蓋あり、兩端に紅の枕ある八萬四千の牀座は我のものたりしなり。
それら黃金を以て飾られ、黃金の幡を立て、黃金の網にて覆はれたる、布薩陀象王を首とする八萬四千の象は我のものたりしなり。
それら黃金を以て飾られ、黃金の幡を立て、黃金の網にて覆はれたる、雲馬王を首とする八萬四千の馬は我のものたりしなり。
197 それら獅子の皮にて繞らされ、虎の皮にて繞らされ、彪の皮にて繞らされ、淡紅の毛布を繞らされ、黃金にて飾られ、黃金の幡を立て、黃金の網を以て覆はれたる、ヱーヂャヤンタ車を首とする八萬四千の車は我のものたりしなり。
それら珠寶を首とする八萬四千の珠は我のものたりしなり。
それら善賢妃を首とする八萬四千の女は我のものたりしなり。
それら居士寶を首とする八萬四千の居士は我のものたりしなり。

行は安定なるものにあらず。か丶るが故に、阿難よ、一切の行に於て離脱することそ適當なれ、それに於て心を動かされざることそ適當なれ、それに於て解脱することそ適當なれ。

一七　阿難よ、實に我、六度この地に於て舍利を埋めしを記憶す。而して、かの王として住し、轉輪王にして法に從へるもの、法王にして、四邊の主・常勝者・國の確保者にして七寶具有者たりしは、こは舍利を此處に埋めし第七なり。阿難よ、如來
199 が第八に舍利を埋むるが如き場所を我復見ることとなし、諸神界に於ても、魔界に於ても、梵界に於ても、沙門婆羅門の中に於ても人天の生に於ても」と。

斯く世尊は說き給へり。善逝は斯く說きて復次の如く師は說き給ひぬ。

諸行は無常なり、
生滅の法なり。
生じては又滅す、
それらに對して心寂滅なるは樂なり、と。

阿難よ、それらの八萬四千の象の中、かの一こそは、其の時我の乘りしものなり、卽ち布薩陀象王なり。

198 阿難よ、それらの八萬四千の馬の中、かの一こそは其の時我の乘りしものなり、卽ち雲馬王なり。

阿難よ、それら八萬四千の車の中、かの一こそは其の時我の乘りしものなり、卽ち、ヹージャヤンタ車なり。

阿難よ、それら八萬四千の女の中、かの一女こそは、其の時我に侍せる王妃なり、卽ち、刹帝利族女、又はヹーラーマ族女なり。

阿難よ、それら八萬四千倶胝の布の中、かの一こそは、其の時我の著けしものなり、卽ち麻布、又は綿布、又は絹布、又は毛布なり。

阿難よ、それら八萬四千鉢の中、かの一こそは其の時我それより一合の米を食し、及びそれだけの汁を飲みし鉢なり。

一六　阿難よ、見よ、此等一切の行は過ぎ去り滅し去り變化せり。是の如く、阿難よ、諸行は常住ならず。是の如く阿難よ、諸行は永遠ならず。是の如く阿難よ、諸

補譯したるなり。

❽一切人に珍らしき」(sabbajanassa anācāraṁ の anācāraṁ は不道徳の意の場合多けれど、今は稀有なる現象の意なるを以て上の如く譯せり。

❾銀の乳入(kaṁsupadhāraṇa) は Jātaka 547 (vol. VI. p. 504) の註に銀製の乳を入れたる鉢 (rajatamaya-khira-paṭicchannabhāja) とあるに從つて上の如く譯したり。ナーナチローカ氏はその增一部經典の譯に眞鍮の鈴としたり。(A.N. IV. p. 393, Nānatiloka, Aṅguttara, vol. VII. p. 201).

❿八萬四千、底本には單に「千」とあれど、五及び一一には共に八萬四千とあれば訂正して譯したり。

⓫執著、前に希望と譯せると同字(apekha)なり。前の場合は、將來に向ひて積極的の意味を表はさん爲に希望と譯したるが、今は現狀に對する消極的の意味を示さんとて執著としたり。

註

❶ 𨚢跛單、Upavattana (Sk. Upavartana) は遊戯場の意なり。或は保養場又は郊外とも譯せらる。中阿含に𨚢跛單と音寫せるは個有名詞と見たるなるべし。もと拘尸那揭羅城邊の遊戯場又は競馬場なりしものが、次第に個有名詞の如く見らるゝに至りしならん。今は個有名詞と見て譯せり。

❷「歡び騷げ」底本には khīdatha とあり、「齟めよ」と譯すべきなれど、こは恐らく khiḍatha, kiḷatha, khiddatha の何れかの誤寫ならん。何れにするも梵語 krīḍatha に相當する語ならざるべからずと思考す。漢譯には戯笑語と譯したり。

❸「習制に從ひて」底本に yathā bhuttaṁ bhuñjatha とありて、食せられたる如くに食せよ、卽ち習慣に從つて食せよの意なれば、上の如くに譯したり。

❹ 七處 (sattappatiṭṭho) は四脚、鼻、兩牙の七處を指す。

❺「純白」底本に sabba-seto とあり。此と同文なる中部經典 (MN. vol. III. p. 174) には seso とあるも seto の誤植なること明なればこゝに純白と譯したり。然るに Mahāvastu I, p. 108; Lalitavistara p. 16 及び漢譯には常に sarvaṁ nīlaṁ 紺青色とす。佛音の註釋書によれば vijjullatā-vinaddha-saradakāla-seta-valāhakarāsi-sassiriko とあり、輝きて黑きが如く又白雲の堆積せる如く輝けるの意なり。

❻ 如意德は iddhi の譯、超人的の德なり。次經には iddhipada を神足と譯したるも、今は七寶と列べられたる場合なれば、上の如く譯したり。

❼「種々華を植ゑ以て自然の華鬘となさしめむ」は mālāni ropapeyyaṁ (華鬘を植えしめん)を

一八　闍[1]尼沙經（ヂャナワサバ・スッタンタ）

200 是の如く我聞く。

一　一時世尊、那提迦部落の[2]煉瓦造屋に在しき。其の時世尊は迦尸・拘薩羅・跋耆・末羅・支提・拔沙・拘樓・般遮羅・婆蹉・戍囉西那等諸方の國々に於ける信者達の過ぎ逝き、死に去りし者の再生に關して「彼の者は彼處に生ぜり、彼の者は彼處に生ぜり。那提迦人の信者達の逝去せる五十人餘の者は、五下分結を斷じて天に生じ、そこに入滅して其の世界より還り來らざるものとなれり。那提迦人の信者達の逝去せる九十人餘の者は、三結を斷じ、貪瞋痴を滅して、一來者にして、一度のみ此の世に還り來りて苦の終を爲すべし。那提迦人の信者達の逝去せる五百人餘の者は、三結を斷じ、預流者にして、[3]惡趣に墮することなきものにして、正覺に向つて確定せるものなり」と說き給へり。

201
二　那提迦人の信者達は「世尊は、迦尸・拘薩羅・跋耆・末羅・支提・拔沙・拘樓・般遮羅・婆蹉・戍

れり。那提迦人の信者達の逝去せる九十人餘の者は三結を斷じ貪瞋痴を滅して、一來者にして一度のみ此の世に還り來りて苦の終をなすべし。那提迦人の信者達の逝去せる五百人餘の者は三結を斷じ、預流者にして惡趣に墮することなきものにして、正覺に向つて確定せるものなり」と說き給へり。而してそれに依りて那提迦人の信者達は滿足し、世尊によりて問題が解說されたるを聞きて歡び喜悅せり」と。

四　斯くて尊者阿難謂へらく、「又實に彼等摩揭陀人の信者達にして、長き間修行して過ぎ逝き死に去りし者多くあり。人或は鴦伽・摩揭陀國に就きて鴦伽・摩揭陀人にして、信者として逝去せる者無しと考ふるならむ。されど彼等も亦佛陀を信じ法を信じ僧伽を信じ、教に於てよく行へり。しかも彼等逝去せる者は世尊によりてその[4]運命を說かれず、若し彼等に就きてもそが說かるゝならむには誠に幸なり。多くの人々はそれを信じそれに緣りて善趣に趣くべし。又、かの摩揭陀國王斯尼喩頻婆娑羅は如法者・法に從へる王にして、婆羅門及び居士に對しても、都市の住民に對しても、亦一般人民に對しても哀愍の情深かりき　又實

囉西那等、諸方の國々に於ける信者達の過ぎ逝き死に去りし者の再生に關して、「彼の者は彼處に生ぜり、彼の者は彼處に生ぜり。那提迦人の信者達の逝去せる五十人餘の者は、五下分結を斷じて天に生じ、そこに入滅して其の世界より還らざるものとなれり。那提迦人の信者達の逝去せる九十人餘の者は、三結を斷じ、貪瞋癡を滅して、一來者にして一度のみ此の世に還り來りて苦の終を爲すべし。那提迦人の信者達の逝去せる五百人餘の者は、三結を斷じ、預流者にして、惡趣に墮することなきものにして、正覺に向つて確定せるものなり」と說き給へり」と聞きぬ。それに依りて那提迦人の信者達は滿足し、世尊に依りて問題が解說されたるを聞きて歡び喜悅せり。

三　尊者阿難は聞きぬ。

「世尊は實に迦尸・拘薩羅・跋耆・末羅・支提・拔沙・拘樓・般遮羅・婆蹉・戍囉西那等、諸方の國々に於ける信者達の過ぎ逝き、死に去りし者の再生に關して「彼の者は彼處に生ぜり、彼の者は彼處に生ぜり、那提迦人の信者達の逝去せる五十人餘の者は、五下分結を斷じて天に生じ、そこに入滅して其の世界より還り來らざるものとな

上り、世尊の所に詣り、世尊に敬禮して一方に坐しぬ。一方に坐して尊者阿難は世尊に白して言く、「世尊、我次の如く聞く、世尊は迦尸・拘薩羅・跋耆・末羅・支提・拔沙・拘樓・般遮羅・婆蹉・戍囉西那等、諸方の國々に於ける信者達の逝去せるもの丶再生處に關して說き給ふらく「彼の者は彼處に生ぜり、彼の者は彼處に生ぜり。那提迦人の信者達の逝去せる五十人餘の者は、五下分結を斷じて天に生じ、そこに入滅して其の世界より還り來らざるものとなれり。那提迦人の信者達の逝去せる九十人餘の者は、三結を斷じ、貪瞋痴を滅して、一來者にして一度のみ此の世に還り來りて苦の終をなすべし。那提迦人の信者達の逝去せる五百人餘の者は、三結を斷じ、預流者にして惡趣に墮することと無きものにして正覺に向つて確定せるものなり」と。那提迦人の信者達はそれによりて滿足し、世尊によりて問題が解說されたるを聞きて歡び喜悅したりと。

六　又世尊、此等摩掲陀人の信者達にして長き間修行して過ぎ逝き、死に去りし者多くあり。人或は鴦伽・摩掲陀國に就き、鴦伽・摩掲陀人にして信者として逝去せるもの無しと考ふるならむ。されど世尊、彼等も亦佛を信じ法を信じ僧伽を

に人々は王を稱讃して『是の如くかの如法者にして法に從へる我等の王は、我等に幸福を與へて死に逝けり、是の如く我等はかの如法者にして法に從へる王の國土に於て、斯く幸福に生存せり』と言へり。實に彼も亦佛を信じ法を信じ僧伽を信じ、教に於てよく行へるものなりき。人々は又實に是の如く謂へり『死に至るまで、摩揭陀王斯尼喩頻婆娑羅は世尊を稱讃するものなりき、而して既に死せり』と。彼は逝去したるも世尊によりて其の運命は說かれず。若し彼に就きても、そが說かるゝならむには幸なり、多くの人々はそれを信ずべく、それに緣りて善趣に趣かむ。又、世尊は實に摩揭陀國に於て正覺に達し給へるなり。世尊の正覺に達し給へる其の摩揭陀人の信者達の逝去せるもの、再生處に關し、如何にして世尊は說き給はざるべき。若し世尊にして摩揭陀人の信者達の逝去せるもの、再生處に關して說き給はざらむには、それに緣りて摩揭陀の信者達は不幸となるべし。それに緣りて摩揭陀人の信者達が不幸となるべきに、如何に
203 して世尊はそを說き給はざるべきや』と。

五　尊者阿難は摩揭陀人の信者達に關し、此のことを獨り竊に考へて、晨早く起

して説き給はざるべき。世尊、世尊にして若し摩掲陀人の信者達の逝去せるものゝ、再生處に關して説き給はざらむには、ぞれに縁りて摩掲陀人の信者達は不幸となるべし。世尊、ぞれに縁りて摩掲陀人の信者達が不幸となるべきに、如何にして世尊はそを説き給はざるべきや」と。

尊者阿難は摩掲陀人の信者達に關して、世尊の面前にこの長談をなし、座より立ちて世尊に敬禮し右繞して去りぬ。

七　世尊は阿難の去りたる後久しからずして朝、下衣を整へ鉢を持し上衣を著けて、那提迦村に乞食に行き給ひぬ。那提迦村に乞食に行き、乞食より歸りて、食後、足を洗ひ、煉瓦造屋に入りて、摩掲陀人の信者達に關して考慮し思慮し、一切心を專中し、定めの座に坐して思ひ給はく「我、彼等の趣(しゅ)、彼等の運命を知らむ、彼等尊者達は如何なる趣、如何なる運命を有するや［を 知らむ］」と。斯くて世尊は摩掲陀人の信者達は如何なる趣に趣くや、彼等尊者達は如何なる運命を有するやを

205 見知り給ひぬ。斯くて世尊は夕刻、獨坐より立ちて煉瓦造屋より出で、僧院の蔭に於ける定めの座に坐し給ひぬ。

信じ、教に於てよく行へり。しかも彼等逝去せる者は、世尊によりて其の運命を說かれず、若し彼等に就きてもそが說かるゝならむには誠に幸なり。多くの人人はそを信ずべく、それに緣りて善趣に趣くべし。又世尊、かの摩揭陀王斯尼喩頻婆娑羅は如法者・法に從へる王にして、婆羅門及び居士に對しても、都市の住民に對しても、亦一般人民に對しても哀愍の情深かりき。又實に人々は王を稱讚して『是の如くかの如法者にして法に從へる我等の王は、我等に幸福を與へて死に逝けり、是の如く我等はかの如法者にして法に從へる王の國土に於て幸福に生存せり』と言へり。世尊、實に彼も亦佛を信じ法を信じ僧伽を信じ、教に於てよく行へる者なりき。人々は又實に是の如く謂(おも)へり、『死に至るまで摩揭陀王斯尼喩頻婆娑羅は世尊を稱讚するものなりき。而して既に死せり』と。彼は逝去したるも世尊によりて其の運命は說かれず、若し彼に就きてもそが說かるゝならむには幸なり。多くの人々はそを信ずべく、それに緣りて善趣に趣くべし。又世尊、世尊は實に摩揭陀國に於て正覺に達し給へるなり。世尊の正覺に達したまへる其の摩揭陀人の信者達の逝去せるものゝ再生處に關し、世尊は如何に

206の如き名を有するもの卽ち闍尼沙といふが如きは、尋常の夜叉に非ざるべし」と。

一〇「阿難よ、聲を發して間もなく、熈(かがや)ける顏色をなせる彼、夜叉は我が面前に現はれぬ。而して再び聲を發して「世尊、予は頻婆娑羅なり。善逝、予は頻婆娑羅なり。世尊、予が、毘沙門天王の眷屬として生れたるは、此を以て七度目とす。その予は人間の王としてそこより消え、非人間の王として天に生ぜり。

こゝより七度(たび)かしこより七度、合して十四度の輪廻
前世に經たるこれだけの住處を予は知る。

世尊、予は長き間、惡趣に墮することなきものにして惡趣に墮することなしと知り、予は一來者たらむとの希望に住す」と言へり。

この尊者闍尼沙夜叉の、「長き間、予は惡趣に墮することなきものにして、惡趣に墮するなしと知りぬ」と言ひ、又「予は一來者たらむとの希望に住す」と言へるは、誠に不可思議、稀有の事なり。如何なる因縁によりて、尊者闍尼沙夜叉は是の如き偉大にして殊勝なる智を得るに至れるや。

一一「世尊、世尊の敎以外のものにあらず。善逝、善逝の敎以外のものにあらず。

八　時に尊者阿難は世尊の所に詣り、世尊に敬禮して一方に坐しぬ。一方に坐して尊者阿難は世尊に白して言く「世尊、世尊は誠に寂靜に見え給ふ、世尊の顏色は、諸根の清淨となれるによりてか熈きて見ゆ、世尊は今日寂靜なる日を過し給へるや」と。

九　「阿難よ、汝我に摩掲陀人の信者達に關して面前にかの長談をなし、座より立ちて去るや、我那提迦村に乞食に行き、乞食より歸りて食後、足を洗ひて煉瓦造屋に入り、摩掲陀人の信者達に關して考慮し思慮し、一切心を專中して定めの座に坐して思はく『我、彼等の趣、彼等の運命を知らむ、彼等尊者達は如何なる趣、如何なる運命を有するや「を知らむ』と。阿難よ摩掲陀人の信者達は如何なる趣に趣くや、彼等尊者達は如何なる運命を有するやを我は見知りぬ。時に阿難よ、隱れたる一夜叉聲を發しぬ。「世尊、予は闍尼沙なり、善逝、予は闍尼沙なり」と。阿難よ、汝は是の如き名卽ち闍尼沙なる名を有するものを嘗て聞き知れりや」。

「世尊、予は嘗て是の如き名、卽ち闍尼沙なる名を有するものを聞き知らず、又予は闍尼沙なる名を聞きて身[5]毛竪立せり。それに就き予は次の如く考ふ『彼、是

長天王北面して諸神を前にして坐し、西方に廣目天王東面して諸神を前にして坐し、北方に毘沙門天王南面して諸神を前にして坐せり。世尊、全三十三天の天
208 衆が善法堂に集り坐し、大なる天の衆は普く一切方に坐し、四天王も四方に坐する時には、これ彼等〔四天王〕の坐法なり。而して後に我等の座はあるなり。世尊、若し諸神にして世尊の所に於て梵行を行じ新に三十三天に生じたるものは、彼等は其の色光に於て他の諸神を凌駕したり。それによりて實に三十三天の諸神は滿悅し「實に天界は增大し阿修羅界は減滅す」とて歡喜を生じたり。

一三　世尊、斯くて帝釋天は三十三天の諸神の歡喜せるを知り、次の偈を以て隨喜せり。

　　三十三天の神々は其の主と共に歡喜す、
　　如來と法の善法性とに歸命して。
　　善逝の所に梵行を行じて此處に來れる
　　色光勝れたる新生の神々を見て。
　　彼等は色光と壽命とに於て他の諸神を凌駕す。

予が最初、世尊に一向に歸依し信仰(しんぎよう)したるより以來、長く予は惡趣に墮せざるも
207 のにして、惡趣に墮せざることを知り、又、一來者たらむとの希望に住す。今予は毘沙門天王の命により、增長天王の所に、或る用事の爲に使する途中に於て、世尊が煉瓦造屋に入り、摩揭陀人の信者達に關して考慮し思慮し、一切心を專中して住し給ひて、 彼等の趣、彼等の運命を我知らむ、如何なる趣、如何なる運命を彼等尊者達は有するやと考へ居給ふを見ぬ。而して又偶[6]然にも毘沙門天王が其の衆會に於て、彼等〔摩揭陀の〕尊者達が如何なる趣、如何なる運命を有するやを說き給へるをば、予は其の面前にて聞き、面前にて受けぬ。それに就き予は世尊に會ひ、此のことを告げまつらむと思ひぬ。世尊、予はこの二の緣によりて世尊に見(まみ)えむとて來れるなり。

一二　世尊、昔、遙なる昔、雨安居の始まる月の十五日滿月の夜、布薩の時に於て、全三十三天の天衆、善法堂に集り坐せり。大なる天の衆は普く一切方に坐せり。四天王は四方に坐せり、東方に持國天王西面して諸神を前にして坐し、南方に增

徵相見られたるを以て梵天現はるべし、此の廣大なる光燿は、こは梵天の徵相なり」。

一六　世尊、斯くて三十三天の諸神は各自の座に坐して言く、「此の光燿は如何なる結果を齎すやを知らむと欲す。そを實見して其の所に行かむと欲す」と。

四天王亦各自の座に坐して言く「此の光燿は如何なる結果を齎すやを知らむ

210

と欲す、そを實見して其の所に行かむと欲す」と。そを聞きて三十三天の諸神は相和して言く「此の光燿は如何なる結果を齎すやを知らむと欲す、そを實見して其の所に行かむと欲す」と。

一七　世尊、常童形梵天は三十三天の諸神に對して出現する時は、麁なる形相を化作して現はるゝなり。蓋し、梵天の自然の容相にて現はれなば、そは三十三天の神々の眼には觸れ難ければなり。常童形梵天の三十三天の前に現るゝ時は、彼は其の色光を以て他の諸神を凌駕す。恰も、世尊、黃金體が光を以て人體を凌駕するが如く、その如く常童形梵天の三十三天の前に現はるゝ時は、彼は其の色光を以て他の諸神を凌駕するなり。常童形梵天の、三十三天の前に現はるゝ時

大智者の弟子にして殊勝なるものとして此處に來れり。
之を見て三十三天の神々は其の主と共に歡喜す、
如來と法の善法性とに歸命して。

209 それによりて實に三十三天の諸神は更に悅びて「天界は實に增大し阿修羅界
は滅減す」とて歡喜せり。

一四 世尊、斯くて三十三天の諸神は、彼等が善法堂に集り會したる其の目的を考へ慮りぬ。而してかの四天王は其の目的に就きて語られ又教へられて、自らの座を離れずして立ちゐたり。

彼等天王は語られて其の教を受け、
心清淨寂靜にして各々其の座に立ちぬ。

一五 時に、世尊、北方に於て大光明現はれ、光耀を發しぬ、そは諸神の神威を凌駕せり。帝釋天、乃ち三十三天に告げて言く、「諸卿よ、徵相の見られ光明の現はれ光耀の發せらるゝ時は、梵天現はるべし。實に光明現はれ光耀發せらるゝは、こは梵天出現の前相なり。

善逝の所に梵行を修して此處に來れる
色光勝れたる新生の神々を見て。
彼等は色光と壽命とに於て他の諸神を凌駕す。
大智者の弟子にして殊勝なるものとして此處に來れり。
これを見て三十三天の神々は其の主と共に歡喜す。
如來と法の善法性とに歸命して」。

一九 世尊、此の事を常童形梵天は説きぬ。此の事が常童形梵天によりて説かれたる時、其の聲八種を備へたり、卽ち、玲瓏、淸徹、美妙、和雅、[7]充滿、[8]不亂、甚深、[9]廣博なりき。世尊、常童形梵天の集會に聲を以て告ぐる時には、其の音聲集會の外には出でず。而して是の如き八種を備へたる聲あるものは、梵聲あるものと稱せらるるなり。

二〇 世尊、斯くて常童形梵天は、自身を三十三の形と化し、三十三天の各々の座
212 に結跏趺坐して三十三天に告げて言く、
「三十三天よ、諸卿は如何に思ふや、彼世尊は衆生の幸福の爲に、衆生の安樂、世間

は、其の集會に於ける如何なる神も話しかくるものなく、立ち上るものなく、又座を以て招待するものもなし。一切は默々として、座上に合掌し結跏趺坐して思へらく「常童形梵天は今、彼が用事ある其の神の座に於て坐すならむ」と。而して常童形梵天の坐せる其の座の神は、大なる法悅を得、大なる歡喜を得。恰も刹帝利王の灌頂して新に卽位せるが大なる法悅を得、大なる歡喜を得るが如く、その如く實に常童形梵天の坐せる其の座の神は、大なる法悅を得、大なる歡喜を得るなり。

211 一八　世尊、斯くて常童形梵天は麁なる形相を化作して童兒形となり、五髻にして三十三天の前に現はれぬ。彼は虛空を行き、空間に結跏趺坐せり。恰も力強き人の、よく擴げられたる座に、又は均正なる地上に、結跏趺坐するが如く、その如く實に常童形梵天は虛空を行き、空間に結跏趺坐して、三十三天の諸神の歡喜せるを知り、次の偈を以て隨喜せり。

　三十三天の神々は其の主と共に歡喜す、
　　如來と法の善法性とに歸命して。

「三十三天よ、卿等如何に思ふや。かの世尊・知者・見者・應供者・等正覺者によりて、此等四神足が神通の充滿の爲に、神通の熟達の爲に、神通の變幻の爲に、實によく說かれたるにあらずや。其の四とは、比丘は欲[12]の等持と勤勇との條件を成就せる神足を修し、精進の等持と……乃至……心の等持と……乃至……思惟の等持と勤勇との條件を成就せる神足を修するなり。此等四神足が、世尊・知者・見者・應供者・等正覺者によりて、神通の充滿の爲に、神通の熟達の爲に、神通の變幻の爲に敎へられたり。諸卿よ、過去に於ける沙門婆羅門にして種々に種々なる神通を實現せるものは凡て此等四神足の修行者・實習者たりき。又諸卿よ、未來に於ける沙門婆羅門にして、種々に種々なる神通を實現せむものは凡て此等四神足の修行者・實習者ならむ。又、諸卿よ、現在の沙門婆羅門にして、種々に種々なる神通を實現するものは凡て此等四神足の修行者・實習者なり。三十三天よ、卿等は予に於ても亦、此の是の如き神通の威德を見るや」と。

「然り、梵天よ」。

「諸卿よ、予も亦實に此等四神足の修行者なり、實習者なり。それ故に斯く偉大

の哀愍の爲に、人・天の利益幸福・安樂の爲に、行動し給ふものなれば、何人なりとも佛陀に歸依し法に歸依し僧伽に歸依し、教に於てよく行ぜむに、彼は身壞して死後、或る者は他化自在天界に生じ、或る者は化樂天界に、又或る者は覩史多天界に、或る者は夜摩天界に、或る者は三十三天界に、或る者は四天王界に生ず。又最下等の界に赴くも乾闥婆界に赴くなり」と。

二一　世尊、此の事を常童形梵天は說きぬ。此の事が常童形梵天によりて說かれたる時、各々其の神は思はく、「予の座に在はすもの、唯その一神のみ說き給ふなり」と。

一神の說ける時、一切化神は說き、
一神の默坐せる時、一切化神は默す。
されば三十三天は其の主と共に思へらく、
予の座に在はすもの、唯[12]その一神のみ說き給ふ。

二二　世尊[11]、斯くて常童形梵天は一身に自身を攝したり。一身に自身を攝して、
213 帝釋天の座に結跏趺坐し、三十三天に告げて言く。

聞となりて熱心に學び、一切の法を了得し、麁なる身行寂滅し…乃至…意行寂滅
215 す。彼麁なる身行を寂滅し、麁なる口行…乃至…意行を寂滅せる者には樂生じ
樂以上の喜樂生ず。恰も、諸卿よ、愉快より喜悦生ずるが如く、その如く實に麁な
る身行を寂滅し、麁なる口行を…乃至…意行を寂滅して樂生じ、樂以上の喜樂を
生ず。諸卿よ、實に彼の世尊・知者・見者・應供者・等正覺者によりて、此の第二の徑路
が、樂の到達の爲に開示せられたり。

二五　復次に、諸卿よ、或る者は「こは善なり」と如實に知らず「こは不善なり」と如實
に知らず「こは誹難せらるべきものなり、こは誹難せらるべきものにあらず、こは
用ふべし、こは用ふべからず、こは卑劣なり、こは高尚なり、こは黑白等分なり」と如
實に知らず。彼は後に聖法を聽きて熱心に學び一切の法を了得す。彼は聖法
の聲聞となりて熱心に學び、一切の法を了得して、「こは善なり」と如實に知り「こ
は不善なり」と如實に知り、「こは誹難せらるべきものなり、こは誹難せらるべき
ものにあらず、こは用ふべし、こは用ふべからず、こは卑劣なり、こは高尚なり、こは
黑白等分なり」と如實に知る。是の如く知り是の如く見るものには、無明滅して

214 にして斯く威徳あるなり」と。

二三　世尊、常童形梵天は此の事を説きぬ。此の事を常童形梵天は説きて「三十三天に告げて言く。

「三十三天よ、卿等は如何に思ふや。かの世尊・知者・見者・應供者・等正覺者によりて、かの三の徑路が、安樂の到達の爲に、實によく開示せられたるにあらずや。

其の三とは、諸卿よ、或る者は愛欲に親近し不善法に親近したり。彼は後に聖法を聽きて熱心に學び、一切の法を了得す。彼は聖法の聲聞となり、熱心に學び、一切の法を了得して、愛欲に親近せず不善法に親近せざるものとなる。愛欲に親近せず不善法に親近せざる彼には、樂生じ樂以上の喜樂生ず。恰も、諸卿よ、愉快より喜悅生ずるが如く、その如く實に愛欲に親近せず不善法に親近せざるものには、樂生じ樂以上の喜樂生ず。諸卿よ、實にかの世尊・知者・見者・應供者・等正覺者によりて、此の第一の徑路が、樂の到達の爲に開示せられたり。

二四　復次に、諸卿よ、或る者は麁なる身行寂滅せず、又麁なる口行…乃至…意行寂滅せず、彼は後に聖法を聽きて熱心に學び、一切の法を了得す。彼は聖法の聲

乃至……法に於て觀察し精勤して思慮し思念し、世間に於ける貪著と憂悲とを除くべし。自分に關して法に於て觀察し、そこに正しく靜慮し正しく心平和となる。彼はそこに於て正しく靜慮し正しく心平和となりて外部に關して他の法に於て知と見とを生ずるなり。

諸卿よ、彼の世尊・知者・見者・應供者等正覺者によりて、善の到達の爲に、此等四念處が教へられたり」。

二七　世尊、常童形梵天は此の事を說きぬ。此の事を常童形梵天は說きて、三十三天に告げて言く、

「三十三天よ、卿等如何に思ふや。彼の世尊・知者・見者・應供者・等正覺者によりて、正定の修行の爲に正定の完成の爲に七定具が實によく說かれしにあらずや。その七とは、卽ち正見、正思惟、正語、正業、正命、正精進、正念なり。諸卿よ、此等の七支 217 を以て心一向專念になりしもの、そを方法を備へ資具を備へたる聖正定とはいふ。諸卿よ、正見に緣りて正思惟生じ、正思惟に緣りて正語生じ、正語に緣りて正業生じ、正業に緣りて正命生じ、正命に緣りて正精進生じ、正精進に緣りて正念生

明生ず。彼、無明滅して明生ぜる者には、樂生じ樂以上の喜樂生ず。恰も、諸卿よ、愉快より喜悅生ずるが如く、その如く樂生じ樂以上の喜樂生ず。諸卿よ、實に彼、世尊・知者・見者應供者等正覺者によりて、この第三の徑路が樂の到達の爲に開示せられたり。

216 諸卿よ、實に世尊・知者・見者・應供者・等正覺者によりて、此等三の徑路が樂の到達の爲に開示せられたり」と。

二六　世尊、常童形梵天は此の事を說きぬ。此の事を常童形梵天は說きて、三十三天に告げて言く

「三十三天よ、卿等は如何に思ふや。彼世尊・知者見者・應供者・等正覺者によりて、善の到達の爲に、此等四念處が實によく說かれたるにあらずや。其の四とは、諸卿よ、比丘は自分に關して身を觀察し精勤して思慮し思念し、世間に於ける貪著と憂悲とを除くべし。自分に關して身を觀察し、そこに正しく靜慮し正しく心[13]平和となる。彼はそこに於て正しく靜慮し正しく心平和となりて、外部に關して他の身に於て知と見とを生ず。自分に關して受に於て……乃至……心に於て……

予はそを計量する能はず。

虚言となるの罪を恐るゝが故に」。

二八　世尊、常童形梵天は此の事を常童形梵天が說ける時、毘沙門天王は心中に次の如く思ひぬ。「是の如き偉大なる師あり、是の如き偉大なる法話、是の如き偉大なる勝智が說かるべしとは、實に不可思議なり、誠に稀有なり」。

斯くて、世尊、常童形梵天は毘沙門天王の心中所念を知りて、毘沙門天王に告げて言く、

「毘沙門天王よ、卿は如何に思ふや。過去世に於ても是の如き偉大なる師あり、是の如き偉大なる法話、是の如き偉大なる勝智は說かれたるなり。未來に於ても亦、是の如き偉大なる師あり、是の如き偉大なる法話、是の如き偉大なる勝智は說かるべきなり」と。

二九　常童形梵天[15]は此の事を三十三天に說きぬ。此の事を常童形梵天が三十

じ、正念に緣りて正定生じ、正定に緣りて正智生じ、正智に緣りて正解脫生ず。

諸卿よ、若し正語者ありて『世尊によりて効果現前に顯はれ而も一時的ならず、何者をも歡迎し誘導し、智者によりて自ら知られ得る、斯かる法はよく說かれたり』。又『不死への門は開かれたり』と語りしとせよ、そは實に正しく語りしものなり。蓋し、諸卿よ、効果現前に顯はれ、而も一時的ならず、何者をも歡迎し、誘導し、智者によりて自ら知られ得る法が、世尊によりて實によく說かれたり。不死への門は開かれたり。

蓋し諸卿よ、佛陀に於て確乎たる信心を有し、法に於ても、僧伽に於ても確乎たる信心を有し、聖樂誡を體得せる如何なる人も、又、如何なるかの生天者、法に導かれたる者、例へば八百四十萬餘の摩揭陀人の信者達の逝去せるものも、彼等は凡て三結を斷じ預流者にして再び惡趣に墮するなきもの、正覺に向つて確定せるものなり。又そこには一來者もあるなり。

218

されど此の次[14]の生類は

德を備ふるものと思へど、

219 三天に說ける時、毘沙門天王はそを面前に聞き、面前に受けて彼の衆會に語りぬ。

此の事を毘沙門天王がその衆會に說きし時、闍尼沙夜叉はその面前に聞き、面前に受けて、世尊に語りぬ。

此の事を世尊は闍尼沙夜叉の面前に聞き面前に受け、自ら認知して尊者阿難に語り給ひぬ。

此の事を尊者阿難は世尊の面前に聞き面前に受けて、比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷に語りぬ。

それ故に梵行は興り隆え、布演せられ、多くのものに附屬せられ廣敷せられて、人間によく說かれたり。

註 ❶闍尼沙 Janavasabha は人牛王の意。今は音寫をとつて闍尼沙とせり。
❷ Giñjakavasatha (煉瓦造屋)、當時煉瓦造屋に未だ珍らしかりしを以て、かく殆ど固有名詞の如くに呼ばれしならん。漢譯には貧寠迦精舍とせるもあり。

❸原語 avinipāta-dhamma 呪はれたる存在に生ずることなきもの、卽ち惡趣に墮することなきものの意なり。

❹「運命を說く」とは vyākaroti を譯せるなり。この語は本來は解說說明する意なるが、名詞として veyyākaraṇa となり、普通授記と譯せらる、こゝの意味に死後の運命に關して說くことなり。

❺「身毛竪立」原文に lomāni naṭṭhāni は lomāni haṭṭhāni の誤植なるべし。

❻「偶然にも」とは原文 anacchariyaṁ とあるを註釋に anu-acchariyaṁ と解せるに從つて譯す。

❼充滿とは bindu (滴)を譯したるなり、水滴の全面等質なるが如きをいふ。

❽不亂は avisāri を譯す、明瞭にして分散せざるをいふ。

❾廣博とは ninnādi を譯す、聲廣く遠く響き渡るをいふ。

❿一身に。原文には ekante (一方に)とせると ekattena (身を以て)とせるとあり、今は後者の意にとる。

⓫「座に結跏趺坐し」原文には pallaṅkena nisiditvā とせると、pallaṅke pallaṅkena nisiditvā とせるとあり、今は後者に從ふ。

⓬原語 chanda-samādhi-padhāna-saṁkhāra-samannāgata これを漢譯にては欲定滅行成就と普通譯せども意味明瞭を缺く。殊にその滅とは padhāna (勤勇)を梵語化する時に誤りて prahāna (捨離)と見て譯せるなり。從つて益々意味不明となれり。

⓭心平和になるとは原文 vippasīdati を譯せるなり。

⓮次の生類とは恐らく一來者の次の不還者を指すならん。

⑮以上閣尼沙夜叉が毘沙門天王より聞きしまゝに世尊に語りしもの、又こゝにて世尊が阿難に語りたまひし語終る。以下は經の編者の言なり。

大典尊経（だいてんそんぎょう） (Mahāgovinda-sutta)

一九　大典尊經（マハーゴーギンダ・スッタンタ）

第一誦品

220

一　是（かく）の如く我（われ）聞く。一時、世尊王舍城靈鷲山中に在しぬ。爾の時、容貌端正なる、乾闥婆の子、五髻なるもの、夜の明けむとする頃、全靈鷲山を光明にて照し、世尊の所に來詣し、來詣し已りて世尊に敬禮して一方に坐せり。一方に坐せる乾闥婆の子、五髻は世尊に斯く言へり。

「世尊、我は三十三天の諸神より親しく聞き、親しく受けしものを世尊に告げまつらむと欲す」。

「五髻よ、汝は我に語るべし」と世尊は曰へり。

二　「世尊、昔、遙かなる昔、十五日布薩會自恣の日、滿月の夜、三十三天の一切の諸神、善法堂に集り會し、天人の一大會衆、普く一切方に坐し、四天王も四方に坐せり。

大智者の聲聞にして特に茲に來れるものは
容貌・榮光・壽命に於て他神に優れて輝く。
これを見て帝釋と共なる三十三天の諸神は歡喜す、
如來及び法の善法性に敬禮しつゝ。

222

世尊、之に依りて三十三天の諸神は更に一層歡喜、悅樂、喜悅、滿足して『實に諸天の衆團は榮え、阿修羅の衆團は衰へり』と言へり。

四　爾の時、世尊、天主帝釋は三十三天の諸神の歡喜を知り、三十三天の諸神に斯く言へり。

『諸賢よ、汝等は世尊の八無等法を聞かむと欲するや』。

『賢者よ、吾等は世尊の八無等法を聞かむと欲す』。

爾の時、世尊、天主帝釋は三十三天の諸神に世尊の八無等法を說示したり。

五　『汝等三十三天の諸神は如何に思惟するや、世尊は衆生の幸福の爲、衆生の安樂の爲、世間に對する同情の爲、人天の利益幸福安樂の爲に行動し給ふを。是の如く衆生の幸福の爲、衆生の安樂の爲、世間に對する同情の爲、人天の利益幸福安

即ち東方には持國天王、諸神を前にして西方に向つて坐し、南方には增長天王、諸神を前にして北方に向つて坐し、西方には廣目天王、諸神を前にして東方に向つて坐し、北方には多聞天王、諸神を前にして南方に向つて坐せり。世尊、三十三天の一切の諸神が善法堂に集り會し、天人の一大會衆、普く一切方に坐し、更に四大王も四方に坐する時には、これが彼等〔四天王〕の坐法なり、然る後に我等の座は加はれり。世尊、曾て世尊の下に梵行を修して新に三十三天の衆團に生れたるものは、容貌と榮光に於て、他神に優りて輝けり。故に世尊、三十三天の諸神は歡喜、悅樂、喜悅、滿足して「實に諸天の衆團は榮え、阿修羅の衆團は衰へり」と言へり。

三　爾の時、世尊、天主帝釋は三十三天の諸神の歡喜を知り、偈に依りて斯く讚嘆せり。

帝釋と共なる三十三天の諸神は實に歡喜す、
如來及び法の善法性に敬禮しつゝ、
善逝の下に梵行を修して玆に生れたる
美しき容貌と榮光とを得し新來の諸神を見て。

て弟子等に、涅槃に到るの道は善説せられ、涅槃と道とは結合せり。是の如く涅槃に到るの道の教示者、卽ち斯かる性質を有し給ふ教主を、我等は過去に於ても見ず、現在に於ても然り、そは唯世尊のみなり。

九　世尊は實に有學と聖道及び漏盡に到達せる〔阿羅漢〕と伴友となり、世尊は彼等を去りて[1]、一樂遊に心を傾けて住し給ふ。是の如く一樂遊に心を傾けたる、卽ち斯かる性質を有し給ふ教主を我等は過去に於ても見ず、現在に於ても然り、そは唯世尊のみなり。

十　世尊に對して實に利養が與へられ又名聞も與へられり[2]、他の王族等が歡喜に滿てる容貌をなしゐる間に、世尊は實に愛樂を離れて榮養を取り給へり。是の如く愛樂を離れて榮養を取れる、卽ち斯かる性質を有し給ふ教主を我等は過
224 去に於ても見ず、現在に於ても然り、そは唯世尊のみなり。

一一　世尊は實に語る如く實行し、實行する如く語り給ふなり。是の如く、語る如く實行し、實行する如く語り、法隨法を獲得せる、卽ち斯かる性質を有し給ふ教主を、我等は過去に於ても見ず、現在に於ても然り、そは唯世尊のみなり。

樂の爲に行動し給ふ、卽ち斯かる性質を有し給ふ教主を、我等は過去に於ても見ず、現在に於ても然り、そは唯世尊のみなり。

六　かの世尊の、直接功德の現はれ、時を定めず、何者をも歡迎し誘導し、知者に依りてその內心に知られ得る法は實に說示されたり。是の如く誘導的なる法の說示者、卽ち斯かる性質を有し給ふ教主を我等は過去に於ても見ず、現在に於ても然り、そは唯世尊のみなり。

七　「こは善なり」と實に世尊に依りて善說せられたり。「こは不善なり」と善說せられたり。「こは邪なり、こは正なり、こは從ふべきものなり、こは從ふべからざるものなり、こは劣なり、こは優なり、こは黑白調和なり」と善說せられたり。是の如く善惡邪正、從ふべきものと從ふべからざるものの劣優・黑白調和の法の教示者、卽ち斯かる性質を有し給ふ教主を、我等は過去に於ても見ず、現在に於ても然り、そは唯世尊のみなり。

八　世尊に依りて實に弟子等に、涅槃に到るの道は善說せられ、涅槃と道とは結合せり。恰も實に殑伽(ガンガー)河水が閻牟那(ヤムナー)河水と結びて合流するが如く、世尊に依り

世間に對する同情の爲、人天の利益幸福安樂の爲に」。

或る神々は斯く言へり

「諸賢よ、三人の等正覺者はさし措き、諸賢よ、若し二人の等正覺者が此の世に出現して、世尊の如く法を說き給はば如何。卽ち衆生の幸福の爲、衆生の安樂の爲、世間に對する同情の爲、人天の利益幸福安樂の爲に」。

225 **一四** 世尊、斯く問はれて天主帝釋は三十三天の諸神に斯く言へり。

「諸賢よ、一世界に於て二人の應供・等正覺者が、同時に出現し給ふ理由あることなし。諸賢よ、世尊は無病健在なれば永に生存し給ふべし。そは衆生の幸福の爲、衆生の安樂の爲、世間に對する同情の爲、人天の利益幸福安樂の爲なり」。

爾の時、世尊、三十三天の諸神が善法堂に集り會して論議したる問題を熟慮し思惟し已り、四天王はかの問題に關して、說かれ訓戒されたる言葉の受者となり、各自の座席を離れずして起ち居たり。

　四天王は、述べられたる言葉と敎訓とを聞き、
　心淸淨寂靜となりて各自の座席に起てり。

一二　世尊は實に疑惑を超越し、疑論を離脫し、欲望と第一梵行に對する思惟を完了し給ふ。是の如く疑惑を超越し、疑論を離脫し、欲望と第一梵行に對する思惟を完了せる、卽ち斯かる性質を有し給ふ敎主を、我等は過去に於ても見ず、現在に於ても然り、そは唯世尊のみなり」。

世尊、天主帝釋は、かの三十三天の諸神に世尊の八無等法を說示したり。世尊、是に依りて三十三天の諸神は世尊の八無等法を聞き、更に一層歡喜、悅樂、喜悅、滿足したり。

一三　世尊、こゝに於て或る神々は斯く言へり。

『諸賢よ、若し四人の等正覺者が此の世界に出現して、世尊の如く法を說き給はば如何。卽ち衆生の幸福の爲、衆生の安樂の爲、世間に對する同情の爲、人天の利益·幸福·安樂の爲に』。

或る神々は斯く言へり。

『諸賢よ、四人の等正覺者はさし措き、諸賢よ、若し三人の等正覺者が此の世に出現して、世尊の如く法を說き給はば如何。卽ち衆生の幸福の爲、衆生の安樂の爲、

は入らざるが故なり。世尊、常童梵天の三十三天の諸神の前に現はるゝ場合には、容貌に於ても榮光に於ても他の諸神に優れて輝く。恰も金像が人像に優れて輝くが如く、世尊、是の如く常童梵天の三十三天の諸神の前に現はるゝ場合には、容貌に於ても榮光に於ても、他の諸神に優れて輝くなり。世尊、常童梵天の三十三天の諸神の前に現はるゝ場合は、會衆中の何れの神も梵天に敬禮もせず起立もせず叉座に請ひもせず、一切は默して合掌趺坐し、「今、常童梵天にして若し何れかの神に希ふ所あらば、其の神の座に坐するならむ」と考ふ。世尊、常童梵天に依りて、其の座に坐せられたる神は、偉大なる歡喜と滿足とを得るに到る。世尊、
227 恰も刹帝利の王が將に王位に登り王位を繼がむとする時、偉大なる歡喜と滿足とを得るが如く、世尊、是の如く常童梵天に依りて其の座に坐せられたる神は偉大なる歡喜と滿足とを得るに到るなり。

一七 爾の時、世尊、常童梵天は三十三天の諸神の歡喜を知り、身を隱して偈に依りて斯く讃嘆せり。

　帝釋と共なる三十三天の諸神は實に歡喜す、

一五　時に、世尊、北方に當りて、偉大なる光明現じ光輝顯はれて、諸天の威神力を凌駕したり、時に世尊、天主帝釋は三十三天の諸神に告げて言く、

「諸天よ、相が見られ光明現じ光輝顯はれなば梵天出現せむ、卽ち光明現じ光輝顯はるゝは梵天出現の前相なり。

相の見らるゝや梵天出現せむ、

偉大なる光輝は梵天出現の相なればなり。

時に、世尊、三十三天の諸神は「かの光輝は如何なる結果を生ずるやを知らむと欲す、そを實現してその所に行かむ」と考へ各自の座席に著けり。四天王も亦「かの光輝は如何なる結果を生ずるやを知らむと欲す、そを實見して、其の所に行かむ」と考へ各自の座席に著けり。是を聞き已りて三十三天の諸神は「かの光輝は如何なる結果を生ずるやを知らむと欲す、そを實見して其の所に行かむ」と同意したり。

一六　世尊、常童梵天は三十三天の諸神の前に現はるゝ場合には麁なる形に化作して現はるゝなり。そは世尊、梵天の本來の容貌は三十三天の諸神の眼界に

爾の時、世尊、常童梵天は天主帝釋に斯く言へり。

「善き哉、天主帝釋よ、我等はかの世尊の八無等法を聞かむと欲す」。

「然り、大梵天よ」。

と答へて天主帝釋は常童梵天に世尊の八無等法を說示したり。

二〇　「爾、大梵天は如何に思惟するや。世尊は衆生の幸福の爲、衆生の安樂の爲、世間に對する同情の爲、人天の利益幸福安樂の爲に行動し給ふを。是の如く衆生の幸福の爲、衆生の安樂の爲、世間に對する同情の爲、人天の利益幸福安樂の爲に行動するかゝる性質を有し給ふ教主を我等は過去に於ても見ず、現在に於ても然り、そは唯世尊のみなり。

二一　かの世尊の、直接功德の現はれ、時を定めず何者をも歡迎し誘導し、知者に依りてその內心に知られ得る法が實に說示せられたり。是の如く誘導的なる法の說示者、卽ち斯かる性質を有し給ふ教主を我等は過去に於ても見ず、現在に於ても然り、そは唯世尊のみなり。

二二　「こは善なり」と實に世尊に依りて善說せられたり。「こは不善なり」と善說

如來及び法の善法性に敬禮しつゝ、
善逝の下に梵行を修して茲に生れたる
美しき容貌と榮光とを得たる新來の諸神を見つゝ、
大智者の聲聞にして特に茲に來れるものは、
容貌榮光壽命に於て他神に優れて輝く。
これを見て帝釋と共なる三十三天の諸神は歡喜す、
如來及び法の善法性に敬禮しつゝ。

一八　世尊、常童梵天は此の事を說きぬ。世尊、此の事を說ける常童梵天には八支を具有せる聲あり、卽ち明瞭・知的・美音快音・簡潔・短音、深音・大音なり。世尊、常童梵天が其の會衆に、此の聲を以て告ぐる時、その音聲はこれ以外の會衆には聞かれざるなり。世尊、是の如く八支を具有せる聲は梵音と稱せらるゝなり。

一九　爾の時、世尊、三十三天の諸神は常童梵天に斯く言へり『善き哉、梵天よ、そを我等は明かに喜ぶ、又天主帝釋に依りて、かの世尊の八無等法は說かれたるが、そも我等は明かに喜ぶなり』。

二五　世尊に對して、實に利養が與へられ又名聞も與へられたり。他[3]の王族等が歡喜に滿てる容貌をなしゐる間に、世尊は實に愛樂を離れて榮養を取り給へり。是の如く愛樂を離れて榮養を取れる、卽ち斯かる性質を有する教主を我等は過去に於ても見ず、現在に於ても然り、そは唯世尊のみなり。

二六　世尊は實に語る如く實行し、實行する如く語り給ふなり。是の如く、語る如く實行し、實行する如く語り、法隨法を獲得せる、卽ち斯かる性質を有し給ふ教主を、我等は過去に於ても見ず、現在に於ても然り、そは唯世尊のみなり。

二七　世尊は實に疑惑を超越し、疑論を離脫し、欲望と第一梵行に對する思惟を
230 完了し給ふ。是の如く疑惑を超越し、疑論を離脫し、欲望と第一梵行に對する思惟を完了せる、卽ち斯かる性質を有し給ふ教主を我等は過去に於ても見ず、現在に於ても然り、そは唯世尊のみなり」。

世尊、天主帝釋はかの常童梵天に世尊の八無等法を說示したり。世尊、これに依りて常童梵天は世尊の八無等法を聞き、歡喜、悅樂、喜悅、滿足したり。

二八　爾の時、世尊、常童梵天は麁なる容貌に化現して五髻を有する童子形とな

せられたり。「こは邪なり、こは正なり、こは從ふべきものなり、こは從ふべからざるものなり、こは劣なり、こは優なり、こは黑白調和なり」と善說せられたり。是の如く善惡邪正從ふべきもの從ふべからざるもの劣優・黑白調和の法の敎示者、卽ち斯かる性質を有し給ふ敎主を我等は過去に於ても見ず、現在に於ても然り、そは唯世尊のみなり。

二三　世尊に依りて實に弟子等に涅槃に到るの道は善說せられ、涅槃と道とは結合したり。恰も實に殑伽(ガンガー)河水が閻牟那(ヤムナ)河水と結びて合流するが如く、世尊に依りて弟子等に、涅槃に到るの道は善說せられ、涅槃と道とは結合したり。是の如く涅槃に到るの道の敎示者、卽ち斯かる性質を有し給ふ敎主を、我等は過去に於ても見ず、現在に於ても然り、そは唯世尊のみなり。

二四　世尊は實に有學と聖道及び漏盡に到達したる阿羅漢と伴友となり、世尊は彼等を去りて一樂遊に心を傾けて住し給ふ。是の如く一樂遊に心を傾けたる卽ち斯かる性質を有し給ふ敎主を我等は過去に於ても見ず、現在に於ても然り、そは唯世尊のみなり。

羅門には護明と稱する童子あり、父よりも賢明にして父よりも有爲聰明なり。父の輔佐したる國政は護明童子に輔佐せしむべし」。

「然るや、王子よ」。

「實に然り、父王よ」。

三〇　爾の時、城主王は他の臣に告げて言く「いでや、汝は護明童子の所に到り、到り已りて護明童子に傳ふべし。汝護明童子に[4]幸福あらむことを。城主王は汝護明童子に物語らむとす。城主王は汝護明童子を見むと欲すと」。

「諾、大王よ」と言ひて、かの臣は城主王の言に從ひ、護明童子の所に到り、到り已りて護明童子に斯く言へり、「汝護明童子に幸福あらむことを。城主王は汝護
232 明童子に物語らむとす。城主王は汝護明童子を見むと欲す」。

「諾、友よ」と答へ、護明童子はかの臣の言に從ひ、城主王の所に到れり、到り已りて城主王に敬禮し、親密なる對話と禮儀とを交して一方に坐しぬ。一方に坐せる護明童子に城主王は斯く言へり。

「汝、護明童子は我等を輔佐すべし、汝護明童子はその輔佐を拒絶する勿れ。我

り、三十三天の諸神の前に現はれ、空中に昇りて空中に趺坐したり。世尊、恰も偉力ある人が廣大なる椅子或は平地に趺坐するが如く、世尊、常童梵天は空中に昇り空中に趺坐して、三十三天の諸神に斯く告げたり。

二九 「三十三天の諸神よ、汝等は如何に思惟するや。世尊は幾何の間、大智者にて在せしや。

古昔、域主と稱する王あり、此の域主王に典尊と稱する婆羅門の帝師ありき。又域主王に黎努(レーヌ)と稱する王子ありき。典尊婆羅門には護明と稱する童子ありき。斯く黎努王子と護明童子と六人の刹帝利との八人が伴友となれり。程經
231 て典尊婆羅門は死せり。典尊婆羅門の死せる時、域主王は悲泣して斯く言へり。

「嗚呼、我等、典尊婆羅門に一切の國政を委付し、五欲に囚はれて娯樂に耽りゐたる其の時、典尊婆羅門は死せり」と。

斯く告げられたる時、黎努王子は域主王に言ひぬ。

「父王よ、典尊婆羅門の死に對して、斯くも烈しく悲泣する勿れ。父王よ、典尊婆

時、我等も不幸なり。域主王は年老い年長け老境に進み齢を重ねたり。誰か壽命を知らむ。域主王崩じなば恐らく王を立つる人々は爾、黎務を卽位せしめむ。爾若し王國を得ば我等にも王國を分與せむことを、と」

三三　「諸、友よ」と答へ、かの六人の刹帝利は大典尊婆羅門に同意して、黎務王子の所に到り、到り已りて黎務王子に斯く言へり。

「我等は爾、黎務王子の親愛にして友情深き伴友たり。爾の幸福なる時、我等も亦幸福なり、爾の不幸なる時、我等も亦不幸なり。域主王は年老い年長け老境に進み齢を重ねたり。誰か壽命を知らむ。域主王が崩じなば恐らく王を立つる人々は爾、黎務を卽位せしめむ。爾若し王位を得なば我等にも王國を分與せむことを」と。

「汝等を除きて、何人か我が王國に於て、幸福を增進せしむるを得む。若し我、王國を得なば汝等に王國を分與すべし」。

234 三四　爾の時、程經て域主王は崩御したり。域主王崩御したる時、王を立つる人々は、黎務王子を卽位せしめたり。王位を繼げる黎務王は五欲に囚はれて娛樂

は汝を父の地位に立たしめ、典尊位に卽かしめむ」。
「諸、王よ」と答へて護明童子は域主王に同意したり。

三一　爾の時、域主王は護明童子を典尊位に卽かしめ、父の地位に立たしめたり。典尊位に卽き父の地位に立てる護明童子は、父の輔佐したる事柄は總て自らも輔佐し、父が輔佐せざりし事柄は總て自らも輔佐せず、父が實行したる業作は總て自らも實行し、父が實行せざりし業作は總て自らも實行せざりき。從ひて彼に就きて、人々は「かの婆羅門は實に典尊なり、かの婆羅門は實に大典尊なり」と言へり。かるが故に護明童子に對して大典尊てふ名稱生じぬ。

三二　爾の時、大典尊婆羅門は、かの六人の刹帝利の所に到り、到り已りて彼の六人の刹帝利に斯く言ひぬ。

「域主王は年老い年長け老境に進み齢を重ねたり。誰か壽命を知らむ。域主
233 王崩じ給はば、恐らく王を立つる人々は黎努王子を卽位せしめむ。爾等は來りて黎努王の所に到れ、到る已りて黎努王子に斯く申すべし。我等は爾、黎努王子の親愛にして友情深き伴友なり、爾の幸福なる時、我等も幸福なり、爾の不幸なる

爾を呼ぶと申すべし」。

235 「諸大王よ」と言ひて、かの臣は黎努王の言に従ひ大典尊婆羅門の所に到り、到り巳りて大典尊婆羅門に斯く言へり、「卿よ、黎努王爾を呼ぶ」と。

「諸汝よ」と言ひて、大典尊婆羅門はかの臣の言に従ひ、黎努王の所に到り、到り巳りて黎努王に敬禮し、親密なる對話と禮儀とを交換して一方に坐せり。一方に坐せる大典尊に黎努王は斯く言へり。

「さて、典尊は北は廣がり南は車の前部の形をなす此の大地を、正に七分に分つべし」。

「諸大王よ」と言ひて黎努王の言に従ひ北は廣がり南は車の前部の形をなせる此の大地を正に七分に分ちて、總てを車の前部の形の如くになせり。

三六　其の中央に黎努王の國あり。

迦陵誡(カーリンガ)國の棕多布囉(ダンタプラ)城、摩濕摩迦(アッサカ)國の褒怛那(ポータナ)城と

晩帝那(アヴンティ)國の摩咽沙摩(マーヒッサティー)城と蘇尾囉(ソーヴィーラ)國の勞嚕迦(ロールカ)城と

尾提咽(ヴィデーハ)國の彌體羅(ミティーラー)城と鴦伽(アンガ)國の瞻波(チャンパー)城と

に耽りぬ。爾の時、大典尊婆羅門はかの六人の刹帝利の所に到り到り已りて六人の刹帝利に斯く言へり。

「汝等よ、域主王崩御して、畏敬すべき黎努王即位し、五欲に囚はれて娯樂に耽れり。汝等よ誰か知る、愛欲は人を迷はしむるものなり。汝等來りて黎努王の所に到り到り已りて黎努王に斯く申すべし。域主王崩御して、爾黎努王即位したり。爾はかの約束を記憶せるやと」。

「然り、友よ」と言ひて、かの六人の刹帝利は大典尊婆羅門に同意して、黎努王の所に到り、到り已りて黎努王に斯く言へり。

「域主王崩御して、爾黎努王即位したり、爾はかの約束を記憶せるや」。

「諸子よ、我、その約束を記憶す。されど誰か北は廣がり南は車の前部の形をなす此の大地を、正に七分に分ち能ふや」。

「大王よ、大典尊婆羅門以外の何人か能く爲し得む」。

三五 爾の時、黎努王は一人の臣に告げて言く、

「いでや、爾よ、汝、大典尊婆羅門に、黎努王は

237
三八　其の後、大典尊婆羅門には是の如き名聲揚れり。「大典尊婆羅門は親しく梵天を見、大典尊婆羅門は親しく梵天と話し語り評議す」と。

爾の時、大典尊婆羅門は斯く考へぬ。「我に對して是の如き名聲揚れり。「大典尊婆羅門は親しく梵天を見、大典尊婆羅門は親しく梵天と話し語り評議す」と。されど我は梵天を見ず、梵天と話し語り評議せず。我は耆宿婆羅門たる師の師等が、雨期の四箇月間、靜處に閑居して悲の禪定を修するものは、梵天を見、梵天と話し語り評議すと言へるを聞けり。いでや、我、雨期の四箇月間靜處に閑居して悲の禪定を修せむ」と。

三九　爾の時、大典尊婆羅門は黎努王の所に到れり、到り已りて黎努王に斯く言へり。「我に是の如き名聲揚れり。「大典尊婆羅門は親しく梵天を見、大典尊婆羅門は親しく梵天と話し語り評議す」と。されど、我は梵天を見ず、梵天と話し語り評議せず。我、耆宿婆羅門たる師の師等が、雨期の四箇月間、靜處に閑居して悲の禪定を修するものは、梵天を見、梵天と話し語り評議すと言へるを聞けり。故

迦戸國の波羅奈城とに分たれ、此等は典尊に依りて區分されり。

爾の時、かの六人の刹帝利は各自の所得を得、所願を成就して喜びて言へり「我等の欲し希望し計畫し願望したるものは我等に得られたり」と。

破宛王と梵授王と勝尊王と明愛王と

黎努王と二持國王と、此等は七婆羅多王なり。

第二誦品

三七　爾の時、かの六人の刹帝利は大典尊婆羅門の所に到り、到り已りて大典尊婆羅門に斯く言へり。「汝、典尊は黎努王の親愛にして友情深き件友なるが如く、汝、典尊は我等に對しても亦親愛にして友情深き件友なり。汝、典尊は我等を輔佐すべし、汝、典尊は我等に輔佐を拒絶する勿れ」。「諸、諸子よ」と言ひて大典尊婆羅門は此等六人の刹帝利に同意したり。爾の時、大典尊婆羅門は王位に登れる七人の刹帝利王に王政を輔佐し、又七人の富める婆羅門と七百の梵行期終了者に呪文を教授したり。

は親しく梵天と話し語り評議す」と。されど我は梵天を見ず、梵天と話し語り評議せず。我、耆宿婆羅門たる師の師等が、雨期の四箇月間、靜處に閑居して悲の禪定を修するものは梵天を見、梵天と話し語り評議すと言へるを聞けり。故に諸子よ、聞けるが如く、記憶するが如く、呪文を詳細に學習し、相互に呪文を敎ふべし我、雨期の四箇月間、靜處に閑居して悲の禪定を修せむと欲す。食事を運ぶもの以外、何人をも我に近づかしむる勿れ」。

「爾、典尊よ、時宜しと思はば行ふべし」。

239 **四二**　爾の時、大典尊婆羅門は身分を同じくする彼の四十の夫人等の許に到り、到り已りて、身分を同じくする彼の四十の夫人等に斯く言へり。

「我に是の如き名聲揚れり。『大典尊婆羅門は親しく梵天を見、大典尊婆羅門は親しく梵天と話し語り評議す』と。されど我は梵天を見ず、梵天と話し語り評議せず。我、耆宿婆羅門たる師の師等が、雨期の四箇月間、靜處に閑居して悲の禪定を修するものは梵天を見、梵天と話し語り評議すと言へるを聞けり。故に我、雨期の四箇月間、靜處に閑居して悲の禪定を修せむと欲す。食事を運ぶもの以外、

に我、雨期の四箇月間、靜處に閑居して悲の禪定を修せむと欲す。食事を運ぶものの以外、何人をも我に近づかしむる勿れ」。

「汝、典尊よ、時宜しと思はば行ふべし」。

238

四〇　爾の時、大典尊婆羅門は、かの六人の刹帝利の所に到り、到り已りて六人の刹帝利に斯く言へり。「我に是の如き名聲揚れり。『大典尊婆羅門は親しく梵天を見、大典尊婆羅門は親しく梵天と話し語り評議す』と。されど我は梵天を見ず、梵天と話し語り評議せず。我は耆宿婆羅門たる師の師等が、雨期の四箇月間、靜處に閑居して悲の禪定を修するものは梵天を見、梵天と話し語り評議すと言へるを聞けり。故に我、雨期の四箇月間、靜處に閑居して悲の禪定を修せむと欲す。食事を運ぶものの以外、何人をも我に近づかしむる勿れ」。

「汝、典尊よ、時宜しと思はば行ふべし」。

四一　爾の時、大典尊婆羅門は七人の富める婆羅門と七百人の梵行期終了者の所に到り、到り已りて七人の富める婆羅門と七百の梵行期終了者とに斯く言へり。「我に是の如き名聲揚れり。『大典尊婆羅門は親しく梵天を見、大典尊婆羅門

何人をも我に近づかしむる勿れ」。

「爾、典尊よ、時宜しと思はば行ふべし」。

四三　爾の時、大典尊婆羅門は城の東方に新講堂を作らしめ、雨期の四箇月間、靜處に閑居して悲の禪定を修し、食事を運ぶもの以外、何人も[5]彼に近づかざりき。爾の時、四箇月經過の後、大典尊婆羅門に失望と恐怖の念起れり。その故は、彼は耆宿婆羅門たる師の師等が、雨期の四箇月間、靜處に閑居して悲の禪定を修するものは梵天を見、梵天と話し語り評議すと言へるを聞けるに、今彼は梵天を見ず、梵天と話さず、梵天と語らず、梵天と評議せざるが故なり。

四四　爾の時、常童梵天は心に大典尊婆羅門の心の所念を知り、恰も壯士の臂を
240 屈伸する如き速さを以て、梵界より姿を消し大典尊婆羅門の面前に現はれぬ。
爾の時、大典尊婆羅門は未だ曾て見ざる貌を見、怖れ痲痺し戰慄したり。爾の時、慄き激動し身毛竪立せる大典尊婆羅門は、常童梵天に次の如き偈を以て問ひて言く、

「美貌と榮光と吉祥とを有する、主よ、爾は何人ぞ。

知らざるが故に爾に問ふ、
我等は如何にして爾を知り得む」。
「梵界に於ては神々は我を常童なりと知る。
一切の神は我を知る、典尊よ、汝も我を知れ」。
「牀座と洗足の水と熟蜜とは梵天の爲に存す、
その供物を[捧げて]我等は爾に問ふ。爾も吾等に供物を與へよ」。
「典尊よ、汝の言ふ其の供物を汝等の爲に我等は受く、
現法の利益の爲と來世の幸福の爲に
問を許すが故に凡て欲するを問ふべし」。

四五 爾の時、大典尊婆羅門は常童梵天より問ふことを許されて、常童梵天に現法の善利を問ふべきや、來世の善利を問ふべきやを考へぬ。

241 爾の時、大典尊婆羅門は現法の善利を熟知したれば却つて他人が彼に現法の善利を聞けり。故に來世の善利を常童梵天に問はむと考へぬ。

爾の時、大典尊婆羅門は常童梵天に偈を以て問へり。

「疑ある我は疑なき常童梵天に
他の人々も知らむと欲することに就きて問ふ
何處に住し何に於て學修して
人は不死の梵界に達し得るや」。
「婆羅門よ、人間に於て我執を捨て、
心一境相となり、悲の禪定に專心し、
臭穢を脱し、不淨法を遠離す。
此處に住し、此處に於て學ぶ人は
不死の梵界に達す」。

四六 「梵天よ、我は我執を捨つるの法を知る。人あり、大小何れにても財產を捨て、多寡何れにても親屬を捨て、鬚髮を剃除し、袈裟衣を著して在家より出家の生活に入るなり。梵天よ、これ我執を捨つる法なりと我は知る。梵天よ、心一境相をも亦我は知る。此の場合には、人は遠離の住處卽ち森林・樹根・山岳・洞窟・山洞・墓地・林藪・野外の藁場を得るなり。梵天よ、これ心一境相を得る法なりと我は知る。242

悲の禪定を專らにする法をも亦、我は知る。此の場合には、人は悲を伴へる心を以て一方を遍滿せしめて住す。是の如く第二方、是の如く第三方、是の如く第四方も然り。卽ち上下水平一切處に遍く、全世界をば、悲を伴ひ廣大無邊にして無寃無害の心を以て遍滿せしめて住す。梵天よ、これ悲の禪定を專らにする法なりと我は知る。

梵天よ、されど我は爾の言ふ臭穢を知らず。

243 「梵天よ、人間に於ける臭穢とは何ぞや。
それ等を知らざるが故に、賢者よ、今、爾は語れ、
何に依りて蔽はれて生類は惡臭を放ち、
梵界を閉ざされて惡趣に墮するや」。

「忿怒と妄語と僞瞞と不信と
貪婪と高慢と嫉妬と欲求と疑惑と他を害すると
貪欲と瞋恚と憍慢と愚痴と、
これに繋縛されなば臭穢を離れ得ず、

244

「我に諸欲の不滿あらず、又我を害する何人もなし、
超人の言を聞きて、我家居をば樂しまざるなり」。
「如何なるをか超人とはいふ、彼、何事をか汝に語れる。
そを聞きて汝は我等の家と我等一切を捨て去らむとは」。
「曾て我、犧牲を行はむと欲しそを擧行しにける時、
壇火燃え上り、吉祥草敷かれたり。
その時梵界より常童梵天現はれ、
我が問に答へり、そを聞きたる我は家居をば樂しまず。
「典尊よ、汝の言を我信ず、
超人の言を聞きては、他に方法ぞなき、
我等は汝に從はむ、典尊よ、汝は我等の教主たれ。
恰も高價にして清淨無垢、光輝を有する琉璃の如く
心清淨となりて我等は汝の訓諭を守らむ」。
「若し汝、典尊にして、在家より出家の生活に入るならむには、我も亦在家より出

梵界を閉ざされて悪趣には墮するなり」。

「爾の說ける臭穢をば我知りぬ。在家者にして此等を抑制せむこと不可能なるが故に、梵天よ、我、在家より出家の生活に入らむと欲す」。

「汝、典尊時宜しと思はゞ行ふべし」。

四七　爾の時、大典尊婆羅門は黎努王の所に到り、到り已りて黎努王に斯く言へり。「大王よ、王は今、王位を輔佐すべき他の帝師を求め給はむことを。我、在家より出家の生活に入らむと欲す。我、梵天の說ける臭穢を聞けり。在家者にして此等を抑制せむこと不可能なるが故に、大王よ、我、在家より出家の生活に入らむとす」。

「國土の主、黎努王に我、告げむ、
王位に關して王は熟知し給へ、帝師の官位を最早我樂しまず」。

「汝若し諸欲に於て不足あらば、我はそを滿さしめむ。
汝を害するものあらば、そを我排除せむ、我は國土の主、軍師なれば。
汝は我が父、我は汝が子なり、我を見捨てざれ、典尊よ」。

生活に入らむとす」。

四九　爾の時、かの六人の刹帝利は一處に集り、婆羅門は婦人を好む。故に我等は今、大典尊婆羅門をば、婦人に依りて誘はむと考へぬ。

彼等は大典尊婆羅門の所に到りて斯く言ひぬ。「この七王國には夥多の婦人あり、故に汝の欲するまゝの婦人を伴ひ去れ」と。

「その用無し、諸子よ、我には身分同じき四十の夫人あり。我は彼女等總てを捨てゝ在家より出家の生活に入らむとす。我は梵天の説ける臭穢を聞きぬ。在家者にして此等を抑制せむこと不可能なるが故に、諸子よ、我は在家より出家の生活に入らむとす」。

246 **五〇**　「若し汝、典尊にして在家より出家の生活に入らむには、我等も亦在家より出家の生活に入らむ。その故は汝の赴くところ卽ち、我等の赴くところなればなり」。

「若し汝、他の凡夫の[7]執著しつゝある諸欲を捨てむとせば、
堅固にして忍辱力を具足すべし。

家の生活に入るべし。その故は、汝の赴くところ卽ち我等の赴くところなればなり」。

四八　爾の時、大典尊婆羅門はかの六人の利帝利の所に到れり、到り巳りて斯く言ひぬ。「爾等は今、爾等の王位を輔佐すべき他の帝師を選ぶべし。諸子よ、我は在家より出家の生活に入らむと欲す。我、梵天の說ける臭穢を聞けり。在家者にして此等を抑制せむこと不可能なるが故に、諸子よ、我は在家より出家の生活に入らむとするなり」。

爾の時、六人の利帝利は一處に集りて、婆羅門は貪欲なるものなり、故に我等は今、大典尊婆羅門をば、財に依りて誘はむと考へぬ。

彼等は大典尊婆羅門の所に到りて斯く言へり。「この七王國には夥多の財産あり、故に汝の欲するまゝの量を取るべし」。

「その用無し、諸子よ、爾等の爲に、我夥多の財産を得たり。我は斯かる名譽を捨てゝ在家より出家の生活に入らむとす。我は梵天の說ける臭穢を聞きぬ。在家者にして此等を抑制せむこと不可能なるが故に、諸子よ、我は在家より出家の

247 知らむ。未來は行かれざるべからず。智は證せられざるべからず、善根は作されざるべからず、梵行は修せられざるべからず。生ある者には不死あることなし。我は梵天の說ける臭穢を聞きぬ。在家者にして此等を抑制せむこと不可能なるが故に、諸子よ、我は在家より出家の生活に入らむとす」。

「然らば汝、典尊は七箇月待つべし。七箇月經過せば我等も在家より出家の生活に入らむ。その故は汝の赴くところ即ち吾等の赴くところなればなり」。

五四 「諸子よ、七箇月は餘りに長し。我七箇月、爾等を待つ能はず。誰か壽命を知らむ。未來は行かれざるべからず。智は證せられざるべからず、善根は作されざるべからず、梵行は修せられざるべからず。生ある者に不死あることなし我は梵天の說ける臭穢を聞きぬ。在家者にして此等を抑制せむこと不可能なるが故に、諸子よ、我は在家より出家の生活に入らむとす」。

「然らば汝、典尊は六箇月待つべし…乃至…五箇月待つべし…乃至…四箇月待つべし…乃至…三箇月待つべし…乃至…二箇月待つべし…乃至…一箇月待つべし…乃至…半箇月待つべし。半箇月經過せば我等も在家より出家の生活に入

こは道なり、こは正道なり、こは無上道なり。

正法は梵界に生るゝ爲に善人に依りて守護せらる」。

五一 「然らば汝、典尊は七年間待つべし。七年間經過せば我等も在家より出家の生活に入らむ、その故は汝の赴くところ卽ち我等の赴くところなればなり」

「諸子よ、七年間は餘りに長し。我、七年の間、爾等を待つ能はず。誰か壽命を知らむ。未來は行かれざるべからず、智は證せられざるべからず、善根は作されざるべからず、梵行は修せられざるべからず、生ある者に不死あることなし。我、梵天の說ける臭穢を聞きぬ。在家者にして此等を抑制せむこと不可能なるが故に、諸子よ、我は在家より出家の生活に入らむとす」。

五二 「然らば汝、典尊は六年間待つべし……乃至……五年間待つべし……乃至……四年間待つべし……乃至……三年間待つべし……乃至……二年間待つべし……乃至……一年間待つべし。一年間經過せば我等も在家より出家の生活に入らむ、その故は汝の赴くところ卽ち我等の赴くところなればなり」。

五三 「諸子よ、一年間は餘りに長し、我一年の間、爾等を待つ能はず。誰か壽命を

出家の生活に入らむと欲す。我は梵天の説ける臭穢を聞けり、在家者にして此等を抑制せむこと不可能なるが故に、諸子よ、我は在家より出家の生活に入らむとす」。

「爾、典尊は在家より出家の生活に入る勿れ、出家は微力にして得る所少し、婆羅門たらば偉力あり、得る所多し」。

「出家は微力にして得る所少く、婆羅門たらば偉力あり得る所多しと言ふ勿れ。諸子よ、我以外の何人が、より偉大にしてより多く得る所ありや。我は實に今、王中の王なり、婆羅門に對する梵天なり、長者に對する神なり、我は此等一切をも捨離して、在家より出家の生活に入らむとす。我は梵天の説ける臭穢を聞けり、在
249 家者にして此等を抑制せむこと不可能なるが故に、諸子よ、我は在家より出家の生活に入らむとするなり」。

「若し汝典尊にして在家より出家の生活に入らむには、我等も亦在家より出家の生活に入らむ。その故は汝の赴くところ即ち我等の赴くところなればなり」。

五七　爾の時、大典尊婆羅門は身分の同じき四十の夫人の所に到り、到り已りて

らむとす、その故は汝の赴くところ卽ち我等の赴くところなればなり」。

五五　「諸子よ、半箇月は餘りに長し。我は半箇月、爾等を待つ能はず。誰か壽命を知らむ。未來は行かれざるべからず。智は證せられざるべからず、善根は作されざるべからず、梵行は修せられざるべからず。生ある者に不死あることなし。我は梵天の說ける臭穢を聞きぬ。在家者にして此等を抑制せむこと不可能なるが故に、諸子よ、我は在家より出家の生活に入らむとするなり」。

248
「然らば汝、典尊は、我等が子息或は兄弟に王國を委付すべき間の七日間待つべし。七日を經過せば我等も在家より出家の生活を入らむ。その故は汝の赴くところ卽ち我等の赴くところなればなり」。

「諸子よ、七日間は長からず、我は七日間爾等を待つべし」。

五六　爾の時、大典尊婆羅門は、かの七人の富める婆羅門と七百の梵行期終了者の所に到り、到り已りて七人の富める婆羅門と七百の梵行期終了者に斯く言へり。

「汝等は汝等に呪文を敎授する他の軌範師を求むべし。諸子よ、我は在家より

時、人々は噴嚏し或は蹪く毎に「大典尊婆羅門に歸命す、人師に歸命す」と言へり。

五九　大典尊婆羅門は慈を伴へる心を以て一方を遍滿せしめて住したり、是の如く第二方、是の如く第三方、是の如く第四方も然り。卽ち上下水平一切處に遍く、全世界を、慈を伴ひ廣大無邊にして無寃無害なる心を以て遍滿せしめて住したり。悲を伴へる心を以て、…乃至…喜を伴へる心を以て…乃至…捨を伴へる心を以て一方を遍滿せしめて住したり。是の如く第二方、是の如く第三方、是の如く第四方も然り。卽ち上下水平一切處に遍く、全世界を、捨を伴ひ廣大無邊にして無寃無害なる心を以て遍滿せしめて住し、弟子等に梵天と伴友たるの道を示したり。

六〇　その時、大典尊婆羅門の弟子にして十分に一切の敎を了解したるものは、死後幸ある梵界に生れたり。十分に一切の敎を了解せざりしものにして死後、或る者は他化自在天と伴友たるを得、或る者は化樂天と伴友たるを得、或る者は兜率天と伴友たるを得、或る者は夜摩天と伴友たるを得、或る者は三十三天と伴
251 友たるを得、或る者は四天王天と伴友たるを得たり。最低の身を得たる者と雖

身分の同じき四十の夫人に斯く言へり。「若し欲するならむには、自家或は親屬の家に歸り、他の夫を選ぶべし、我は在家より出家の生活に入らむと欲す。我は梵天の說ける臭穢を聞けり、在家者にして此等を抑制せむこと不可能なるが故に、我は在家より出家の生活に入らむとす」。

「爾は我等の親屬を欲するもの丶親族なり、又爾は夫を欲するもの丶夫なり。若し爾、典尊にして在家より出家の生活に入らむには我等も在家より出家の生活に入らむ。その故は爾の赴くところ卽ち我等の赴くところなればなり」。

五八　爾の時、大典尊婆羅門は、七日を過ぎて、鬚髮を剃除し袈裟衣を著し、在家より出家の生活に入りぬ。七人の王位にある刹帝利、七人の富める婆羅門、七百の梵行期終了者、身分を同じくする四十の夫人、幾千の刹帝利、幾千の婆羅門、幾千の長者、婦人の群集より來れる幾多の婦人等は、鬚髮を剃除し袈裟衣を著け、出家せる大典尊婆羅門の後を追ひて出家したり。この會衆に圍繞せられて大典尊婆羅門は、村落・市町・都會の間を遊行したり。大典尊婆羅門は村落或は市町に到る每に王中の王となり、婆羅門に對する梵天となり、長者に對する神となりぬ。當

も乾闥婆身を得たり。
此等一切の善男の出家は有效にして空しからず、果實と[8]效果とを齎したり」と」。

六一　「五髻の言く」「世尊は記憶し給へるや」。

「世尊の曰く」「五髻よ、我記憶す。我は其の時、大典尊婆羅門なりき。我はかの弟子等に梵天と伴友たるの道を示したり。然れども五髻よ、此の梵行は厭汚離欲・滅・寂靜・神智力・正覺・涅槃に導くの法に非ずして、單に梵界に生るゝの法なり。然るに五髻よ、我が梵行は究竟の厭汚・離欲・滅・寂靜・神智力・正覺・涅槃に導くの法なり。こは八聖道にして卽ち正見・正思・正語・正業・正命・正精進・正念・正定なり。五髻よ、この梵行こそ究竟の厭汚離欲・滅寂靜・神智力・正覺・涅槃に導くの法なり。

六二　五髻よ、我が弟子にして、十分に一切の敎を了解したるものは、[9]漏を滅して無漏の心解脫・慧解脫を、現在に於て自ら現證し、神通を得て住す。十分に一切の
252 敎を了解せざるもの丶或る者は、五下分結を斷じ、涅槃を得て、此の世に再び還らざる法の所有者の住所に、父母なくして再生す。又十分に一切の敎を了解せざ

るもの丶或る者は三結を斷じ、更に貪瞋·痴を次第に滅じて斯陀含となり、一度此の世に還りて苦の終滅をなす。又十分に一切の教を了解せざるもの丶或る者は、三結を斷じて須陀洹となり、惡趣に墮すべき法を離れ必定正覺を成ずべき位に達す。五髻よ、此等一切の善男子の出家は、有效にして空しからず、果實と效果とを齎したり」

世尊は斯く語り給へり。歡喜せる乾闥婆の子五髻は、世尊の所說に滿足し感謝し、世尊を禮し右繞の禮をなして退きぬ。

註❶「去りて」apanujja は apanudati の不變分詞と見る。
❷「他の」は底本に maññe とあれど、aññe の義に取れり。註❸を見よ。
❸「他の」は底本に maññe とあれど、一本は aññe とあれば、今是に依る。
❹「幸福」、原語の bhava は中性として譯したり。
❺底本に nāssuda とあれど一本に nāssa とあり。今是に從ふ。
❻「犧牲を行はんと欲し」は、底本に yatthu-kāmassa とあれど一本に yiṭṭha-kāmassa とあるに依る。

大会経(だいえぎょう) (Mahāsamaya-sutta)

阿部(あべ)訳

❼「執著する」、底本に ārabhavho とあれど一本は āraṃbho とあるに依る。
❽「效果」、底本に sa-uddisā とあれど一本に sa-udrayā とあるに依る。
❾「漏」、底本に āsāvānaṁ とあるも āsavānaṁ の誤なるべし。

二〇 大會經（マハーサマヤ・スッタンタ）

253 一 是の如く我聞く。

一時、世尊、釋迦族の地、迦毘羅城の大園林に於て、總て阿羅漢なる五百の大比丘衆と倶に住し給へり。而して十方世界より許多の諸天、世尊と比丘衆に見えむが爲に集ひ來れり。

二 時に、四淨居天は謂へり。

「今や、かの世尊は釋迦族の地なる迦毘羅城の大園林に於て、總て阿羅漢なる五百の大比丘衆と倶に住し給ふ。而して十方世界より許多の諸天、世尊と比丘衆に見えむとて集ひ來れり。我等も亦世尊の所に到り、到り已つて世尊の御前に於て、各々偈を唱へなば如何」と。

三 斯くて、彼等諸天は、譬へば大力士の屈したる臂を伸ばし、伸ばしたる臂を屈

254 するが如く、その如く〔速に〕淨居天より消え失せて世尊の御前に現れたり。其

の時、彼等諸天は世尊に禮拜して一方に立てり。一方に立ちたる一天は、實に世尊の御前にて次の偈を唱へたり。

「此の園林に於ける大會は
諸天族の來集するところ
吾等亦此の法會に來れり
無能勝なる僧伽を見むとて」と。

其の時、他の天は世尊の御前にて次の偈を唱へたり。

「こゝなる諸比丘は心を安靜にし
精神を正しくせり
恰も御者の手綱を執るが如く
諸の賢者は諸根(こん)を保護す」と。

其の時、他の天は世尊の御前にて次の偈を唱へたり。

「羈絆を斷ち、門閂を切斷し
城門の柱石を破碎し、欲を離れて遊歩す

離垢清淨にして具眼の彼等は
恰もよく馴らされたる若き象の如し」と。

255 次に、他の天は世尊の御前にて次の偈を唱へたり。

「佛に歸依する者はみな
惡趣に赴くことぞなき
人身を捨てゝ天身を
まどかにこそは得るなれ」と。

四　其の時、世尊は諸の比丘衆に告げて曰へり。

「比丘等よ、十方世界より許多の諸天來り會せり、世尊及び比丘等に見えむとて。比丘等よ、誰にてもあれ、遠き往昔に於て應供・等正覺たりし者には、其等の世尊の爲に、此等最高の諸天の集はありしなり、恰も、今日、我が爲にあるが如く。比丘等よ、誰にてもあれ、遠き未來に於て應供・等正覺たらむ者には、其等の世尊の爲に、此等最高の諸天の集はあるべし、恰も今日我が爲にあるが如く。比丘等よ、我、汝等の爲に諸天族の名を告げむ。比丘等よ、我、汝等の爲に諸天族の名を宣言せむ。

比丘等よ、我、汝等の爲に諸天族の名を教示せむ。そをよく聽きて憶念せよ。我、汝等に告げむ」。

「世尊、仰せの如くなさむ」と彼等比丘衆は應へぬ。

世尊は次の如く曰へり。

五　我、偈を摸擬すべし

地ある處、其處に彼等〔諸天〕は寄托す

山窟に住する者は

心決定して確固たり

恰も竪立せる毛髮を有しつゝも

屈縮する多くの獅子の如く

潔白なる心を持ち

清淨にして清澄明白なり

256 迦毘羅城の園林に

五百餘多〔の弟子〕あるを知りて

六

教を喜ぶ弟子等に
教主は告げて曰へり
「天族は近づき來れり
比丘等よ、彼等をよく識知せよ」と
佛陀の教を聞きて
彼等は熱心となれり。
かの〔比丘等〕には明白に
非人の相の識生ぜり
或る者は百を見
さてはまた七萬を〔見〕
或る者はまた非人の
百千を見たり
或る者はまた無邊數を見たり
總ての方處に許多ありき

彼等總ての諸天を知りて
具眼の師は說明して
敎を喜ぶ弟子等に
やがて告げて曰へり
「天族は近づき來れり
比丘等よ、彼等を識知せよ
その彼等を我讚詩もて
次第正しく汝等に宣べむ。
迦毘羅城地の夜叉
〔その數〕正に七千
神通を具し光明を有し
儼容あり名聲あり
彼等は歡喜しつゝ進み來れり
比丘衆の集ふ園林に。

雪山の夜叉六千
各々異なる容色あり
神通を具し光明を有し
儼容あり名聲あり
彼等は歡喜しつゝ進み來れり
比丘衆の集ふ園林に。
娑多(サーター)山の夜叉三千
各々異なる容色あり
神通を具し光明を有し
儼容あり名聲あり
彼等は歡喜しつゝ進み來れり
比丘衆の集ふ園林に。
都合夜叉一萬六千
各々異なる容色あり

257 八

神通を具し光明を有し
儼容あり名聲あり
彼等は歡喜しつゝ進み來れり
比丘衆の集ふ園林に。
毘波密(ヱッサーミッタ)の夜叉五百
各々異なる容色を有し
神通を具し光明を有し
儼容あり名聲あり
彼等は歡喜しつゝ進み來れり
比丘衆の集ふ園林に。
毘富羅(ヱーブラ)山に住せる
王舍城なる金毘羅(クンビーラ)神
百千より多くの夜叉は
彼に奉仕す

九

王舎城なるかの金毘羅神も
また園林の集(つどひ)に來れり。
而して提頭頼吒(ダタラタ)(持國)天王は
東方を支配す
彼は諸の乾闥婆(ガンダッベ)の長(おさ)にして
名聞ある大王なり
彼には許多(あまた)の子あり
皆因陀羅(インダ)と字(あざな)して大力有り
神通を具し光明を有し
儼容あり名聲あり
彼等は歡喜しつゝ進み來れり
比丘衆の集ふ園林に。
次に毘樓勒(ボンルーラ)(増長)天王は
かの南方を支配す

彼は諸の鳩槃荼(クンベンダ)の長にして
名聞ある大王なり
彼に叉許多の子あり
皆因陀羅と字して大力あり
神通を具し光明を有し
儼容あり名聲あり
彼等は歡喜しつゝ進み來れり
比丘衆の集ふ園林に。
次に毘樓博叉(ザルーハッカ)(廣目)天王は
西方を支配す
實(げ)に彼は諸龍の長にして
名聞ある大王なり
彼に叉許多の子あり
皆因陀羅と字して大力あり

258

神通を具し光明を有し
儼容あり名聲あり
彼等は歡喜しつゝ進み來れり
比丘衆の集ふ園林に。
次に倶毘羅（クヹーラ）(多聞)天王は
かの北方を支配す
實に彼は諸夜叉の長にして
名聞ある大王なり
彼に又許多の子あり
皆因陀羅と字して大力あり
神通を具し光明を有し
儼容あり名聲あり
彼等は歡喜しつゝ進み來れり
比丘衆の集ふ園林に。

東方に提頭賴吒天王
南方に毘樓勒天王
西方に毘樓博叉天王
北方に倶毘羅天王
此等四天王は普く四方を照しつゝ
迦毘羅城の園林に立ちぬ。

一〇

彼等の幻僞あり虛妄にして
惡心ある部下は來れり
摩野(マーヤ)、クテーンドゥ、エーテーンドゥ
ギトゥッチ及びギトゥッチャと共に
旃陀那(チャンダナ)と加摩世致(カーマセッタ)と
迦尼延豆(キンヌガンドゥ)と尼延豆(ニガンドゥ)と
波那𢮦(パナーダ)と嗚呼枚奴(オーパマンニャ)と
天の御者なる摩頭羅(マータリ)と

乾闥婆(ガンダッベ)の支多羅斯那(チッタセーナ)と
那羅(ナラ)王と闍尼沙(ヂャネーサベ)と
珍浮樓(ティンバルー)と修利婆折斯(スリヤヷッチャサー)と
般闍尸呵(パンチャシカ)も亦來れり
此等と其の他の諸王と
諸の乾闥婆も諸王と共に
歡喜しつゝ進み來れり
比丘衆の集ふ園林に。
その時那陀瑟(ナーバサ)龍は
毘舍離怛叉迦(ヹーサーラタッチャカ)と共に來れり
加毘羅攝(カンベラッサタラ)と波耶伽(バーヤーガ)は
親族と共に來れり
ヤームナ、提頭賴吒(ダタラッタ)の
名聲ある諸龍は來れり

かの大龍伊羅婆陀(エーラーヷナ)も亦
集ひの園林に來れり。
かの速に龍王を運び去り
淨眼あり翼ある天の再生者(鳥)なる
彼等は天空より園林の眞中に飛來しぬ
美しき金翅鳥とはその名なり
その時諸龍王には怖畏無かりき
金翅鳥を(避難する)安隱所を
佛は造り給へばなり
互に愛語もて呼びかけつゝ
諸龍と諸の金翅鳥とは
佛に歸依したり。

一二

金剛手の爲に打ち負かされたる
阿修羅は海に住す

彼等は婆三婆の同胞にして
神通を具し名聲あり
大怖畏の諸のカーラカンチャ阿修羅
ダーナヱガサ
毘摩質多、蘇喞怛囉と
波羅陀、那無夷と共に
又凡て毘盧遮と稱する
跋黎の子等一百は
有力なる軍勢羅耶跋兜樓を糾合せり
❶「諸賢者よ、今日の集會は
比丘衆の園林の集ひなり」とて
水・地・火・風の諸天も
そこに到來せり
水天及び水天族

蘇摩耶舍(ソーマヤサス)の諸天と共に
慈悲天の一族は
名聲ある諸天なり。
　此等十の十種天族は
各々異なる容色あり
神通を具し光明を有し
儼容あり名聲あり
彼等は歡喜しつゝ進み來れり
　比丘衆の集ふ園林に。

一四

鞞弩(ヹーンフ)(毘紐)と舍伽利(サヘーリー)の諸天と
アサマと雙子のヤマと
月天の諸侍者は
月天に供奉して來り
日天の諸侍者は

日天を恭敬して來り
遲々たる雲神は
諸星に侍(はべ)りて來り
諸の婆藪天の主婆娑婆(ヷーサヴ)(即ち帝釋
〔又の名〕プリンダダも亦到來せり
此等十なる十種の天族は
各々異なる容色あり
神通を具し光明を有し
儼容あり名聲あり
彼等は歡喜しつゝ進み來れり
比丘衆の集ふ園林に。

一五 その時諸のサハブ天は來れり
燃ゆる[2]火焰の頂の如くにて
阿栗吒(アリッタカ)と樝耶(ローヂャ)天は

麻の華の風情にて
嚩嚕拏(ヴルナ)天と遮婆陀暮(サハダンマ)天と
阿周陀(アッチユタ)と阿尼輸(アネーヂャカ)天と
輝しきスーレーヤは來り
毘沙門伊邐(ヴーサヴネーシ)も亦來れり
此等十なる十種の天族は
各々異なる容色あり
神通を具し光明を有し
儼容あり名聲あり
彼等は歡喜しつゝ進み來れり、
比丘衆の集ふ園林に。

一六

睒摩(サマーナ)と摩呵睒摩(マハーサマーナ)と
麼奄沙(マーヌサ)と摩奄疏多摩(マーヌスッタマ)と
乞陀波頭邐(キッダーパドゥーシカ)は來り

摩㝹波頭灑も亦來れり、
その時呵羅の諸天と
紅衣を著けたるローヒタ諸天は來り
名聲ある諸神波羅
摩訶波羅も來れり。

此等十なる十種の天族は
各々異なる容色あり。
神通を具し光明を有し
儼容あり名聲あり
彼等は歡喜しつゝ進み來れり
比丘衆の集ふ園林に。
叔伽、阿羅那、伽羅摩
鞞摩尼娑は共に來れり
鳴娑提奇呵を始として

鞞波羅微那の諸天は來れり
薩陀摩多、ハーラガヂャと
名聲ある彌沙も來れり
四方に雨降らす波純提は
雷鳴を轟しつゝ來れり
此等十なる十種の天族は
各々異なる容色あり
神通を具し光明を有し
儼容あり名聲あり
彼等は歡喜しつゝ進み來れり
比丘衆の集ふ園林に。

261
一八

差摩、兜率、夜摩
及び伽沙の名聲あるもの
藍鞞と主なる藍婆天と

火天の樹提と伊灑天と
化樂の諸天は來り
又、他化自在の諸天も來れり
　此等十なる十種の天族は
各々異なる容色あり
神通を具し光明を有し
儼容あり名聲あり
彼等は歡喜しつゝ集み來れり
比丘衆の集ふ園林に。

一九

此等六十の天族等は
各々異なる容色あり
名と種族とに從ひて
他の等しき諸天と諸共に
「斯く言ひつゝ」來れり

「我等をして見せしめよ
生を捨て三毒の杭を抜き取れる者
暴流を渡りたる無漏の者を
〔彼等は〕恰も暴流を渡れる龍[3]の如く
闇黒を出でたる月の如くならむ」と。

二〇

神通具足者の子なる
善梵天パラマッタと共に
かの常童子なる底沙（ティッサ）も亦
園林の會集に來れり
大梵天は千の梵界に
王として君臨す
彼は光輝を具足し
怖畏すべき體軀を有し名聲あり
こゝに各々自在を有する

二一

十の自在者は來れり
それ等の眞中にハーリタは
圍繞せられて來れり。
因陀羅、梵天と共に來れる
彼等總ての諸天に對して
魔軍は「進み行け
見よ、カンハの緩漫きを
いざ、縛せよ、捕へよ、
❹彼は實に愛欲に縛せらるべし
四方より圍め
誰にてもあれ彼を解放たざれ」と。
かくて玆にマハーセーナは
カンハの軍を遣はせり
手もて地の面を打ちつゝ

恐ろしき響を爲して
恰も雨期の雲の
電光と共に雷鳴せる如くなりき
それより彼は忿怒しつゝ
自制し得ずして退散せり。
而してその總てを知りて
具眼の師は説明して
教を喜ぶ弟子等に
やがて告げて曰へり
「魔の軍進み來れり
比丘等よ、彼等を識知せよ」と
彼等は佛の教を聞きて緊張しぬ
愛欲を離れたる人々よゝ
彼等魔軍は退却せり

一筋の毛髪だに動搖せしめ得で
戰は總て勝利に歸し
怖畏は過ぎ去りて譽高し
〔此を〕聞ける彼等衆生は
諸天と共に歡喜しぬ、と。

註❶ 底本には bhaddan とあれど、西藏譯並に高楠博士編巴利語讀本の大會經には bhadante とあるに據りて「諸賢よ」と譯したり。

❷ 「火焔の頂」jalam aggisikha を、西藏譯は jala を「水」と讀み、從つて jalam aggisikha を「水火の頂」となせり。

❸ 龍（naga）を西藏譯は「象」となせり。

❹ 「彼」を西藏譯には Gotama（瞿曇）となせり。

二一 帝釋所問經(サッカパンハ・スッタンタ)

第一誦品

263 一 是の如く我聞く。

一時、世尊、摩揭陀に住り給ひ、王舍城の東なるアンバ・サンダーてふ婆羅門聚落の北、毘陀山因陀娑羅窟に在ませり。其の時、天主帝釋には世尊に見えむとの渴仰生ぜり。

斯くて彼惟へらく「今いづこに世尊・應供・等正覺は在ますや」と。而して天主帝釋は世尊が摩揭陀に住り給ひ、王舍城の東なるアンバ・サンダーてふ婆羅門聚落の北、毘陀山因陀娑羅窟に在ますを見たり。彼、見まつりて忉利諸天に言ひけらく、

「諸天よ、かの世尊は摩揭陀に住り給ひ、王舍城の東なるアンバ・サンダーてふ婆羅門聚落の北、毘陀山因陀娑羅窟に在ませり。いま我等、かの世尊應供・等正覺に

見えむが爲、詣でなば如何に」。

「さなり、卿にさかえあれ」と忉利諸天は天主帝釋に諾ひける。

二 次に天主帝釋は乾闥婆子、般遮翼(五髻)に言ひけらく「般遮翼よ、かの世尊は摩
264 揭陀に住り給ひ、王舍城の東なるアンバ・サンダーてふ婆羅門聚落の北、毘陀山、因陀娑羅窟に在ませり。般闍翼よ、今我等、かの世尊應供等正覺に見えむ爲、詣でなば如何に」。

「さなり卿にさかえあれ」と帝釋に諾ひて乾闥婆子般遮翼はベールヷ木の黃なる琴を把りて、天主帝釋の隨行に加はりぬ。

斯くて天主帝釋は忉利諸天に圍繞せられ乾闥婆子、般遮翼を隨へ、恰も力士が腕の曲げたるを伸ばし、はた伸ばしたるを曲ぐるばかりの隙に、忉利天より姿を沒して摩揭陀の王舍城の東なるアンバ・サンダーてふ婆羅門聚落の北、毘陀山に顯れたり。

三 其の時、毘陀山は甚々しく赫き亘り婆羅門聚落アンバサンダーも亦然なりき。これ諸天の神威によるなり。而して四邊の聚落にては諸人斯く言ひたり。

「毘陀山は今、正に火つきて燃え、焰上り居れり。何故いま毘陀山は甚々しく赫き亘り、婆羅門聚落アンバ・サンダーも亦然るぞや」。彼等悚れて毛髪竪立したり。

四　さるほどに天主帝釋は乾闥婆子、般遮翼に言ひけらく、

265 「やよ、般遮翼、およそ禪定を行じ禪定を悦び頓に靜居し給へる如來は、我如き者には近づき難きぞかし。されば汝いま先づ世尊を怡しまつれ、而して後、我等かの世尊應供・等正覺に見えむが爲に詣でなば如何に」。

「さなり、卿にさかえあれ」と乾闥婆子、般遮翼は天主帝釋に諾ひ、ベールヴァ木の黄なる琴を把りて因陀娑羅窟に到り、到り已りて「世尊が我より遠きに過ぎず近きに過ぎず在まさむには、我が聲を聞き給ふべし」とて一方に立ちぬ。一方に立ちたる乾闥婆子、般遮翼はベールヴァ木の黄なる琴を彈じて、佛と法と聖者と愛樂とに綺へるこの歌をうたへり。

五　「日の如かぐよふ跋陀よ
　　爾の父御、耽浮樓をわれ拜む
　　そは、麗女よ、わが歡びの因なる

「おんみ」を生れさせたればなり。
汗づく人にうれしき風
または渇（かわ）けるものに水
はた聖者（ひじり）に御法（みのり）のごとく
爾（おんみ）われに愛（めで）たき天女なり。
いたづける人にくすり
はた飢ゑたるものに食
「そのもころ」跛陀（バッダイ）よ
もゆるが如き「わが思ひ」を
「所作（しよさ）の」水もてしづめよ。
水冷たく花末（はなのと）みてる蓮池に
陽（ひ）のほてりもて苛（いら）なけく
やかれし象の「入るが」ごとく
おんみの胸肚（ふところ）に吾いりなむ。

また鉤鎗かなはぬ象にも似て
やり突棒はわれにやぶられ
目立たしきおんみの美奶に
われはいとゞくるほされて
なす術をさらに知らざるなり。
おんみに思ひ泥みては
わが心のさまも變りて
鉤のみし魚かとばかり
たちかへり得ざるなれ。
むかもゝ美しき跋陀よ、
抱糾れ、われを優しき眸に摧け
眞玉手さし纏けよろしめよ
われひたすら此を欲せり。
あゝこの波髮の愛女に

267

わが戀はつゆ和(のど)められず
聖者(ひじり)に供物(くもつ)のそれに似て
彌(いや)ましに成り行けるを。
悉身(みすがら)うつくしき嬌女(たをやめ)よ
かゝる聖者(ひじり)にわが爲せし
善ごんは凡ておんみの共(むた)
われにそのみを結べかし。
身すがら美しきたをやめよ
この世に於てわがなせし
功德は凡ておんみのむた
われにその果(み)をむすべかし。
日の如(もころ)かぐよふ愛女(えをとめ)よ
釋迦牟尼佛が禪定により
一心·聰慧·正念にして

常住を求めたまふが如く
われはおんみを欲(ほり)せり。
さては釋迦牟尼佛が
無上正覺にいたりて
怡(うら)ぎたまふにも似て
よろしめよ、われもまた
おんみと契りえて悦ぶ。
はた忉利天主帝釋が
御惠を垂れたまはゞ
跋陀(バッダー)よ、われは爾(おんみ)を
願ひ求めむ、鳴呼かくも
わが戀はつよきものを。
賢慧(さか)しめよ、おんみの
はな咲きてまもなき

沙羅の如く〔かゞやかしき〕
父御をわれ伏しをろがむ
その息女かくも〔よければ〕」。

六　歌をはりて世尊は乾闥婆子、般遮翼に曰はく、

「般遮翼よ、いま汝の歌聲は絃音に和し、絃音また歌聲に和す、而してその歌聲は絃音に劣らず、絃音また歌聲に劣らず。そも佛と法と聖者と愛樂とに綺へる此の歌を、汝いづれの時にかとり萃めたる」。

「世尊、初めて世尊の正覺を成じ給ひし時、鬱鞞羅に住り給ひ、尼連禪河の岸なる
268 阿闍惒羅榕樹の下に在せり。世尊、其のみぎり乾闥婆王浮耽樓に、日の如かぐよふ跋陀てふ姫ありけるが、我そを憬れはべりぬ。然るにかの姫はあだし男を偲べりて、御者摩兜麗の子、戸漢陀てふ者に思を寄せたり。我かの姫を如何なる手だてにても覓ぎかね侍りしかば、卽ちベールヷ木の黄なる琴を把りて、乾闥婆王耽浮樓の宮居に到れり。我、到りてベールヷ木の黄なる琴を彈じ、佛と法と聖者と愛樂とに綺へるこの歌をうたひ侍りぬ。

七

『日の如(もころ)かぐよふ跋陀よ
爾(おんみ)の父御、耽浮樓をわれ拝(をろが)む
そは麗女(よろしめ)よ、わが歡びの因(もと)なる
〔おんみ〕を生れさせたればなり。

……乃至……

賢慧(さか)しめよ、おんみの
はな咲きてまもなき
沙羅の如く〔かゞやかしき〕
父御をわれ伏しをろがむ
その息女(むすめご)かくもよければ』。

斯く歌ひ已るや、日の如(もころ)かぐよふ跋陀は、我に言ひけらく、
『我は世尊をまのあたり見まつらされど、世尊のおんことは忉利天の善法堂にて奏舞のみぎり、聞きまつりぬるを。さても卿(おんみ)が世尊を讃嘆したまへれば、今やわれらは逢はなむ』と。

269 而して世尊、その時ならざりしが、後にかの姫と我は逢ひはべりぬ」。

八　さるほどに天主帝釋惟へらく、
「げに乾闥婆子、般遮翼は世尊と、また世尊は般遮翼と、かたみに誼を結べり」と。
斯くて天主帝釋は乾闥婆子、般遮翼に言ひけらく、
「やよ、般遮翼、汝我がため、世尊に「天主帝釋は宰相扈從と共に世尊の御足に頂禮しまつる」と言上せよ」と。
「さなり、卿にさかえあれ」と乾闥婆子、般遮翼は天主帝釋に諾ひて世尊に白さく、
「天主帝釋は宰相扈從と共に、世尊の御足に頂禮しまつる」。
「やよ、般遮翼、天主帝釋は、宰相扈從の共さきくあれ。幸こそ神・人・阿修羅・龍・乾闥婆また其のほかに有りとある諸衆は之を欲すれば」と。
凡そ如來は斯かる上衆には、斯く挨拶し給ふなり。世尊に挨拶せられたる天主帝釋は、因陀娑羅窟に入り、世尊を拜して一方に立ち、忉利諸天と乾闥婆子、般遮翼も亦因陀娑羅窟に入り、世尊を拜して一方に立ちぬ。

九　其の時、因陀娑羅窟は、平かならざるに坦々となり、狹きに恢々となり、暗き窟

270 内も明るくなれり。これ諸天の神威による。さて世尊は天主帝釋に曰はく、
「かほど任おほく事わざしげき帝釋尊の、此處にこの來莅は異しう奇特なり」。
「世尊、我、時長く世尊に見えむが爲に、詣でむことを願ひまつれり。されど我は忉利天かれこれの任ことわざに暇なくして、世尊に見えむが爲に詣づる事かなはざりき。たゞ世尊、一時、世尊は舍衞國に住り給ひ松林精舍に在せり。其の頃、我は世尊に見えむが爲に舍衞國に行きはべりぬ。
一〇　時に世尊は或る三昧に住して坐し給ひ、而して毘沙門天后ブンヂャティーが世尊に侍り合掌恭敬したり。されば我、ブンヂャティーに言ひはべりぬ、『夫人よ、おんみ我がため、世尊に言上し給はれ。天主帝釋は宰相扈從と共に、世尊の御足に頂禮しまつると』。
斯く言ひたるにブンヂャティーは我に言ひけらく『おんみ世尊に見え給ふに今はその時ならず、世尊は靜居し給へり』と。
271 『夫人よ、よしさらば世尊が彼の三昧より起ちたまへる時、我が言づてに天主帝釋は宰相扈從と共に世尊の御足に頂禮しまつると言上し給はれ』と。

世尊、おそらく彼の夫人は我が爲世尊に言上し、世尊はその辭を憶念し給はむ」。
「天主よ、かの夫人は我に白ひ、我その辭を憶念す。なほ又我は卿の車輪の音によりて彼の三昧より起ちたりき」。

一一　「世尊、我等よりさきに忉利天に生れたる諸天あり、彼等に向ひて我聞きて知りはべりぬ「凡そ如來應供等正覺の世に出で給ふや「天衆は增し阿修羅は減ず」と。げに我は之をまのあたり見はべりぬ。如來應供等正覺の世に出でましゝより、天衆は增し阿修羅は減ぜり。世尊、こゝに迦毘羅城に佛・法・僧を信じ戒具足せる瞿毘てふ釋女ありき。此のをみな、女心を捨てゝ丈夫の心を起し、身壞命終して善趣天界に生れ、忉利天の儕となり、我等の公子になりぬ。而して彼處にてこれ天子瞿婆と知られたり。さらに三比丘あり、世尊の御もとにて梵行を修したれども、低き位の乾闥婆に生れたり。彼等は五欲の快樂を享け有ちたのしみ、我等の許に供御奉仕に來れり。我等の許に供御奉仕に來りし彼等を、天子瞿波
272 は咎めて言く「卿等世尊の御法を聽聞せざりしはそもいづこに面を向けて居たりしや。我こそは女ながらも佛・法・僧を信じ戒具足し、女心を捨てゝ丈夫の心を—

起し、身壞命終して善趣天界に生れ、忉利天の儕(ともがら)となり、天主帝釋の公子になりぬ。而して此處にて我、天子瞿波とぞ知られたり。然るに卿等、世尊の御もとにて梵行を修したれど、低き位の乾闥婆に生れたり。同法を修したるもの、低き位の乾闥婆に生れしを見むとは痴(しれ)ごとを我等は見たるものかな」と。世尊、天子瞿波に咎められし彼等の二(ふたり)祇は、既にその生のうちに念を得て梵輔天の位に生れぬ。されど一(ひとり)祇はなほかの欲に住したり。

一二　「われ〔もと〕具眼(ほとけ)の優婆夷にて
　名を瞿毘(ゴービカー)とぞ呼ばれたり
　佛と法とをわれ信じ
　うれしく僧に仕へけり。
　われかの佛の御法(みをしへ)に
　かしこく隨ひたりし故
　〔いま〕帝釋の公子(みこ)として
　大なる威力光輝ある

273

忉利天にぞ生を得て
瞿波と玆に知られたり。
さて前世には比丘にして
いま乾闥婆の衆となり
住める者等をわれ見たり。
げにこれやこの瞿曇(みほとけ)と
同じ姿(さま)にてさきの世に
人間たりしわがみらが
飮食(おんじき)供養しみづからの
家にて足にいそしくも
仕へまつりしものなるを。
佛のみのり受けざりし
おんみらは、そも面(おもて)をば
何處(いづこ)に向けて居たりしか

具眼のさとり御をしへの
法はその身に知るべきを。
而してわれたゞ卿等に
仕へまつりてもろ〳〵の
聖者の妙説聴きたれば
［いま］帝釋の公子として
大なる威力光輝ある
忉利天にぞ生を得ぬ。
されど勝尊に奉仕して
無上梵行を修したれど
低きくらゐに生れたる
卿等の世はあやまてり。
同じ御法のともがらが
ひくき位にうまれしは

あゝ痴事(しれごと)をわれら見き
おんみら乾闥婆生にて
諸天の奉仕に來るとは。
〔さきに〕在家の此のわれの
たかき位を、おんみ見よ
我こそ女の身ながらも
いま丈夫なり天界の
快樂(けらく)を得たる神なるぞ』。
瞿曇(ほとけ)の御弟子瞿波(ゴーパカ)に
あひて責められ詰(なじ)られし
彼等は惱みもだえたり
『いざや我等は離〔欲〕して
努めはげまむ他のものゝ
しもべとな爲(せ)そ己が身を』。

なかに二祇(ふたり)は精進し
瞿曇(ほとけ)のみちを憶ひてぞ
こゝに心をきよくして
欲に罪過(わざはひ)あるを見ぬ。
かれらは象がとめ縄を
〔破りて逃れ出づる〕ごと
かち難き魔の繋縛(けばく)なる
欲の絆(きづな)をたち切りて
忉利諸天を超えゆけり。
諸天は帝釋梵天と
善法堂に居たりしが
愛染をすて塵欲を
はなれたる彼の丈夫(ますらを)は
その會衆(ともがら)をこえ行けり。

天主帝釋は天衆の
眞中(もなか)にありて之を見て
〔玆に〕焦慮(なやみ)をおこしたり
『げに是やこのいと低き
身に生れたる彼等よく
忉利諸天を超えぞゆく』。
この焦慮(なやみ)をばいだきたる
言の葉きゝて瞿波(ゴーパカ)は
帝釋天に白したり。
『そも釋迦牟尼と知られたる
佛こそ人間世界にて
欲に克ちたる〔ひじり〕なり
その〔御弟子にてありつれど〕
念をはなれて世を變へし

かれら佛子はわれにより
その念をこそ得たるなり。
みたりの中のひとりのみ
なほ乾闥婆のともがらに
生れし儘にとゞまりぬ。
されど正覺にしたがひて
自性をかたく決定(ぢやう)し
五欲おさへし二祇(ふたり)こそ
神にも焦慮(なやみ)を起させぬ。
かゝる御法(みのり)の開闡(あかし)こそ
茲にあるなりそれ何を
み弟子のたれか疑はむ
暴流(ぼる)を度(わた)りて斷惑の
佛陀勝者・人王に

我等歸命し奉る』。
げにや世尊の御法(みをしへ)を
こゝに覺りてさし登る
彼ら二祇(ふたり)は梵輔天
たかき位にいたりけり。
世尊われらもその法(のり)を
やがては得るに至るべし
御肯可(ゆるし)あらば請問せむ』。

一三　さるほどに世尊は惟(おも)ひ給ふらく「げに此の帝釋は長時無垢なり。かれ如何なることを我に聞けばとて、凡て肝要にこそあれ、よも徒爾ならじ。また問はれて我が答ふる趣は、彼たちどころに領解(りやうげ)すべし」と。

斯くて世尊は天主帝釋に此の偈を宣べ給へり。

「なにを心に欲(おも)ふとも
帝釋天よ、われにきけ

卿のために我はその
所問を一々斷ずべし」。

第二誦品

276 一　肯可を得たる天主帝釋は世尊にまづ問ひまつるらく、
「さて、世尊、如何なる結の天・人・阿修羅・龍・乾闥婆、また其の他の諸衆にはべりてか、彼等は『我等恚らず・苛めず・爭はず・害はず・怨まずして過すべし』とて、然もなほ、恚り・苛め・爭ひ・害ひ・怨みて過すや」。

天主帝釋は世尊に先づ斯く問ひまつりぬ。世尊は之に應へて曰はく、
「されば、天主よ、嫉と慳との結こそ、天・人・阿修羅・龍・乾闥婆、また其の他の諸衆にあり。彼等は『我等恚らず・苛めず・爭はず・害はず・怨まずして過すべし』とて、然もなほ恚り・苛め・爭ひ・害ひ・怨みてぞ過すなり」と。

世尊は斯く天主帝釋に應へ給へり。心をどれる天主帝釋は、世尊の御ことばを歡喜信受して白さく「さなり、世尊、さなり、善逝。我、世尊の應答を聞きはべりて、

茲に疑は消え迷は晴れたり」と。

二 斯く天主帝釋は世尊の御ことばを歡喜信受して、更に問ひまつりぬ。

277 「さて、世尊、嫉と慳とは、何を縁とし、何より起り、何より生じ、何を源とするや。何有るとき嫉と慳とは有り、何無きとき嫉と慳とはなきや」。

「されば、天主よ、嫉と慳とは愛憎を縁とし愛憎より起り、愛憎より生じ、愛憎を源とす。愛憎あるとき、嫉と慳とはあり、愛憎なきとき嫉と慳とはなし」。

「さて、世尊、愛憎は何を縁とし、何より起り、何より生じ、何を源とするや。何あるとき愛憎あり、何なきとき愛憎はなきや」。

「されば天主よ、愛憎は欲を縁とし、欲より起り、欲より生じ、欲を源とす、欲あるとき愛憎あり、欲なきとき愛憎なし」。

「さて世尊、欲は何を縁とし、何より起り、何より生じ、何を源とするや。何あるとき欲あり、何なきとき欲なきや」。

「されば天主よ、欲は尋を縁とし、尋より起り尋より生じ尋を源とす。尋あるとき欲あり、尋なきとき欲なし」。

「さて、世尊、尋は何を縁とし、何より起り、何より生じ、何を源とするや。何あるとき尋あり、何なきとき尋なきや」。

「されば天主よ、尋は妄想の諸支を縁とし、妄想の諸支より起り、妄想の諸支より生じ、妄想の諸支を源となす。妄想の諸支あるとき尋あり、妄想の諸支なきとき尋なし」。

三　「さて世尊、妄想の諸支をよく滅するに至る道を得たる比丘は、何によりて爲したるや」。

278 「天主よ、喜には親しむべきと親しむ可からざるとの二者ありと我は説き、憂には親しむべきと親しむ可からざるとの二者ありと我は説き、捨には親しむべきと親しむ可からざるとの二者ありと我は説く。いま『天主よ、喜には親しむべきと親しむ可からざるとの二者ありと我は説く』と言へり。さて何とて斯くは言ひたるや。こゝに『我、此の喜に親しむや、惡法長じ善法滅ず』と覺ゆるものあり、斯かる喜は親しむ可からず。又こゝに『我、此の喜に親しむや、惡法滅じ善法長ず』と覺ゆるものあり、斯かる喜には親しむべし。これに尋伺あるものと、尋伺なきも

のとありて、尋伺なきもの勝れり。

かるが故に『天主よ、喜には親しむべきと親しむ可からざるとの二者ありと我は説く』とは言ひたるなれ。

いま『天主よ、憂には親しむべきと、親しむ可からざるとの二者ありと我は説く』と言へり。さて何とて斯くは言ひたるや。こゝに『我、此の憂に親しむや、悪法長じ善法滅ず』と覺ゆるものあり、斯かる憂には親しむ可からず。又ここに『我、此の憂に親しむや、悪法滅じ善法長ず』と覺ゆるものあり、斯かる憂には親しむべし。これに尋伺あるものと、尋伺なきものとありて、尋伺なきもの勝れり。

かるが故に『天主よ、憂には親しむべきと親しむ可からざるとの二者ありと我
279 は説く』とは言ひたるなれ。

いま『天主よ、捨には親しむべきと、親しむ可からざるとの二者ありと我は説く』と言へり。さて何とて斯くは言ひたるや。こゝに『我、此の捨に親しむや、悪法長じ善法滅ず』と覺ゆるものあり、斯かる捨には親しむ可からず。又こゝに『我、此の捨に親しむや、悪法滅じ善法長ず』と覺ゆるものあり、斯かる捨には親しむべし。

これに尋伺あるものと、尋伺なきものとありて、尋伺なきもの勝れり。
かるが故に、「天主よ、捨には親しむべきと、親しむ可からざるとの二者ありと我は說く」とは言ひたるなれ。
天主よ、妄想の諸支をよく滅するに至る道を得たる比丘は、之によりて爲したり」。
世尊はかく天主帝釋に應へ給へり。心をどれる天主帝釋は、世尊の御ことばを歡喜信受して白さく「さなり、世尊、さなり善逝。我、世尊の應答を聞きはべりて、こゝに疑は消え迷は晴れたり」と。

四 斯く天主帝釋は、世尊の御ことばを歡喜信受して、更に問ひまつりぬ。
「さて、世尊、波羅提木叉の律儀を得たる比丘は、何によりて爲したるや」。
「天主よ、身業には親しむべきと親しむ可からざるとの二者ありと我は說き、口業には親しむべきと親しむ可からざるとの二者ありと我は說き、遍尋に親しむべきと親しむ可からざるとの二者ありと我は說く。
280 いま、「天主よ、身業には親しむべきと親しむ可からざるとの二者ありと我は說

く』と言へり。さて何とて斯くは言ひたるや。こゝに『我、此の身業に親しむや、悪法長じ善法滅ず』と覺ゆるものあり、斯かる身業には親しむ可からず。又こゝに『我、此の身業に親しむや、悪法減じ善法長ず』と覺ゆるものあり、斯ゝる身業には親しむべし。

かるが故に『天主よ、身業には親しむべきと親しむ可からざるとの二者ありと我は説く』とは言ひたるなれ。

いま、『天主よ、口業には親しむべきと親しむ可からざるとの二者ありと我は説く』と言へり。さて何とて斯くは言ひたるや。こゝに『我、此の口業に親しむや、悪法長じ善法滅ず』と覺ゆるものあり、斯かる口業には親しむ可からず。又こゝに『我、此の口業に親しむや、悪法減じ善法長ず』と覺ゆるものあり、斯かる口業には親しむべし。

かるが故に『天主よ、口業には親しむべきと親しむ可からざるとの二者ありと我は説く』とは言ひたるなれ。

いま、天主よ、遍尋には親しむべきと親しむ可からざるとの二者ありと我は説

く」と言へり。さて何とて斯くは言ひたるや。こゝに「我、此の遍尋に親しむや、惡法長じ善法滅ず」と覺ゆるものあり、斯かる遍尋には親しむ可からず。又こゝに「我、此の遍尋に親しむや、惡法滅じ善法長ず」と覺ゆるものあり、斯かる遍尋には親しむべし。

かるが故に「天主よ、遍尋には親しむべきと親しむ可からざるとの二者ありと我は說く」とは言ひたるなれ。

281 「天主よ、波羅提木叉の律儀を得たる比丘は、之によりて爲したり」。

世尊は斯く天主帝釋に應へ給へり。心をどれる天主帝釋は、世尊の御ことばを歡喜信受して白さく「さなり、世尊、さなり善逝。我、世尊の應答を聞きはべりて、こゝに疑は消え迷は晴れたり」と。

五　斯く天主帝釋は、世尊の御ことばを歡喜信受して、更に問ひまつりぬ。

「さて、世尊、諸根の律儀を得たる比丘は、何によりて爲したるや」。

「天主よ、眼もて知る色には、親しむべきと親しむ可からざるとの二者ありと我は說く。天主よ、耳もて知る聲には……乃至……天主よ、鼻もて知る香には……乃至……

天主よ、舌もて知る味には：乃至：天主よ、身もて知る觸には：乃至：天主よ、意もて知る法には親しむべきと親しむ可からざるとの二者ありと我は說く」。

かく聞きて天主帝釋は世尊に白さく、

「いま世尊これを約言し給へれば、我、その逐一を斯く知りまつれり。世尊、眼もて知る色には、之に親しむや惡法長じ善法滅ずるが如きものあり、眼もて知る斯かる色には親しむ可からず。又世尊眼もて知る色には之に親しむや惡法滅じ善法長ずるが如きものあり、眼もて知る斯かる色には親しむべし。又、世尊、耳も
282 て知る聲には：乃至：鼻もて知る香には：乃至：舌もて知る味には：乃至身もて知る觸には：乃至：意もて知る法には、之に親しむや惡法長じ善法滅ずるが如きものあり、意もて知る斯かる法には親しむ可からず。又世尊、意もて知る法には、之に親しむや惡法滅じ善法長ずるが如きものあり、意もて知る斯かる法には親しむべし。

「いま世尊之を約言し給ひ、我その逐一を知りはべれば、こゝに疑は消え迷は晴れたり」と。

六　斯く天主帝釋は世尊の御ことばを歡喜信受して、更に問ひまつりぬ。
「さて、世尊、沙門婆羅門の凡ては、其の信念・戒行・欲求・意趣は同一なるや」。
「いな天主よ、沙門婆羅門の凡ては、其の信念戒行・欲求・意趣は同一ならず」。
「如何なれば、世尊、沙門婆羅門の凡ては、其の信念戒行・欲求意趣は同一ならざるや」。
「されば、天主よ、世の體は非一・種々なり。この非一・種々の體(より成れる)世にありて、有情は如何なる體に據りても、固く之に執著して「之こそ眞なれ、他は痴なり」と決定せるなり。かるが故に、沙門婆羅門の凡ては、其の信念戒行欲求意趣は同一ならざるなり」。
283 「さて、世尊、沙門婆羅門の凡ては、其の依憑安穩梵行・滅度は究竟なるや」。
「いな天主よ、沙門婆羅門の凡ては、其の依憑安穩・梵行滅度は究竟ならず」。
「如何なれば、世尊、沙門婆羅門の凡ては、其の依憑安穩梵行・滅度は究竟ならざるや」。
「されば天主よ、愛欲を斷じて解脱せる沙門婆羅門のみ、その依憑安穩・梵行・滅度

は究竟なり。かるが故に、沙門婆羅門の凡ては、其の依憑安穩・梵行・滅度は究竟ならざるなり」。

世尊は斯く天主帝釋に應へ給へり。心をどれる天主帝釋は、世尊の御ことばを歡喜信受して白さく「さなり、世尊、さなり、善逝。我、世尊の應答を聞きはべりてこゝに疑は消え迷は晴れたり」と。

七 斯く天主帝釋は、世尊の御ことばを歡喜信受して「なほ」白さく、

「世尊、愛欲は病なり腫なり箭なり。愛欲は彼此の生を致して人を牽きゆく、かるが故に人は上下せしめらるゝなり。世尊、外道なる他の沙門婆羅門に、我聞くたよりすら得ずして、長時いだける此等の問を、世尊は我に明し給へり。而して今や我に疑惑の箭なるもの、世尊は之を拔き給へり」。

284 「天主よ、卿、此等の問を他の沙門婆羅門になしたるや」。

「世尊、我、此等の問を、他の沙門婆羅門になしはべりき」。

「さらば、天主よ、卿障りなくば、彼等の卿にいかゞ答へしやを語らむことを」。

「世尊又は世尊のごとき「如來」の在しませるや、我に何の障りかはべらむ」。

「さらば天主よ、語らむことを」。

「世尊、森にすみ遠く離れて坐臥したれば、沙門婆羅門ならむと思はるゝ人々に我到りて、此等の問ひをなしはべりぬ。されど彼等は明し得ず、却りて聞きけらく『尊者は誰にておはすや』と。されば答へて白さく『我はこれ天主帝釋なり』と。彼等更に聞きけらく『そも何すれぞ天主は此處に來ませるや』と。我、法を所聞所學のまゝ教へたりしに、彼等いたく喜びて言へらく『我等は天主帝釋を見まつれり、而して我等が問に彼、答へ給へり』と。則ち彼等、我が弟子となり、我、彼等の弟子たらず。されど今や、我は世尊の御弟子なり、預流にして不墮惡趣なり、決定して向正覺者なり」。

「天主よ、卿、斯かる歡喜を嘗て得たるや」。

285 「世尊、我、斯かる歡喜を嘗て得はべりき」。

「さらば天主よ、卿、如何にして斯かる歡喜を嘗て得たるや」。

「世尊、そのかみ諸天と阿修羅との軍起りたりき。さてその軍に諸天は勝ち阿修羅破れぬ。その軍に勝ちて我、惟へらく『今や諸天は天界の精華のみならず、阿

修羅の精華をも倶に之を享け樂しまむ』と。然るに世尊、我が得たる歡喜は刀杖に據れるものにして、厭世・離欲・滅盡・寂靜・神通・正覺・涅槃のたよりならず。されど、世尊の御法を聞きまつりて我の得たる此の歡喜は、刀杖に據らざるものにして、一向厭世・離欲・滅盡・寂靜・神通・正覺・涅槃のたよりとなり侍るなり」。

八　「さて天主よ、卿いかなる果報を惟んみて斯かる歡喜を得たりとは言ふや」。

「世尊、我は六の果報を惟んみて斯かる歡喜を得たりとは白しはべるなり。

こゝに神ざね在る我は
みづから更に生を得ぬ
斯くとぞ、世尊、知り給へ

世尊、我は此の第一の果報を惟んみて斯かる歡喜を得たりとは白しはべるなり。[286]

人間ならぬ生を捨て
神の體よりわれ轉じ
おのが心に欣求せる

貽過たす入りゆかむ

世尊、我は此の第二の果報を惟んみて斯かる歡喜を得たりとは白しはべるなり。

所問迷はず御をしへを
喜びくらす其の我は
慧念たゞしく住すべし

世尊、我は此の第三の果報を惟んみて斯かる歡喜を得たりとは白しはべるなり。

行住正しきその我に
正覺成らば智慧具して
我住すべし、これ歸寂

世尊、我は此の第四の果報を惟んみて斯かる歡喜を得たりとは白しはべるなり。

さて人間の生をすて

人の體よりわれ轉じ
天上界にたぐひなき
神と再び成りいでむ

世尊、我は此の第五の果報を惟んみて斯かる歡喜を得たりとは白しはべるなり。

すぐれし神は榮譽(ほまれ)ある
色究竟なり［そこにこそ］
此の身ゆく末住ひせむ

287 世尊、我は此の第六の果報を惟んみて斯かる歡喜を得たりとは白しはべるなり。

世尊、我は此等六(むつ)の果報を惟んみて、斯かる歡喜を得たりとは白しはべるなり。

九

「希ひたる望を遂げず
われは［たゞ］疑ひまよひ
如來(みほとけ)をたづねもとめて

久しくも彷徨(さまよ)ひにけり。
彼等をば離れて住める
沙門ぞと我は見定め
覺りたる人なるべしと
思ひつゝ近づき行けり。
『何すれば得ありやはた
何すれば失は有りや』と
問ひたるに、彼等はさらに
その道も、たづきも知らず。
來たりしは天主なるぞと
我を知りて彼等は問へり
『何すれぞ、此の處へと
卿(おんみ)には來たまへる』と。
われ法を所聞のまゝに

288

教へしに耳をかたむけ
みなそれを喜びて[言ふ]
『帝釋を己見たり』と。
さて、み佛に我見ゆるや
疑はあとなく消えて
正覺をこゝにうやまひ
此の身には恐とて無し。
[天照らす]日の親にて
愛欲の箭をぬき給ふ
無等尊・大雄佛陀
我、これを拜みまつる。
われら彼の諸天と倶に
梵天になすべき敬禮を
今こそは世尊になさむ

げにわれら拜みまつる。
みほとけは正覺者なり
尊師なり無上の士なり
天のむた、此の世の中に
比ぶべき者とては無し」。

一〇　さるほどに天主帝釋は乾闥婆般遮翼に言ひけらく、
「やよ般遮翼、汝まづ世尊を怡しまつりしこと、我に裨益おほいなり。汝まづ怡しまつりて後にこそ、我等は世尊應供・等正覺に見えむが爲に詣でたり。われ父となりて汝を乾闥婆王とせむ、而して汝、慓れたれば日の如かぐよふ跋陀を汝に與へむ」。
そのとき天主帝釋は、手を地につけて三たび言あげして白さく、
「世尊應供等正覺に歸命し奉る
世尊應供・等正覺に歸命し奉る
世尊應供・等正覺に歸命し奉る」と。

さて此の宣說(みをしへ)のべらるゝや、天主帝釋は淸淨無垢なる法眼を得て「如何なる集法も總てこれ滅法なり」と「知れり」。而して爾餘の八萬諸天もまた然り。

289 是の如く天主帝釋、請問しまつり、世尊これに應(こた)へ給ひけり。かるが故にこの宣說(みをしへ)は「帝釋所問經」とぞ名けられたり。

三二　大念處經（マハーサティパッターナ・スッタンタ）

是の如く我聞く。

一　一時、世尊は拘樓國に在しぬ。劍磨瑟曇と名づくる拘樓國の都邑あり。其處にて世尊は諸比丘に曰はく、「比丘等よ」と。かの比丘等は「世尊」と世尊に對へぬ。世尊は斯く曰へり。

「比丘等よ、これは衆生を淨くする爲、憂悲を度する爲、苦惱を滅する爲、正理を得む爲、涅槃を證せむ爲の唯一趣向の道、卽ち四念處なり。

如何が四となす。比丘等よ、こゝに比丘は身に就きて身を觀じて住し、精勤し、正智正念にして、世の欲及び惱を捨し、――受に就きて受を觀じて住し、精勤し、正智正念にして、世の欲及び惱を捨し、――心に就きて心を觀じて住し、精勤し、正智正念にして、世の欲及び惱を捨し、――法に就きて法を觀じて住し、精勤し、正智正念にして世の欲及び惱を捨す。

291 二　而して、比丘等よ、比丘は如何にして身に就きて身を觀じて住するや。

こゝに、比丘等よ、比丘は森に赴き、或は樹下に赴き、或は空所に赴き、結跏して身を直くし、思念を〔對象の〕前面に据ゑて趺坐す。彼は正念にして息を吸ひ、正念にして息を出し、或は長く息を吸へば「我は息を長く吸ふ」と知り、又長く息を出せば「我は息を長く出す」と知る。又短く息を吸へば「我は息を短く吸ふ」と知り、又短く息を出せば「我は息を短く出す」と知る。「全身を認知して我は息を吸ふべし」と修し、「全身を認知して我は息を出すべし」と修す。「身行を鎮めて我は息を吸ふべし」と修し、「身行を鎮めて我は息を出すべし」と修す。

比丘等よ、恰も熟練せる轆轤匠又は轆轤匠の弟子が、或は長く〔轆轤を〕廻せば「我は長く廻す」と知り、或は短く廻せば「我は短く廻す」と知るが如く、比丘等よ、是の如く、比丘は長く息を吸へば「我は長く息を吸ふ」と知り、又長く息を出せば「我は長く息を出す」と知り、或は短く息を吸へば「我は短く息を吸ふ」と知り、又短く息を出せば「我は短く息を出す」と知る。「全身を認知して我は息を吸ふべし」と修し、「全身を認知して我は息を出すべし」と修す。「身行を鎮めて我は息を吸ふべし」と修し、

『身行を鎮めて我は息を出すべし』と修す。

292 斯く、或は内に身に就きて身を觀じて住し、又外に身に就きて身を觀じて住し、又内外倶に身に就きて身を觀じて住す。或は身に就きて生法を觀じて住し、又身に就きて滅法を觀じて住し、又身に就きて生滅の法を觀じて住す。尙又、智識所成のもの及び憶念所成のものに對すると同じ程度に『身あり』との思念眼前す。彼は賴らずして住し、且世の何物にも執著せず。比丘等よ、是の如く比丘は身に就きて身を觀じて住す。

三　次に又比丘等よ、比丘は、行けば『我は行く』と知り、又住せば『我は住す』と知り、又坐せば『我は坐せり』と知り、又臥せば『我は臥す』と知る。又如何なる狀態に此の身が置かるゝも其の如くに之を知る。

斯く、或は内に身に就きて身を觀じて住し、又外に身に就きて身を觀じて住し、又内外倶に身に就きて身を觀じて住す。或は身に就きて生法を觀じて住し、又身に就きて滅法を觀じて住し、又身に就きて生滅の法を觀じて住す。尙又智識所成のもの及び憶念所成のものに對すると同じ程度に、『身あり』との思念眼前

す。彼は頼らずして住し、且世の何物にも執著せず。比丘等よ、是の如く比丘は身に就きて身を觀じて住す。

四　次に又、比丘等よ、比丘は行くにも歸るにも正智にして所作す。彼は前方を見るにも後方を見るにも正智にして所作す。彼は屈するにも伸ばすにも正智にして所作す。彼は、僧伽梨(袈裟)・衣鉢を著くるにも、正智にして所作す。彼は食し、飮み、嚙み、味ふにも、正智にして所作す。彼は大小便を爲すにも正智にして所作す。彼は行き、住り、坐し、眠り、寤め、語り、默するにも正智にして所作す。

斯く或は內に身に就きて身を觀じて住し、又外に身に就きて身を觀じて住し、又內外倶に身に就きて身を觀じて住す。或は身に就きて生法を觀じて住し、又身に就きて滅法を觀じて住し、又身に就きて生滅の法を觀じて住す。尙又、智識所成のもの及び憶念所成のものに對すると同じ程度に「身あり」との思念眼前す。彼は頼らずして住し、且世の何物にも執著せず。比丘等よ、是の如く比丘は身に就きて身を觀じて住す。

五　次に又、比丘等よ、比丘は皮にて覆はれ種々の不淨物にて充たされたる此の

身をば、上髪端より下蹠に至るまで觀察して『此の身には髮・髦・爪・齒・皮・肉・筋・骨・髓・腎臟・心臟・肝臟・肋膜・脾臟・肺・腸・腸間膜・胃・排泄物・膽汁・痰・膿・血・汗・脂肪・涙・淋巴液・唾液・粘液・關節液・尿有り』と知る。比丘等よ、恰も二重口の袋が、種々の穀物、卽ち稻・粳・綠豆・豆類・胡麻・玄米もて充たされたるを、具眼者そを解きて『こは稻なり、こは粳なり、こは綠豆なり、こは豆類なり、こは胡麻なり、こは玄米なり』と觀察するが如く、比丘等よ、是の如く比丘は、皮にて覆はれ種々の不淨物にて充たされたる此の身をば上髪端より下蹠に至るまで觀察して『此の身には髮・髦・爪・齒・皮・肉・筋・骨・髓・腎臟・294 肋膜・脾臟・肺・腸・腸間膜・胃・排泄物・膽汁・痰・膿・血・汗・脂肪・涙・淋巴液・唾液・粘液・關節液・尿有り』と知る。

斯く或は內に身に就きて身を觀じて住し、又外に身に就きて身を觀じて住し、又內外倶に身に就きて身を觀じて住す。或は身に就きて生法を觀じて住し、又身に就きて滅法を觀じて住し、又身に就きて生滅の法を觀じて住す。尚又智識所成のもの及び憶念所成のものに對すると同じ程度に『身あり』との思念眼前す。彼は賴らずして住し、且世の何物にも執著せず。比丘等よ、是の如く比丘は身に

就きて身を觀じて住す。

六　次に又、比丘等よ、比丘は、界(要素)に從ひて、有るがまゝに、與へられたるがまゝに此の身を觀察して、「此の身中には、地界水界・火界・風界あり」と「知る」。比丘等よ、恰も熟練せる屠牛者、或は屠牛者の弟子が牛を殺し、四衢道に於て「それを」片々に分割して坐するが如く、比丘等よ、是の如く比丘は、界に從ひて、有るがまゝに、與へられたるがまゝに、此の身を觀察して「此の身には地界・水界・火界・風界あり」と「知る」。

斯く或は內に身に就きて身を觀じて住し、又外に身に就きて身を觀じて住し、又內外倶に身に就きて身を觀じて住す。或は身に就きて生法を觀じて住し、又
295 身に就きて滅法を觀じて住し、又身に就きて生滅の法を觀じて住す。尚又、智識所成のもの及び憶念所成のものに對すると同じ程度に「身あり」との思念眼前す。彼は賴らずして住し、且世の何物にも執著せず。比丘等よ、是の如く比丘は身に就きて身を觀じて住す。

七　次に又、比丘等よ、比丘は恰も塚間に遺棄せられたる死屍の、死後一日二日乃至三日を經て、膨脹し、青黑くなり、腐爛せるを觀ずるが如く、彼は此の身を注視し

て「此の身こそ斯かる法(性質)、斯くなるものにして、そを脱せず」と(知る)。

斯く或は内に身に就きて身を觀じて住し、又外に身に就きて身を觀じて住し、又内外倶に身に就きて身を觀じて住す。或は身に就きて生法を觀じて住し、又身に就きて滅法を觀じて住し、又身に就きて生滅の法を觀して住す、尚又、智識所成のもの及び憶念所成のものに對すると同じ程度に「身あり」との思念眼前す。彼は賴らずして住し、且世の何物にも執著せず。比丘等よ、是の如く比丘は身に就きて身を觀じて住す。

八　次に又、比丘等よ、比丘は、恰も塚間に遺棄せられたる死屍の、烏に啄まれ、或は鷹に啄まれ、或は鷲に啄まれ、或は犬に喰はれ、或は豺に喰はれ、乃至各種の生類に喰はれたるを觀ずるが如く、彼は此の身を注視して「此の身こそ斯かる法、斯くなるものにして、そを脱せず」と(知る)。

296 斯く或は内に身に就きて身を觀じて住し、また外に身に就きて身を觀じて住し、又内外倶に身に就きて身を觀じて住す。或は身に就きて生法を觀じて住し、又身に就きて滅法を觀じて住し、又身に就きて生滅の法を觀じて住す。尚又、智

識所成のもの及び憶念所成のものに對すると同じ程度に「身あり」との思念眼前す。彼は頼らずして住し、且世の何物にも執著せず。比丘等よ、是の如く比丘は身に就きて身を觀じて住す。

九　次に又、比丘等よ、比丘は恰も塚間に遺棄せられたる死屍の、血肉具有して筋の連結せる骸骨：乃至：肉無くして血の附著し筋の連結せる骸骨：乃至：血肉無くして筋のみ連結せる骸骨：乃至：〔關節〕解け散りて、此處に手骨、彼處に足骨、此處に髁骨、彼處に腿骨、此處に骨盤骨、彼處に背骨、彼處に頭蓋骨と四方八方に[297]散在せる骸骨を觀ずるが如く、彼は此の身を注視して「此の身こそ斯かる法、斯く成るものにして、そを脱せず」と〔知る〕。

斯く或は內に身に就きて身を觀じて住し、又外に身に就きて身を觀じて住し、又內外倶に身に就きて身を觀じて住す。或は身に就きて生法を觀じて住し、身に就きて滅法を觀じて住し、又身に就きて生滅の法を觀じて住す。尚又、智識所成のもの及び憶念所成のものに對すると同じ程度に「身あり」との思念眼前す。彼は頼らずして住し、且世の何物にも執著せず。比丘等よ、是の如く比丘は身に

就きて身を觀じて住す。

一〇　次に又比丘等よ、比丘は恰も塚間に遺棄せられたる死屍の、螺の色に似たる白骨…乃至…一年も經過したる、堆高き骨…乃至…敗壞して碎末となれる骨を觀ずるが如く、彼は此の身を注視して、此の身こそ斯かる法、斯く成るものにして、そを脫せず」と〔知る〕。

斯く或は內に身に就きて身を觀じて住し、又外に身に就きて身を觀じて住し、又內外俱に身に就きて身を觀じて住す。或は身に就きて生法を觀じて住し、又
298 身に就きて滅法を觀じて住し、又身に就きて生滅の法を觀じて住す。尙又、智識所成のもの及び憶念所成のものに對すると同じ程度に「身あり」との思念眼前す彼は賴らずして住し、且世の何物にも執著せず。比丘等よ、是の如く比丘は身に就きて身を觀じて住す。

一一　而して比丘等よ、如何にして比丘は受に就きて受を觀じて住するや。

こゝに比丘等よ、比丘は樂受を感ぜば「我は樂受を感ず」と知り、苦受を感ぜば「我は苦受を感ず」と知り、不苦不樂受を感ぜば「我は不苦不樂受を感ず」と知る。或は

肉體的樂受を感ぜば『我は肉體的樂受を感ず』と知り、又精神的樂受を感ぜば『我は精神的樂受を感ず』と知る。或は肉體的苦受を感ぜば『我は肉體的苦受を感ず』と知り、又精神的苦受を感ぜば『我は精神的苦受を感ず』と知る。或は肉體的不苦不樂受を感ぜば『我は肉體的不苦不樂受を感ず』と知り、又精神的不苦不樂受を感ぜば『我は精神的不苦不樂受を感ず』と知る。

斯く或は内に受に就きて受を觀じて住し、又外に受に就きて受を觀じて住し、又内外倶に受に就きて受を觀じて住す。或は受に就きて生法を觀じて住し、又
299 受に就きて滅法を觀じて住し、又受に就きて生滅の法を觀じて住す。尚又、智識所成のもの及び憶念所成のものに對すると同じ程度に、『受あり』との思念眼前す。彼は賴らずして住し、且世の如何なるものにも執著せず。比丘等よ、是の如く比丘は受に就きて受を觀じて住す。

一二　而して、比丘等よ、如何にして比丘は心に就きて心を觀ずるや。こゝに、比丘等よ、比丘は、

心、貪ならば『心、貪なり』と知り、

また心、貪を離れなば『心、貪を離る』と知り、
また心、瞋ならば『心、瞋なり』と知り、
また心、瞋を離れなば『心、瞋を離る』と知り、
また心、癡ならば『心、癡なり』と知り、
また心、癡を離れなば『心、癡を離る』と知り、
また心、轉倒せば『心、轉倒す』と知り、
また心、轉倒せずむば『心、轉倒せず』と知り、
また心、廣大ならば『心、廣大なり』と知り、
また心、狹小ならば『心、狹小なり』と知り、
また心、有上ならば『心、有上なり』と知り、
また心、無上ならば『心、無上なり』と知り、
また心、有定ならば『心、有定なり』と知り、
また心、無定ならば『心、無定なり』と知り、
また心、解脱せば『心、解脱す』と知り、

また心、解脱せずむば「心、解脱せず」と知る、

斯く或は內に心に就きて心を觀じて住し、また外に心に就きて心を觀じて住し、又內外俱に心に就きて心を觀じて住す。或は心に就きて生法を觀じて住し、又心に就きて滅法を觀じて住し、又心に就きて生滅の法を觀じて住す。尙又、智
300 識所成のもの及び憶念所成のものに對すると同じ程度に「心あり」との思念眼前す。彼は賴らずして住し、且世の如何なるものにも執著することなし。比丘等よ、是の如く、比丘は心に就きて心を觀じて住す。

一三　而して、比丘等よ、如何にして比丘は法に就きて法を觀ずるや。

こゝに、比丘等よ、比丘は法卽ち五蓋に就きて法を觀じて住す。

又比丘等よ、如何にして比丘は法卽ち五蓋に就きて法を觀じて住するや。

こゝに、比丘等よ、比丘は或は內に貪欲存せば「我が內に貪欲存す」と知り或は內に貪欲存せずむば「我が內に貪欲存せず」と知る。彼は未生の貪欲の生起するまゝに知り、已生の貪欲の滅盡するまゝに知り、又已滅の貪欲の未來に於ても生起せざるまゝに知る。

或は內に瞋恚存せば『我が內に瞋恚存す』と知り。或は內に瞋恚存せずむば『我が內に瞋恚存せず』と知る。又未生の瞋恚の生起するまゝに知り、又已生の瞋恚の滅盡するまゝに知り、又已滅の瞋恚の未來に於て生起せざるまゝに知る。

或は內に睡眠存せば『我が內に睡眠(惛眠愚鈍)存す』と知り、或は內に睡眠存せずむば『我が內に睡眠存せず』と知る。而して未生の睡眠生起するまゝに知り、又已生の睡眠の滅盡するまゝに知り、又已滅の睡眠の未來に於て生起せざるまゝに知る

或は內に悼悔存せば『我が內に悼悔存す』と知り、或は內に悼悔存せずむば、我が內に悼悔存せず』と知る。而して未生の悼悔の生起するまゝに知り、又已生の悼悔の滅盡するまゝに知り、又已滅の悼悔の未來に於て生起せざるまゝに知る。

或は內に疑惑存せば『我が內に疑惑存す』と知り、或は內に疑惑存せずむば『我が內に疑惑存せず』と知る。而して未生の疑惑生起するまゝに知り、又已生の疑惑の滅盡するまゝに知り、又已滅の疑惑の未來に於て生起せざるまゝに知る。

斯く或は內に法に就きて法を觀じて住し、又外に法に就きて法を觀じて住し、又內外倶に法に就きて法を觀じて住す。或は法に就きて生法を觀じて住し、又

法に就きて滅法を觀じて住し、又法に就きて生滅の法を觀じて住す。尙又、智識所成のもの及び憶念所成のものに對すると同じ程度に「法あり」との思念眼前す。彼は賴らずして住し、且世の如何なるものにも執著せず。比丘等よ、是の如く比丘は法卽ち五蓋に就きて法を觀じて住す。

一四　次に又比丘等よ、比丘は法卽ち五取蘊に就きて法を觀じて住す。

而して比丘等よ、如何にして比丘は法卽ち五取蘊を觀じて住するや。

こゝに比丘等よ、比丘は「色は斯く斯くなり、色の生は斯く斯くなり、色の滅は斯
く斯くなり、――受は斯く斯くなり、受の生は斯く斯くなり、受の滅は斯く斯くな
り、――想は斯く斯くなり、想の生は斯く斯くなり、想の滅は斯く斯くなり、――行
302 は斯く斯くなり、行の生は斯く斯くなり、行の滅は斯く斯くなり、――識は斯く斯
くなり、識の生は斯く斯くなり、識の滅は斯く斯くなり」と〔知る〕。

斯く或は內に法に就きて法を觀じて住し、又外に法に就きて法を觀じて住し又內外俱に法に就きて法を觀じて住す。或は法に就きて生法を觀じて住し、又法に就きて滅法を觀じて住し、又法に就きて生滅の法を觀じて住す。尙又、智識

所成のもの及び憶念所成のものに對すると同じ程度に「法あり」との思念眼前す。彼は頼らずして住し、且世の如何なるものにも執著せず。是の如く、比丘等よ、比丘は法卽ち五取蘊に就きて法を觀じて住す。

一五　次に又、比丘等よ、比丘は法卽ち六內外處に就きて法を觀じて住す。而して比丘等よ、如何にして比丘は法卽ち六內外處に就きて法を觀じて住するや。

こゝに、比丘等よ、比丘は眼を知り、色を知り、また其の兩者に緣りて生ずる結を知る。而して未生の結の生起するまゝに知り、又已生の結の滅盡するまゝに知り、又已滅の結の未來に於て生ぜざるまゝに知る。また耳を知り、聲を知り、…乃至…鼻を知り、香を知り、…乃至…舌を知り、味を知り…乃至…身を知り、觸を知り
303 …乃至…意を知り、法を知りて、其の兩者に緣りて生ずる結を知る。而して未生の結の生起するまゝに知り、又已生の結の滅盡するまゝに知り、又已滅の結の未來に於て生ぜざるまゝに知る。

斯く或は內に法に就きて法を觀じて住し、また外に法に就きて法を觀じて住

し、また内外倶に法に就きて法を觀じて住す。或は法に就きて生法を觀じて住し、又法に就きて滅法を觀じて住し、又法に就きて生滅の法を觀じて住す。尙又、智識所成のもの及び憶念所成のものに對すると同じ程度に『法あり』との思念眼前す。彼は賴らずして住し、且世の如何なるものにも執著することなし。比丘等よ、是の如く、比丘は法に就きて法を觀じて住す。

一六　次に又比丘等よ、比丘は法卽ち七覺支に就きて法を觀じて住す。而して比丘等よ、如何にして比丘は法卽ち七覺支に就きて法を觀じて住するや。

こゝに、比丘等よ、比丘は或は内に念覺支存せば『我が内に念覺支存す』と知り、或は内に念覺支存せずば『我が内に念覺支存せず』と知る。而して未生の念覺支の生起するまゝに知り、又已生の念覺支の發達成就するまゝに知る。

或は内に擇法覺支存せば…乃至…發達成就するまゝに知る。

或は内に精進覺支存せば…乃至…發達成就するまゝに知る。

或は内に喜覺支存せば…乃至…發達成就するまゝに知る。

或は内に息(輕安)覺支存せば…乃至…發達成就するまゝに知る。

或は内に定覺支存せば……乃至……發達成就するまゝに知る。

或は内に捨覺支存せば「我が内に捨覺支存す」と知り、或は内に捨覺支存せずば「我が内に捨覺支存せず」と知る。而して未生の捨覺支の生起するまゝに知り、又已生の捨覺支の發達成就するまゝに知る。

斯く或は内に法に就きて法を觀じて住し、又外に法に就きて法を觀じて住し、また内外倶に法に就きて法を觀じて住す。或は法に就きて生法を觀じて住し、又法に就きて滅法を觀じて住し、又法に就きて生滅の法を觀じて住す。尚又、智識所成のもの及び憶念所成のものに對すると同じ程度に「法あり」との思念眼前す。彼は頼らずして住し、且世の如何なるものにも執著せず。比丘等よ、是の如く、比丘は法卽ち七覺支に就きて法を觀じて住す。

一七　次に又、比丘等よ、比丘は法卽ち四聖諦に就きて法を觀じて住す。

而して比丘等よ、如何にして比丘は法卽ち四聖諦に就きて法を觀じて住するや。

ここに比丘等よ、比丘は「こは苦なり」と如實に知り「こは苦の集なり」と如實に知

り『こは苦の滅なり』と如實に知り、『こは苦の滅に到る道なり』と如實に知る。

305 一八　而して、比丘等よ、苦聖諦とは何ぞや。

生は苦なり、老は苦なり、[1]〔病は苦なり〕、死は苦なり、憂・悲・苦・惱悶は苦なり、求むる所を得ざるは苦なり、約言せば五取蘊は苦なり。

次に比丘等よ、生とは何ぞや。至る處の生類中に於ける諸の衆生にありて、出產出生・出成・更生・諸蘊の顯現・〔內外〕諸處の攝受これぞ、比丘等よ、生とは名けらる。

次に、比丘等よ、老とは何ぞや。至る處の生類中に於ける諸の衆生にありて、年老い、老耄し、齒落ち、頭髮白く、皮膚皺寄り、壽短縮し、諸根毀熟する、これぞ、比丘等よ、老とは名けらる。

次に比丘等よ、死とは何ぞや。至る處の生類中に於ける諸の衆生にありて、消失・散滅・破壞・滅亡・消滅・死亡・滿時(命終)・諸蘊の破壞・死屍の放棄、これぞ比丘等よ、死とは名けらる。

次に比丘等よ、憂とは何ぞや。比丘等よ、幾何(いくばく)の不幸に伴はれ、幾何の苦法に惱
306 める、憂・愁・慼・內憂・內悄、これぞ、比丘等よ、憂とは名けらる。

次に、比丘等よ、悲とは何ぞや。實に比丘等よ、幾何の不幸に伴はれ、幾何の苦法に惱める、嘆・悲嘆・息悲哀・悲歎・悲痛これぞ、比丘等よ、悲とは名けらる。

次に比丘等よ、苦とは何ぞや。實に比丘等よ身に關する苦痛、身に關する不快、身觸より生ずる苦痛及び不快の感受、これぞ、比丘等よ、苦とは名けらる。

次に比丘等よ、惱とは何ぞや。實に比丘等よ、心に關する苦痛・心に關する不快、意觸より生ずる苦痛及び不快の感受、これぞ、比丘等よ、惱とは名けらる。

次に比丘等よ、悶とは何ぞや。實に比丘等よ幾何の不幸に伴はれ、苦法に惱める、失望・落膽・沮喪・愁悶、これぞ、比丘等よ、悶とは名けらる。

307

而して比丘等よ、求めて得ざるの苦とは何ぞや。比丘等よ、生法の衆生に於て、斯かる欲求生ず。『實に我等、生法の下にあらざらむに、卽ち我等に生の來らざらむには』と。されどこは欲求に依りて達せらるべからず。これ求めて得ざるの苦なり。比丘等よ、老法の衆生に於て…乃至…比丘等よ、病法の衆生に於て…乃至…比丘等よ、死法の衆生に於て…乃至…比丘等よ、憂・悲・苦・惱・悶法の衆生に於て、斯かる欲求生ず。『實に我等、憂悲苦惱悶法の下にあらざらむには、卽ち我等に憂・

悲・苦・惱悶法の來らざらむにはと。されど、こは欲求に依りて達せらるべからず。これ求めて得ざるの苦なり。

而して、比丘等よ、約言して五取蘊の苦とは何ぞや。次の如き色取蘊・受取蘊・想取蘊・行取蘊・識取蘊、此等は、比丘等よ、約言して五取蘊の苦と名けらる。比丘等よ、これぞ苦聖諦とは名けらる。

一九　而して、比丘等よ、苦集聖諦とは何ぞや。

此の愛は再生に導き、喜と貪を伴ひ、到る處滿足を求むるものにして、卽ち欲愛・有愛・無有愛なり。

次に、比丘等よ、かの愛は何處に生起し、何處に止住するや。世に愛しきもの喜ばしきものあらば、此の愛は此處に生起し、此處に止住す。

如何なるものか、世に愛しきもの、喜ばしきものなる。眼は世に於て愛しきもの、喜ばしきものたり。此の愛は、此處に生起し、此處に止住す。耳は世に：乃至：鼻は世に：乃至：舌は世に：乃至：身は世に：乃至：意は世に愛しきもの、喜ばしきものたり。此の愛は、此處に生起し、此處に止住す。

色は世に…乃至…聲は世に…乃至…香は世に…乃至…味は世に…乃至…觸は世に…乃至…法は世に愛しきもの、喜ばしきものたり。此の愛は此處に生起し、此處に止住す。

眼識は世に…乃至…耳識は世に…乃至…鼻識は世に…乃至…舌識は世に…乃至…身識は世に…乃至…意識は世に愛しきもの、喜ばしきものたり。此の愛は此處に生起し、此處に止住す。

眼觸は世に…乃至…耳觸は世に…乃至…鼻觸は世に…乃至…舌觸は世に…
309 乃至…身觸は世に…乃至…意觸は世に愛しきもの、喜ばしきものたり。此の愛は此處に生起し、此處に止住す。

眼觸所生の受は世に…乃至…耳觸所生の受は世に…乃至…鼻觸所生の受は世に…乃至…舌觸所生の受は世に…乃至…身觸所生の受は世に…乃至…意觸所生の受は世に愛しきもの喜ばしきものたり。此の愛は此處に生起し、此處に止住す。

色想は世に…乃至…聲想は世に…乃至…香想は世に…乃至…味想は世に…

乃至…乃至…觸想は世に…乃至…法想は世に愛しきもの、喜ばしきものたり。此の愛は此處に生起し、此處に止住す。

色思は世に…乃至…聲思は世に…乃至…香思は世に…乃至…味思は世に…乃至…觸思は世に…乃至…法思は世に愛しきもの、喜ばしきものたり。此の愛は此處に生起し此處に止住す。

色愛は世に…乃至…聲愛は世に…乃至…香愛は世に…乃至…味愛は世に…乃至…觸愛は世に…乃至…法愛は世に愛しきもの、喜ばしきものたり。此の愛は此處に生起し此處に止住す。

色尋は世に…乃至…聲尋は世に…乃至…香尋は世に…乃至…味尋は世に…乃至…觸尋は世に…乃至…法尋は世に愛しきもの、喜ばしきものたり。此の愛は此處に生起し、此處に止住す。

色伺は世に…乃至…聲伺は世に…乃至…香伺は世に…乃至…味伺は世に…乃至…觸伺は世に…乃至…法伺は世に愛しきもの、喜ばしきものたり。此の愛は此處に生起し此處に止住す。これぞ、比丘等よ、苦集聖諦とは名けらる。

310

二〇　次に比丘等よ、苦滅聖諦とは何ぞや。

かの愛の残りなき離欲・滅盡・捨離・棄捨・解脱・無染これなり。

次に、比丘等よ、彼の愛は何處に捨棄せられ何處に止滅するや。世に愛しきもの、喜ばしきもののあらば、此の愛は此處に捨棄せられ、此處に止滅す。

世に如何なるものか愛しきもの、喜ばしきものなる。眼は世に愛しきもの、喜ばしきものたり。此の愛は此處に捨棄せられ、此處に止滅す。耳は世に…乃至…鼻は世に…乃至…舌は世に…乃至…身は世に…乃至…意は世に愛しきもの、喜ばしきものたり。此の愛は此處に捨棄せられ、此處に止滅す。

色は世に…乃至…聲は世に…乃至…香は世に…乃至…味は世に…乃至…觸は世に…乃至…法は世に愛しきもの、喜ばしきものたり。此の愛は此處に捨棄せられ、此處に止滅す。

眼識は世に…乃至…耳識は世に…乃至…鼻識は世に…乃至…舌識は世に…乃至…身識は世に…乃至…意識は世に愛しきもの、喜ばしきものたり。此の愛は此處に捨棄せられ、此處に止滅す。

眼觸は世に…乃至…耳觸は世に…乃至…鼻觸は世に…乃至…舌觸は世に…
311 乃至…身觸は世に…乃至…意觸は世に愛しきもの、喜ばしきものたり。此の愛
は此處に捨棄せられ、此處に止滅す。

眼觸所生の受は世に…乃至…耳觸所生の受は世に…乃至…鼻觸所生の受は世に…乃至…舌觸所生の受は世に…乃至…身觸所生の受は世に…乃至…意觸所生の受は世に愛しきもの、喜ばしきものたり。此の愛は此處に捨棄せられ此處に止滅す。

色想は世に…乃至…聲想は世に…乃至…香想は世に…乃至…味想は世に…乃至…觸想は世に…乃至…法想は世に愛しきもの、喜ばしきものたり。此の愛は此處に捨棄せられ此處に止滅す。

色思は世に…乃至…聲思は世に…乃至…香思は世に…乃至…味思は世に…乃至…觸思は世に…乃至…法思は世に愛しきもの、喜ばしきものたり。此の愛は此處に捨棄せられ此處に止滅す。

色愛は世に…乃至…聲愛は世に…乃至…香愛は世に…乃至…味愛は世に…

乃至…觸愛は世に…乃至…法愛は世に愛しきもの、喜ばしきものたり。此の愛は此處に捨棄せられ此處に止滅す。

色尋は世に…乃至…聲尋は世に…乃至…香尋は世に…乃至…味尋は世に…乃至…觸尋は世に…乃至…法尋は世に愛しきもの、喜ばしきものたり。此の愛は此處に捨棄せられ此處に止滅す。

色伺は世に…乃至…聲伺は世に…乃至…香伺は世に…乃至…味伺は世に…乃至…觸伺は世に…乃至…法伺は世に愛しきもの、喜ばしきものたり。此の愛は此處に捨棄せられ、此處に止滅す。

これぞ比丘等よ、苦滅聖諦と名けらる。

二一　次に、比丘等よ、苦滅道聖諦とは何ぞや。

八支聖道、卽ち正見・正思・正語・正業・正命・正精進・正念・正定これなり。

而して、比丘等よ、正見とは何ぞや。

312 實に比丘等よ、苦に關する知、苦の集に關する知、苦の滅に關する知、苦の滅に到る道に關する知、これぞ、比丘等よ、正見とは名けらる。

次に、比丘等よ、正思とは何ぞや。
無欲の思、無恚の思、無害の思、これぞ比丘等よ、正思とは名けらる。
次に、比丘等よ、正語とは何ぞや。
兩舌よりの禁制、悪口よりの禁制、妄語よりの禁制、綺語よりの禁制、これぞ、比丘等よ、正語とは名けらる。
次に、比丘等よ、正業とは何ぞや。
殺生よりの禁制、不與取よりの禁制、邪婬よりの禁制、これぞ、比丘等よ、正業とは名けらる。
次に、比丘等よ、正命とは何ぞや。
こゝに比丘等よ、聖弟子は邪命を捨て、正命に依りて命(生活)を營む。これぞ、比丘等よ、正命とは名けらる。
次に、比丘等よ、正精進とは何ぞや。
こゝに比丘等よ、比丘は未生の悪、不善の法を生ぜざらしめむとの決意を起すに努力し、精進を爲し、心を緊張せしむるに勤む。已生の悪不善の法を遠離せむ

との決意を起すに努力し、精進を爲し、心を緊張せしむるに勤む。未生の善法を生ぜしめむとの決意を起すに努力し、精進を爲し、心を緊張せしむるに勤む。已
313 生の善法を住せしめ、惑亂せしめず、増長し、充滿し、成立し、成就せしむる決意を起すに努力し、精進を爲し、心を緊張せしむるに勤む。これぞ、比丘等よ、正精進とは名けらる。

次に比丘等よ、正念とは何ぞや。

こゝに、比丘等よ、比丘は身に就きて身を觀じて住し、精勤し、正智正念にして、世の欲と惱とを捨し、受に就きて…乃至…心に就きて…乃至…法に就きて法を觀じて住し、精勤し、正智正念にして、世の欲と惱とを捨す。これぞ、比丘等よ、正念とは名けらる。

次に、比丘等よ、正定とは何ぞや。

こゝに、比丘等よ、比丘は欲を去り、不善法を離れて有尋有伺にして、離より生ぜる喜と樂とのある初禪に達して住す。尋伺を滅して、內心靜安となり、心專一となり、無尋無伺にして、定より生ぜる喜と樂とのある第二禪に達して住す。更に

喜を離れ捨となりて住し、正念正智にして、身を以て樂を感受し、唯、諸聖者が「これ捨にして正念樂住なり」と說ける第三禪に達して住す。次に樂を捨て、苦を離れ、前に感じたる悅と憂とを共に滅したるが故に不苦不樂にして、捨念淸淨となれる第四禪に達して住す。これぞ、比丘等よ、正定とは名けらる。

比丘等よ、これぞ苦滅道聖諦とは名けらる。

斯く內に法に就きて法を觀じて住し、外に法に就きて法を觀じて住し、また內外倶に法に就きて法を觀じて住す。或は法に就きて生法を觀じて住し、又法に就きて滅法を觀じて住し、又法に就きて生滅の法を觀じて住す。尙又、智識所成のもの及び憶念所成のものに對すると同じ程度に「法あり」との思念眼前す。彼は賴らずして住し、且世の如何なるものにも執著せず。比丘等よ、是の如く、比丘は法に就きて法を觀じて住す。

二二　比丘等よ、實に何人たりとも、此の四念處を七年間、是の如く修せむ者には、二果中の一果(卽ち)現法に於て究竟智、或は有餘ならば不還が期待せらる。比丘等よ、七年の間(念を)立すべし。比丘等よ、實に何人なりとも、此の四念處を六年間、

…乃至…五年間…乃至…四年間…乃至…三年間…乃至…二年間…乃至…一年間、是の如く修せむ者には、二果中の一果〔即ち〕現法に於て究竟智、或は有餘ならば不還が期待せらる。比丘等よ、何人なりとも、此の四念處を七箇月間、是の如く修せむ者には、二果中の一果〔即ち〕現法に於て究竟智、或は有餘ならば不還が期待せらる。比丘等よ、七箇月の間〔念を〕立すべし。比丘等よ、實に何人なりとも、此の四念處を六箇月…乃至…五箇月…乃至…四箇
315 月…乃至…三箇月…乃至…二箇月…乃至…一箇月…乃至…半箇月間、是の如く修せむ者には、二果中の一果〔即ち〕現法に於て究竟智、或は有餘ならば不還が期待せらる。比丘等よ、半月の間〔念を〕立すべし。比丘等よ、實に何人なりとも、此の四念處を七日間、是の如く修せむ者には、二果中の一果〔即ち〕現法に於て究竟智、或は有餘ならば不還が期待せらる。『比丘等よ、こは衆生を淨くする爲、憂悲を度する爲、苦惱を滅する爲、正理を得る爲、涅槃を證する爲の、唯一趣向の道、即ち四念處なり』とて、斯くは述べたるにて、此〔の經〕は之が爲に說かる」と。

世尊は斯く曰へり。かの隨喜せる諸の比丘等は、世尊の所說を歡喜しぬ。

註❶「病は苦なり」vyādhi pi dukkhā は、定本に〔 〕印を以て括してある。此の句は中部經典の分別聖諦經(Saccavibhaṅgasutta)には無く、相應部經典の轉法輪品第二(Dhammacakkappavattana-vaggo-dutiyo)に在る。惟ふに此の句は、轉法輪品より取り來りて此の經に添加挿入したるものなるべし。

弊宿経 (Pāyāsi-sutta)

二三　弊宿經（パーヤーシ・スッタンタ）

316 是の如く我聞く、

一　一時、尊者鳩摩羅迦葉、拘薩羅國に遊行し、五百の比丘大衆と倶に斯波醯と稱する拘薩羅の城市に到りぬ。そこにて尊者鳩摩羅迦葉は斯波醯の北方なる尸舍婆林に住したり。爾の時、王族弊宿は斯波醯に居住しぬ。この城は、人畜繁榮し、牧草・薪・水・穀類の豐饒なる王領地にして拘薩羅國王波斯匿より授けられたる淨施の拜領地なりき。

二　爾の時、王族弊宿は「斯く他世なく、化生の有情なく、善惡業の果報なし」との斯
317 かる惡邪見を懷けり。時に斯波醯城市の婆羅門長者等は聞きぬ。「實に沙門瞿曇の弟子、沙門鳩摩羅迦葉は拘薩羅國に遊行し、五百の比丘大衆と倶に斯波醯に來り、その北方なる尸舍婆林に住せり。而して彼の尊者鳩摩羅迦葉には廣博・聰明・叡智・多聞にして辯才機に應じ、談論に長じたる耆舊長宿の阿羅漢なりとの大

名稱あり。斯かる阿羅漢に見ゆるは洵によし」と。時に斯波醯城市の婆羅門・長者等は斯波醯を出で、群となして隊々相隨ひ、北方に進みて尸舍婆林に近づき行けり。

三　爾の時、王族弊宿は高樓上にありて日中の休息をなせり。偶〻王族弊宿は、斯波醯城市の婆羅門・長者等の斯波醯を出で群をなして隊々相隨ひ、北方に進み尸舍婆林に近づけるを見たり。乃ち從者に問ひて言く、

「從者よ、何の故に斯波醯城市の婆羅門・長者等は斯波醯を出で、群をなして隊々相隨ひ、北方に進みて尸舍婆林に行くや」。

318 「主よ、沙門瞿曇の弟子、沙門鳩摩羅迦葉は拘薩羅國に遊行し、五百の比丘大衆と倶に斯波醯に來り、北方尸舍婆林に住せり。而して彼の尊者鳩摩羅迦葉には廣博・聰明・叡智多聞にして、辯才機に應じ談論に長じたる耆舊長宿の阿羅漢なりとの大名稱あり。かの尊者鳩摩羅迦葉に見えむが爲、彼等は近づき行くなり」。

「然らば、從者よ、斯波醯城市の婆羅門・長者等の許に近づきて、彼等にかく言へ、『我が主、王族弊宿は、斯く言へり。「卿等よ、暫時待たむことを。王族弊宿も亦沙門鳩

摩羅迦葉に見えむが爲、近づき行かむ」と」。「その故は沙門鳩摩羅迦葉は蒙昧愚鈍なる斯波醯城市の婆羅門長者等に『斯く他世あり、化生の有情あり、善惡業の果報あり』と豫め教示するならむ。「而して實には他世なく、化生の有情なく、善惡業の果報あることなければなり」と。

時にかの從者は王族弊宿に然諾して、斯波醯の婆羅門等の許に近づき行きて彼等に斯く言ひぬ。

「我が主、王族弊宿は斯く言へり『卿等よ、暫時待たむことを。王族弊宿も亦、沙門鳩摩羅迦葉に見えむが爲、近づき行かむ』と。

四　時に王族弊宿は斯波醯の婆羅門・長者等に圍繞せられて、尸舍婆林なる尊者鳩摩羅迦葉に近づきぬ。近づきて尊者鳩摩羅迦葉と親しく挨拶を交し、懇懃な
319 る敬意を表し合ひて一方に坐しぬ。斯波醯の婆羅門長者等も亦、或は尊者鳩摩羅迦葉に禮敬して一方に坐し、或は尊者鳩摩羅迦葉と親しく挨拶を交し、懇懃なる敬意を表し合ひて、一方に坐し、或は尊者鳩摩羅迦葉に合掌し低頭して一方に坐し、或は姓名を告げて一方に坐し或は默然として一方に坐しぬ。

五　一方に坐し終りて、王族弊宿は尊者鳩摩羅迦葉に斯く言へり。
「尊迦葉よ、予は斯く『他世はなく、化生の有情なく、善悪業の果報なし』とする斯かる論者なり、斯かる見者なり」。
「王族よ、我は斯かる論、斯かる見をば、未だ曾て見ず、曾て聞かず。何の故に『斯く他世はなく、化生の有情なく、善悪業の果報あることなし』と斯く論ぜらるべきや。王族よ、然らば我、今こゝに卿に問はむ。卿の意に随ひて答へよ。王族よ、卿の意に於て如何、此の日月は此世にありや、他世にありや。天となすや、人となすや」。
「尊迦葉よ、此の日月は他世にありて此世にあらず、天にして人ならず」。
「然らば、王族よ、この論據によりて卿は、『斯く他世はあり、化生の有情あり、善悪業の果報あり』と斯く信ずべし」。
六　「如何に尊者迦葉は斯く言ふとも、尚予は『斯く他世はなく、化生の有情なく、善悪業の果報なし』と、斯く思惟す」。
「王族よ、然らば卿には『斯く他世はなく、化生の有情なく、善悪業の果報なし』とす
320 る論據ありや」。

「尊迦葉よ、予には「斯く他世はなく、化生の有情なく、善惡業の果報なし」とする論據あり」。

「然らば王族よ、そは如何に」。

「尊迦葉よ、今こゝに予の朋友・知己・親族・血緣の者にして、殺生者・偷盜者・邪婬者・妄語者・兩舌者・惡口者・綺語者・貪欲者・瞋恚者・邪見者ありとせよ。彼等は他日、罹病して苦惱し激痛す。今や彼等はこの病氣より恢復する能はざるべしと予の知る時、予は彼等の許に近づきてかく言ふ、『卿等よ、某沙門婆羅門は、「殺生者・偷盜者・邪婬者・妄語者・兩舌者・惡口者・綺語者・貪欲者・瞋恚者・邪見者は、身壞命終の後、惡趣・苦處・地獄に生ず」とする斯かる論者、斯かる見者なり。卿等は實に、殺生者・偷盜者・邪婬者・妄語者・兩舌者・惡口者・綺語者・貪欲者・瞋恚者・邪見者たり。若しかの尊沙門婆羅門の言にして眞實なりせば、卿等は身壞命終の後、惡趣・苦處・地獄に生ずべし。卿等若し身壞命終の後、惡趣・苦處・地獄に生じなば、予の許に來りて、告げよ。斯く他世はあり、化生の有情あり、善惡業の果報ありと。卿等は實に、予が信用し信賴するに足る人々なり。卿等によりて見られたる事は、宛も予自らの所見の如かる

321 べし』と。彼等は予に然諾しつゝ、而も來りて告げず、又使者をも遣はさず。尊迦葉よ、此の論據に依りて、予は『斯く他世はなく、化生の有情なく、善惡業の果報あることなし』と思惟す」。

七　「王族よ、然らば、我、今、卿に問はむ、卿の意に隨ひて答へよ。王族よ、卿の意に於て如何。今こゝに卿の臣民あり、盜賊惡漢を捕へ來り『主君よ、こは盜賊惡漢なり、彼に主の欲する所の刑罰を加へむことを』とて示すとせむ。卿は彼等に斯く命ずるならむ。『然らば、汝等よ、此の者を強き索もて後手に固く縛り、頭を剃り、鳴り響く小鼓を打ちて、街より街に、巷より巷に引廻し、南門を出で、城市の南方なる刑場に於て首を刎ぬべし』と。彼等は然諾して彼の者を強き索もて、後手に固く縛り、頭を剃り鳴り響く小鼓を打ちて、街より街に巷より巷に引廻し、南門を出でゝ、城市の南方なる刑場に坐せしむるならむ。時にかの盜賊は『我が刑吏等よ、某村某邑に予の朋友・知己・親族・血緣の者あり、予の彼等に逢ひて來るまで「處刑を待た
322 むことを』との哀願の許可を刑吏等より得べきや。或は哀願者の首を刑吏等は直ちに刎ぬべきや」。

「尊迦葉よ、彼の盗賊は『我が刑吏等よ、某村某邑に予の朋友・知己・親族・血縁の者あり。予の彼等に逢ひて來るまで〔處刑を〕待たむことを』との哀願を刑吏等より聽許せらるゝことなし。刑吏等は直ちにこの哀願者の首を刎ぬべし」。

「王族よ、かの盗賊と雖も人間たり。彼は〔人間にして而も〕人間たる刑吏等に、處刑の猶豫を哀願して許されず。如何に況んや、卿の朋友・知己・親族・血縁の者にして、殺生者・偸盗者・邪婬者・妄語者・兩舌者・惡口者・綺語者・貪欲者・瞋恚者・邪見者の、身壞命終したる後、惡趣・苦處・地獄に生じて、『我が獄卒等よ、予等の王族、弊宿の許に到りて、他世はあり、化生の有情あり、善惡業の果報ありと告げ來るまで待たむことを』との哀願を一獄卒者より聽許せらるべけむや。王族よ、この論據に依りて卿は『斯く他世はあり、化生の有情あり、善惡業の果報あり』と信ずべし」。

八　「如何に尊迦葉は斯く言ふとも、予は尙『斯く他世はなし、化生の有情なし、善惡業の果報あることなし』と斯く思惟す」

「王族よ、卿に尙『斯く他世はなく、化生の有情なく、善惡業の果報なし』と斯く思惟すべき論據ありや」。

「尊迦葉よ、予には、『斯く他世なく、化生の有情なく、善惡業の果報なし』と斯く思惟すべき論據あり」。

「然らば、王族よ、そは如何に」。

「尊迦葉よ、今こゝに予の朋友・知己・親族・血緣の者にして、離殺生者・離偸盗者・離邪
323 婬者・離妄語者・離兩舌者・離惡口者・離綺語者・不貪欲者・不瞋恚者・正見者ありとせよ。彼等は他日、罹病して苦惱し激痛す。彼等はこの病氣より恢復する能はざるべし」と予の知る時、予、彼等の許に近づきて斯く言ふ。『卿等よ、某沙門婆羅門は、離殺生者・離偸盗者・離邪婬者・離妄語者・離兩舌者・離惡口者・離綺語者・不貪欲者・不瞋恚者・正見者は身壞命終の後、善趣・天界に生ずべしとする斯かる論者なり、斯かる見者なり。卿等は實に離殺生者・離偸盗者・離邪婬者・離妄語者・離兩舌者・離惡口者・離綺語者・不貪欲者・不瞋恚者・正見者たり。若し、かの尊沙門婆羅門の言にして眞實なりせば、卿等は身壞命終の後、善趣・天界に生ずべし。卿等よ、若し卿等にして、身壞命終の後、善趣・天界に生ぜば、予の許に來りて「斯く他世はあり、化生の有情あり、善惡業の果報あり」と告げよ。卿等は實に予が信用し信賴するに足る人々なり。

汝等によりて見られたる事は宛も予自らの所見の如くなるべし』と。彼等は予に然諾しつゝ、而も來りて告げず、又使者をも遣はさず。尊迦葉よ、予は實に此の
324 論據に依りて、『斯く他世はなく、化生の有情なく、善惡業の果報なし』と、斯く思惟す」。

九　「然らば王族よ、我卿に譬喩をなさむ。譬喩によりて諸の有智者は所説の義を解す。王族よ、譬へば人あり、糞坑に墜落して身首共に沒溺せむ。時に卿は臣下に斯く命ずとせよ。『汝等よ、かの人をその糞坑より救出せよ』と。彼等は然諾して、かの人をその糞坑より救出するならむ。次に卿は彼等に、『汝等よ、かの人の身體より竹篦もて糞穢を三度拂拭せよ』と命ずとせよ。彼等は然諾して、かの人の身體より竹篦もて糞穢を三度拂拭せむ。更に卿は彼等に斯く命ずとせよ。『汝等よ、かの人の身體をば黃土もて三度よく塗附すべし』と。彼等は然諾してかの人の身體をば黃土もて三度よく塗附するならむ。更に卿は彼等に斯く命ずとせよ。『汝等よ、かの人をば香油もて塗り、細末もて三度淨潔にすべし』と。彼等はかの人をば香油もて塗り、細末もて三度淨潔にするならむ。次に卿は彼等に

斯く言ふとせよ。『汝等よ、かの人の鬚髮を調整せよ』と。彼等はかの人の鬚髮を調整すべし。次に卿は彼等に斯く言ふとせよ。『汝等よ、かの人に最上の花環と香水と衣裳とを持ち來れ』と。彼等はかの人に最上の花環と香水と衣裳とを持
325
ち來るべし。次に卿は彼等に斯く命ずとせよ。『汝等よ、彼の人を高樓に昇らしめ、五欲の樂を恣にせしめよ』と。彼等はかの人を高樓に昇らしめ、五欲の樂を恣にせしむべし。王族よ、卿の意に於て如何。浄浴し、塗香し、調髮し、嚴飾し、美衣を纏ひて、高樓に昇り、五欲の樂を得て、享樂し恣にせる彼の人の再び糞坑に墜落せむと欲するや」。

「然らず、尊迦葉よ」。

「そは何故なるや」。

「尊迦葉よ、糞坑は不浄にして、不浄なりとせられ、臭穢にして、臭穢なりとせられ、嫌忌すべく、嫌忌すべしとせられ、厭避すべく、厭避すべしとせらるるが故に」。

「王族よ、實に人界も亦是の如し。諸天にとりて人界は不浄にして、不浄なりとせられ、臭穢にして、臭穢なりとせられ、嫌忌すべく、嫌忌すべしとせらる、厭避すべ

く、厭避すべしとせらる。王族よ、人界の臭氣は天界に昇ること實に百由旬なり。如何ぞ、卿の朋友・知己・親族・血緣の者にして、離殺生者・離偸盜者・離邪婬者・離妄語者・離兩舌者・離惡口者・離綺語者・不貪欲者・不瞋恚者・正見者の、身壞命終したる後、天上界に生じたるが、還り來りて『斯く他世はあり、化生の有情あり、善惡業の果報あり』と告げむや。王族よ、この論據によりて卿は『斯く他世はあり、化生の有情あり、善惡業の果報あり』と斯く信ずべし」。

326 一〇 「如何に尊迦葉は斯く言ふとも、而も予は尙是の如く思惟す。『斯く他世はなく、化生の有情なく、善惡業の果報なし』と。

「王族よ、卿に尙……乃至……思惟すべき論據ありや」。

「尊迦葉よ、……乃至……思惟すべき論據あり」。

「然らば、　そは如何に、王族よ」。

「尊迦葉よ、今、こゝに予の朋友・知己・親族・血緣の者にして離殺生者・離偸盜者・離邪婬者・離妄語者・離飮酒者ありとせよ。彼者は他日罹病して苦惱し激痛す。若し予、『彼等の此の病氣より恢復する能はざるべし』と知らば予彼等の許に近づき

て斯く言ふ。「卿等よ、某沙門婆羅門は、離殺生者・離偷盗者・離邪婬者・離妄語者・離飲酒者は、身壞命終の後、善趣・天界に生じて忉利天の眷屬となるべしとする、斯かる論者なり、斯かる見者なり。卿等は實に離殺生者・離偷盗者・離邪婬者・離妄語者・離飲酒者たり。卿等よ、若しかの尊沙門婆羅門の言にして眞實なりせば、卿等は身壞命終の後、善趣・天界に生じて、忉利天の眷屬となるべし。卿等よ、若し卿等にして、身壞命終の後、善趣・天界に生じて忉利天の眷屬とならば、還り來りて『斯く他世はあり、化生の有情なり、善惡業の果報あり』と予に告げよ。卿等は予の信用し信賴するに足る人々なり。故に卿等の所見は、宛も予自らの所見の如かるべし」と。

327 彼等は予に然諾して而も還り來りて告げず、又使者をも遣はさず。尊迦葉よ、此の論據に依りて、予は『斯く他世はなく、化生の有情なく、善惡業の果報あることなし』と思惟す」。

一一 「然らば王族よ、予は今こゝに問はむ。卿の意に隨ひて答へよ。王族よ、人界の百年は實に忉利天の一日一夜なり。その卅夜は一月、その十二月は一年なり、この一千年を以て忉利天の壽量と爲す。卿の朋友・知己・親族・血緣の者にして、

離殺生者・離偷盜者・離邪婬者・離妄語者・離飲酒者の身壞命終したる後、善趣天界に生じて忉利天の眷屬とならむ。若し彼等に「予等は二三晝夜の間、天の五欲の樂を得て享樂し恣にし、然る後、王族弊宿の許に行きて、斯く他世はあり、化生の有情あり、善惡業の果報ありと語らむ」と「の念起らむ」。然らば彼等は還り來りて卿に、斯く他世はあり、化生の有情あり善惡業の果報ありと語るべきや」。

「否なり、尊迦葉よ、予等は其の時、命終して既に久しからむ。「忉利天あり」或は「忉利天は斯く長壽なり」と尊迦葉に、告ぐる者は誰なりとも、予等は尊迦葉の「忉利天
328 あり」或は「忉利天は斯く長壽なり」との言をば信ぜず」。

「譬へば、王族よ、生盲の人の如し。彼は黑白の色を見ず、青・黄・赤・白等の色を見ず、同異を見ず、星宿、日月を見ず。而して彼は、「黑白色なし、黑白色を見る者なし。青・黄・赤・白色、同異、星宿、日月なし、青・黄・赤・白色、同異、星宿、日月を見る者なし」と斯く言ふとせよ、然らば、王族よ、彼の言は正當なりや」。

「否なり、尊迦葉よ、黑白色あり、黑白色を見る者あり、青・黄・赤・白色・同異、星宿、日月あ
329 り、青・黄・赤・白色、同異、星宿、日月を見る者あり。故に尊迦葉よ、「予はこれ等を知ら

ず見ず、故にこれあることなし」との彼の言は正當ならず」。
「王族よ、卿も亦復、是の如し。思ふに生盲者の如く、卿も亦答へて、言はむ。『尊迦葉よ、忉利天あり、或は忉利天は長壽なりと語る者は誰なりとも、予等は、忉利天あり、或は忉利天は長壽なりとの尊迦葉の言を信ぜず』と。
王族よ、斯く他世は、卿の思惟するが如く、肉眼をもて見らるべきものにあらず。王族よ、聲少く、音響少き、森林の遠離處に坐臥する沙門婆羅門は、そこに不放逸にして一心不亂に住して、天眼を淨む。彼等は超人的なる淨天眼によりて、此世他世を見、化生の有情を見るなり。王族よ、斯くして他世は見らるべきなり、卿の思惟するが如く、この肉眼をもてするに非ず。王族よ、この論據によりて、卿は斯く他世はあり、化生の有情あり、善惡業の果報あることを信ぜよ」。
一二　「いかに尊迦葉は斯く言ふとも、予は尚『斯く他世はなく、化生の有情なく、善
330 惡業の果報あることなし』と思惟す」。
「王族よ、卿に尚…乃至…思惟すべき論據ありや」。
「尊迦葉よ、…乃至…思惟すべき論據あり」。

「王族よ、然らばそは如何に」
「尊迦葉よ、今こゝに予、戒を具し有徳にして活くるを冀ひ死するを欲せず、樂を欲求して苦を嫌忌せる沙門婆羅門を見る。尊迦葉よ、予思ふに、若し戒を具して有徳なる此の尊沙門婆羅門等にして、『予等、こゝより死せば更に好境遇となるべし』と知らば、今この戒を具して有徳なる尊沙門婆羅門等は毒を仰ぎ、或は刀劍にて自殺し、或は懸崖より墮すべし。實にこの戒を具して有徳なる沙門婆羅門等は『予等、こゝより死せば更に好境遇となるべし』と知らざるが故に、彼等は生を欣ひ死を厭ふなり。尊迦葉よ、この論據によるが故に『斯く他世はなく、化生の有情なく、善惡業の果報なし』と予は思惟す」。

一三　「然らば、王族よ、我卿に譬喩をなさむ。譬喩によりて諸の有智者は所說の義を解す。王族よ、往昔、一婆羅門に二夫人あり。大夫人には十一二歲の息子あり。[1]小夫人は妊娠して出產に近し。時にかの婆羅門は命終しぬ。爾の時、かの儒童は小夫人に斯く言ひぬ。『小母よ、所有の財產・穀物・金・銀等は皆予に屬す。汝
331
にはこゝに一分もなし。父の遺產を予に讓渡せよ』と。斯く言はれて、かの小夫

人はかの儒童に言ひぬ。『小子よ、わが出産まで待て、若し童男ならば彼にも一分あるべし。若し童女ならば彼女は又汝の妻[2]となるべし』と。

再び、儒童は小夫人に斯く言ひぬ。『小母よ、所有の財産・穀物・金・銀等は皆予に屬す。汝にはこゝに一分もなし。父の遺産を予に讓渡せよ』と。再び、かの小夫人はかの儒童に斯く言ひぬ。『小子よ、わが出産まで待て、若し童男ならば彼にも一分あるべし。若し童女ならば彼女は又汝の妻となるべし』と。

三度かの儒童は小夫人に斯く言ひぬ。『小母よ、所有の財産・穀物・金・銀等は皆予に屬す、汝にはこゝに一分もなし。父の遺産を予に讓渡せよ』と。時にかの小夫人は利刀を執りて內室に入り『童男なるや將た童女なるやを知らばや』とて割腹しぬ。彼女は自己の生命も胎兒も財產をも失へり。かくて斯くも蒙昧無智なる彼女は不當にも遺產を貪求して災禍に陷れり。王族よ、卿も亦復是の如し、蒙
昧無智なる卿は、不當にも他世を貪求して災禍に陷るべきこと、恰もかの蒙昧無
332 智なる婆羅門の妻の、不當にも遺產を貪求して災禍に陷りたるが如し。王族よ、
戒を具して有德なる沙門婆羅門等は、熟せざるを強ひて熟せしめむとすること

なく、賢にして「自然の成熟を待つものなり。所以如何となれば、王族よ、戒を具して有德なる沙門婆羅門等は生くることによりて「世を益す」。王族よ、戒を具して有德なる沙門婆羅門等は久しく長時に世に住在するに隨ひて、彼等は益々多くの福德を生じ、衆人の利益の爲に、衆人の安樂の爲に、世間を憐愍せむが爲に、人天の利益安樂の爲に世に住在するなり。王族よ、この論據によりて卿は「斯く他世はあり化生の有情あり、善惡業の果報あり」と信ぜよ」。

一四　「如何に尊迦葉は斯く言ふとも、予は尙斯く思惟す。「斯く他世はなく、化生の有情無く、善惡業の果報なし」と」。

「王族よ、卿に尙…乃至…思惟すべき論據ありや」。

「尊迦葉よ…乃至…思惟すべき論據あり」。

「然らばそは如何に。　王族よ」。

「尊迦葉よ、今こゝに臣民等の盜賊惡漢を捕へて「主君よ、こは盜賊惡漢なり、彼に任意の刑罰を加へむことを」とて予に示すとせよ。予、彼等に「然らば、汝等よ、この者をば生けるままに大釜中に投入し、覆蓋をなし、濕皮にて密閉し、濕泥もて厚く

333 塗り、鑪上に置きて火を焚くべし』と。彼等は予に然諾して、かの者をば生けるまま大釜中に投入し、覆蓋をなし、濕皮にて密閉し、濕泥もて厚く塗り、鑪上に置きて火を焚かむ。予等の『彼者は死せり』と知る時、かの釜を下さしめ、縛を解き、覆蓋を開きて、『予等は恐らく彼の生命の去り行くを見るならむ』とて、徐に窺ひ見るも、彼の生命の去り行くを予等は見ず。尊迦葉よ、この論據によりて予は『斯く他世はなく、化生の有情なく、善惡業の果報なし』と思惟す』。

一五　「然らば王族よ、予、今こゝに卿に問はむ、卿の意に隨ひて答へよ。王族よ、卿は日中の休息にて夢を見、苑囿・林野・國邑・泉池の快味を經驗することなきや」。

「尊迦葉よ、予は日中の休息に於て夢を見、苑囿・林野・國邑・泉池の快味を經驗することあり」。

「爾の時、侏儒・傴僂・少女・處女等の侍女、卿を守護するや」。

「然り、尊迦葉よ、爾の時、侏儒・傴僂・少女・處女等の侍女、予を守護す」。

「然らば彼女等は卿の生命の、卿の身體より出入するを見るや」。

334 「否、然らず、尊迦葉よ」。

「王族よ、彼女等は生ける者にして、而も生ける卿の生命の[卿の身體より]出入するを見ず。如何に況んや、卿にして、死せる者の生命の出入するを見むことをや。王族よ、この論據によりて卿は斯く信ぜよ。『斯く他世はあり、化生の有情あり、善惡業の果報あり』と」。

一六　「如何に尊迦葉は斯く言ふとも、予は尚斯く信ず。『斯く他世はなく、化生の有情なく、善惡業の果報なし』と」。

「王族よ、卿に尚……乃至……思惟すべき論據ありや」。

「尊迦葉よ……乃至……思惟すべき論據あり」。

「然らばそは如何に。」王族よ」。

「尊迦葉よ、今こゝに臣民等の、盜賊惡漢を捕へて『主君よ、こは盜賊惡漢なり、彼に任意の刑罰を加へられよ』とて予に示すとせよ。予、彼等に『然らば汝等よ、此の者をば存命中に秤器にて秤り、弓の絃もて絞殺して後、更に秤器にて秤れ』と命ぜむ。彼等、予に然諾して此の者をば生けるまゝ、秤器にて秤り、弓の絃もて絞殺して再び秤器にて秤らむに、彼の存命中は經く柔軟にして動的なり。彼の命終後は、重

く硬固にして動的ならず。尊迦葉よ、此の論據によりて予は思惟す。『斯く他世はなく化生の有情なく善惡業の果報なし』と」。

一七 「然らば、王族よ、我、卿に譬喩をなさむ。譬喩によりて諸の有智者は所說の
335 義を解す。王族よ、譬へば人あり、終日熱して炎焔赤熱したる鐵丸を秤器にて秤り、他日之を冷却したる時、秤器にて秤らむが如し。然らば、この鐵丸は何時に於て輕く柔軟にして動的なりや、炎焔赤熱せる時なりや、將た冷却消熱せる時なりや」。

「尊迦葉よ、かの鐵丸は、火熱と空氣を伴ひ、炎焔赤熱せる時に輕く柔軟にして動的なり。而して、かの鐵丸は火熱と空氣を伴はず、冷却消熱せる時に、重く硬固にして動的ならず」。

「王族よ、身體も亦復是の如し。此の人體若し壽と煖と識とを倶有せる時は、輕く柔軟にして動的なり。然るにこの人體、壽と煖と識とを倶有せざる時は、重く硬固にして動的ならず。この論據によりて、王族よ、卿は信ぜよ。『斯く他世はあり、化生の有情あり、善惡業の果報あり』と」。

一八　「如何に尊迦葉は斯く言ふと雖も、予は尙斯く信ず。「斯く他世はなく、化生の有情なく、善惡業の果報あることなし」と。

「王族よ、卿に尙……乃至……思惟すべき論據ありや」。

「尊迦葉よ……乃至……思惟すべき論據あり」。

「然らば、そは如何に。王族よ」

「尊迦葉よ、今こゝに臣民等の盗賊惡漢を捕へて『主君よ、こは盗賊惡漢なり、此の
336 者を任意に處刑せむことを』とて予に示すとせよ。予、彼等に『然らば、汝等よ、此の者をば、皮・膚・肉・腱・骨・髓を傷害することなくして、その生命を奪ひ去れ』と斯く命ぜむ。彼等は予に然諾して、かの者を、皮・膚・肉・腱・骨・髓を傷害することなくして、生命を奪はむ。彼、半死の狀態にある時、予は彼等に命じて言く『然らば、汝等よ、此の者を仰臥せしめよ。予等、恐らく彼の生命の去るを見るならむ』と。彼等はかの者を仰臥せしむるも、予等は彼の生命の去り行くを見ることなし。予、更に彼等に命じて言く『然らば、汝等よ、此の者をば、俯臥せしめよ……乃至……一方に橫臥せしめよ……乃至……他方に橫臥せしめよ……乃至……起立せしめよ……乃至……倒置せよ……乃

至…手もて撲て…乃至…棒もて撲て…乃至…杖もて撲て…乃至…刀劍もて撲て…乃至…上下左右に振盪せよ。『予等恐らく彼の生命の去るを見るならむ』と。彼等はかの人を上下左右に振盪するも、而も予等は彼の生命の去るを見ず。彼にはかの眼あり、而して色は存在するも、而も彼の〔眼〕處は〔色を〕認識せず、かの耳あり、而して聲は存在するも、而もかの〔耳〕處は〔聲を〕認識せず、かの鼻あり、而して香は存在するも、而もかの〔鼻〕處は〔香を〕認識せず、かの舌あり、而して味は存在するも、而
337 もかの〔舌〕處は〔味を〕認識せず、かの身あり、而して觸は存在するも、而もかの〔身〕處は〔觸を〕認識せず。尊迦葉よ、この論據によりて予はかく思惟す。斯く他世はなく化生の有情なく、善惡業の果報なし』と。

一九 「然らば、王族よ、我、卿に譬喩をなさむ、譬喩によりて諸の有智者は所説の義を解す。王族よ、往昔一の吹貝者あり、螺貝を携へて邊國に到りぬ。彼、一村落に近づき行きて、村の中央に立ち、三度螺貝を吹奏し、螺貝を地に置きて一方に坐しぬ。王族よ、時にかの邊地の人々、斯く思惟したり。『斯くも魅惑的なる、斯くも愉快なる斯くも陶醉せしむる、斯くも莊重なる、斯くも輕快なるは、そも誰が聲なら

む』と。彼等は集ひ來りて、かの吹貝者に言ひぬ。『友よ、斯くも愉快なる、斯くも陶醉せしむる、斯くも莊重なる、斯くも輕快なるは、そも誰が聲なるや』と。『汝等よ、斯くも魅惑的なる、斯くも愉快なる、斯くも陶醉せしむる、斯くも莊重なる、斯くも輕快なるは、螺貝と名くる此の者の聲なり』と。彼等はかの螺貝を仰臥せしめたり、『汝螺貝よ、聲を出せ。汝螺貝よ、聲を出せ』とて。されどかの螺貝は聲を出すことなかりき。彼等はかの螺貝を俯臥せしめたり……乃至……〔一方に横臥せしめたり……乃至……他方に横臥せしめたり……乃至……起立せしめたり 338 ……乃至……倒置したり……乃至……手もて撲てり……乃至……杖もて撲てり……乃至……刀劍もて撲てり……乃至……上下左右に振盪したり。『汝、螺貝よ、聲を出せ。汝螺貝よ、聲を出せ』とて。然もかの螺貝は聲を出すことなかりき。王族よ、時にかの吹貝者は斯く思惟したり。『愚昧なる哉、邊地の人々。如何なれば、不適當にも彼等は螺貝の聲を求めむとするや』とて、かの觀察しつゝある人々より螺貝を取りて、三度螺貝を吹奏し、螺貝を携へて去りぬ。王族よ、時にかの邊地の人々斯く思惟しぬ。『實にこの螺貝なるものは、人と努力と風とを伴ひて、始めて聲を出すものな

り。この螺貝にして、人と努力と風とを伴はずむば、聲を出すことなし」と。王族よ、この身體も亦復是の如し。この身體にして、壽と煖と識とを伴ふ時、卽ち行住坐臥をなす、眼もて色を見、耳によりて聲を聞き、鼻もて香を嗅ぎ、舌にて味を味ひ、身によりて觸を感じ、意もて法を識るなり。この身體にして、壽と煖と識とを伴はざる時は卽ち行住坐臥なく、眼もて色を見ず、耳によりて聲を聞かず、鼻もて香を嗅がず、舌に依りて味を味はず、身に依りて觸を感ぜず、意もて法を識ることなし。王族よ、この論據に依りて汝は斯く信ぜよ。『斯く他世はあり、化生の有情あり、善惡業の果報あり』」と。

二〇　「如何に尊迦葉は斯く言ふとも、予は尙斯く思惟す。『斯く他世はなく、化生
339 の有情なく、善惡の果報なし』」と。

「王族よ、卿に尙…乃至…思惟すべき論據ありや」。

「尊迦葉よ、…乃至…思惟すべき論據あり」。

「然らばそは如何に。王族よ」。

「尊迦葉よ、今こゝに臣民等、盜賊惡漢を捕へて、『主君よ、こは盜賊惡漢なり、彼に

任意の刑罰を加へむことを』とて、予に示すとせよ。予は彼等に命じて言はむ。『然らば、汝等よ、この者の皮を剝ぐべし、恐らくは予等、彼の生命を見るならむ』と。彼等は、かの者の皮を剝ぐも予等は彼の生命を見ることなし。予は更に彼等に斯く言はむ。『然らばこの者の膚を剝ぐべし…乃至…肉を截るべし…乃至…腱を斷つべし…乃至…骨を斫るべし…乃至…髓を割くべし。予等、恐らく彼の生命を見るならむ』と。彼等、かの者の髓を割くも、予等は彼の生命を見ることなし。尊迦葉よ、この論據に依るが故に、予は斯く思惟す。『斯く他世はなく、化生の有情なく、善惡業の果報あることなし』と」。

二一　「然らば、王族よ、予は卿に譬喩をなさむ。譬喩に依りて諸の有智者は所說の義を解す。往昔、結髮の事火外道ありて、森林の茅屋に住したり。王族よ、時に[3]その地方に一隊商到れり。時にかの隊商は、かの結髮の事火外道の草菴の附近に一宿して去りぬ。王族よ、爾の時、かの結髮の事火外道は斯く思惟しぬ。『予は
340 かの隊商の宿營に近づき行かばや、恐らく其處にて何等かの糧食を得るならむ』と。時にかの結髮の事火外道は好き時に起きて、かの隊商の宿營に近づき行き

ぬ。而してかの宿營にて、彼は柔き孩兒の仰臥して遺棄されたるを見たり。見て彼は斯く思惟しぬ。『予は見つゝ而も人の死するを放置するは非道に非ずや。如かず、予、今この孩兒を草菴に伴ひ歸り、養育して成長せしめむには』と。時にかの結髮の事火外道、かの孩兒を草菴に伴ひ般り、養育して成長せしめぬ。かの童子の十一二歲となりたる時、かの結髮の事火外道に、村落に於て或る用件起りぬ。時にかの結髮の事火外道は、かの童子に語りて言く、『小子よ、予は村落に行かむと欲す。火をよく守護せよ。汝は火を滅すること勿れ。若し汝、火を滅しなば、こゝに斧あり、こゝに薪あり、こゝに鑽あり、〔再び火を作りて〕よく守護せよ』と。時にかの結髮の事火外道は、かの童子に斯く誨へて村落に行きぬ。童子は戲に耽りて火は滅しぬ。時にかの童子は思惟すらく『父は予に斯く言へり、小子よ、よく火を守護せよ、汝は火を滅する勿れ。若し汝、火を滅しなば、こゝに斧あり、こゝに薪あり、こゝに鑽あり、再び火を作りてよく守護せよと。予は火を作りてよく
341 守護せむ』と。時に彼の童子、斧もて鑽を斫りぬ。『恐らくは火を得るならむ』とて。然れども彼は火を得ることなかりき。鑽を二分し三分し四分し五分し十分し

百分し、次第に細分したり、細分し細分して臼中に於て粉砕したり、粉砕して更に大風に簸りぬ。『恐らくは火を得るならむ』とて。されど彼は火を得ることなかりき。時にかの結髪の事火外道、村落に於てかの用件を了へ、己が草菴に近づきぬ。近づきてかの童子に言く『小子よ、何故に汝は火を滅したるや』と。『父君よ、予は戯に耽れり、爲に火は滅したり。時に予、斯く思惟しぬ。「父は予に斯く言へり、小子よ、よく火を守護せよ、汝は火を滅する勿れ、若し汝火を滅しなば、こゝに斧あり、こゝに薪あり、こゝに鑽あり、再び火を作りてよく守護せよと。予は火を作りてよく守護せむ」と。時に父君よ、予は斧もて鑽を斫りぬ、「恐らくは火を得るならむ」とて、然れど火を得ることなりき。予は鑽を二分し三分し四分し五分し十分し百分し、次第に細分したり。細分し細分して臼中に於て粉砕したり、粉砕して大風に簸りぬ。「恐らくは火を得るならむ」とて。されど予は火を得ることなかりき』と。時にかの結髪の事火外道は、斯く思惟しぬ。「この童子はいかに愚鈍にして無智なるや。如何ぞ不當に火を求めむとしたるや」と。かの觀察しつゝある童子より、鑽を取りて火を作りてかの童子に語りて言く『小子よ、斯くして火は

342 作らるべきなり。汝の如く愚鈍無智にして不當に火をば求むること能はざるべし」と。王族よ、卿も亦復是の如し、愚鈍無智にして不當に卿は他世を求む。王族よ、斯かる惡邪見を放棄せよ。卿は長夜に無益に苦惱する勿れ」。

二二　「如何に尊迦葉は斯く言ふとも、予は尚この惡邪見を放棄する能はず。拘薩羅國王波斯匿（パセーナディ）も、又他國の諸王も予を知れり『王族弊宿は、他世はなく、化生の有情なく、善惡業の果報あることなしとする斯かる論者なり、斯かる見者なり』と。尊迦葉よ、予、若し、この惡邪見を放棄せば、人々は予を斯く嘲笑するならむ。『王族弊宿は如何に蒙昧愚鈍にして、信じ難きを信ずる人なるや』と。「その嘲笑に對する」忿によりても覆によりても惱によりても、予は予の説を固持せむ」。

二三　「然らば王族よ、我、卿に譬喩をなさむ。譬喩によりて諸の有智者は所説の義を解す。往昔千車を有する大車隊商ありて、東國より西國に往きたり。隊商は到る處にて急に草・薪・水・野菜を消盡したり。かの隊商に二人の指導者ありて、
343 各々五百車を指揮したり。時にかの隊商指導者は斯く思惟しぬ。『こは千車を有する大車隊商なり。予等は到る處にて直ちに草・薪・水・野菜を消盡す、予等この

隊を二分して、各々五百車となさば如何」と。

彼等はかの隊を二分して各々五百車となせり。一隊商の指導者は多くの草・薪・水を積載して隊を進めたり。二三日行きてかの隊商は、黒色、赤眼にして髪束を解き亂し、蓮華の花環を持ち濕衣を著け濕髮にして、驢馬に牽かしめたる泥塗れの車もて、前方より路を來れる人を見たり。見て斯く言ひぬ。『卿よ、何處より來るや』。

『斯く斯くの地方より』。

『汝は何處に行くや』。

『斯く斯くの地方に』。

『卿よ、前方の荒地には大雨降りたるや否や』。

『然り、卿等よ、前方の荒地には大雨澍ぎて、路は滿水し、多くの草・薪・水あり。卿等
344 よ、以前の草・薪・水を棄てよ、而して輕き荷の車もて疾く疾く行け、輓牛をして疲勞せしむること勿れ』と。

時にかの指導者は隊商等に言へり。『この者は斯く言ひぬ「前方の荒地には

大雨澍ぎ、路は滿水し、多くの草・薪・水あり。卿等よ、以前の草・薪・水を棄てよ、而して輕き荷の車もて疾く疾く行け、軛牛をして疲勞せしむる勿れ」と。汝等よ、以前の草・薪・水を棄てよ、而して輕き荷の車もて隊を進めよ」と。

かの隊商等は指導者に然諾して、以前の草・薪・水を放棄し、輕き荷の車もて隊を進めたり。彼等は第一の宿營にて草・薪・水を見ざりき。第二の宿營に於て……乃至……第三の宿營に於て……乃至……第四の宿營に於て……乃至……第五の宿營に於て……乃至……第六の宿營に於て……乃至……第七の宿營に於ても、草・薪・水を見ることなかりき。全隊は災禍に陷れり。かの隊にありし者は、人畜共に凡てかの夜叉非人の食餌となり、骨のみ殘れり。

第二の隊商指導者は「今やかの隊商は出發して以來、久しくなれり」と知るや、多くの草・薪・水を積載して隊を進めたり。この隊は二三日進むや、黑色、赤眼にして、
345 髮束を解き亂し、蓮花の花環を持ち濕衣を著け、濕髮にして、驢馬に牽かしめたる泥塗れの車もて、前方より路を來れる人を見たり。見て斯く言ひぬ。「卿よ、何處より來れるや」。

「斯く斯くの地方より」。
「汝は何處に行くや」。
「斯く斯くの地方に」。
「卿、前方の荒地には大雨降りしや否や」。
「然り、卿等よ、前方の荒地には大雨澍ぎて、路は滿水し、多くの草・薪・水あり。卿等よ、以前の草・薪・水を棄てよ、而して輕き荷の車もて疾く疾く行け、軛牛をして疲勞せしむること勿れ」と。

時にかの指導者は隊商等に斯く言へり。「汝等よ、此の者は斯く言へり、前方の荒地には大雨澍ぎて、路は滿水し、多くの草・薪・水あり。卿等よ、以前の草・薪・水を棄てよ、而して輕き荷の車もて疾く疾く行け、軛牛をして疲勞せしむること勿れと。汝等よ、此の者は予等の朋友ならず、親族・血縁の者ならず、いかでか予等は彼を信じて行かむや。以前の草・薪・水は棄つべからず、荷を舊の如くにして隊を進めよ、予等は以前の荷を棄つまじ」。

かの隊商等は指導者に然諾して、荷を舊の如くにして隊を進めたり。彼等は

346 第一の宿営にて草・薪・水を見ざりき。第二の宿営に於て…乃至…第三の宿営に於て…乃至…第四の宿営に於て…乃至…第五の宿営に於て…乃至…第六の宿営に於て…乃至…第七の宿営にても亦草・薪・水を見ることなかりき。而して先の隊商の災禍に陥れるを見たり。かの隊にありし者は、人畜共にすべてかの夜叉非人の食餌となりて骨のみ殘れるを見たり。

時にかの指導者は隊商等に斯く言へり。『汝等よ、この隊商はかの愚鈍なる指導者支配者に依りて是の如き災禍に陥れり。故に、汝等よ、予等の隊に於ける價値少き物品を棄てゝ、この隊の價値多き物品を取れ』と。彼の隊商等はかの指導者に然諾して、自己の隊に於ける價値少き物品を棄て、かの隊に於ける價値多き物品を取り、斯かる賢明なる指導者支配者によりて、無事にかの荒地を通過したり。王族よ、卿も亦復是の如し。卿も亦かの隊商の指導者の愚鈍無智にして不當にも、他世を貪求して災禍に陥りたるが如くならむ。聞ける事を無批判に信じて可なりと思惟する人はかの隊商等の如く、災禍に陥るべし。王族よ、かの惡邪見を棄てよ。卿は長夜に無益に苦惱する勿れ」。

二四　「如何に尊迦葉は斯く言ふとも、予は此の惡邪見を棄つる能はず。拘薩羅國王波斯匿も又他國の諸王も予を知れり。「王族弊宿は、他世はなく、化生の有情
347 なく、善惡業の果報あることなしとする論者なり、斯かる見者なり」と。尊迦葉よ、予にして若し此の惡邪見を放棄しなば、人々は予を斯く嘲笑せむ。「王族弊宿は如何に蒙昧愚鈍にして、信じ難きを信ずる人なるや」と。〔その嘲笑に對する〕忿に依りても、覆に依りても、惱に依りても、予は予の説を固持せむ」。

二五　「然らば、王族よ、我、卿に譬喩をなさむ。譬喩によりて諸の有智者は所説の義を解す。王族よ、往昔或る養豚者ありて、自村より他村に行けり。其處にて彼は多量の乾糞の棄てられたるを見たり。見て彼は斯く思惟せり「此の棄てられたる多量の乾糞は豚の飼料なり。この乾糞を持ち歸らばや」と。彼は上衣を擴げ、多量の乾糞を集めて包みとなし、頭上に運び行けり。彼の途中にて大驟雨降りぬ。彼は足の爪先に至るまで糞汁に塗れる程、滴々と流下する糞の荷を擔ひ行けり。人々は彼の此の様を見て言へり。「實に汝は氣狂へるに非ざるか。精神錯亂せるに非ずや。いかでか〔足の〕爪先に至るまで糞汁もて塗れる程、滴々と

流下する糞の荷を擔へるや」。
「汝等こそ、恐らくは氣狂ひ精神錯亂せるなるべし。所以如何となれば、斯くて
348 予の豚の飼料を得るが故に」と。王族よ、卿も亦復是の如し。思ふに卿も亦復の擔糞者の如く答へむ。王族よ、かの惡邪見を棄てよ。王族よ、かの惡邪見を棄てよ。卿は長夜に無益にも苦惱する勿れ」。

二六　「如何に尊迦葉は斯く言ふとも、予は此の惡邪見を棄つる能はず。拘薩羅國王波斯匿も、又他國の諸王も予を知れり。「王族弊宿は他世はなく、化生の有情なく、善惡業の果報あることなしとする、斯かる論者なり、斯かる見者なり」と。予にして若し此の惡邪見を放棄しなば、人々は予を斯く嘲笑せむ。「王族弊宿は如何に蒙昧愚鈍にして、信じ難きを信ずる人なるや」と。「その嘲笑に對する忿に依りても、覆に依りても、惱に依りても予は予の説を固持せむ」。

二七　「然らば王族よ、予は卿に譬喩をなさむ。譬喩によりて諸の有智者は所説の義を解す。王族よ、往昔、二博徒ありて骰子もて遊べり。一博徒は不利玉の出る毎に、そを呑めり。相手はかの博徒の、不利玉の出る毎に、そを呑めるを見たり。

見てかの博徒に斯く言へり。『友よ、汝は斷然勝てり。友よ、予に骰子を與へよ。予はそを神に供へむ』。『然り友よ』とてかの博徒は相手に骰子を與へたり。時に相手の博徒は、骰子に毒を泌込ましめ、かの博徒に斯く言へり『いざ友よ、予等は博戯せむ』と。かの博徒は相手に然諾して、再びかの博徒等は博戯をなせり。かの
349 博徒は再び、不利玉の出る毎に、そを呑めり。相手はかの博徒の、再び不利玉の出る毎に、そを呑めるを見たり。見てかの博徒に斯く言へり。

『呑まれたる骰子は、最惡の利毒もて
塗られたるをかの人覺らず。
呑め、呑め、惡欺漢よ、
汝には後に痛苦あるべし』と。

王族よ、卿も亦復是の如し。思ふに卿も博徒の如く答へむ。王族よ、かの惡邪見を棄てよ、王族よ、かの惡邪見を棄てよ。卿は長夜に無益にも苦惱する勿れ』。

二八 『如何に斯く尊迦葉はいふとも、予は此の惡邪見を棄つる能はず。拘薩羅國王波斯匿も、又他國の諸王も予を知れり。『王族弊宿は、他世はなく、化生の有情

なく、善悪業の果報あることとなしとする斯かる論者なり、斯かる見者なり」と。尊迦葉よ、予にして若し此の悪邪見を放棄しなば、人々は予を斯く嘲笑せむ。「王族弊宿は如何に蒙昧愚鈍にして信じ難きを信ずる人なるや」と。「その嘲笑に對する」忿に依りても覆に依りても惱に依りても、予は予の説を固持せむ」。

二九　「然らば、王族よ、予は卿に譬喩をなさむ。譬喩によりて諸の有智者は所説の義を解す。王族よ、往昔一地方興れり。時に一人その友に言へり、「友よ、予等かの地方に近づき行かむ、恐らくは其處に何等かの財物を得む」と。友は彼に然
350 諾して、かの地方の一村道に近づけり。そこに彼等は多量の麻の棄てられたるを見たり。見て一人は其の友に言へり。「友よ、こゝに多量の麻棄てられたり、故に友よ、汝は麻の荷を結べ、予も亦麻の荷を結ばむ、予等は二人共に麻の荷を携へ行かむ」。「然り、友よ」と友は其の友に答へて麻の荷を結びぬ。

彼等兩人は麻の荷を携へて、更に一村道に近づけり。そこに彼等は多量の麻絲の棄てられたるを見たり。見て一人は其の友に言へり。「友よ、麻絲を得むが爲にこそ、予等は麻を求むるなれ。今こゝに多量の麻絲棄てられたり。故に、友

よ、汝は麻の荷を棄てよ、予も亦麻の荷を棄てむ。予等は共に麻絲の荷を携へて行かむ』。『友よ、この麻の荷は予に依りて遠く運ばれたり、又よく縛られたり、予は之にて充分なり、汝は棄てよ』と。時に一人は麻の荷を棄てゝ麻絲の荷を取りぬ。

彼等は更に一村道に近づけり。そこに彼等は多量の麻布の棄てられたるを見たり。見て一人は友に言へり。『友よ、麻布を得むが爲にこそ、予等は麻又は麻絲を求むるなれ。今こゝに多量の麻布棄てられたり。故に友よ、汝は麻の荷を棄てよ。予も亦麻絲の荷を棄てむ。予等は共に麻布の荷を携へ行かむ』。『友よ、この荷は予に依りて遠く運ばれたり、又よく結ばれたり、予はこれにて充分なり、汝は棄てよ』と。時に一人は麻絲の荷を棄てゝ麻布の荷を取れり。

351 彼等は更に一村道に近づけり。其處にて彼等は多量の亞麻の棄てられたるを見たり。見て…乃至…多量の亞麻絲の棄てられたるを見たり。見て…乃至…多量の亞麻布の棄てられたるを見たり。見て…乃至…多量の綿の棄てられたるを見たり。見て…乃至…多量の綿絲の棄てられたるを見たり。見て…乃至…多量の綿布の棄てられたるを見たり。見て…乃至…多量の鐵の棄てられ

たるを見たり。見て…乃至…多量の銅の棄てられたるを見たり。見て…乃至…多量の錫の棄てられたるを見たり。見て…乃至…多量の鉛の棄てられたるを見たり。見て…乃至…多量の銀の棄てられたるを見たり。見て…乃至…多量の金の棄てられたるを見たり。見て一人は友に言へり。「友よ、予等は黄金を得むが爲にこそ、麻・麻絲・麻布・亞麻・亞麻絲・亞麻布・綿・綿糸・綿布・鐵・銅・錫・鉛・銀を求むるなれ。今こゝに多量の黄金、棄てられたり。故に友よ、汝は麻の荷を棄てよ、予も亦銀の荷を捨てむ、予等は共に黄金の荷を携へて行かむ」。「友よ、この麻の荷は予に依りて遠く運ばれたり、よく結ばれたり。予は之にて充分なり、汝は棄てよ」と。時に一人は銀の荷を棄てゝ、黄金の荷を取れり。

彼等は自己の村に近づけり。其處にて、麻の荷を携へ還れる、かの友の父母は喜ばざりき、妻子は喜ばざりき、朋友知己も喜ばざりき。その因緣に依りて彼も
352 亦喜樂を得ざりき。黄金の荷を携へ還れる、かの友の父母は喜べり、妻子は喜べり、朋友知己も喜べり。その因緣によりて彼も亦喜樂を得たり。

王族よ、卿も亦復是の如し。思ふに卿は麻を運べる人の如くに答へむ。王族

よ、かの惡邪見を棄てよ。王族よ、かの惡邪見を棄てよ。卿は長夜に無益にも苦惱する勿れ」。

三〇　「予は尊迦葉の最初の譬喩によりて、喜悅滿足したり。［されど］予は尚此等種々の問答を聽かむと欲したり。斯くて予は尊迦葉に反問すべきことを思惟せり。尊迦葉よ、感歎に堪へたり、尊迦葉よ、感歎に堪へたり。恰も尊迦葉よ、顚覆せられたるものゝ起されたるが如く、蔽はれたるものゝ顯はされたるが如く、迷へる人に道を示すが如く、暗夜に『具眼の人は物を見るべし』とて燈火を齎すが如く、是の如く、尊迦葉に依りて、種々の方法によりて法は說かれたり。尊迦葉よ、この予は今、かの世尊瞿曇に歸依す、又法と僧とに歸依す。尊迦葉は予を、今日以後、盡形壽まで歸依せる優婆塞として攝受し給へ。尊迦葉よ、予は大供養をなさむと欲す。尊迦葉は予の長夜の利益の爲に悅樂の爲に、予に敎誨せむことを」。

三一　「王族よ、牛を殺し山羊を殺し、豚鷄を殺し、種々の生類を死に至らしめ、又は
353 邪見邪思惟邪語邪業邪命邪精進邪念邪定を執持する人たる、斯かる種類の供養は、王族よ、大果なく大功德なく大光輝なく大遍滿なし。譬へば王族よ、農夫の種

子犂鋤を携へて林に入るが如し。彼は其處にて木株の除去せられず、よく耕さ
れざる惡地に、破壞し、腐敗し、風熱に害はれたる古き惡種子を蒔き、天、又須時に好
雨を下さゞるが如し。かの種子は發芽成長繁茂すべきや、而して農夫は大果を
得べきや」。

「否なり、尊迦葉よ」。

「王族よ、是の如く、牛を殺し、山羊を殺し、豚雞を殺し、種々の生類を死に至らしめ、
又は邪見・邪思惟・邪語・邪業・邪命・邪精進・邪念・邪定を執持する人たる、斯かる種類の
供養は、王族よ、大果なく、大功德なく、大光輝なく大遍滿なし。王族よ、牛を殺さず、
山羊を殺さず、豚雞を殺さず、種々の生類を死に至らしめず、又正見・正思惟・正語・正
業・正命・正精進・正念・正定の執持者たる斯かる種類の供養は大果あり、大功德あり、
大光輝あり、大遍滿あり。譬へば王族よ、農夫の種子犂鋤を携へて林に入るが如
し。彼は其處にて、木株のよく根絕せられ、よく耕されたる良地に、破壞せず腐敗
354 せず風熱に害はれざる新しき良種子を蒔き、天も亦適時に好雨を下すが如し。
然らばかの種子は發芽成長繁茂すべきや、又は農夫は大果を得べきや」。

「然り、尊迦葉よ」。
「王族よ、是の如く牛を殺さず、山羊を殺さず、豚雞を殺さず種々の生類を死に至らしめず、又正見・正思惟・正語・正業・正命・正精進・正念・正定を執持する人たる、斯かる種類の供養は、大果あり、大功德あり、大光輝あり、大遍滿あるなり」。

三二　爾の時、王族弊宿は沙門・婆羅門・貧窮者・浮浪者・乞食者等に施を設けたり。その施に粗末なる粥・酸粥の如き食物、麁布、古著類など與へられたり。かの布施の時鬱多羅(ウッタラ)と名くる儒童ありて、熱心に分配に從事したり。彼は施を與へて斯く言へり。「予、この施に依りて王族弊宿に遭遇したり、されど他世に於ては相遇
355 ふことなからむ」と。王族弊宿は「鬱多羅なる儒童は施を與へて『この施に依りて予は王族弊宿に遭遇したり、されど他世に於ては相遇ふことなからむ』と斯く言へり」と聞きて、王族弊宿は鬱多羅儒童を招きて斯く言へり。「我が鬱多羅よ、汝は施を與へて『この施に依りて、予は王族弊宿に遭遇したり、されど他世に於ては相遇ふことなからむ』と言へるは眞實なりや」。
「然り卿よ」。

「我が鬱多羅よ、何故に汝は施を與へて「この施に依りて予は王族弊宿に遭遇したり、されど他世に於ては相遇ふことなからむ」と斯く言へるや。我が鬱多羅よ、予等善福を欲する者は、施の果を期待するに非ずや」。

「卿の施に於て、粗末なる粥、酸粥の如き食物與へられたり。卿はそれに卿の足を觸るゝことをも欲せず、況んや食せむことをや。又卿の足を觸るゝことをも欲せず、況んや著ることを欲せざる如き麁布、古著の類、與へられたり。卿は予等に愛ありて喜悦す。如何ぞ予等、愛と喜悦をば不喜悦なるものに結合せむや」。

「然らば我が鬱多羅よ、汝は予の食するが如き食物を施與せよ、予の著るが如き衣服を施與せよ」。

鬱多羅儒童は王族弊宿に然諾して、王族弊宿の食するが如き食物を與へ、王族弊宿の著るが如き衣服を施したり。

356 時に王族弊宿は恭敬施をなさず親手施をなさず、至心施をなさず、悋惜施をなせるが故に、身壞命終の後、四大王天の眷屬となりて楫樹林の空宮殿に生れたり。かの施に於て、熱心に分配に從事したる鬱多羅なる儒童は、恭敬施をなし、親施を

なし、至心施をなし、不悋惜施をなせるが故に、身壊命終の後、善趣天界に生じ忉利天の眷屬となれり。

三三　爾の時、尊者牛主は屢々日中の休息の爲、楳樹林の空宮殿に行けり。時に弊宿天子は尊者牛主に近づけり、而して尊者牛主に挨拶して一方に立てり。一方に立ちたる弊宿天子に尊者牛主は斯く言へり。「友よ、汝は誰なるや」。

「尊者よ、予は王族弊宿なり」。

「汝は『斯く他世はなく、化生の有情なく、善惡業の果報あることなし』とする、斯かる見者にはあらざりしや」。

「尊者よ、予は斯かる見者なりき。予は又尊鳩摩羅迦葉に依りて、斯かる惡邪見[357]を捨離せしめられたり」。

「されど友よ、汝の施に於て、熱心に分配に從事したる鬱多羅なる儒童は何處に生じたるや」。

「尊者よ、予の施に於て、熱心に分配に從事したる鬱多羅なる儒童は、恭敬施をなし、親手施をなし、至心施をなし、不悋惜施をなしたるが故に、身壊命終の後、善趣天

界に生じ、忉利天の眷屬となれり。予は恭敬施をなさず、至心施をなさず、悋惜施をなしたるが故に、身壞命終の後、四大王天の眷屬となり、椑樹林の空宮殿に生じたり。故に、尊牛主よ、人間世界に往きて、斯く語らむことを。「恭敬施をなせ、親手施をなせ、至心施をなせ、不悋惜施をなせ。王族弊宿は、不恭敬施・不親手施・不至心施・悋惜施をなしたるが故に、身壞命終の後、四大王天の眷屬となり、椑樹林の空宮殿に生じたり。されど弊宿の施に於て、分配に從事したる鬱多羅なる儒童は、恭敬施・親手施・至心施・不悋惜施をなしたるが故に、身壞命終の後、善趣天界に生じ、忉利天の眷屬となれり」と。

三四　時に尊者牛主は、人間世界に來りて斯く言へり。「恭敬施をなせ、親手施をなせ、至心施をなせ、不悋惜施をなせ。王族弊宿は不恭敬施・不親手施・不至心施・悋惜施をなしたるが故に、身壞命終の後、四大王天の眷屬となりて椑樹林の空宮殿に生じたり。されど弊宿の施に於て分配に從事したる鬱多羅なる儒童は、恭敬
358 施・親手施・至心施・不悋惜施をなしたるが故に、身壞命終の後、善趣天界に生じて忉利天の眷屬となれり」と。

註

❶「小夫人」、原語 mātu-sapattiṁ は「母の相手の夫人」の義なり。

❷「妻」、原語 opabhoggā は「享樂物」の義なり。

❸底本には aññataro janapada-padeso vuṭṭhāsi とあれど他本に aññataro janapade sattho vuṭṭhāsi とあるに從ひて譯せり。

索隱

發音索隱

漢　字　索　隱

キ，ギ

ク，グ

ケ，ゲ

南傳大藏經

高楠博士功績記念會纂譯

代表者　文學博士　宇井伯壽
　　　　文學博士　長井眞琴
　　　　文學士　福島直四郎

監修　マスター・オブ・アーツ　ドクター・オブ・リテラチュア　ドクトル・フィロソフィー　文學博士　高楠順次郎

飜譯

文學士　阿部文雄
文學士　和泉得成
文學博士　宇井伯壽
文學博士　荻原雲來
文學博士　故木村泰賢
文學士　佐藤密雄
文學士　田中於菟彌
ドクター・オブ・フィロソフィー　立花俊道
文學士　中野義照
文學士　西義雄
林五邦
文學士　平等通昭
文學博士　逸見梅榮
文學士　宮田菱道
文學士　山本快龍
文學士　渡邊照宏

文學士　寄原慶哉
文學士　石川海淨
文學士　上田天瑞
文學博士　金倉圓照
文學士　久野芳隆
文學士　佐藤良智
文學博士　高楠順次郎
文學士　寺崎修一
文學博士　長井眞琴
文學博士　羽溪了諦
文學士　干潟龍祥
文學士　福島直四郎
文學士　增永靈鳳
文學士　山崎良順
文學士　山本智教

文學士　赤沼智善
文學士　石黒彌致
文學士　小野島行忍
文學士　神林隆淨
文學士　栗原廣廊
文學士　坂本幸男
高田修
寺本婉雅
文學士　成田昌信
文學士　花山信勝
文學士　平松友嗣
文學士　藤田眞道
文學士　水野弘元
文學士　山田龍城
文學士　渡邊楳雄

編輯

文學博士　小野玄妙
文學士　山本快龍
文學士　高崎森暢

文學士　逕澤成淳
文學士　金森西俊
花戶三一

文學士　和泉得成
文學士　山本智教
關根正行

昭和十年七月五日印刷
昭和十年七月八日發行

第七卷

東京市本郷區本郷三丁目二
大藏出版株式會社
編輯兼發行者　木村省吾

東京市芝區金杉新濱町十二
印刷者　和田助一

東京市芝區金杉新濱町十二
印刷所　單式印刷株式會社

東京市荒川區日暮里町八ノ五五
製本所　村田文泉閣

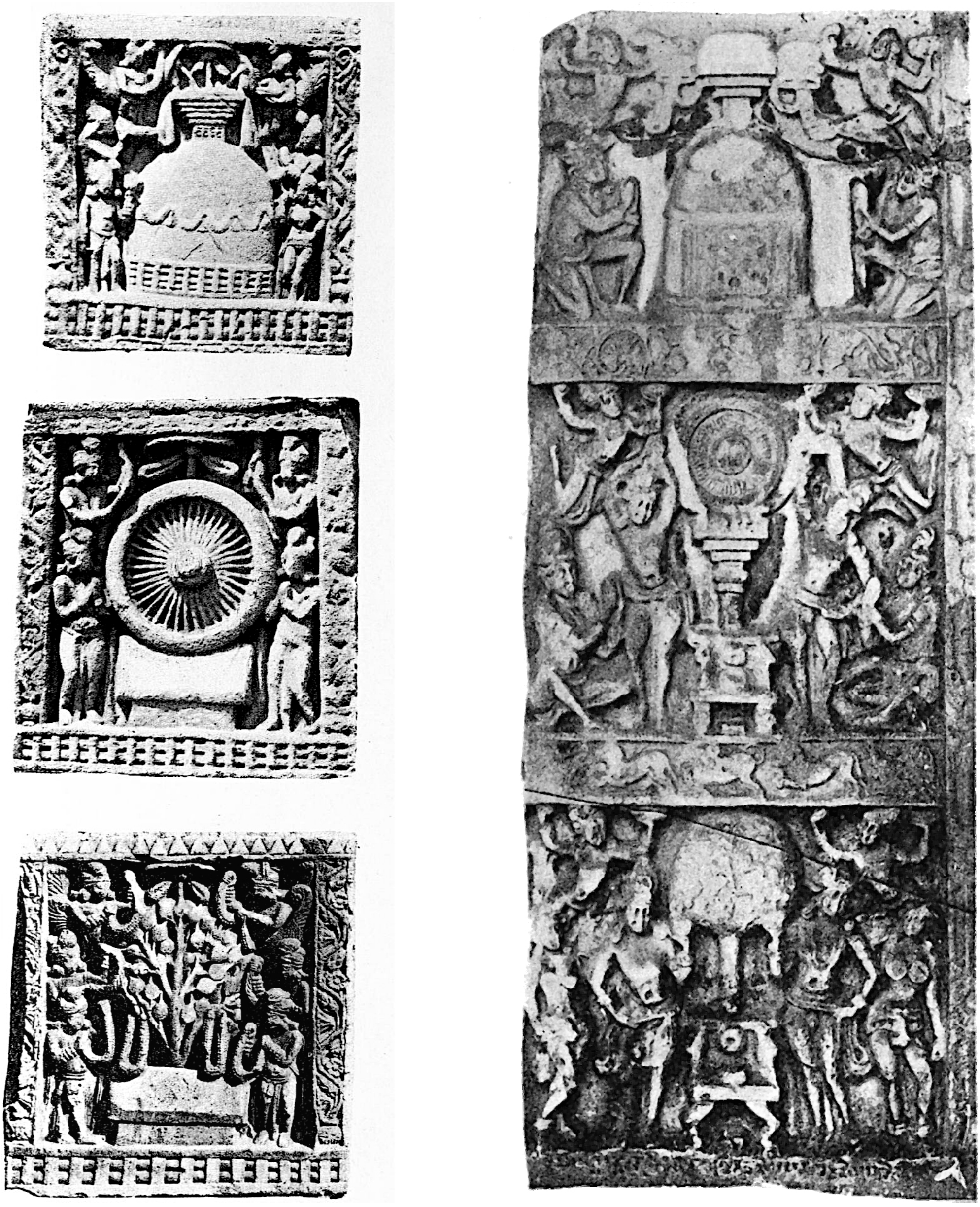
會員番號

【非賣品】

發行所　東京市本郷區本郷三丁目二
大藏出版株式會社
電話小石川六三二〇番
振替東京五一一六八四番

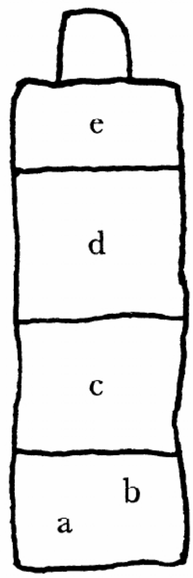
Rescanned Plates

(suppl. Adi Meyerhofer, 2020)



“The three last great miracles:” l.: Sanchi, r.: Amaravati (Foucher, Alfred; *The beginnings of Buddhist art …,* pl. 2.)





a. Birth of the Buddha
b. Bathing of the Buddha
c. Māra's Assault
d. First Sermon
e. Parinirvāṇa

Better reproduction of plate 2 a, taken from: Williams, Joanna; *Sārnāth Gupta Steles of the Buddha's Life;* ARS ORIENTALIS, Vol. 10 (1975).

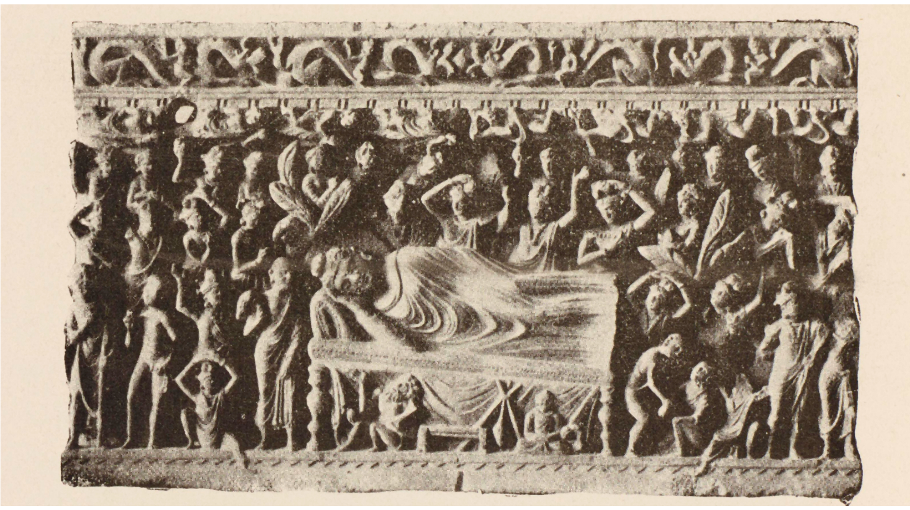


“The four great miracles:” l.: Gandhara, c.: Amaravati, r.: Benares (Foucher, Alfred; *The beginnings of Buddhist art …;* pl. 4.)



Foucher, Alfred; *L'art Greco-Bouddhique :* Le parinibvâna du buddha, I, pl. 281. (Musée de Lahore, no 1043. Provenant de monastère inférieur de Nathou, h. 23 cm.)





Foucher, Alfred; *L'art Greco-Bouddhique :* Le parinibvâna du buddha. top : pl. 282 : Musée de Mattra. Provenance locale, 80 cm ; b.: pl. 277 : Musée de Calcutta. Provenant de Loriyân-Tangai. H. 41 cm.



La mise au cercueil du Buddha. (Musee de Calcutta. Provenant de Miyân-Khân, h. 22 cm.)

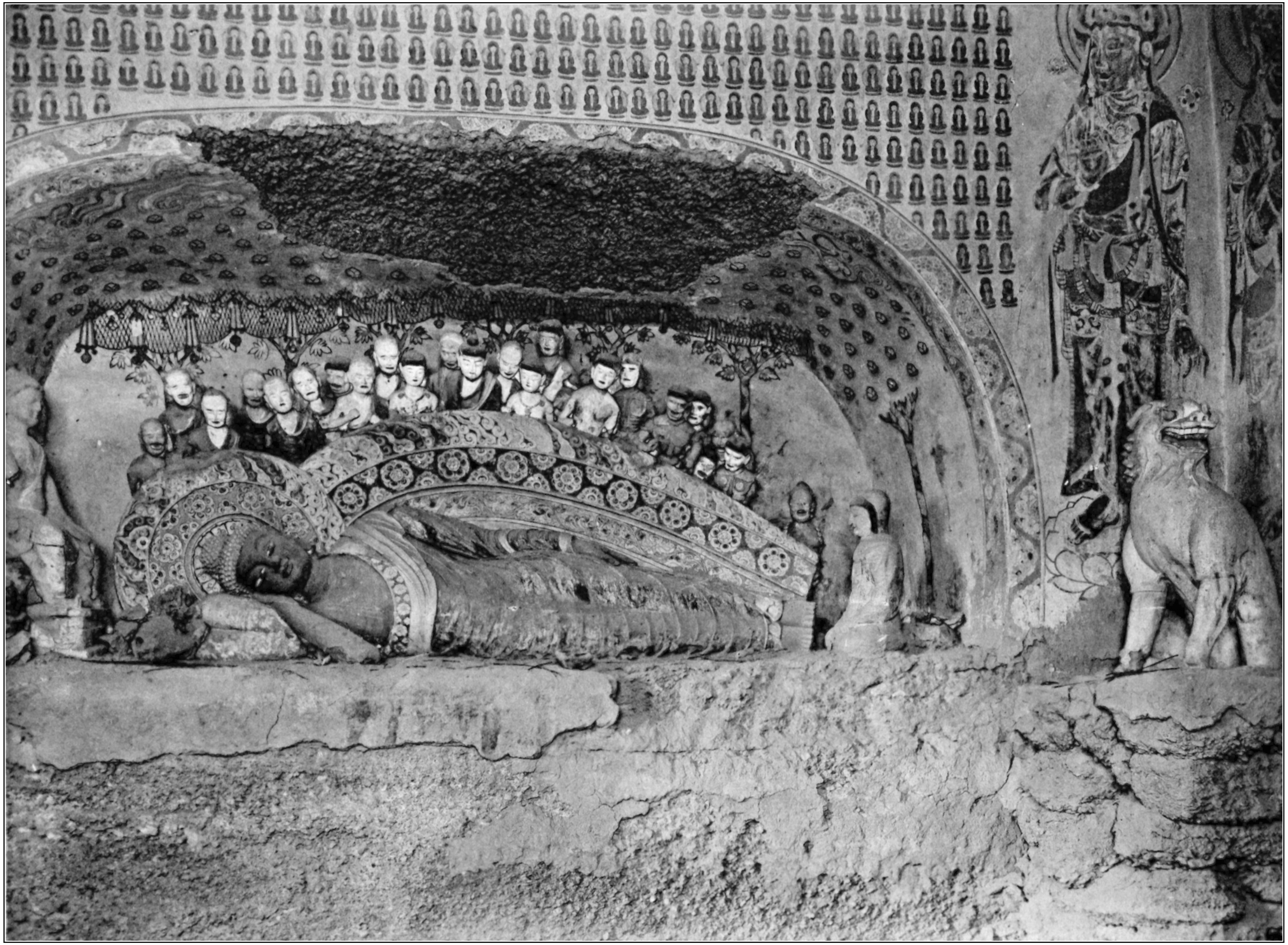


L'ensevelissement du Buddha. (Collection privée. photogr. J. Burgess.)

Foucher, Alfred; *L'art Greco-Bouddhique.*



Figure 3: Māyā-Höhle, Qyzyl. H. 1.48 m, w. 2.00 m. (Grünwedel, A.; *Alt-Kutscha,* pl. 44.)



Pelliot, Paul; *Grottes de Touen-Houang …;* pl. 245.





„Seefahrerhöhle, 2. Anlage, Qyzyl." [克孜爾千佛洞] Grünwedel, A.; *Alt-Kutscha …;* (top) pl. 46, contiued by pl. 47 (bottom). ["The Cave of the Seafarers belongs to the simplest type of building that occurs in Central Asia, consisting of a long, narrow, rectangular room with a barrel-vaulted ceiling. The major paintings on the side walls, in the first Indo-Iranian style, illustrate two seafaring legends, the Shronakotikarna and the Maitrakanyaka Avadana, which relate the consequences of good and bad deeds performed in an earlier life." (Central Asian art from the West Berlin State Museums, 1982)]

Concordance コンコルダンス

Adi Meyerhofer (2020)

The Japanese texts in this volume are translations based on the *Digha Nikaya* edition of the PTS, 1890–1911 ☞ p. XIII.
The present volume contains the *Mahā-vagga* except for the the first Sutta which is included in the *Sīlakkhanda Vagga* volume.

Below: ❶ Links from this pdf directly to the respective Sutta at *SuttaCentral* (SC), where further paralells are listed;
❷ Captions from Karl-Eugen Neumanns German translation,[4] page numbers (S.) are from the 1996 edition (☞ p. XIII) followed by direct links to PK: *Digha Nikāya – Die Längere Sammlung* palikanon.de; ❸ Paralells in the *Dīrgha-āgama* (長阿含經[5 6])

Mahā Vagga:

❷ Grosses Buch / Der Große Teil

---

[4] Errata list to his terminology: http://www.palikanon.com/diverses/ken_error.html

[5] T 1. W.-G.: *Ch'ang a han ching. Tripitaka Koreana,* K 647 (장아함경). "Dīrghâgama ; *'dus pa chen po'i mdo.* 22 fasc., trans. Buddhayaśas 佛陀耶舍 and Zhu Fonian 竺佛念 in 412–13. It is one of the four āgamas in Chinese, written in four vargas 品, and one of the five canonical collections of discourses (sūtra) of the Buddha as contained in the Dharma Collection 法藏 by the Theravādins 上座部. It deals with the life of the Buddha in its first varga, teaching and practice in the second, refutation of other teachings in the third, and Buddhist cosmology in the fourth. It is roughly equivalent to the Pāli Dīgha-nikāya. Partial variant translations can be seen in the Middle Length Āgama 中阿含經 (T. 26) and the Longer By One Āgama 增一阿含經 (T. 125). It is believed that this version was handed down in the Dharmagupta school 法藏部." (http://www.buddhism-dict.net/cgi-bin/xpr-ddb.pl?q=長阿含經)

[6] Detailled: *Āgama/Nikāya;* in *Brill's Encyclopedia of Buddhism;* Leiden 2015, Vol. I, p. 50–9. Translated into modern Japanese: 1) 国訳一切経; 佛說長阿含経解題 [*Bussetsu jō agon-gyō kaidai*]; Tokyo 1933 (Daitō Shuppansha); 2) 丘山新 [Okayama Hajime; et. al.]; 現代語訳「阿含経典」長阿含経 [*Gendaigoyaku "Agon kyōten:" Jōagonkyō*]; Tokyo 1995–2005 (Hirakawa), 6 Vol.

Supplementary: 1) Dhammadinnā; *Research on the Dīrgha-āgama;* Taipeh 2014 (Dharma Drum), ISBN 978-957-598-657-5; 2) Tamai, Tatsushi; *Sanskrit, Gāndhārī and Bactrian manuscripts in the Hirayama Collection: Tipiṭaka. Suttapiṭaka. Dīghanikāya. Sanskrit;* Tokyo 2016 (International Research Institute for Advanced Buddhology, Soka University); ISBN 9784904234129 ["Partial contents Sanskrit Dīrghāgama." Text in Sanskrit, Gāndhārī and Bactrian; pref. in English.]; 3) Couvreur, Walter; *Sanskrit-Tochaarse en Sanskrit-Koetsjische trefwoordenlijsten van de Dīrghāgama (Dīghanikāya);* Leiden 1969 (Brill), reprint from: ORIENTALIA GANDENSIA, Vol. 4 (1967).

Bibliography: Mahāparinibbāna and Mahāsatipaṭṭhāna-sutta

This bibliography lists some modern translations of the *Mahāparinibbāna* (DN 16) and *Mahāsatipaṭṭhāna Suttas* (DN 22) when published as separate monographs. (For complete editions of the *Dīgha Nikāya* refer to the bibliography at the end of Vol. 6.) The DN has its analogues in 30 Sutras of the Chinese canon, the Dīrgha-āgama (長阿含經), not covered here but listed in the concordance as ❸ from p. X. Full texts that are available online at *SuttaCentral* (as of July 2020) are indicated there by "❶ SC."

To distinguish the Hinayānist *Mahāparinibbāna Sutta* from the Mahāhāyāna-*Mahāparinirvāṇa Sūtra*[7] it is customary to refer to the first by it's Pāli title (*…sutta*) the second by the Sanskrit …*Sūtra*.

Allon, Mark; *Mahāparinirvāṇa-sūtra (incorporating the Mahāsudarśana-sūtra being the "Sanskrit" version of the Pali Mahāparinibbāna-sutta and the Mahāsudassana-sutta; a translation with explanatory footnotes ed. in comparison with the corresponding Pali with an introductory essay and a supplementary word index;* Canberra 1987 (ANU, Diss.)

Buddhagosa; An Yang-gyu; *Buddha's last days: Buddhagosa's commentary on the Mahāparinibbāna Sutta;* Oxford 2003 (PTS); ISBN 0860134059; [= *Sumaṅgalavilāsinī.* "Translation from the Pali."]

Buddhagosa; Rhys Davids, T. W.; Carpenter, J. Estlin; *Sumaṅgala-Vilāsinī, Buddhaghosa's Commentary of the Dīgha Nikāya;* London 1886 (H. Frowde), London 1949, 1968–71 (Publ. for the Pali Text Society by Luzac), 3. vol.; reprints 1976 [ISBN 0-7100-8544-3], 2011 (Frowde); Yamazaki, Moriichi [comp.]; *Index to the Dīgha-nikāya;* Oxford 2003 (PTS); ISBN 0860133559; `archive.org` ↗ Vol. I (1886)

Childers, Robert Cæsar; *Pali text of the Mahâparinibbâna Sutta and commentary;* London 1876 (Trübner; Royal Asiatic Society of Great Britain and Ireland)

Dayan Ram Sahni; *Catalogue of the Museum of Archaeology at Sarnath;* Calcutta 1914, reprint 1972 (Indological Book House); `archive.org` ↗ Scan (gray)

Foucher, Alfred; *L'art Greco-Bouddhique du Gandhâra;* Paris I: 1905, II: 1917; `Tōyō Bunko` ↗ Vol. I

Goenka, S. N. [ed.]; *Mahāsatipaṭṭhāna sutta: the great discourse on the establishing of awareness;* Maharashtra, India 1998 (Vipassana Research Institute); ISBN 8174141308; ["This

[7] 大般涅槃經; chin.: *Dà Bān Nièpán Jīng;* jap.: *Dai-Hatsunehan-gyō,* meist abgekürzt 涅槃経, *Nehangyō.* Three existing versions: Taishō № 376, Vol. 12 853–99; T. 374, 12 365c–603c; T. 375, 12 605–852. Engl.: Blum, Mark Laurence [*1950]; *Nirvana Sutra: (Mahāparinirvāṇa-sūtra);* Berkeley 2013 (Bukkyo Dendō Kyōkai America). Cf. Bongard-Levin, Grigorij M. [1933–2008]; *New Sanskrit fragments of the Mahāyāna Mahāparinirvāṇa-mahāsūtra: Central Asian Manuscript Collection at Leningrad;* Tokyo 1986 (Internat. Inst. for Buddhist Studies). Very similar is the *Caturdāraka-samādhi-sūtra.* Tibetan [9 versions in Kanjur] cf.: Habata, Hiromi; *Aufbau und Umstrukturierung des Mahāparinirvāṇasūtra: Untersuchungen zum Mahāparinirvāṇa-mahāsūtra unter Berücksichtigung der Sanskrit-Fragmente;* Bremen 2019 (U. Hempen); [LMU München Habil. WS 2014/5: Teil I: *A Critical Edition of the Tibetan Translation of the Mahāparinirvāṇa-mahāsūtra* (ISBN 9783895009914). Teil II: *Die Sanskrift-Fragmente des Mahāparinirvāṇa-mahāsūtra. Untersuchungen zum Mahāparinirvāṇa-mahāsūtra II.* Teil III: *Aufbau und Strukturierung des Mahāparinirvāṇa-mahāsūtra. Untersuchungen zumMahāparinirvāṇa-mahāsūtra III.*]; ISBN 9783944312682.

is a revised edition of the text in Roman-script Pāli with translation into English for the use of participants in a meditation course on the Satipaṭṭhana Sutta as taught by S. N. Goenka."]

Grünwedel, Albert; *Alt-Kutscha: archäologische und religionsgeschichtliche Forschungen an Tempera-Gemälden aus Buddhistischen Höhlen der ersten acht Jahrhunderte nach Christi Geburt; Veröffentlichung der preussischen Turfan-Expeditionen mit Unterstützung des Bässler-Instituts ;* Berlin 1920 (Elsner); `Tōyō Bunko` Vol. I

Institute for Buddhist Scriptures in Korean Translation; *Mahāsatipaṭṭhāna Suttanta* = 大念處經. *Satipaṭṭhāna Sutta* = 念處經 [*Mahāsatipaṭṭhāna Suttanta = Tae yŏmch'ŏ gyŏng. Satipaṭṭhāna Sutta = Yŏmch'ŏ gyŏng*]; Gyeonggi-do 2005; [Text in Pali and Korean.]

Jñānārāma, Pātegama [*1931]; *Mission accomplished: a historical analysis of the Mahaparinibbana Sutta of the Digha Nikaya of the Pali canon;* Singapore 1997 (Ti Sarana Buddhist Association); ISBN 9810090870

Khur-Yearn, Jotika; *The poetic Dhamma of Zao Amat Long's Mahāsatipaṭṭhāna Sutta and the place of traditional literature in Shan Theravada Buddhism;* Lonon 2012 (SOAS, Diss.)

각묵; 부처님의마지막발자취: 대반열반경 (D16) [*Puch'ŏnim ŭi majimak palchach'wi: taeban yŏlban'gyŏng (D16)*]; Ulsan Kwangyŏksi 2007 (Ch'ogi Pulchŏn Yŏn'guwŏn); ISBN 8991743102

Neumann, Karl-Eugen; *Die Reden des Buddha: Längere Sammlung;* München 1907–12 (Pieper & Co.) [= *Die Reden Gotamo Buddho's aus der längeren Sammlung Dīghanikāyo des Pāli-Kanons*] 2 Bde., ^{2}1927–8; Zürich 1957 (Patmos); Stammbach ^{4}1996, 2004 (Beyerlein-Steinschulte); ISBN [1996] 3931095150; [This translation is based on the Royal Thai edition, donated to the Göttingen University Library (e. g. พระ สุต์ตัน์ตปิฎก ทีฆนิกาย ปาฏิกวัค์ค; รัตนโกสินทรศก ๑๑๒ [1893]). Much maligned by his contemporaries, specially Paul Dahlke who published his own translation[8] remains this the most rhythmically correct and poetic translation into German to date. Biogr. Neumann's: Hecker, Hellmuth; *Karl Eugen Neumann: Erstübersetzer der Reden des Buddha, Anreger zu abendländischer Spiritualität;* Wien 1986 (Octopus).]

Mahāparinibbāna-sutta and Cullavagga; Calcutta 1932 (Oriental Pr.), reprint from INDIAN HISTORICAL QUARTERLY, Vol. 8 (1932)

Pañña Dīpa, U [Kaba-Aye Sayadaw]; *Mahasatipatthana sutta: the great discourse on the foundations of mindfulness;* Boulder Creek, CA 1985 (Taungpulu Kaba-Aye Dhamma Center)

Pelliot, Paul [1878–1945] ; *Grottes de Touen-Houang : carnets de notes de Paul Pelliot … ;* Paris (Collége de France, Inst. d'Asie, Centre de Recherche sur l'Asie Centrale et la Haute Asie)

Rhys-Davids, T. W.; Carpenter, J. Estlin; *Digha Nikaya;* 1890–1911; London 1960–67 (Publ. for the Pali Text Society by Luzac), 3. vol.; eBook 2013 (Taylor & Francis); Scans: `archive.org`: Vol. I, Vol. II, Vol. III

[8] Errors therein: *paticca-samuppāda* (bedingte Entstehung) as ‚abhängig-gleichzeitiges Entstehen;' *jhāna* (geistige Vertiefung) as ‚Gedankenstufe;' *salāyatana* as ‚Sechssinn;' *sankhāra* (Karmaformationen) as ‚Veranlagungen' or even ‚Begriffe;' *nāma-rūpa* as ‚Geistform;' *sammāsati* (rechte Achtsamkeit) as ‚rechte Verinnerung' etc.

Rhys Davids, T. W.; Rhys Davids, Caroline; *Dialogues of the Buddha;* Oxford 1899 (Oxford Univ Pr.); `archive.org`: Vol. II, Vol. III

Rozehnal, Miroslav; *Buddhovy rozpravy. Sv. 4, Velká rozprava o Buddhově úplné nibbáně (Maháparinibbána sutta);* Praha 1995 (DharmaGaia); ISBN 8085905124

Shiraishi Muraji; *Hōryūji ōkagami* [法隆寺大鏡]; Tōkyō 1919 (Tōkyō Bijutsugakkō Bunko)

Sujato [Bhikkhu]; *Long Discourses: A Translation of Dīgha Nikāya;* 2018 (Sutta Central)

Sunanda [Bhikshu]; *Mahā smr̥ti prasthāna sūtra arthakathā vyākhyā sahita: dhyānabhāvanā saṃbandhī Buddhakā mukhya upadeśa;* Lalitapura 2011 (Siddhārthaviśvavidyālayako Kāryālaya) [Nepali. Free translation of classic Pali text on meditation, together with commentary. "Mahasatipatthana sutta, Setting-up of great mindfuless, with commentary explanation, the Buddha's main teachings on meditation cultivation."]

Ten Suttas from Digha Nikaya [three fundamental concepts and comments on salient points in each sutta]; Rangoon, 1984 (Burma Pitaka Association); Sarnath, Varanasi 1987 (Central Inst. of Higher Tibetan Studies [Kendrīya-Tibbatī-Ucca-Śikṣā-Saṃsthānam]), *Bhoṭa-Bhāratīya granthamālā,* 12; Tōkyō 1987 (Bukkyō Dendō Kyōkai); Delhi 1999 (Sri Satguru Publications); [DN: 1, 2, 9, 15, 16, 22, 26, 28–9, 31]

Vajirā [lay sister]; *Last days of the Buddha: The Mahā Parinibbāna Sutta;* Kandy, Sri Lanka rev 1988 (Buddhist Publ. Soc.); ISBN 9552400066

Waldschmidt, Ernst [1897–1985]; *Das Mahāparinirvāṇasūtra: Text in Sanskrit und Tibetisch, verglichen mit dem Pāli; nebst einer Übersetzung der chinesischen Entsprechung im Vinaya der Mūlasarvāstivādins;* Berlin 1951 (Akad.-Verl.); [„auf Grund der Turfan-Mss. hrsg. und bearb.“]; Sonderdruck aus *Abhandlungen der Deutschen Akademie der Wissenschaften, Klasse für Sprachen, Literatur und Kunst,* I: 1949, 1; II: 1951, S. 102–303, III: 1951, S. 304–523

Williams, Raymond; *Historical Criticism of a Buddhist Scripture: The Mahāparinibbāna Sutta;* JOURNAL OF THE AMERICAN ACADEMY OF RELIGION, Vol. 38 (1970), Nr. 2, S. 156–67

印度內觀研究所著; 大念住經: 對於建立覺知的開示 [*Dà niàn zhù jīng: Duìyú jiànlì jué zhī de kāishì*]; 2000 (臺灣內觀基金會); ISBN 9579754810

https://web.archive.org/web/20150117050645/http://daizoshuppan.bunkensystem.co.jp/usr/info/WEB南伝大蔵経目録.pdf

◎律　蔵（Vinaya-piṭaka）

【第1巻　律蔵一】

A　経分別［Sutta-vibhaṅga］

大分別〔比丘戒〕

(1) 波羅夷　(2) 僧残法　(3) 不定法　(4) 捨堕法

【第2巻　律蔵二】

A　経分別

大分別〔比丘戒〕

(5) 波逸提法　(6) 提舎尼法　(7) 衆学法　(8) 滅諍法

比丘尼分別〔比丘尼戒〕

(1) 波羅夷法　(2) 僧残法　(3) 捨堕法　(4) 波逸提法
(5) 提舎尼法　(6) 衆学法　(7) 滅諍法

【第3巻　律蔵三】

B　犍　度［Khandhaka］

大　品

(1) 大犍度　(2) 薩犍度　(3) 入雨安居犍度　(4) 自恣犍度
(5) 皮革犍度　(6) 薬犍度　(7) 迦絺那衣犍度　(8) 衣犍度
(9) 瞻波犍度　(10) 拘睒弥犍度

【第4巻　律蔵四】

B　犍　度

小　品

(1) 羯磨犍度　(2) 別住犍度　(3) 集犍度　(4) 滅諍犍度
(5) 小事犍度　(6) 臥坐具犍度　(7) 破僧犍度　(8) 儀法犍度
(9) 遮説戒犍度　(10) 比丘尼犍度　(11) 五百〔結集〕犍度
(12) 七百〔結集〕犍度

【第5巻　律蔵五】

C　附　随［Parivāra］

(1)大分別　(2)比丘尼分別　(3)等起の摂頌
(4)無間省略，滅諍分解　(5)問犍度章　(6)増一法
(7)布薩初〔中後〕解答章，〔制戒の〕義利論　(8)伽陀集
(9)諍事分解　(10)別の伽陀集　(11)呵責品
(12)小諍　(13)大諍　(14)迦絺那衣分解
(15)優波離〔問〕五法　(16)等起　(17)第二伽陀集
(18)発汗偈　(19)五品

D　**波羅提木叉［Pātimokkha］**

◎経　蔵（Suttanta-piṭaka）

【第6巻　長部経典一】Dīgha-nikāya

A　**戒蘊篇［Sīlakkhandha-vagga］**

(1)梵網経　(2)沙門果経　(3)阿摩昼経　(4)種徳経
(5)究羅檀頭経　(6)摩訶梨経　(7)闍利経　(8)迦葉師子吼経
(9)布吒婆楼経　(10)須婆経　(11)堅固経　(12)露遮経
(13)三明経

B　**大　篇［Mahā-vagga］**

(14)大本経

【第7巻　長部経典二】

B　**大　篇**

(15)大縁経　(16)大般涅槃経　(17)大善見王経　(18)闍尼沙経
(19)大典尊経　(20)大会経　(21)帝釈所問経　(22)大念処経
(23)弊宿経

【第8巻　長部経典三】

C　**波梨篇［Pāṭika-vagga］**

(24)波梨経　(25)優曇婆邏師子吼経　(26)転輪聖王師子吼経
(27)起世因本経　(28)自歓喜経　(29)清浄経　(30)三十二相経
(31)教授尸伽羅越経　(32)阿吒曩胝経　(33)等誦経　(34)十上経

【第9巻　中部経典一】Majjhima-nikāya

Ａ　根本五十経篇［Mūlapaṇṇāsa］

〈根本法門品〉　(1)根本法門経　(2)一切漏経　(3)法嗣経
(4)怖駭経　(5)無穢経　(6)願経　(7)布喩経　(8)削減経
(9)正見経　(10)念処経

〈師子吼品〉　(11)師子吼小経　(12)師子吼大経　(13)苦蘊大経
(14)苦蘊小経　(15)思量経　(16)心荒野経　(17)林藪経
(18)蜜丸経　(19)双考経　(20)考想息止経

〈譬喩法品〉　(21)鋸喩経　(22)蛇喩経　(23)蟻垤経
(24)伝車経　(25)撒餌経　(26)聖求経　(27)象跡喩小経
(28)象跡喩大経　(29)心材喩大経　(30)心材喩小経

〈双大品〉　(31)牛角林小経　(32)牛角林大経　(33)牧牛者大経
(34)牧牛者小経　(35)薩遮迦小経　(36)薩遮迦大経　(37)愛尽小経
(38)愛尽大経　(39)馬邑大経　(40)馬邑小経

【第10巻　中部経典二】

Ａ　根本五十経篇

〈双小品〉　(41)薩羅村婆羅門経　(42)鞞蘭若村婆羅門経
(43)有明大経　(44)有明小経　(45)得法小経　(46)得法大経
(47)思察経　(48)憍賞弥経　(49)梵天請経　(50)魔訶責経

Ｂ　中分五十経篇［Majjhimapaṇṇāsa］

〈居士品〉　(51)カンダラカ経　(52)アッタカ城人経
(53)有学経　(54)哺多利経　(55)ヂーヴカ経　(56)優波離経
(57)狗行者経　(58)無畏王子経　(59)多受経　(60)無戯論経

〈比丘品〉　(61)教誡羅睺羅菴婆蘗林経　(62)教誡羅睺羅大経
(63)摩羅迦小経　(64)摩羅迦大経　(65)跋陀利経　(66)鶉喩経
(67)車頭聚落経　(68)那羅伽波寧村経　(69)瞿尼師経
(70)枳吒山邑経

〈普行者品〉　(71)婆蹉衢多三明経　(72)婆蹉衢多火〔喩〕経
(73)婆蹉衢多大経　(74)長爪経　(75)摩犍提経　(76)サンダカ経

【第11巻上　中部経典三】

Ｂ　中分五十経篇

〈普行者品〉　(77)善生優陀夷大経　(78)沙門文祁子経
(79)善生優陀夷小経　(80)鞞摩那修経
〈王品〉　(81)陶師経　(82)頼吒惒羅経　(83)大天㮈林経
(84)摩偸羅経　(85)菩提王子経　(86)鴦掘摩経　(87)愛生経
(88)鞞訶提経　(89)法荘厳経　(90)普棘刺林経
〈婆羅門品〉　(91)梵摩経　(92)施羅経　(93)阿摂惒経
(94)瞿哆牟伽経　(95)商伽経　(96)鬱痩歌邏経　(97)陀然経
(98)婆私吒経　(99)須婆経　(100)傷歌邏経

C　**後分五十経篇［Uparipaṇṇāsa］**

〈天臂品〉　(101)天臂経　(102)五三経　(103)如何経
(104)舎弥村経　(105)善星経　(106)不動利益経
(107)算数家目犍連経　(108)瞿黙目犍連経　(109)満月大経
(110)満月小経

【第11巻下　中部経典四】

C　**後分五十経篇**

〈不断品〉　(111)不断経　(112)六浄経　(113)善士経
(114)応習不応習経　(115)多界経　(116)仙呑経　(117)大四十経
(118)入出息念経　(119)身行念経　(120)行生経
〈空品〉　(121)空小経　(122)空大経　(123)希有未曾有法経
(124)薄拘羅経　(125)調御地経　(126)浮弥経　(127)阿那律経
(128)随煩悩経　(129)賢愚経　(130)天使経
〈分別品〉　(131)一夜賢者経　(132)阿難一夜賢者経
(133)大迦旃延一夜賢者経　(134)盧夷強耆一夜賢者経
(135)小業分別経　(136)大業分別経　(137)六処分別経
(138)総説分別経　(139)無諍分別経　(140)界分別経
(141)諦分別経　(142)施分別経
〈六処品〉　(143)教給孤独経　(144)教闡陀経　(145)教富楼那経
(146)教難陀迦経　(147)教羅睺羅小経　(148)六六経
(149)大六処経　(150)頻頭城経　(151)乞食清浄経　(152)根修習経

【第12巻　相応部経典一】Saṁyutta-nikāya

A　**有偈篇［Sagātha-vagga］**

(1)諸天相応　(2)天子相応　(3)拘薩羅相応　(4)悪魔相応
(5)比丘尼相応　(6)梵天相応　(7)婆羅門相応　(8)婆耆沙長老相応
(9)森相応　(10)夜叉相応　(11)帝釈相応

【第13巻　相応部経典二】

B　因縁篇［Nidāna-vagga］

(12)因縁相応　(13)現観相応　(14)界相応　(15)無始相応
(16)迦葉相応　(17)利得と供養相応　(18)羅睺羅相応
(19)勒叉那相応　(20)譬喩相応　(21)比丘相応

【第14巻　相応部経典三】

C　犍度篇［Khandha-vagga］

(22)蘊相応　(23)羅陀相応　(24)見相応　(25)入相応　(26)生相応
(27)煩悩相応　(28)舎利弗相応　(29)龍相応　(30)金翅鳥相応
(31)乾達婆相応　(32)雲相応　(33)婆蹉種相応　(34)禅定相応

【第15巻　相応部経典四】

D　六処篇［Saḷāyatana-vagga］

(35)六処相応　(36)受相応　(37)女人相応　(38)閻浮車相応
(39)沙門出家相応　(40)目犍連相応　(41)質多相応

【第16巻上　相応部経典五】

D　六処篇

(42)聚落主相応　(43)無為相応　(44)無記説相応

E　大　篇［Mahā-vagga］

(45)道相応　(46)覚支相応　(47)念処相応

【第16巻下　相応部経典六】

E　大　篇

(48)根相応　(49)正勤相応　(50)力相応　(51)神足相応
(52)阿那律相応　(53)静慮相応　(54)入出息相応　(55)預流相応
(56)諦相応

【第17巻　増支部経典一】Aṅguttara-nikāya

A　一　集［Eka-nipāta］

(1) 色等品　(2) 断蓋品　(3) 無堪忍品　(4) 無調品
(5) 向と隠覆との品　(6) 弾指品　(7) 発精進等品　(8) 善友等品
(9) 放逸等品　(10) 非法等品　(11) 非法等品　(12) 無犯等品
(13) 一人品　(14) 是第一品　(15) 無処品　(16) 一法品
(17) 種子品　(18) 末伽梨品　(19) 不放逸品　(20) 静慮品
(21) 静慮品

B　二　集［**Duka-nipāta**］

〈初の五十〉　(1) 科刑罰品　(2) 諍論品　(3) 愚人品　(4) 等心品
(5) 衆会品
〈第二の五十〉　(6) 人品　(7) 楽品　(8) 有品　(9) 法品
(10) 愚者品
〈第三の五十〉　(11) 希望品　(12) 希求品　(13) 施品　(14) 覆護品
(15) 入定品
〈五十所不摂の品〉　(16) 忿品　(17) 第十七品

C　三　集［**Tika-nipāta**］

〈初の五十〉　(1) 愚人品　(2) 車匠品　(3) 人品　(4) 天使品
(5) 小品
〈第二の大五十〉　(1) 婆羅門品　(2) 大品　(3) 阿難品　(4) 沙門品
(5) 一掬塩品
〈第三の小五十〉　(1) 等覚品　(2) 悪趣品　(3) 拘尸那掲羅品
(4) 戦士品　(5) 吉祥品
〈五十所不摂の品〉　裸形品

【第18巻　増支部経典二】

D　**四**　集［**Catukka-nipāta**］

〈初の五十〉　(1) バンダガーマ品　(2) 行品　(3) 優楼比螺品
(4) 輪品　(5) 赤馬品
〈第二の五十〉　(1) 福生品　(2) 適切業品　(3) 無戯論品　(4) 不動品
(5) 阿修羅品
〈第三の五十〉　(1) 雲品　(2) 只尸品　(3) 怖畏品　(4) 補特伽螺品
(5) 光品

〈第四の大五十〉　(1)根品　(2)行品　(3)故思品　(4)戦士品
(5)大品
〈第五の五十〉　(1)善士品　(2)荘飾品　(3)妙行品　(4)業品
(5)犯畏品　(6)通慧品　(7)業道品　畢品

【第19巻　増支部経典三】

E　五　集［Pañcaka-nipāta］
〈初の五十〉　(1)学力品　(2)力品　(3)五支品　(4)須摩那品
(5)文荼王品
〈第二の五十〉　(6)蓋品　(7)想品　(8)戦士品　(9)長老品
(10)カクダ品
〈第三の五十〉　(11)安穏住品　(12)アンダカンギンダ品　(13)病品
(14)王品　(15)ティカンダキ品
〈第四の五十〉　(16)妙法品　(17)嫌根品　(18)優婆塞品
(19)阿蘭若品　(20)婆羅門品
〈第五の五十〉　(21)金毗羅品　(22)罵詈品　(23)長遊行品
(24)旧住品　(25)悪行品
〈第六の五十〉　(26)近円品

【第20巻　増支部経典四】

F　六　集［Chakka-nipāta］
〈第一の五十〉　(1)応請品　(2)可念品　(3)無上品　(4)天品
(5)曇弥品
〈第二の五十〉　(6)大品　(7)天神品　(8)阿羅漢果品　(9)清涼品
(10)勝利品
〈五十所不摂品〉　(11)三法品　(12)品所不摂(経)品
G　七　集［Sattaka-nipāta］
〈第一の五十〉　(1)財品　(2)随眠品　(3)跋耆品　(4)天品
(5)大供犠品
〈五十所不摂品〉　(6)無記品　(7)大品　(8)律品　(9)品所不摂(品)

【第21巻　増支部経典五】

H　八　集［Aṭṭhaka-nipāta］

〈五十経〉　(1)慈品 (2)大品 (3)居士品　(4)布施品　(5)布薩品
〈五十経余品〉 (6)瞿曇弥品 (7)地震品　(8)双品 (9)念品 (10)貪品

【第22巻上　増支部経典六】

Ⅰ　九　集［**N**avaka-nipāta］
〈初の五十経〉 (1)等覚品　(2)師子吼品 (3)有情居品 (4)大品
(5)般闍羅健品
〈五十経余品〉 (6)安穏品　(7)念処品　(8)正勤品　(9)神足品
(10)貪品

J　十　集［**D**asaka-nipāta］
〈初の五十経〉 (1)功徳品　(2)救護品　(3)大品　(4)優波離品
(5)罵詈品
〈第二の五十経〉　(6)己心品

【第22巻下　増支部経典七】

J　十　集
〈第二の五十経〉　(7)双品 (8)願品 (9)長老品　(10)優婆塞品
〈第三の五十経〉　(11)沙門想品　(12)捨法品　(13)清浄品
(14)善良品　(15)聖道品
〈第四の五十経〉　(16)人品　(17)生聞品　(18)善良品
(19)聖道品　(20)人品
〈余経〉　(21)業所生身品
〈広説〉
〈貪品〉

K　十一集［Ekādasaka-nipāta］
(1)依止品　(2)憶念品

【第23巻　小部経典一】Khuddaka-nikāya

A　小誦経［Khuddaka-pāṭha］
B　法句経［**D**hamma-pada］
C　自説経［**U**dāna］
D　如是語経［**I**tivuttaka］

【第24巻　小部経典二】

Ｅ　経　集［**Sutta-nipāta**］

Ｆ　天宮事経［**Vimāna-vatthu**］

【第25巻　小部経典三】

Ｇ　餓鬼事経［**Peta-vatthu**］

Ｈ　長老偈経［**Thera-gāthā**］

Ｉ　長老尼偈経［**Therī-gāthā**］

【第26巻　小部経典四】

Ｊ　譬喩経［**Apadāna**］

(1)仏陀品　(2)シーハーサナ品　(3)須菩提品　(4)軍頭波漢品
(5)優波離品　(6)ギーデャニー品　(7)サカチッタニヤ品
(8)ナーガサマーラ品　(9)ティミラプッピヤ品　(10)スーダ品
(11)ビッカダーヰー品　(12)マハーパリヴーラ品
(13)セーレッヤカ品　(14)輪毘多品　(15)チャッタ品
(16)バンドゥヂーヴカ品　(17)スパーリチャリヤ品　(18)拘物頭品
(19)クタヂャプッピヤ品　(20)タマーラプッピヤ品
(21)カニカーラプッピヤ品　(22)ハッティ品
(23)アーランバナダーヤカ品　(24)ウダカーサナダーヤカ品
(25)トゥヴラダーヤカ品　(26)トーマダーヤカ品
(27)パドゥムッケーパ品　(28)スヴンナビンボーハナ品
(29)パンナダーヤカ品　(30)チタカプーヂャカ品
(31)パドゥマケーサリヤ品　(32)アーラッカダーヤ品
(33)ウンマープッピヤ品　(34)ガンドーダカ品
(35)エーカパドゥミヤ品　(36)サッダサンニャカ品
(37)マンダーラプッピヤ品　(38)ボーディヴンダカ品
(39)アヴンタパラ品

【第27巻　小部経典五】

Ｊ　譬喩経

(40)畢隣陀品　(41)帝須弥勒品　(42)跋陀利品
(43)サキンサマッヂャカ品　(44)エーカヸハーリ品

(45)ギビータキ品　(46)チャガティダーヤカ品
(47)サーラプッピヤ品　(48)ナラマーリー品
(49)パンスクーラ品　(50)キンカニプッピヤ品
(51)カニカーラ品　(52)クレーンチャパラダーヤカ品
(53)ティナダーヤカ品　(54)迦旃延品　(55)抜提品
〈四　長老尼の譬喩〉　(1)善慧品　(2)エークーポーサティカ
(3)君荼羅繫頭品　(4)刹帝利童女品

【第28巻　小部経典六】

K　本生経［**Jātaka**］

因縁物語

第一篇

〈無戯論品〉　(1)無戯論本生物語　(2)砂道本生物語
(3)貪慾商人本生物語　(4)周羅財官本生物語　(5)稲稈本生物語
(6)天法本生物語　(7)採薪女本生物語　(8)首領王本生物語
(9)摩迦王本生物語　(10)楽住本生物語
〈戒行品〉　(11)瑞相鹿本生物語　(12)榕樹鹿本生物語
(13)結節本生物語　(14)風鹿本生物語
(15)カラーディヤ鹿本生物語　(16)三臥鹿本生物語
(17)風本生物語　(18)死者供物本生物語　(19)祈願供養本生物語
(20)蘆飲本生物語
〈羚羊品〉　(21)羚羊本生物語　(22)犬本生物語
(23)駿馬本生物語　(24)良馬本生物語　(25)沐浴場本生物語
(26)女顔象本生物語　(27)常習本生物語　(28)歓喜満牛本生物語
(29)黒牛本生物語　(30)ムニカ豚本生物語
〈雛鳥品〉　(31)雛鳥本生物語　(32)舞踊本生物語
(33)和合本生物語　(34)魚本生物語　(35)鶉本生物語
(36)鳥本生物語　(37)鷓鴣本生物語　(38)青鷺本生物語
(39)難陀本生物語　(40)カディラ樹炭火本生物語
〈利愛品〉　(41)ローサカ長老本生物語　(42)鳩本生物語
(43)竹蛇本生物語　(44)蚊本生物語　(45)赤牛女本生物語
(46)毀園本生物語　(47)酒本生物語　(48)ヹーダッバ呪文本生物語
(49)星宿本生物語　(50)無智本生物語

【第29巻　小部経典七】

Ｋ　本生経

第一編

〈願望品〉　(51)大具戒王本生物語　(52)小チャナカ王本生物語
(53)満瓶本生物語　(54)果実本生物語　(55)五武器太子本生物語
(56)金塊本生物語　(57)猿王本生物語　(58)三法本生物語
(59)打鼓本生物語　(60)吹螺本生物語

〈婦女品〉　(61)嫌悪聖典本生物語　(62)生卵本生物語
(63)棗椰子本生物語　(64)難知本生物語　(65)懊悩本生物語
(66)優相本生物語　(67)膝本生物語　(68)娑袛多城本生物語
(69)吐毒本生物語　(70)鋤賢人本生物語

〈婆那樹品〉　(71)婆那樹本生物語　(72)有徳象王本生物語
(73)真実語本生物語　(74)樹法本生物語　(75)魚族本生物語
(76)無憂本生物語　(77)大夢本生物語　(78)イッリーサ長者本生物語
(79)騒音本生物語　(80)ビーマセーナ職人本生物語

〈飲酒品〉　(81)飲酒本生物語　(82)知友本生物語
(83)不運者本生物語　(84)利益門本生物語　(85)有毒果本生物語
(86)験徳本生物語　(87)吉凶本生物語　(88)サーランバ牛本生物語
(89)詐欺本生物語　(90)忘恩本生物語

〈塗毒品〉　(91)塗毒本生物語　(92)大精本生物語
(93)信食本生物語　(94)怖畏本生物語　(95)大善見王本生物語
(96)油鉢本生物語　(97)依名得運本生物語　(98)邪商本生物語
(99)超千本生物語　(100)嫌悪色本生物語

〈超百品〉　(101)超百本生物語　(102)八百屋本生物語
(103)仇敵本生物語　(104)知友比丘本生物語　(105)弱木本生物語
(106)釣瓶女本生物語　(107)投擲術本生物語　(108)田舎女本生物語
(109)粉菓子本生物語　(110)全総括問

〈設問品〉　(111)驢馬問　(112)不死皇后問　(113)豺本生物語
(114)中思魚本生物語　(115)警告者本生物語　(116)背教者本生物語
(117)鷓鴣本生物語　(118)鶉本生物語　(119)非時叫喚者本生物語
(120)解縛本生物語

〈吉祥草品〉　(121)吉祥草本生物語　(122)愚者本生物語

(123)鍬柄本生物語　(124)菴羅果本生物語
(125)カターハカ奴隷本生物語　(126)剣相師本生物語
(127)カランドゥカ奴隷本生物語　(128)猫本生物語
(129)火種本生物語　(130)コーシャ女本生物語
〈不与品〉　(131)不与本生物語　(132)五師本生物語
(133)火焔本生物語　(134)禅定清浄本生物語　(135)月光本生物語
(136)金色鵝鳥本生物語　(137)猫本生物語　(138)蜥蜴本生物語
(139)二重失敗本生物語　(140)烏本生物語
〈カメレオン品〉　(141)蜥蜴本生物語　(142)豺本生物語
(143)威光本生物語　(144)象尾本生物語　(145)ラーダ鸚鵡本生物語
(146)烏本生物語　(147)花祭本生物語　(148)豺本生物語
(149)一葉本生物語　(150)等活本生物語

【第30巻　小部経典八】

K　本生経

第二篇

〈剛強品〉　(151)王訓本生物語　(152)豺本生物語
(153)野猪本生物語　(154)龍本生物語　(155)ガッガ婆羅門本生物語
(156)無私心本生物語　(157)有徳本生物語　(158)善頬本生物語
(159)孔雀本生物語　(160)紺青鵐本生物語
〈親交品〉　(161)因陀羅同姓本生物語　(162)親交本生物語
(163)スシーマ王本生物語　(164)鷲本生物語
(165)鼬本生物語　(166)ウパサールハ婆羅門本生物語
(167)完美本生物語　(168)鷹本生物語　(169)アラカ仙本生物語
(170)カメレオン本生物語
〈善法品〉　(171)善法本生物語　(172)ダッダラ山本生物語
(173)猿猴本生物語　(174)叛逆猿猴本生物語
(175)日輪供養本生物語　(176)一握豌豆本生物語
(177)鎮頭迦樹本生物語　(178)亀本生物語
(179)正法婆羅門本生物語　(180)難施本生物語
〈無双品〉　(181)無双王子本生物語　(182)戦場住居本生物語
(183)濾水本生物語　(184)山牙本生物語　(185)不喜本生物語
(186)凝乳運搬王本生物語　(187)四美本生物語　(188)獅子豺本生物語

(189)獅子皮本生物語　(190)戒徳利益本生物語
〈ルハカ品〉　(191)ルハカ婆羅門本生物語　(192)吉祥黒耳本生物語
(193)小蓮華王本生物語　(194)宝珠窃盗本生物語
(195)山麓本生物語　(196)雲馬本生物語　(197)怨親本生物語
(198)ラーダ鸚鵡本生物語　(199)家長本生物語　(200)善戒本生物語
〈ナタムダルハ品〉　(201)獄舎本生物語　(202)耽戯本生物語
(203)犍度本生物語　(204)ギーラカ烏本生物語
(205)恒伽魚本生物語　(206)羚羊本生物語
(207)アッサカ王本生物語　(208)鰐本生物語
(209)鶶鴣本生物語　(210)カンダガラカ啄木鳥本生物語
〈香草叢品〉　(211)ソーマダッタ婆羅門子本生物語
(212)残食本生物語　(213)バル王本生物語　(214)河水満本生物語
(215)亀本生物語　(216)魚本生物語　(217)セッグ女本生物語
(218)騙詐商人本生物語　(219)誹謗本生物語　(220)法幢本生物語
〈袈裟品〉　(221)袈裟本生物語　(222)小ナンディヤ猿本生物語
(223)嚢食本生物語　(224)鱷本生物語　(225)堪忍礼讃者本生物語
(226)梟本生物語　(227)糞喰虫本生物語
(228)カーマニータ婆羅門本生物語　(229)逃亡本生物語
(230)第二逃亡本生物語
〈革履品〉　(231)革履本生物語　(232)琵琶竿本生物語
(233)鏃箭本生物語　(234)アシターブー妃本生物語
(235)ヴァッチャナカ遊行者本生物語　(236)青鷺本生物語
(237)娑祇多婆羅門本生物語　(238)一句本生物語
(239)緑母本生物語　(240)大黄王本生物語
〈豺品〉　(241)一切牙豺本生物語　(242)犬本生物語
(243)グッティラ音楽師本生物語　(244)離欲本生物語
(245)根本方便本生物語　(246)油教訓本生物語
(247)パーダンヂャリ王子本生物語　(248)緊祝迦喩本生物語
(249)サーラカ猿本生物語　(250)猿本生物語

【第31巻　小部経典九】

Ｋ　本生経

第三篇

〈思惟品〉　　(251)思惟本生物語　　　(252)一握胡麻本生物語
(253)宝珠頸龍王本生物語　　(254)糠腹辛頭馬本生物語
(255)鸚鵡本生物語　　　　　(256)古井戸本生物語
(257)ガーマニチャンダ農夫本生物語　(258)曼陀多王本生物語
(259)ティリータヴッチャ仙本生物語　(260)使者本生物語
〈梟品〉　　(261)蓮華本生物語　　　(262)柔軟手本生物語
(263)小誘惑本生物語　　　　(264)摩訶波羅那王本生物語
(265)箭本生物語　　(266)疾風辛頭馬本生物語　(267)蟹本生物語
(268)毀園本生物語　(269)善生女本生物語　　(270)梟本生物語
〈森林品〉　　(271)泉井汚濁本生物語　(272)虎本生物語
(273)亀本生物語　　(274)貪欲本生物語　(275)美麗本生物語
(276)拘楼国法本生物語　(277)羽毛本生物語　(278)水牛本生物語
(279)鶴本生物語　　(280)毀籠本生物語
〈真中品〉　　(281)真中本生物語　　　(282)善人本生物語
(283)工匠養猪本生物語　　　(284)吉祥本生物語
(285)宝珠野猪本生物語　　　(286)サールーカ豚本生物語
(287)利得軽侮本生物語　　　(288)魚群本生物語
(289)諸種願望本生物語　　　(290)験徳本生物語
〈瓶品〉　　(291)賢瓶本生物語　(292)スパッタ烏王本生物語
(293)身体厭離本生物語　　　(294)閻浮果食本生物語
(295)下賤者本生物語　　　　(296)海本生物語
(297)愛慾悲歎本生物語　　　(298)優曇婆羅本生物語
(299)コーマーヤプッタ婆羅門本生物語　　(300)狼本生物語
第四篇
〈開門品〉　　(301)小迦陵誐王女本生物語　(302)大騎手本生物語
(303)一王本生物語　　　　　(304)ダッダラ龍本生物語
(305)験徳本生物語　　　　　(306)善生妃本生物語
(307)パラーサ樹本生物語　　(308)速疾鳥本生物語
(309)屍漢本生物語　　　　　(310)サヰハ大臣本生物語
〈プチマンダ樹品〉　(311)プチマンダ樹本生物語
(312)迦葉愚鈍本生物語　　　(313)堪忍宗本生物語
(314)鉄鼎本生物語　　　(315)肉本生物語　　(316)兎本生物語
(317)死者哀悼本生物語　　　(318)カナヱーラ華本生物語

(319)鶉鴣本生物語　　　　　　　(320)喜捨本生物語
〈毀屋品〉　　　(321)毀屋本生物語　　　　(322)堕々音本生物語
(323)梵与王本生物語　　　　　(324)皮衣普行者本生物語
(325)蜥蜴本生物語　　　　　　(326)カッカール華本生物語
(327)カーカーティ妃本生物語 (328)不可悲本生物語
(329)黒腕猿本生物語　　　　　(330)験徳本生物語
〈時鳥品〉　　　(331)拘迦利比丘本生物語　　(332)車鞭本生物語
(333)蜥蜴本生物語　　(334)王訓本生物語　　(335)豺本生物語
(336)大傘蓋王子本生物語 (337)座席本生物語　　(338)稃本生物語
(339)バーヹール国本生物語　　(340)ヸサヰハ長者本生物語
〈小郭公品〉　　(341)カンダリ王本生物語　　(342)猿本生物語
(343)穀禄鳥本生物語　　　　　(344)菴羅果盗本生物語
(345)亀本生物語　　　　　　　(346)ケーサヴ行者本生物語
(347)鉄槌本生物語　　　　　　(348)森林本生物語
(349)破和睦本生物語　　　　　(350)天神所問本生物語

【第32巻　小部経典十】

K　**本生経**

第五篇

〈摩尼耳環品〉　(351)摩尼耳環本生物語　　(352)善生居士子本生物語
(353)張枝本生物語　　(354)蛇本生物語　　　(355)蘇油王子本生物語
(356)カーランディヤ青年本生物語　　(357)鶉本生物語
(358)小護法王子本生物語　　　　(359)金鹿本生物語
(360)スッソンディー妃本生物語
〈色高品〉　　　(361)色高本生物語　　　　(362)験徳本生物語
(363)慚本生物語　　　(364)蛍本生物語　　　(365)蛇使本生物語
(366)グンビヤ夜叉本生物語　　　(367)九官鳥本生物語
(368)竹梏本生物語　　(369)知友本生物語　　(370)蘇芳樹本生物語
〈半品〉　　　　(371)長災拘薩羅王本生物語　(372)鹿児本生物語
(373)鼠本生物語　　　(374)小弓術師本生物語　　(375)鳩本生物語

第六篇

〈アヷーリヤ品〉　(376)アヷーリヤ渡守本生物語
(377)白旗婆羅門本生物語　　　　(378)ダリームカ辟支仏本生物語

(379)ネール黄金山本生物語　(380)疑姫本生物語
(381)ミガーローパ兀鷹本生物語　(382)吉祥黒耳本生物語
(383)鶏本生物語　(384)法幢本生物語　(385)難提鹿王本生物語
〈セーナカ品〉　(386)驢馬子本生物語　(387)縫針本生物語
(388)鼻豚本生物語　(389)金色蟹本生物語　(390)我有鳥本生物語
(391)害魔法本生物語　(392)蓮花本生物語　(393)残滓本生物語
(394)鶉本生物語　(395)烏本生物語

第七篇

〈クック品〉　(396)クック本生物語　(397)意生獅子本生物語
(398)スタナ青年本生物語　(399)兀鷹本生物語
(400)ダッバ草花本生物語　(401)ダサンナ国製剣本生物語
(402)菓子袋本生物語　(403)アッティセーナ婆羅門本生物語
(404)猿本生物語　(405)婆迦梵天本生物語
〈健陀羅品〉　(406)健陀羅王本生物語　(407)大猿本生物語
(408)陶師本生物語　(409)堅法本生物語　(410)蘇摩達多象本生物語
(411)スシーマ王本生物語　(412)綿樹頂本生物語
(413)ドゥーマカーリ牧羊者本生物語　(414)不寝番本生物語
(415)酢味粥食本生物語　(416)パランタパ従僕本生物語

【第33巻　小部経典十一】

K　本生経

第八篇

〈迦旃延品〉　(417)迦旃延本生物語　(418)八声本生物語
(419)美女スラサー本生物語　(420)善吉祥本生物語
(421)理髪師ガンガマーラ本生物語　(422)支提本生物語
(423)根本生物語　(424)燃焼本生物語　(425)非処本生物語
(426)豹本生物語

第九篇

(427)鷹本生物語　(428)憍賞弥本生物語　(429)大鸚鵡本生物語
(430)小鸚鵡本生物語　(431)ハーリタ仙本生物語
(432)足跡善知童子本生物語　(433)多毛迦葉本生物語
(434)鴛鴦本生物語　(435)散乱本生物語　(436)箱本生物語
(437)腐肉豺本生物語　(438)鷓鴣本生物語

第十篇

(439)四門本生物語　(440)カンハ賢者本生物語
(441)四布薩誓願本生物語　(442)サンカ婆羅門本生物語
(443)小菩提童子本生物語　(444)カンハディーパーヤナ道士本生物語
(445)尼拘律童子本生物語　(446)球茎本生物語
(447)大護法本生物語　(448)雄鶏本生物語　(449)煌輝耳環本生物語
(450)布施比丘本生物語　(451)鴛鴦本生物語
(452)ブーリパンハ本生物語(*ブーリパンハー本生物語)
(453)大吉兆本生物語　(454)ガタ賢者本生物語

第十一篇

(455)養母象本生物語　(456)月光王本生物語
(457)法天子本生物語　(458)優陀耶王子本生物語
(459)水本生物語　(460)ユヴンチャヤ王子本生物語
(461)十車王本生物語　(462)防護童子本生物語
(463)スッパーラカ賢者本生物語

【第34巻　小部経典十二】

K　本生経

第十二篇

(464)小郭公本生物語　(465)跋陀娑羅樹神本生物語
(466)海商本生物語　(467)欲愛本生物語
(468)闍那散陀王本生物語　(469)大黒犬本生物語
(470)拘私夜長者本生物語　(471)牡羊本生物語
(472)大蓮華王子本生物語　(473)真友非友本生物語

第十三篇

(474)菴羅果本生物語　(475)パンダナ樹本生物語
(476)敏捷鷲本生物語　(477)小那羅陀苦行者本生物語
(478)使者本生物語　(479)迦陵誐王菩提樹供養本生物語
(480)アキッティ婆羅門本生物語　(481)タッカーリヤ青年本生物語
(482)ルル鹿本生物語　(483)舎羅婆鹿本生物語

第十四篇

(484)稲田本生物語　(485)月緊那羅本生物語
(486)大鸚本生物語　(487)鬱陀羅迦苦行者本生物語

(488)蓮根本生物語　(489)善喜王本生物語
(490)五者布薩会本生物語　(491)大孔雀王本生物語
(492)大工養猪本生物語　(493)大商人本生物語
(494)サーディーナ王本生物語　(495)十婆羅門本生物語
(496)次第供養本生物語

【第35巻　小部経典十三】

K　本生経

第十五篇

(497)摩登伽本生物語　(498)質多・三浮陀本生物語
(499)尸毘王本生物語　(500)栄者の愚本生物語
(501)ローハンタ鹿本生物語　(502)白鳥本生物語
(503)サッティグンバ鸚鵡本生物語　(504)バッラーティヤ本生物語
(505)ソーマナッサ王子本生物語　(506)チャンペッヤ本生物語
(507)大誘惑本生物語　(508)五賢人本生物語
(509)護象本生物語　(510)鉄屋本生物語

第十六篇

(511)何欲本生物語　(512)瓶本生物語
(513)伏敵本生物語　(514)六色牙象本生物語
(515)三婆婆本生物語　(516)大猿本生物語
(517)水羅刹本生物語　(518)パンダラ龍王本生物語
(519)サンブラー妃本生物語　(520)結節鎮頭迦樹神本生物語

【第36巻　小部経典十四】

K　本生経

第十七篇

(521)三鳥本生物語　(522)サラバンガ仙本生物語
(523)アランブサー天女本生物語　(524)サンカパーラ龍王本生物語
(525)小スタソーマ王本生物語

第十八篇

(526)ナリニカー姫本生物語　(527)ウンマダンティー女本生物語
(528)大菩提普行沙門本生物語

第十九篇

(529)須那迦辟支仏本生物語　(530)サンキッチャ仙本生物語

第二十篇

(531)姑尸王本生物語　(532)数那・難陀仙本生物語

【第37巻　小部経典十五】

K　本生経

第二十一篇

(533)小鵞本生物語　(534)大鵞本生物語　(535)天食本生物語

(536)鳩那羅本生物語　(537)大須陀須摩本生物語

第二十二篇

(538)唖躄本生物語　(539)マハーヂャナカ本生物語

【第38巻　小部経典十六】

K　本生経

第二十二篇

(540)睒摩賢者本生物語　(541)尼弥王本生物語

(542)カンダハーラ司祭官本生物語　(543)槃達龍本生物語

(544)大那羅陀迦葉梵天本生物語　(545)比豆梨賢者本生物語

【第39巻　小部経典十七】

K　本生経

第二十二篇

(546)大隧道本生物語　(547)毘輸安呾囉王子本生物語

【第40巻　小部経典十八】

L　無礙解道［Paṭisambhidā-magga］

論母　大品

【第41巻　小部経典十九】

L　無礙解道

倶存品　慧品

M　仏種姓経［Buddha-vaṁsa］

N　所行蔵経［Cariyā-piṭaka］

【第42巻　小部経典二十】

O　大義釈［**Mahā-niddesa**］

【第43巻　小部経典二十一】

O　大義釈

【第44巻　小部経典二十二】

P　小義釈［**Culla-niddesa**］

◎論　蔵（**Abhidhamma-piṭaka**）

【第45巻　法集論】

A　法集論［**Dhamma-saṅgaṇi**］

(0)論母　(1)心生起品　(2)色品　(3)概説品　(4)義釈品

【第46巻　分別論一】

B　分別論［Vibhaṅga］

(1)蘊分別　(2)処分別　(3)界分別　(4)諦分別　(5)根分別
(6)縁行相分別　(7)念処分別　(8)正勤分別　(9)神足分別
(10)覚支分別　(11)道分別　(12)禅定分別　(13)無量分別
(14)学処分別　(15)無礙解分別

【第47巻　分別論二・界論・人施設論】

B　分別論

(16)智分別　(17)小事分別　(18)法心分別

C　界　論［**Dhātu-kathā**］

D　界論註(覚音造)［**Dhātukathā-aṭṭhakathā**］

E　人施設論［Puggala-paññatti］

【第48巻上　双論一】

F　双　論［Yamaka］

(1)根双論　(2)蘊双論　(3)処双論　(4)界双論　(5)諦双論

(6)行双論

【第48巻下　双論二】

F　双　論

(7)随眠双論

【第49巻　双論三】

F　双　論

(8)心双論　(9)法双論　(10)根双論

【第50巻　発趣論一】

G　発趣論［Paṭṭhāna］

順三法発趣　(1)善三法

H　大発趣論註(覚音造)［Mahāpaṭṭhāna-aṭṭhakathā］

(1)善三法発趣之釈

【第51巻　発趣論二】

G　発趣論

順三法発趣　(2)受三法　(3)異熟三法　(4)已取三法

(5)已染三法　(6)尋三法　(7)喜三法　(8)見三法

H　大発趣論註(覚音造)

(2)受三法之釈　(3)異熟三法之釈　(4)已取三法之釈

(5)残余三法之釈

【第52巻　発趣論三】

G　発趣論

順三法発趣　(9)見所断因三法　(10)積集趣三法　(11)有学三法

(12)小三法　(13)小所縁三法　(14)劣三法　(15)邪性〔決定〕三法

(16)道所縁三法　(17)已生三法　(18)過去三法　(21)内所縁

(22)有見有対三法

H　大発趣論註(覚音造)

(5)残余三法之釈

【第53巻　発趣論四】

G　発趣論

順二法発趣　(1)因二法　(2)有因二法　(3)因相応二法
(4)因有因二法　(5)因因相応二法　(6)非因有因二法
(7)有縁二法　(8)有為二法　(9)有見二法
(10)有対二法　(11)有色二法　(12)世間二法
(13)所識二法　(14)漏二法　(15)有漏二法
(16)漏相応二法　(17)漏有漏二法　(18)漏漏相応二法
(19)漏不相応有漏二法　(20)結二法　(21)順結二法
(22)結相応二法　(23)結順結二法　(24)結結相応二法
(25)結不相応順結二法　(26)繋二法　(27)順繋二法
(28)繋相応二法　(29)繋順繋二法　(30)繋繋相応二法
(31)繋不相応順繋二法　(32～43)暴流・軛群二法　(44)蓋二法
(45)順蓋二法　(46)蓋相応二法　(47)蓋順蓋二法
(48)蓋蓋相応二法　(49)蓋不相応順蓋二法　(50)執二法
(51)已執二法　(52)執相応二法　(53)執已執二法
(54)執不相応已執二法

【第54巻　発趣論五】

G　発趣論

順二法発趣　(55)有所縁二法　(56)心二法　(57)心所二法
(58)心相応二法　(59)心相雑二法　(60)心等起二法
(61)心俱有二法　(62)心随転二法　(63)心相雑等起二法
(64)心相雑等起俱有二法　(65)心相雑等起随転二法　(66)内二法
(67)所造二法　(68)已取二法　(69)取二法
(70)順取二法　(71)取相応二法　(72)取順取二法
(73)取取相応二法　(74)取不相応順取二法　(75)染二法
(76)順染二法　(77)已染二法　(78)染相応二法
(79)染順染二法　(80)染已染二法　(81)染染相応二法
(82)染不相応順染二法　(83)見二法　(84)修二法
(85)見所断因二法　(86)修所断因二法　(87)有尋二法
(88)有伺二法　(89)有喜二法　(90)喜俱行二法
(91)楽俱行二法　(92)捨俱行二法　(93)欲界繋二法

(94)色界繫二法　(95)無色界繫二法　(96)所摂二法
(97)出離二法　(98)決定二法　(99)有上
(100)有諍二法

H　大発趣論註(覚音造)

(6)二法発趣之釈

【第55巻　発趣論六】

G　発趣論

順二法三法発趣
順三法二法発趣

【第56巻　発趣論七】

G　発趣論

順三法三法発趣
順二法二法発趣
逆発趣
順逆発趣
逆順発趣

H　大発趣論註(覚音造)

(7)二法三法発趣之釈　(8)三法二法発趣之釈　(9)三法三法発趣之釈
(10)二法二法発趣之釈　(11)順発趣之釈　(12)逆発趣之釈
(13)順逆発趣之釈　(14)逆順発趣之釈　後之釈

【第57巻　論事一】

Ⅰ　論　事［Kathā-vatthu］

大五十〔第一品～第五品〕

【第58巻　論事二】

Ⅰ　論　事

第二五十〔第六品～第十品〕
第三五十〔第十一品～第十五品〕
第四五十〔第十六品～第二十三品〕

◎蔵　外

【第59巻上　弥蘭王問経上】

弥蘭王問経(上)［Milinda-pañha］

【第59巻下　弥蘭王問経下】

弥蘭王問経(下)

【第60巻　島王統史・大王統史】

島王統史［Dīpa-vaṁsa］
大王統史［Mahā-vaṁsa］

【第61巻　小王統史】

小王統史［Cūḷa-vaṁsa］

【第62巻　清浄道論一】

清浄道論［Visuddhi-magga］

(0)因縁等の論　(1)戒の解釈　(2)頭陀支の解釈
(3)業処把取の解釈　(4)地遍の解釈　(5)余遍の解釈
(6)不浄業処の解釈　(7)六随念の解釈

【第63巻　清浄道論二】

清浄道論

(8)随念業処の解釈　(9)梵住の解釈　(10)無色の解釈
(11)定の解釈　(12)神変の解釈　(13)神通の解釈

【第64巻　清浄道論三】

清浄道論

(14)蘊の解釈　(15)処・界の解釈　(16)根・諦の解釈
(17)慧地の解釈　(18)見清浄の解釈　(19)度疑清浄の解釈
(20)道非道智見清浄の解釈　(21)行道智見清浄の解釈
(22)智見清浄の解釈　(23)慧修習の功徳の解釈

【第65巻　一切善見律註序・摂阿毘達磨義論・阿育王刻文】

（Ⅰ）一切善見律註序［Samanta-pāsādikā］

（Ⅱ）摂阿毘達磨義論［Abhidhammattha-saṅgaha］

（Ⅲ）阿育王刻文［Inscriptions of Asoka］

About

The original 65 volumes in 70 parts of the **Nanden Daizōkyō** (南傳大藏經) were published 1936–41 by the Takakusu Hakushi Kōseki Kinenkai (高楠博士功績記念會纂譯), under the editorship of Takakusu Junjirō (高楠順次郎; 1866–1945[9]), who also used the resources of the Taishō Shinshū Daizōkyō Kankōkai (大正新脩大藏經刊行會). It contains the complete Pāli canon as well as additional texts like the Milindapañhā, Visuddhimagga and Edicts of Ashoka. A reprint was published by *Taishō Shinshū Daizōkyō Kankōkai* (大正新脩大藏經刊行會) in Tokyo from 1970 onwards. The three-volume index was edited by Mizuno Kōgen.[10]

The translation of the Pāli-Canon, *Nanden Daizōkyō* is no longer in Japanese copyright, as determined by the *National Diet Library,* Tokyo. Their reasoning is given below:

suttacentral.net

Scans zenwort.de
mail@zenwort.de

2014 年 1 月 7 日インターネット提供に対する出版社の申出への対応について。2013 年 7 月 12 日付ニュースでお知らせした一般社団法人日本出版者協議会及び大蔵出版株式会社から『大正新脩大蔵経』（全 88 巻）ほかのインターネット提供の中止を求める旨の申出を受けた件に関し、その後の対応について報告します。[11]

当館では、申出を受けて、当該資料のインターネット提供を一時停止し、当面館内利用に限定するとともに、2013 年 7 月に館内検討組織を設置し本事案の検討を行い、5 名の有識者のヒアリング等も踏まえて、下記の結論を取りまとめました。

1. 『大正新脩大蔵経』（1923 年〜1934 年、大正一切経刊行会、全 88 巻）については、インターネット提供を再開する。

[9] Biogr.: 鷹谷俊之 (1891–1970); 高楠順次郎先生伝; Tokyo 1957 (武蔵野女子学院).

[10] 水野弘元; *Nanden daizōkyō sōsakuin* [南傳大藏經総索引]; “Comprehensive Index to the Pali Canon,” Tokyo 1959-60 (Nihon Gakujutsu Shinkōkai). Scans available on `archive.org`. Permalinks: Vol. 1-1 (第 1 部 上巻): `ark:/13960/t0rr2qp0m`, Vol. 1-2 (第 1 部 下巻): `ark:/13960/t0zp4x15x`, Vol. 2 (第 2 部): `ark:/13960/t9s18vg4b`.

[11] 2013 年 7 月 12 日近代デジタルライブラリー提供資料の一時公開停止について
国立国会図書館が、近代デジタルライブラリー等で提供する『大正新脩大蔵経』（全 88 巻）及び『南伝大蔵経』（全 70 巻のうち 21 巻）について、一般社団法人日本出版者協議会及び刊行元の大蔵出版株式会社から、「当該資料は、現在も商業刊行中であり、公開中止を求める」旨の申出を受けました。
当館としましては、当該資料はすでに著作権の保護期間が満了しており、遠隔地でも広く利活用可能とするため、インターネット公開が望ましいとの基本的立場に変わりはございません。しかしながら、直接の利害を有する商業出版者の申出であることに鑑み、当面 3 か月程度を目途にしかるべき検討を行うこととし、その結論が出るまでの間、当該資料のインターネット提供を一時停止し、館内利用に限定することといたしました。
利用者の皆様には、ご不便をおかけいたしますが、円満な解決に向けて、引き続き努力を重ねてまいりたいと存じますので、ご理解を賜りますようお願いいたします。(Archived at: `https://web.archive.org/web/20140111204528/http://www.ndl.go.jp/jp/news/fy2013/1201734_1828.html`)

2. 『南伝大蔵経』（1935 年〜1941 年、大蔵出版、全 70 巻）については、当分の間、インターネット提供は行わず、館内限定の提供を行う。

検討の詳細につきましては、報告書（「インターネット提供に対する出版社の申出への対応について」[12]）を参照ください。

現在、日本出版者協議会及び大蔵出版株式会社と『大正新脩大蔵経』のインターネット提供の再開について協議を行っているところであり、再開の時期については未定です。解決に向けて、引き続き努力を重ねてまいりたいと存じます。

The *National Diet Library* limits its scan to in-house use. [13]

All original material created by *SuttaCentral* is dedicated to the Public Domain by means of Creative Commons Zero.[14] This file was created on July 11, 2020 by Adi Meyerhofer, Munich on behalf of `suttacentral.net`:

> "*SuttaCentral* is a website run by a small team, originally based in Australia. We have no institutional affiliation, but are just a group of friends interested in the Suttas. The founders are Rod Bucknell, John Kelly, and Bhante Sujato. As of 2017 the main developers are Bhante Sujato, Ayya Vimala, and Blake Walsh. Financial support for the site comes from the *SuttaCentral Development Trust,* a non-profit charity incorporated in Australia.
>
> *SuttaCentral* aims at facilitating the study of Buddhist texts from comparative and historical perspectives. It focuses on the texts that represent"Early Buddhism," texts preserved not only in the Pali Sutta and Vinaya Piṭakas but also in Chinese and Tibetan translations and in fragmentary remains in Sanskrit and other languages.
>
> If you make use of any of our material, even though you are under no legal obligations, we respectfully request that you:
>
> - Provide a notice of attribution.
> - Maintain the spirit of the Buddhist tradition.
>
> Please let us know if you would like any assistance in making use of our materials."

☸ ☸ ☸

Although the creators of *SuttaCentral* had several times promised to bear the cost of scanning of this project nothing but "umpty words" have been forthcoming as of July 11, 2020. Adi Meyerhofer, Munich.

[12] Archived: `https://web.archive.org/web/20140114004605/http://www.ndl.go.jp/jp/news/fy2013/report140107.pdf` （pdf: 435 kB）

[13] Call number: 183.039-M723n (DOI: `10.11501/2997519`).

[14] `http://creativecommons.org/publicdomain/zero/1.0/`

Journey to the West (西遊記): “The Seiryu-zan Goblin (青竜山妖怪) steals the Tripitaka from the ‘monkey.’” (Woodcut by Katsushika Taito 葛飾戴斗 1818–54).

